
エルサティナーの笛吹姫

小沢出新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルサテイナーナの笛吹姫

【Nコード】

N5174N

【作者名】

小沢出新都

【あらすじ】

ベアトリーチエは旅立つ。自分を思いやってくれた親友も愛されること

を望んだ思い人をも捨てて。

忘れえぬ辛い記憶と思い人から向けられた冷たい瞳から逃げ出すために。

髪を切り、少年の服を着て、思い出の魔笛を携えて。

(11月20日まで更新停止。再開はそれからもう少したってから
と思います。)

そして作者は書いている作品がまったく出来上がらないので、適
当な

プロットを見切り発車という暴挙に出た。

1. 『旅立ちの夜』

もう、帰ってくることはないだろう。

ベアトリーチエは最後に振り向き、自分がいままでいた豪華な宮殿を見上げる。

大陸一の大国エルサティーナ、その王が所持する後宮。汚れひとつない白亜の壁が、夜の闇の中魔法で作られた白い明かりに照らされ、壮麗な姿を闇夜に写している。

王の抱える側室の美姫たちが住まう場所、絢爛なるエルサティーナの繁栄の象徴のひとつ、ベアトリーチエが三年間暮らしてきた場所。

暮らしたのは短い時間ではなかったが、荷物は少なかつた。祖国にいた時小遣いとして貰い当面の路銀にしようと思つた金貨と銀貨、侍女たちの目を盗んで手に入れた少年用の服、護身のナイフ、そしていつもさびしい心を慰めてくれた銀製の魔笛。後は防寒用のマントと大陸の地図。装飾のない皮のバッグひとつだけに収まる荷物。それ以外のものはすべて置いてきた。ほかの側室たちにくらべれば少なすぎるが一応持っていたドレスも、記念日などに思い出したように贈られたそれなりに高価な装飾品、祖国フィラルドから持ってきた嫁入り道具の高価な家具。エルサティーナ王国側室第八妃という立場。ずっと一緒にいたが、今は距離を置いてしまった親友。愛されたいと願い、決してそれは適わなかつた愛しい人。

短く自分で切つた不恰好な髪が夜風に揺れる。唯一、あの人からも褒められた美しく輝く金髪は、色の付いた油でくすませた。

夜の闇と共に抜け出したベアトリーチエは、誰にも見咎められることなく、ずっと前に見つけていた抜け穴から城の外に出た。今日に限って、警備の女兵士も夜回りの侍女たちも少ないのは、きつと気のせいではなかつただろう。自分がこそそ城をでる準備をしていたのを、後宮の皆は気づいていたはずだ。だからこそ、あっさり

抜け出せたことに気づいていた。

もしかしたらあの人の指示があったのかもしれない。でもそれは考えたくなかった。

もともと誰かに望まれて後宮にいたわけではない。祖国の都合と王の同情、両国の間で結ばれたもう必要のない約束、その細い糸がベアトリーチエを異例の第八妃として後宮にすることを許した。自分も後宮にいることを望んだ。愛される望みがないとわかっていても、それでもあの人の傍にいたかった。望みを捨て切れなかった。どれだけかかっても良い、わずかなひと時でもいい、偽りの情ですらかまわない、あの人に愛されたかった。

しかし、待っていたのは残酷な結末だった。

ベアトリーチエの胸にあの人の顔が浮かぶ。最も広大な領地を持つ国エルサティーナを治める偉大なる王アーサー、光り輝く金色の髪と翡翠の瞳をもつ美しき男、まだ30歳にもならないのにその治世と武勲は大陸中に轟き、賢王、勇者と称えられる。

だが、心に浮かんだ自分を見つめた時のその人の顔は歪んでいた。まるで汚いもの見るかのように……。

その顔を見て、声をかけることすらなくアーサーが去ったとき、ベアトリーチエの心は折れた。

誰からも望まれず、むしろ疎まれ続けても居座った後宮をついに去ることにした。

もつと早く去っていれば傷つくこともなかったかもしれない。いまさらな後悔が胸に浮かぶ。

ここに来てから楽しい記憶はなかった気がする。事実、振り返り後宮を見上げて、胸に浮かんでくるのは辛い記憶ばかりだった。それでもたまに偶然居合わず、まだ自分を無視することがなかった王と取り留めない会話をした記憶は切なくも幸せな記憶だったのかもしれない。

十八歳になってもあまり成長しなかった胸は、さらにさらしで巻き目立たなくしている。瞳の色は茶色がかった黒色で、この大陸で

は一般的な色でありあまり目立たない。

これに少年の服を合わせて、男装することにした。女の一人旅は危険なのが一番の理由だが、変装もせずに歩いて連れ戻されなかつたら、本当に必要とされてなかったことに気づかされてしまうのでそれが怖かったのかもしれない。それも今更過ぎることで、往生際が悪いと口元に苦笑が浮かぶ。

でもあの子だけは心配するかもしれない。

親友の悲しそうな顔が浮かび、胸に痛みが走る。

この国の王妃、アーサーの正妻レティシア。自分が一度もつけることの出来なかった彼の愛を、その身に多く受けた女性。彼女を僻み遠ざけた私を、それでも私を心配してくれた心優しい親友。優しすぎる彼女は、彼女の目をまっすぐ見つめることが出来なくなった私を、彼女のほうが立場が上になっても変わらさず慕ってくれた。その彼女の優しさすら辛いと後ろを向いた私を、影からもそっと支えてくれた。彼女がいなかったら、私は後宮で暮らしていくことすらできなかったかもしれない。

後宮から私の姿が無くなったことに気づいた彼女はきつと悲しむだろう。でもきつと、私の気持ちを察して探さないでくれるはずだ。ここ三年間、冷たい態度で接し続けた親友への身勝手な望みだったが、彼女はきつとそうしてくれると信じていた。

新月の闇が照らす夜空に浮かび上がる王宮の淡く輝く白い影。一際輝くその宮の頂点に、自分が愛したあの人はいる。

それは夜空に浮かぶ星とよく似ていた。地上に佇む自分からはあまりにも遠い。手を伸ばしても届かない。なのに見上げればいつもその目に映ってしまう。

その光の美しさに、目から一粒涙がこぼれる。

ベアトリーチェは目を閉じた。その美しい光を、心に焼き付けるように。

そして目を開くと、振り返り歩き始めた。美しい星々からおざかるように、真つ暗な夜の道へと。

ただ一人で、誰からも見送られること無く。
その歩みは静かで寂しげでありながら、胸に刻んだ覚悟のせいか、
意外にも力強かった。

2. 『希望を胸に』

エルサティーナへと向かう馬車に乗りながら、ベアトリーチェは喜びに胸を高鳴らせていた。

「ほら、見て見てウサギがいたわ！」

外の景色を彩る木々の山はエルサティーナの国境に面しているサウザンと言う広大な森だ。自然に溢れながらも、その森を横断するように作られた街道はとてもなめらかに整備されていて、エルサティーナの国力と余裕を示していた。

ベアトリーチェの祖国フィラルドはエルサティーナからはあまり近いとはいえない国だ。

馬車を使っても一週間以上かかる道のりだ。きちんと休みはとっているとはいえ、王族に生まれたベアトリーチェにとって楽な旅ではないはずだ。

だというのに、ベアトリーチェの顔には疲れの色は見えない。それどころか、旅だってから日を経てエルサティーナに近づくごとにベアトリーチェの笑顔は増えていった。

今もベアトリーチェはしきりに窓の外を見ながら、見つけたものをレティシアに報告する。

レティシアはその興奮に頬を染めたた少々子供っぽい表情の自分が遣える王女を見つめ、一緒に幸せそうに微笑み、何かあるたびに自分に話しかける王女の言葉に一つ一つ丁寧に頷いていく。彼女がくすりと笑うと、彼女の美しい銀系の髪が風に揺れた。

レティシアはベアトリーチェに遣える侍女だ。ベアトリーチェが10歳のときから遣えてくれていて、彼女の身の回りの世話を一手に引き受けている。年はベアトリーチェとひとつ違いでしかないが、美しく流れる銀色の髪、青く澄んだ宝石のような瞳、真っ白な透き通るような肌、彫刻みたいに整った容姿に豊満でいてところどころ引き締まった年相応いじょうに大人びた肢体、十六にしてまさに傾

国の美女といった感のある少女だった。後宮の口の悪い侍女も言っていたが、私なんかよりよっぽどお姫様らしいとベアトリーチェも思っている。レティシアは孤児院出身なので一応平民ということになっているが、きつと貴族の血を引いているに違いないと思う。

ベアトリーチェがエルサティーナに嫁ぐと決まったとき侍女を何人が連れて行くことが出来たが、ベアトリーチェの傍付きレティシア一人であり、彼女以外を連れて行くことはおもわなかった。

「本当に良かったですね。縁談のお相手がまさかアーサーさまだなんて。」

「うん、信じられないわ。おまけに正妃としてだなんて。夢じゃないかしら。ちよつと不安になってきたわ。」

政略結婚として決められたアーサーとベアトリーチェ二人の結婚しかし、ベアトリーチェにとってそれは人生で最大の幸福なニュースだった。アーサーは大陸最大の国家エルサティーナの王であるが、その母はフィラルドゆかりの人物であった。アーサーがまだ王太子であったころ、その縁あつて三年ほどフィラルドに滞在したことがあつたのだ。そのときベアトリーチェはアーサーと知り合い、幼いながらも恋心を抱くまでになった。

しかしベアトリーチェは王女であり、結婚に自由はない。国の都合により嫁ぐ相手を決められ、自分から選ぶことなど不可能に等しい。おまけにアーサーは王に即位した後、側室だが既に6人の妃を得ている。この大陸において覇権を握るエルサティーナの王は絶大な力を持つ。側室でもいいので、輿入れしたいという話が後を絶たない。妃が増えすぎれば後宮の維持費により国が傾き、また怪しげな人間が王宮に入り込む隙を生む。だから五代前の王が妃の数を七人に制限するよう定めた。

妃は立場の高さにより第1妃から第7妃までに振り分けられることになる。

そして現在の王アーサーには第2妃から第7妃まで既にいる。残ったのは正妃となる第1妃の椅子だけである。アーサーは王として

絶大な権力と富を持つだけでなく、その容姿も非常に優れていて、大陸中の乙女がみな憧れの的である。彼の正妻の座をあらゆる国とそこに住まう王族や貴族の女たちが狙っている。ベアトリーチエはかわいらしい容姿をしていたが、しかし美女揃いの上流階級の間人の中ではこれといって目立つものはない。そんな自分がアーサーの正妻に選ばれる可能性など皆無に等しく、ベアトリーチエはアーサーへの恋を叶わぬ願いだと思っていた。

しかしどんな奇跡が起こったのか。三日前15歳になったベアトリーチエは王から呼び出された。一般的に王族の結婚は15歳が最も多く縁談の話だとベアトリーチエはすぐさま察した。まだ、アーサーへの思いを捨てきれずにいたベアトリーチエは断るつもりで王の下へ向かった。そこで聞かされたのは信じられない話だった。

エルサティーナからベアトリーチエを正妻として迎えたい。と言ってきたと。

その言葉を聞いたとき、ベアトリーチエの頭は真っ白になった。だが、体のほうは無意識にでも動いたようでこくと深くうなずいたらしい。

気がついたときには準備がすすめられていて、嫁入り道具が用意され、エルサティーナへの馬車も準備され、ドレスの仕立てもすすんでいた。そして自分がアーサーへの想いを何度も語ったレティシアは、満面の笑顔でベアトリーチエを飾り立て、彼女にしては珍しく弾んだ声で自分に語りかけてくれていた。

一方、ベアトリーチエのほうは茫然自失といった感じで、周りの人間にされるがままの状態だった。

腹違いの姉が自分の元を訪れ、不機嫌そうな顔で何か言ったがあまり覚えていない。

そんな放心状態のベアトリーチエだったが、馬車に乗せられ旅がはじまるとだんだんと正気を取り戻していった。

「ねえ、私アーサーさまと結婚するの？」

旅がはじまってからもまだどこか意識を飛ばしたままのベアトリ

「チエが何度も繰り返す間抜けな問いかけを、レティシアは馬鹿にした様子もなくやさしい笑顔で何度も肯定する。

「ええ、そうです。ビーチさまはアーサーさまと結婚するのですよ。」

「ほんとに？」

「はい、ほんとうです。」

何度も確認したがるベアトリーチェに、レティシアは何度も答え続ける。

叶わぬと思っていた想いが叶い、喜びのあまり呆けてしまっている主人の姿はレティシアにとっても愛おしく見えた。

レティシアはベアトリーチェを敬称はつけつつも「ビーチエ」と愛称で呼ぶ。主従としての立場はあるものの、ベアトリーチェとレティシアの信頼関係は厚く、あらゆることを話し合う親友でもある。

何度もベアトリーチェからアーサーの想いを聞かされていたレティシアは、今回のことをベアトリーチェと同じぐらい喜んでいた。むしろ傍目には呆けて表情がまいち現れないベアトリーチェより、常ににこにこいつも以上の笑顔でかいがいしく世話を焼くレティシアのほうが幸せそうに見えた。

そんな気が抜けたようだったベアトリーチェも、旅がはじまりエルサティーナに近づいていくほどに状況を実感し、喜びの表情を浮かべるようになっていった。

そして馬車は今エルサティーナの国境に近づき、ベアトリーチェは満面の笑顔になり幸せそうな空気を振りまいていた。

「レティ、私の頬をつねってみて！」

そういつてベアトリーチェは対面にすわるレティシアに頬を差し出す。

「いいですわよ、ビーチエさま。」

応じたレティシアは、ちよつといたずらっぽい笑顔を浮かべベアトリーチェの頬をつねると、優しくても微かにひねりを加えてあげる。

「いたいたいいたい〜！」

手をわてわてと振り回す王女を、レティシアは楽しげに眺める。

「はなして〜！おねがいく〜！れていく〜！」

悲鳴をあげるベアトリーチェに、レティシアは頬をつかんだ指をぱつと離す。

「夢じゃないとわかりました？」

笑顔で問いかけるレティシア。ベアトリーチェは涙目だ。

「もう〜、わかったけど痛くしすぎだよ〜。」

ちよつと赤くなつた左頬をさすりながら、レティシアを見るベアトリーチェの瞳はちよつと恨めしげだ。だが、その表情も長くもたない。

「えへへ。」

湧き上がってくる幸せな気持ちを抑えきれず、すぐにほにやつとした笑顔に変わつてしまふ。その表情をみてレティシアも微笑む。

「でも結婚できたからといっても、これからのほうが大変だよね。」
ベアトリーチェの胸に不意に不安な影が差す。

いくらアーサーとの結婚が叶つたといっても、ほかに妃は6人もいるのだ。

何らかの政治的事情で結婚今の立場になれたと考えるベアトリーチェにとって、結婚してから愛されることは確約されたことではない。

むしろうわさに聞くと美女揃いの側室たち、自分なんか相手にしてもらえない可能性もある。

ベアトリーチェの恋が真の意味で叶うのはこれからが肝心だと言えた。

それでも傍にいたことすら望めなかつたところからすると、信じられないほどの幸運なのだ。

「大丈夫です。ビーチェさまならきつとアーサー様の心を射止めることが出来ます。」

レティシアはベアトリーチェの気持ちをすぐに理解し勇気付けて

くれる。

「うん、私、アーサーさまにたくさん愛してもらおうようにがんばる。レティも応援してね！」

「もちろんです。」

そう応じてくれた親友の笑顔が、ベアトリーチェの心の不安を溶かしてくれる。

「殿方を虜にするにはまず髪ですわ。ビーチエさまの髪は何もしなくても綺麗ですが、整えればもっと綺麗になります。髪油を使いましょう。」

「えー、やだあ。べたべたするもん。」

化粧箱からその物を出しながら言ったレティシアの提案をベアトリーチェが子供っぽく拒否する。

美しい蜂蜜色の髪を持つベアトリーチェだが、髪に付ける油などはあまり好きではなかった。

「だめです。ビーチエさまがさらに綺麗になるためです。主の命令に背くことになるともやらせていただきます。」

まじめぶった顔で、でも口元は微笑を湛えながら、レティシアは髪油を片手にベアトリーチェに迫る。

「やだやだー！やめてー！」

きゃーきゃー楽しげな悲鳴を上げながら、ベアトリーチェはレティシアから遠ざかるうとする。

「ビーチエさま、お覚悟を。」

「いゝやゝです。」

2人はそんなに広くない馬車内で、座りながら小さな追いかけっこをはじめた。

どちらも顔には笑顔が浮かび、自然と笑い声がこぼれる。

王女と侍女が仲良くじゃれあう間も、馬車はエルサティーナに近づいている。

2人はその先に幸せがあるのだと疑っていなかった。

2・『希望を胸に』（後書き）

説明が多すぎたり、話が寄り道したりで読みにくいものを書いてしまった自覚があります。

でも自分で書いたものなので本当のところどうなのかよくわかりません。

校正の必要があるならしたいのですが、必要ないのなら出来るだけ話を前に進めたいと思います。

「読みにくい」「わかりにくい」などの率直な感想を頂けたらうれしいです。

3・『カンティアの花』

王宮についたベアトリーチェはひととおり歓迎を受けたあと客室に案内された。

アーサーは重要な会談があり出迎えにはこなかったが、それが終われば会うことができるらしい。5年ぶりの再会に、ベアトリーチェは胸の鼓動をおさえきれなかった。

「うーん、この髪型おかしくないかしら。アーサーさまに子供っぽくおもわれないかしら。レティ、どう思う?」

通された客間で何度も鏡をみながら、レティシアに問いかけるベアトリーチェ。

あまり好きではない髪油もアーサーさまのためなら気にならないらしい。蜂蜜色の髪を後ろでアップ気味にまとめ、横はちよつと癖をつけゆるいロールを描くようにする。

「とっても良くお似合いですよ。ちゃんと立派なレディに見えますよ。」

そう言いながら、レティシアは主人につけるべき装飾品を吟味する。

童顔で小柄なベアトリーチェはあまり大人っぽい装いは似合わない。だが、子供っぽくしすぎると、本当に幼く見えてしまう。侍女としての腕の見せ所だった。

まだ約束の時刻まで、一時間もあるのだが二人は真剣だった。

アーサーとベアトリーチェが最期にあったのは、アーサーが18歳、ベアトリーチェが10歳のころだ。アーサーが国に帰った後にレティシアはベアトリーチェの侍女になったので直接の面識は無い。だが何度もベアトリーチェの口からアーサーの人となりを聞かされていた。

主がそれほどまでに思う相手なら、後押しするための手間は惜しまない。

ちゃんとビーチェさまが大人な女性であることを示しつつ、ビーチェさまの魅力を損なわない装い。それがレティシアの目指すところだった。

「うん、どれにしましょうか。」

いくつか並べた髪飾りの中からどれを選ぶか、レティシアは眉に珍しく皺をつくり吟味する。

第四王女としてあまりフィラルドでは優遇されてこなかったベアトリーチェだが、レティシアのおかげで数は多くないもののセンスの良い装飾品が取り揃えられていた。

「そのルビーのは？」

そういうベアトリーチェは、机に並べた中から赤い宝石が中央に輝く髪飾りをぱつと自分で取ってしまう。それを頭に乘せレティシアのほうを振り向き、首をちょこんと傾げ訪ねてくる。

「どうかしら？」

ベアトリーチェの選んだ髪飾りは確かに本人に似合っていた。

だが、レティシアの眉間の皺は刻まれたままだ。

赤い宝石が蜂蜜色の髪と引き立てあい、ベアトリーチェらしい魅力を存分に引き出している。しかし、それはレティシアの意図するものとは違った。

ベアトリーチェの魅力はその内からあふれるような快活さと無垢さであり、それは子供っぽさと同居していた。ルビーの輝きは、ベアトリーチェの快活さを見たものの胸に刻むだろうが、同時に子供っぽさをも強調してしまう。

もっと違う何かが必要だった。

アーサーさまへビーチェさまの魅力を最大に伝える装い…。

「そうですね！」

その時、レティシアの頭にピンとひらめきが浮かんだ。

サファイアやエメラルドの髪飾りが並んでいる机を離れ、ベアトリーチェの装飾品がしまわれているバッグのほうへと向かう。

そしてひとつの髪飾りを取り出す。

「あ、それって！」

ベアトリーチェはレティシアが取り出したものを見てびっくりした顔をした。

レティシアの手にとったのは、紫色の花の装飾がついた髪飾り。それはカンティアと呼ばれる花を模していた。その花飾りは丁寧に彫られていてとても美しいが、貴族が付けるような豪華なものではない。

事実、お忍びで街に降りた折に露天で見つけて気に入って買ったもので、あまり華美な生活は送ってないベアトリーチェとはいえ、彼女が普段つけている装飾品と比べると価値に天と地ほどの開きがあった。

だからベアトリーチェはその髪飾りを公の場でつけたことはなく、部屋にいるときに付けて楽しむのに留めていた。

「大丈夫かしら。綺麗でないって思われるだけならまだいいけど、無礼だなんて思われたら。」

一国の王の前で名も知れない露天で買った髪飾りをつけるのはためらいがある。

ベアトリーチェはレティシアを不安げに見上げる。

だが、返ってきた彼女の微笑はひとかけらの曇りもないものだった。

「宝石や貴金属の装飾が必ず必要なわけではありませんわ。このように簡素な装いでもベアトリーチェさまの魅力は十分伝わります。

それに」

レティシアの腕が動き紫の髪飾りをベアトリーチェの頭につける。そして一呼吸置いた後。

「あの方はお花を好きでいらっしやるのでしょうか？」

レティシアの言葉に、ベアトリーチェの目がわずかに見開く。

「うん。」

短く答えたベアトリーチェの頬は染っていた。見開かれた目は今度は細められ何かを思い浮かべるようにして鏡にうつるカンティア

の花の髪飾りをつけた自分を見つめる。

それは二人だけの秘密。アーサーはカンティアの花を好む自分を男らしくないと言って恥ずかしかっていた。そして偶然それを知ったベアトリーチェに誰にもいわないよう口止めしたのだ。ベアトリーチェは約束どおり誰にも話すつもりはなかったが、親友であるレティシアだけは例外だった。だから、今は三人だけの秘密。

ベアトリーチェは髪飾りをそっと抑えると、瞳の先に愛おしい人の影を思い浮かべた。

「アーサーさま、綺麗って思ってくれるかしら。」

「はい。」

恋する少女の顔になり呟く王女の言葉に、彼女をいとおしげな瞳で見守る侍女は勇気付けるようにそっと肩に手を置くと笑顔で頷いた。

4・『あなたのそばに』1

装いを整え終え、レティシアにお茶をいれてもらい雑談をはじめてからしばらく経った頃、王の使いがベアトリーチェたちを呼びに来た。

「ベアトリーチェさま、会談が終わりましたので陛下の命によりお迎えに上がりました。準備はよろしいでしょうか。」

深々と礼をして、王の伝言を伝える文官らしき青年に、ベアトリーチェは笑顔で答える。

「お迎えありがとうございます。準備はできています。早速参りましょう。」

二人は立ち上がると、迎えに来た青年の後をついていく。

本来なら国に妃が来れば、パーティーなどを開き盛大な歓迎の催しが開かれるのだが、そういうのが苦手なベアトリーチェのことを知るアーサーからの配慮で、城のものだけの歓迎が行われた。

王に会うのもパーティーでみんなの前で顔を合わせるのがほとんどのだが、ベアトリーチェは大き目の客間で王とその側近、王と特に近い貴族とだけ会う予定だった。

青年がひとつの扉の前で立ち止まる。

「ベアトリーチェさまをお連れしました。」

扉をノックし声をかけると、返事が返ってくる。

「わかった。入ってくれ。」

その声を聞いてどきっとする。5年ぶりだがわかる。アーサーさまの声だ。

自然と手に力が籠る。心臓がきゅーっとなり、腕から冷汗がでてくる。肩はがちがちだ。5年ぶりの大好きな人との再会。ベアトリーチェはどうしようもなく緊張してしまう。

ベアトリーチェはちらっと、レティシアのほうを見た。

レティシアもベアトリーチェをしっかりと見つめていた。お互い

の瞳が交差する。レティシアは真剣なまなざしのまま、目元をやわらかにこくりと頷く。

（大丈夫ですよ。）

レティの声が聞こえた気がした。

肩から力が抜け、固まっていた息が口からゆるやかに出て行く。

ベアトリーチェはもう一度空気を吸い込み大きく深呼吸すると、その顔に微笑みの色をのせた。レティシアが微笑んでくれたのを隣で感じる。

「では、ご案内します。」

ベアトリーチェの準備が出来たことを察したらしい青年が、横に控えるようにして扉を開けていく。部屋の中の景色が、ベアトリーチェの目に映し出されていく。

部屋を彩る壁の白、絨毯の赤、ソファアの藍色、豪華な家具の木の茶、飾られた絵画の印象的な橙、縁を飾る輝く金、窓の向こうの夜の深い黒、でもベアトリーチェの目にとまったのはひとつの色しかなかった。

5年前と変わらぬ色彩をたたえ自分を見つめる優しい緑。美しい翡翠の色を宿したアーサーさまの瞳。

ベアトリーチェの唇がぱくぱくと何かを言葉にだしかけた。レティシアの目には、アーサーさまと言った様に見えた。目じりにほんの僅かだが涙がうかんでいる。ぱちぱちと感動をこらえる瞬きをすると、彼女の大きな茶色の目が部屋の明かりを反射して輝きだす。

ベアトリーチェは駆け出し、抱きつきたくなる衝動をぐつと堪えた。

足音を立てぬよう優雅に一步、部屋へ足を踏み入れると、スカートを両手でつかみ何度も何度もこの日のために練習した礼をする。

「お久しぶりです。お会いできてうれしゅうございます、陛下。」

深々と礼をして顔を上げると、あの人は微笑みが目の前にあった。「久しいな、ベア。長旅で疲れただろう。すぐ休むか？」

優しい言葉に子供のころ、優しく頭を撫でてもらったことを思い

出す。今は曲がりなりに公の場であるのでそんなことはして貰えないが、自分の髪を撫でてくれる大きく優しい手の感触をベアトリーチェは確かに感じていた。

「いいえ、大丈夫です。陛下の方こそ政務でお疲れでしょうに、このような場を設けてくださって申し訳ありません。陛下のご厚意に深く感謝します。」

5年ぶりに再会したアーサーさまは、昔の記憶よりも幾分大人びた顔立ちになられていた。はじめてお会いしたときは女性かと勘違いしてしまった綺麗な顔立ちをされていたが、

相変わらず美しいことに変わりはないが、その出会いから8年が経ち、顔から幼さが抜け今は女性と間違われることはないだろう。

背も伸びたようだ。お別れしたとき成長期はほとんど終わられていたはずだが、発育があまり良くないとはいえ別れたあとで人生一番の成長期を迎えたはずの自分と身長差はあまり縮まっていなかった。ちよつとため息をつきなくなった。

輝く黄金の髪と翡翠の瞳を持つ、大陸でも有数の美丈夫の王。ベアトリーチェは大好きなアーサーさまの容姿が嫌いなわけではなかったが、自分のつりあいの取れない容姿やライバルの多さを考えると、もう少しなんとかならなかったのかとどちらに対してお自分でわからぬまま思ってしまうことがあった。5年ぶりに再会した愛しい人は、美しさは変わらぬまま大人としての魅力を獲得していて、ベアトリーチェのその悩みはさらに深くなりそうだった。

「気にするな。それと陛下ではなくアーサーと呼べ。お前に陛下と呼ばれるとなんだかくすぐったくてかなわん。」

照れたような笑顔で冗談めかしたように言う。その言葉にベアトリーチェは子供扱いされてるのかしら。と不安な感情も浮かんで来たが、それこそが自分とアーサーさまを繋ぐ絆でもあったから不満はない。レティも大人になった印象を与えましょうとは言ったが、子供のころの繋がりを捨てるとはいっていない。それはレティシアがベアトリーチェの頭の上に置いた紫の花も主張していた。

「はい、ではアーサーさま。此度のお申し出とても嬉しゅうございました。わが身に余る光栄ですが、精一杯アーサーさまの妃としてふさわしくあるようこれから努力していきます。」

優雅な笑顔で上品に受け答えするベアトリーチエを見て、顎に手をやりアーサーはちよつと困つたような優しい笑いをする。

「ふむ、5年しか経ってないはずなんだが。子供だと思つていたベアも今や立派なレディなのだ。」

立派なレディ、恋心を抱く人に言われたその言葉は、ベアトリーチエの胸に喜びと少しの誇らしさを与えてくれる。

ベアトリーチエは背筋をいつそうぴんと伸ばし、アーサーの顔を朱の差した顔で見上げる。

「そうです。5年も経ちましたのよ。見違えられましたか？」

ふふつ、と笑つたベアトリーチエの顔は、どこか幼い。せつかく被つたレディの仮面がわずかにはがれてしまつていた。そんなベアトリーチエにアーサーはふきだしてしまう。

「ほめられると調子にのるところは、子供のころと変わらん。」

アーサーのからかうような表情に、自分の失態に気づいたベアトリーチエは思わず眉間に皺を寄せてしまう。

「アーサーさまも相変わらず意地悪です。」

頬を膨らませむくれた可愛らしい表情に思わず破顔してしまいそうになる。

しかし、今は二人つきりで話続けていい場ではない。今は控えてもらつているが、位の高い貴族や側近も呼んでいる。ベアトリーチエは彼らにも顔見せしなければいけない。

「ふむ、元気そうだなによりだ。このまま呼んだ貴族や私の側近と挨拶してもらおうと思つのだが大丈夫か？」

「はい、大丈夫でございます。」

ベアトリーチエはアーサーの問いかけに頷く。レティシアが何気なく一歩近づき、髪を整えなおしてくれる。

「そうか、では入つてくれ。」

王の言葉とともに向かいの扉が開かれ、5人ほどの年齢がばらばらの男性が入ってくる。2人は王と同じ年齢ぐらいの若い男、2人は初老にさしかかるぐらいの男性、残り一人は王より年上とわかる中年ぐらいの男だった。

5・『あなたのそばに 2』

アーサーは男たちをひとりひとりベアトリーチエに紹介していく。まず若い男のうちの一人、赤い髪に茶色の瞳をした男が一步前に出る。線の細い美しい顔立ちをしているが、その切れ長の瞳は鋭く見る人によっては冷たい印象を抱くかもしれない。

「こいつの名はカイト。宰相として俺の政務に力を貸してもらっている。」

ベアトリーチエはその男の名を聞いたことがあった。まだ若い王を同じく若くして支える優秀な宰相。その有能さは大陸中で噂され、いくら優秀な王とはいえアーサーはまだ若く、彼なくしてはエルサティーナの政務はなりたないと言われている。

「ベアトリーチエさま。噂に違わぬ美しい容姿を拝見できて光栄でございます。以降お見知りおきをお願いします。」

嫌味なく優雅に挨拶をするカイトに、ベアトリーチエも挨拶を返す。

ベアトリーチエは一度も美しいと噂された覚えなどないが

いつもいつも噂されるのはレティシアのほうだ。可愛いとなら何度か言われたことはあるが……。そこはお世辞と考え笑顔で流す。

「フィラルド王国第四王女ベアトリーチエです。よろしく願います。」

ベアトリーチエは正妻になるべくエルサティーナにやってきたが、まだ婚姻をなしたわけではない。1ヶ月後の結婚式まではフィラルド王国の第四王女として客人扱いになっている。

「正妃になったらいくつかの政務をこなさなければならなくなる。カイトはそれを助けてくれるだろう。」

次に紹介されたのは、黒髪を短くかりあげた若い男だった。カイトよりかなり背が高い。もしかしたらアーサーよりもあるかもしれない。体格も引き締まっているが筋肉質で、どこことなく無骨な印象

を与える。

「近衛騎士団団長のグノイだ。まだ若いが騎士の長としてとても優秀な男だ。」

ベアトリーチェは武芸にうといので知らないが、エルサティーナで開かれる最大規模の武術大会で何度も優勝する実力を持つだけでなく、政務に關しても特に軍事面で王を助けていた。

「よろしくお願い致します。」

グノイの挨拶は無骨で短かった。

「はい、よろしく願います。」

ベアトリーチェは先ほど王の前で見せた子供っぽさは表に出さず、優雅な微笑で挨拶を返す。

「王宮の警護も任されている。危機が迫ったときも必ずやお前を守ってくれるだろう。」

王とその正妃を守るのは近衛騎士団の最重要任務だ。だから、アーサーは自らが信頼をおく男であるグノイをその役目につけていた。

カイトとグノイは、王であるアーサーにとってその両腕であった。優秀でアーサーの個人的な友人でもある彼らは、時に自分の命令に逆らってもアーサーのために尽くしてくれる。

二人がいるからこそ、アーサーは賢王として大国エルサティーナを治めていられる。

今度紹介されたのは、初老の男の一人。細身でやせ細っていて、頭も禿げ上がっている。しかしその紫の瞳は、どこか子供っぽく輝いている。

「宫廷魔術師のベルドールだ。普段は王宮ではなく塔に籠っているのだが。この日のために出てきてもらった。」

ベルドールは前代の王から宮廷に遣えている魔術師だ。非常に優秀な魔術の使い手のだが、研究好きで城にいることは少ない。

普段はこの国の魔術師が集まる塔にこもって研究ばかりしている。

「大きな魔術など、そう必要とされる時代ではありませんからな。」

わしにとつては良い時代ですじゃ。よろしくお願いしますの姫さま。塔を訪れてくれた暁には、わしの発明品を御見せしましょう。」

戦争のない今、大規模な魔術が使われることはなく、宮廷魔術師が必要なのはいくつかの儀式のときだけである。それならよしと言うばかりのベルドールドの振る舞いであるが、血に飢えたように戦争魔術の実験を行おうとする魔術師がいる中、ベルドールドの研究は王国の利益に貢献するものも多く世間体はあまりよくないもののアーサーによつて容認されていた。

「はい、機会がありましたら是非お願いします。」

ベアトリーチエはちよつと興味を引かれてしまったが、表にだすわけにも行かないので社交辞令という形で答えた。

残り二人のうち中年の男が紹介される。

「クレイドール公爵だ。三大公爵の一人であり、若くしてエラン家の公爵位を引き継いでいる。」

エルサティーナには三人の公爵がいる。どれもエルサティーナ王家に匹敵するほどの歴史を持ち、その権力は小国の王などより大きい。エルサティーナの国の要ともいえ、公爵家全てを敵にまわせば大陸一の大国エルサティーナとはいえ危うい立場にたたされると言われている。

「クレイドールと申します。わざわざ大陸の端にあるフィラルドから、中央にあるエルサティーナまで来られ心細い思いもしていることでしょう。ですが、エルサティーナは大陸一豊かな国です。過ごしてみればこちらの国が故郷と思えるようになっていくでしょう。」

小太りの茶髪の地味目な男は、慇懃無礼とも思える話し口だったが、ベアトリーチエは笑顔を崩さずに答えを返す。実際、フィラルドを貶していると思われかねない発言だったが、故郷を必ずしも好いていないベアトリーチエは馬鹿にされたからといって直情的に怒ることはない。

「エルサティーナの素晴らしさは、我が祖国にも聞こえてきます。この国で過ごす日々をとて楽しんでにしております。」

そうでしょうそうですね。とベアトリーチェのそつのない受け答えを聞いたクレイドールは、にやにやした笑みで頷く。

アーサーはそれを見るとすぐに次の男を紹介する。

「同じく三大公爵が一人、ベグルダンだ。ジギル公爵家の当主を勤めている。」

最後に紹介された初老の公爵は、柔和な笑顔を浮かべている。

「ベグルダンと申します、ベアトリーチェさま。我が国によつこそ居心地よく過ごしていただければ幸いです。エルサティーナの夏はなかなか厳しくございます、我が領には人気の避暑地もあるのでよろしければ陛下と一緒にいらつしやられてください。最高のおもてなしをさせていただきますよ。」

丁寧な挨拶だったが、きちんとベアトリーチェに取り入ることは忘れない。まつりごとに永く携わってきた男が見せる笑顔と所作だった。

「その折には是非によろしく願います。」

ベアトリーチェの快い返事にも笑顔で答える。柔和な笑顔に安心してしまいそうになるが、その心のうちはあまりわからなかった。

「あと一人紹介したいのだが、どうも仕事で遅れて来るようだ。すまないが、ベアトリーチェのほうからも改めて挨拶してくれるか。」

そのアーサーの言葉に、ベアトリーチェはスカートを手で持ち上げ優雅に腰を折り曲げる。

「フィラルド王国第四王女ベアトリーチェです。以後よろしく願います。」

ベアトリーチェの整った礼にこの場に集まった男たちは頷く。

「後ろの女性はベアトリーチェさまの侍女でいらつしやるのかな。」
ベグルダンが相変わらずの柔和な笑顔で言う。

一通り挨拶が終わつたせいか、ベアトリーチェの二歩ほど後ろにひっそり控えていたレティシアに興味の目が向けられる。

自分に目が向けられると思つてなかつたレティシアは多少焦つたが、表には出さず失礼にならないようすぐさま挨拶をする。

「はい、ベアトリーチェさまの侍女を勤めさせていただいてるレイシアと申します。」

頭を深々とさげ、それから顔をあげる。侍女の礼だが、レイシアがやると貴族の礼以上に美しい。

顔を上げたレイシアの容姿を見た男たちが息を呑むのがわかった。

銀色の美しい髪に透き通るブルーの瞳、真っ白な肌に優美な曲線を描く輪郭はこの世のものではない美しさ表している。

長い間レイシアと一緒にいたベアトリーチェは、そんな男たちの反応は何度も経験してきたことで今更悪感情を抱いたりすることはない。だが、アーサーさまの反応が気になり、ちらちらと目どころかがつてしまう。そしてアーサーの翡翠色の瞳が、少なくとも表面上は平常に見えることに安堵の息をついた。

「なんともはや美しい容姿をしている。どこかの貴族の令嬢でいらつしやるのかな。」

いちはやく硬直から立ち直ったクレイドルが訪ねる。

「いいえ、平民の出でございます。孤児であったのですが、ベアトリーチェさまのお陰で宮廷に召し上げられ侍女を勤めさせて頂いております。」

その返事にクレイドルもベグルダンも顎に手を当て少し考えるような表情になる。

「何かしら貴族の血筋を引いているのかもしれないな。」

クレイドルから出てきた言葉にベグルダンも頷く。

6・『あなたのそばに』3

宮廷魔術師は飄々としているし、側近たちは無言だが、公爵たちの興味の中心はもうレティシア一色だった。それを見かねたのかわからないが、アーサーが話題を変える。

「カシミール公爵はまだだろうか。そろそろ来ても良いころなのだが。」

アーサーがそう言うのとほぼ同時に、廊下の向こうで足跡が聞こえてきた。

「失礼しました。仕事が長引きましてな。王女殿下にはとんだ失礼を。」

開かれた扉の外から一人の老人が飛び込んでくる。集まった男立ち寄りもさらに年かさを重ねた印象だが、その足取りは老いた様子をまったく見せない。三大公爵家の中でも、カシミールが当主を務めるカサンドラ家はその歴史も力も頭ひとつ抜きん出ているという話だ。

その家において長く当主を務めるカシミールは、今は一線を引いたものの先代の王のときには政務を一手に引き受けエルサティーナの賢者と呼ばれていた。

「気にしておりません。忙しい中私との会談に時間を割いてくださったことを感謝します。」

ベアトリーチェは礼をして、気にしないことを丁寧につたえる。アーサーもそれを見て頷き、二人を引き合わせる。

「あらためて紹介しよう。カサンドラ家の当主、カシミール公爵だ。父の代には国政を担い、私の代になってからも何度も助けてもらっている。」

カシミールは前国王の従兄弟に当たる人物で、アーサーが子供のころはおじさんとして何度か世話してもらったことがあった。そして自分が王になった今は、後ろ盾として全面的にバックアップして

くれている。

紹介されたカシミールはベアトリーチェに向き直り、年齢を経たものの貫禄のある礼をする。

「ご紹介に預かりました、カシミールでございます。王女殿下が長旅で疲れてる中、お待たせしてしまうという非礼重ねてお詫び申し上げます。エルサティーナでも快適に過ごして頂けるよう、私も微力ながら力添えをさせていただく所存です。」

ベアトリーチェも何度目かになるが、気を引き締めなおし礼を返す。

「フィラルド王国第四王女ベアトリーチェです。遅れたことはまったく気にしておりませんので、お気になさらないでください。しかし、カシミールさまのお心遣いの念に感謝します。」

これで今日、この場に集まるはずだった人間は全員そろったことになる。

この後は僅かに言葉を交わしたあと、長旅で疲れたであろう王女を慮り解散する予定であったが。

「ベアトリーチェさまはとても美しい侍女を連れていらっしゃる。

カシミールさまもご紹介いただいたらどうか。」

クレイドールがあまり上品とは言いがたい表情を浮かべながらカシミールにはなしかける。

カシミールはさして興味のわかないような顔をしていたが、無下にするわけにもいかないのか事務的に答える。

「ふむ、どのような方でいらっしゃるのかな。」

そういつて目を向けられたレティシアは、本来こういった場で侍女が挨拶するのはあまり無いことであり、主にすまなく思いながらも失礼にならないように礼をする。

「レティシアと申します。ベアトリーチェさまの侍女としてこちらからお世話になります。」

そしてレティシアが顔を上げたとき、興味なさげにしていたカシミールの目が見開かれた。

口元がもごもごと動き、聞き取りにくい声で言葉をつぶやく。それはベアトリーチェの耳には「エランティエラさま」と言ったように聞こえた。

そのまま呆然とした様子で、カシミールはレティシアを見つめ続ける。

その尋常じゃない様子に、部屋にいる人間たちもざわめき始める。レティシアはわけもわからずはるかに身分の高い人間に注視され、緊張した様子で動けずにいる。公爵に自ら声をかけるわけにもいかず、公爵の態度の理由をたずねることもできない。

ベアトリーチェはそんな二人の様子を不安げにみつめている。わけのわからない事態に、レティシアに悪いことがないよう祈る。

そんな異様な雰囲気が漂い始めた部屋で、やっとアーサーがカシミールに声をかける。

「どうしたのだ、カシミール。」

王もこの事態を把握できず、カシミール本人に問いかけることしかできない。

「レティシア殿はどこかの貴族なのでいらっしやるのかな。」

はるかに年上でありながら普段は王としての経緯を払ってくれるカシミールだが、このときの王の質問は無視された。いや耳にはいらないといった様子だった。

レティシアはさっき他の公爵がされた質問に、眉を寄せながら同じように答える。

「いえ、平民の出でございます。」

カシミールの質問は続く。

「両親はどのような方かね。」

「孤児ですから申し訳ありませんが、わかりません…。」

レティシアは不安のせいか、いつものような凜とした空気が失われかけた状態で、公爵の質問に答えを返す。

「なんと…。」

公爵は孤児という言葉を聞き、顎に手を当て何かを考え込んでし

まっ。

そしてはっと顔を上げると「失礼！」と言いレティシアの手をとり長い侍女服の裾を二の腕の上まで引き上げる。レティシアのさらされた白い肌の一点、肘の上を見て公爵は固まってしまっ。

ベアトリーチェはそこに青い痣があることを知っていた。わけもわからない不安に心臓が嫌に脈打つ。

「いったいどうしたのだ！カシミール！」

さすがに見ておけなくなったアーサーは大きな声でカシミールを呼ぶ。

カシミールは硬直したままでいるレティシアの裾を下げると、早足で陛下に歩み寄った。そしてアーサーの耳に顔を近づけると何かを耳打ちする。

最初はとまどっていたアーサーだが、公爵の言葉が耳に送られていくことにこわばった表情に変化していく。

「そんな、まさか…。」

そして信じられないものを見るような目でレティシアを見る。

「陛下！」

同じく厳しい顔でカシミールは陛下に声をかけ、確認を求めるような視線を向ける。

「うむ、わかっておる。」

カシミールの目線を受け領いた陛下が、ちらっと一瞬こちらを見た気がした。

その視線にさらに不安が募る。いったい何が起きているのか。アーサーはレティシアに歩み寄ると、こわばった顔で言葉を告げる。

「レティシアどの、我と一緒に来てもらおう。」

拒否を許さない強い口調に、ベアトリーチェとレティシアの顔から血の気が引く。

「お待ちください、アーサーさま！レティシアに何か問題でもありませんでしたでしょうか。理由をお聞かせくださいませ。」

「ビーチェさま…。」

慌ててベアトリーチェは陛下に問いかける。レティシアは不安げな呟きをもらす。

しかしアーサーは厳しい顔をベアトリーチェにも向け、不安をより一層深くする言葉を返す。

「ベアトリーチェ、今日はもう部屋にもどって休んでくれ。」

有無を言わさない王の言葉は、再びレティシアにも向けられる。

「ついてきて来てもらうぞ。レティシア殿」

そう言ってレティシアの手を取り、アーサーは振り返ることもなく行ってしまふ。その後ろをカシミールがついていく。

「ビーチェさま…。」

レティが不安げに自分のほうを振り返る。しかしこの国の主であるアーサーの行いを阻む力はベアトリーチェには無い。

「レティ…。」

ベアトリーチェはつれられて行く親友を呆然と見送っていた。

部屋には混乱した男性たちと、ベアトリーチェだけが残された。

7. 『あなたのそばに』 4

その後、再び最初の部屋に戻されたベアトリーチエは一人呆然と佇んでいた。

レティシアの代わりにと寄越された侍女は、ベアトリーチエが夜着に着替えるのを手伝い、一通り世話をやいたあと退室した。

もう時刻は夜半を過ぎたのに、レティシアは帰ってこない。

「いったいどうしたのかしら…。」

心配で胸がぎゅつとしめつけられる。レティシアのいない今、ベアトリーチエは見知らぬ王宮でたった一人だった。不安を慰めてくれるものは誰もいない。

心強く自分を支えてくれた親友に危機が迫っているかもしれない。胸のざわめきは強さを増していく。

ベアトリーチエはバッグの中から、ひとつの箱を取り出した。それをテーブルの上に丁寧に置くと、優しく蓋を開ける。その中にあるのは、一本の笛だった。銀製の横笛、フルートのような形をしているが、おかしなことにその笛には音程をかなでるためのキーがついてなかった。

それは魔笛と呼ばれる楽器。ベアトリーチエがあの人が貰った一番大切な宝物だった。

ベアトリーチエは箱から魔笛を取り出し、唄口に唇を寄せそっと息を吹き込む。

高く澄んだ美しい音が一人の部屋に響いた。

その優しい音色が胸に大切なあの人の言葉呼び起こす。

『大丈夫。今がどんなに辛くても、ベアががんばればちゃんと幸せは来てくれるよ。』

アーサーさま…、レティ…。ベアトリーチエの心に、大切な人たちの顔が浮かび上がる。

大丈夫。きつと大丈夫。

ベアトリーチェは魔笛に添えた手を動かし、魔力を籠めていく。すると魔笛から出る音が、様々な色を持って変化をはじめ。高く低く響くそれは音の階段を作り、音楽を奏ではじめる。

もし辛いことが起こっても、あきらめずにがんばればなんとかなる。

アーサーさまが去ったフィラルドの王宮、一人になってしまったベアトリーチェは辛い出来事があると夜に魔笛を吹くことにしていた。アーサー様から貰った魔笛の音色はベアトリーチェの心の痛みを癒してくれた。またがんばろうという勇気を与えてくれた。だから王宮で辛いことがあっても、ベアトリーチェはがんばることができた。そしてレティシアとめぐり合うことができた。

だから、今回も大丈夫。

魔笛を吹いていると、まるでアーサーさまに撫でられているような気分になる。美しい音色が、胸の不安を取り払ってくれる。

ベアトリーチェはそのまま無心で魔笛を吹き続けた。

結局、レティは帰ってこないまま3日経ってしまった。

アーサーさまに会って、事情を聞きたかったがあれ以来会いにくることはなかった。

せめて外に出て何か情報を得たかったが、外出は許可されなかった。傍に居るのは侍女と見張りの兵士だけ。しかも、ほとんど同じ人間だ。

有体に言えば軟禁状態だろう。しかも自分の存在を隠すように、ごくわずかな人員でそれがなされている。胸の不安は大きくなるが、無理に逃げ出しても捕まって立場が悪くなるだけ。

日を経るごとに不安は募り、無力さに歯がゆくなるが、魔笛を吹き自らの心を落ち着かせる。

大丈夫。いつまでもこの状況が続くわけじゃない。何かあったとき、それが悪いことか良いことかはわからないが、最良の対応ができるよう今は心を治めておくべきだ。

レティの無事を祈りながら、自分に取り乱さないように言い聞かせる。ベアトリーチェはそうやって三日間過ごしてきた。

そして三日目のこの日、侍女と見張りの兵士以外訪れることのないベアトリーチェの部屋に客が訪れた。アーサーの側近と紹介されたカイト、そしてレティが連れ去られた原因であるカシミール公爵だった。

二人が挨拶するのも早々に、ベアトリーチェは立ち上がり二人に問う。

「レティはどうしたのです。無事なのですか？」

自分に言い聞かせたような冷静な行動とは程遠いが、一番確認したかったことだった。

胸の焦りを隠しきれないベアトリーチェと違い、二人の様子は落ち着いていたものだった。

「レティシアさまはフィラルドに一度戻られています。」

「フィラルドに？ いったいどういうことです。」

大切な侍女が故郷に戻されたと聞きベアトリーチェは動揺する。

一度ということは、またこちらに戻ってこれるといふことなのだろうか。だが、一体なぜフィラルドに戻されなければならなかったのか。

「そのことについてベアトリーチェさまにお話があります。」

そう切り出したカイトの顔は、何かを隠すような硬い表情だった。カシミール公爵の方はもう少し自然体だったが、そこに笑顔は一切ない。

ベアトリーチェは胸に不安を覚えたまま、無言で先を施す。緊張のせいか、喉に水分が不足していて声がだしくかった。

「今回のアーサーさまとベアトリーチェさまのご婚姻の話ですが、これを破棄させていただくことになりました。」

告げられた言葉に心臓が止まりそうになる。あまりにも突然すぎる告示だった。

「いったいなぜ…。」

受けた衝撃に頭がくらくらくらして気絶してしまいそうになる。だがなんとか、ばらばらになりかけた思考をとりまとめていく。

レティのことを聞かねば。レティについては何も教えられていない。

「レティは、それでレティはどうしたのです？そのこととレティが関係あるのですか？レティに悪いことが起こったりはしていないのですか？」

アーサーさまとの婚姻の話がなくなること。それはとてつもないショックだった。だが、まずはレティがちゃんと無事が確認しなければ。

「レティシアさまはフィラルドにて国王グレンダさまの養子となるべく戻られています。」

「養子…？」

ベアトリーチエはカイトの言葉を聞いてもわけがわからなかった。レティと姉妹になるの？そんな疑問が浮かんでくる。

だが、カイトが続けて放った言葉に、再び大きな衝撃を受けることになった。

「アーサーさまはレティシアさまを正妃として迎えられることを決められました。」

突然の婚姻の破棄の通告とアーサーさまとレティが結婚するという報告、ベアトリーチェは混乱して何も考えられなかった。ただ、酷く心臓が痛んだ。

それはアーサーさまが自分との結婚を反故にしたことが痛いのか。それとも、アーサーさまと自分以外の女性が結婚することが辛いのか。アーサーさまと結ばれるという望みが絶たれたのが悲しいのかわからない。

レティに対しても、突然の状況で彼女の身を心配しているのか。彼女がアーサーさまと結婚するという事実にあた動揺しているのか。それとも羨んでいるのか。自分の感情がどこにあるのか理解できない。ベアトリーチェの思考はぐちゃぐちゃだった。

「どういうことです…。」

ベアトリーチェの口から出たのは簡潔な言葉だった。とにかく、何があったのか知りたい。どうしてこうなったのか。何が悪かったのか…。それともどうしようもない事情なのか…。

宰相は公爵へと顔を向ける。

「それは私から説明しましょう。」

カシミール公爵は、その視線に頷くと一歩前に出る。

「これは現在エルサティーナの機密に属することです。ですが、ベアトリーチェさまにはそれが原因で一度こちらから要請した婚姻を破談にしてしまうという事態になってしまいました。なのでお話をすることにします。」

カシミール公爵の顔は厳しかった。エルサティーナの三大公爵が言う王国の機密。それはかなり重いものであることがわかる。それを聞けば自分にも何らかの圧力がかかるだろう。ベアトリーチェは予測した。

「はい…。お願いします…。」

それでも聞かずにはいられなかった。何が原因でアーサーさまとの結婚の道が断たれたのか、何故レティとアーサーさまが結婚することになったのか。

「レティシアさまはアラスト聖国の皇族の末裔であらせられるのです。」

それを聞いたベアトリーチェの目は驚きに見開かれた。アラスト聖国、その名前を知らないものはこの大陸にはいないだろう。かつて、この大陸全土を治めていた伝説の大国。しかし、その国はもう存在しない。滅びてしまった。国を治めていた皇族の滅びとともにベアトリーチェの驚きをよそに、カシミールの話は続く。ベアトリーチェも知る歴史を交えながら、この王国の事情や今回の件につながった王国の望みがカシミールの口から語られていく。

「アラスト聖国の皇族の血を、我がエルサティーナの王家に招き入れること。それは王家代々の悲願だったのです。」

公爵が言うにはこういうことだった。

そもそもエルサティーナの成り立ちは、アラスト聖国の領地の統治を委託されたことにはじまる。

遙か昔、この大陸を治めていたのは一つの強大な国家だった。それがアラスト聖国である。

現在、この大陸に存在する国家のうち古く歴史ある国の全てが、アラスト聖国にその由来を持っている。エルサティーナはまさにその代表と呼べる国で、アラスト聖国の国皇によりエルサティーナの土地の信託されたものが、国の滅亡により王国となったものだ。他にも同じ経緯を経た国が5つあり、どの国も現在において長い歴史と大きな領土を持つ大陸有数の大国となっている。

この古き5国と、古き5国から分派した新たな国、それと民族や英雄によって建国された新興国、現在これらの国が集まって大陸を構成していた。

ちなみにベアトリーチェの故郷フィラルドは、エルサティーナの王族から分派した新たな国のひとつである。新たな国といって

もその歴史は300年以上あるが。儀式や文化など共通することも多く、小国で距離が離れていながらもエルサティーナと交流がもてるのはそのつながりのお陰だった。

そして古き国が広大な領地を治める国家として成り立つ根拠となるものが、アラスト聖国に統治を委任されたことによるのである。エルサティーナに仕える貴族たちは、歴史が古く力の大きいものこそアラスト聖国を介しエルサティーナ王家に忠誠を誓っている。だから代々の国王は王家の権威を高めるために、皇族の血をつぐものを妻にすることを望んでいた。

皇族は世間では滅びたと言われていたが、エルサティーナはひとつの情報を持つていた。生き残った可能性のある皇族がいたのだ。最後の皇族が滅びるより10年前、突如失踪してしまった皇家の姫エランティラ。

彼女の子孫を探し出し、正妃として向かえ皇太子を成すこと。それがエルサティーナの王に代々受け継がれた宿願のひとつ。

だが、

「そんな話：聞いたことありませんでした…。」

ベアトリーチエはそんな話聞いたことがなかった。アラスト聖国の皇族は滅びたと聞いていたし、その生き残りをエルサティーナが探していたということも聞いたことがなかった。フィラルドとエルサティーナの王族のつながりはそれなりに深い。王家がそのようなことを行っていたなら、うわさだけでも聞こえてきていたはずだ。

「はい、実際のところ代々の王は誰もエランエイエラさまの子孫を探そうとはしませんでした。」

公爵はあっさりと肯定する。そしてその理由を話し始める。

9・『あなたのそばに』6

実際のところ、王家は生き残りの情報を持ちながら、その血筋を見つけ出すことより、生き残りがいるという情報が露見することを恐れた。エランティエラが当時生き残っていたとしても、その子孫が生き残っているかとなると話は別だ。さらに子孫が生き残っていたとしても、見つけたせるとは限らない。

それより周りの人間が皇族の生き残りがいるとばれたときのほうがよいか이었다。さつき言ったように、エルサティーナ王家の権威の根源は皇家より賜ったものだ。もし他国や王国の貴族がエランティエラの末裔を見つけ、担ぎだせばそれは王家に匹敵する権威を持ちかねない。本物が見つかれば本当に深刻な事態になる。さらに偽者だつて出てくる可能性がある。その場合相手の虚偽を暴けばいいのだが、政務に負担が強いられることは避けられない。

だから現実的に考えると、皇族の生き残りを探すなどとてもじゃないが出来なかった。むしろ王家は、代々の王ともっとも信頼のかけるカサンドラ公爵家の間でその情報を秘匿することにした。

そうして王家は皇族の血を招き入れることを望みとしながらも、具体的な行動は何も起こさないまま時を重ねてきた。だから、エランティエラの子孫が見つかることはなかったはずだった。しかし、「見つかったのです。エランティエラさまの血を継いでいると思われる方が。それが…」

「レティイなのですか？」
公爵は肯定した。

最初、レティシアを見たカシミール公爵は驚愕するのを禁じえなかった。

そっくりだったのだ。秘匿されていた皇族の資料のひとつ、エランティエラさまの肖像画と瓜二つの少女が目の前にいた。銀色の髪も青色の瞳も、珍しくはあるがこの大陸にいないわけではない。だ

が、その容姿、輪郭、柳眉にいたるまで生まれ変わりかと思うほどに似ていた。

慌ててカシミールはレティシアの二の腕を確認した。アラストの皇家は代々そこにあざをもったと聞いていたからだ。はたしてそれは、存在した。

公爵は呆然となりかけながらも、それを王に報告した。まだ確定したわけではない。だが間違いないという妙な確信もあった。

アラスト聖国が隆盛を誇ったころ、後宮にたくさんの女をかこいすぎ血筋が混乱しかけた。皇家は皇族の血を引くか判定する魔法装置を作り出し、事態を解決した。その時使われた魔法装置が、王家に保存されていた。それは何百年というときを経ながらも、動くことが確認されていた。

アーサーとカシミールはレティシアを連れ出し、確認することにした。果たして結果は、公爵の予想通りだった。レティシアはアラスト皇族の血を引いていた。探すことのできなかった、アラスト皇族の子息が目の前にあった。しかもアーサーとレティシアはお互い結婚するのに調度良い年齢であった。奇跡とも呼べる幸運。叶うはずのなかった王家の宿願が、いま叶おうとしていた。

それからは忙しかった。レティシアを正妻に迎える以上、ベアトリーチエとの婚姻は成しえない。それはフィラルドとの関係に亀裂与えかねなかった。高価な魔道鏡を使い遠話でフィラルド国王と協議を行った結果、レティシアを一度国王の養子として迎えフィラルドの王女とした後、アーサーの妻として迎えることによりエルサテイナーの正妃を出した国としての立場や利益を補填することにした。その他いくつかのフィラルドにとっては喜ばしい条件を付け加えると、国王はそれを笑顔で承諾した。そしてレティシアは一度、フィラルドに戻るようになった。

エルサテイナーではその間、レティシアとの婚姻の準備を進めることにした。王や公爵以外のものにも少しづつ情報が公開されていき、式の準備や衣装の用意が勧められている。情報が広まれば、古

き国のどこからか横槍がはいりかねない。一カ月後に大々的な式を行い、レティシアを正妃とする計画だ。

そして正妃として迎えられるはずだったベアトリーチェは、混乱を招かねないために客室に閉じ込められ少数の人間しか接触しないように処置された。ベアトリーチェが派手な式を好まなかったことも幸いし、正妃となるはずだった少女を知る人間はそれほど多くなかった。

エルサティーナとフィラルド、アーサーとレティシア、そしてそれに仕えるものたち、全ての都合が付き婚姻の準備は急ピッチですすめられていた。ベアトリーチェただ一人を残して。

「ベアトリーチェさまには今回の件まことに申し訳なく思っております。」

カシミールは話の最後に、ベアトリーチェへの謝罪を口にした。

全てを聞いたベアトリーチェの心に、混乱は収まっていった。心中に広がるのはただ暗い暗い絶望だった。

納得した。仕方のないことだ。アーサーさまは王としての責務をこなされただけ。レティシアはただの侍女だった。二国を巻き込んだ話に逆らえるはずもない。誰が悪かったわけでもない。

むしろエルサティーナはさらなる権威を得られ、フィラルドはラスト皇家の血を継ぐ正妃を出したことで大きな恩恵を受けることが出来る。レティシアはエルサティーナの正妃となる。彼女はそれを単純に幸せとは思わないだろうが、彼女が常々望んでいた孤児院への援助などは大いに叶うだろう。アーサーさまのことも愛し合えるようになるかはわからないが、アーサーさまはレティシアを不幸にしたりはしないだろう。レティシアは容姿に優れるだけでなく、むしろその才覚や性格のほうが好きらしいとベアトリーチェは知っていた。彼女はエルサティーナにとって良き正妃になるだろうし、アーサーにとって良き妻になるだろう。

アーサーとレティシアの婚姻は、多くのものに幸せをもたらすものになるはずだ。

なのに、自分は喜ぶことができなかった。それが愛しい人にとっても、親友にとっても、この国にとっても、祖国にとっても良いことになるとわかっていても。

胸にあるのは凍えそうなほどの悲しみと孤独感。

自分はたぶんフィラルドに戻されるだろう。もうアーサーさまと結ばれることは叶わない。そしてその時、親友はもうそばにいない。アーサーさまが来るまで、レティシアと出会うまで、孤独に震えたあの城で、また一人暮らすことになるのだ。

縁談があれば他国のもとに嫁ぐことになるだろう。一度婚姻を破局されたベアトリーチェにろくな縁談は来るはずもないが。しかし、

それはどうでもいいことだった。

既に思い人も親友も失った。これ以上失うものなどないはずだ。

「私はいつ祖国に戻るのでしょうか…。」

ベアトリーチェは問うた。

思い人を親友を祝福できない狭量な心。だからせめて邪魔にだけはならないようにしようと思った。

しかし、帰ってきたのは意外な言葉だった。

「帰る必要はありません。」

言ったのはカイトだった。ベアトリーチェは訝しげに、アーサーの腹心を見る。

「どういうことでしょうか。」

なるべく早くこの国を離れたいと思っていたベアトリーチェには良い話であるとは思えなかった。

「あなたの処遇についても陛下はフィラルド国王とお話になられました。そしてベアトリーチェさまに何の非もないのにこのようになってしまった事を申し訳なく思い、特例を設けられることにしました。あなたを第八妃として迎えることにしたのです。」

「第八妃…。」

エルサティーナの王家では、妃は正妃を含め7人までと決められていた。

「正妃として迎えられるという話で来られたベアトリーチェさまには、納得しがたい話であるかもしれませんが。ですがわが国が、陛下が用意した精一杯の処遇であります。フィラルド国王もそれを了承されました。どうかお受けいただきますようお願いします。」

祖国の了承もあるということは断ることは許されない話なのだろう。

だが、ベアトリーチェはあえて自分の心に問いかけた。それでもいいのか。

第八妃になれば、アーサーさまと結ばれる可能性が残る。しかし、特例として設けられた最低位の第八妃、その重要性は限りなく低い

ものだろう。アーサーさまの側妃は美女揃いと聞く、しかも正妃として新たにレティが嫁いでくる。レティの魅力はベアトリーチェが一番知っていた。たぶん側妃たちがどんなに美女だろうと、レティの魅力には敵わないだろう。それらを差し置いて自分がアーサーさまに愛されることなど、無いに等しい確率だった。

それにそれは親友であるレティと国王の寵愛を巡る恋敵になるということでもあった。

でも…。それでも…。

第八妃になれば、アーサーさまとのわずかなつながりをもたもつことができる。親友と離れないでいられる。

「わかりました…。」

ベアトリーチェは頷いた。

第八妃、その立場は自分が思うよりつらいものになるかもしれない。愛しい人が親友や側妃たちと愛し合う姿を見て、暗い感情を抱いてしまうかもしれない。愛されることも叶わないまま孤独に、後宮で息絶えることになるかもしれない。

『大丈夫。今がどんなに辛くても、ベアががんばればちゃんと幸せは来てくれるよ。』

アーサーさまが言ってくれた言葉が胸に蘇る。

諦めたくないとおもった。どんなに可能性が低くとも、その望みを手放すことはできなかった。

アーサーさまと愛し合い、共にいられること。

たとえ、愛されることが叶わず寂しい思いをすることになろうとも。いつか愛されることを願いながら苦しい思いを抱えながら生きていくことになろうとも。

それでも…。

あなたのそばにいられるなら。

11・『結婚式』

青空の下、優しい光があたりを照らしている。

この日のために飾りつけられた城は、いつも以上の優美さで日の光の下輝いていた。

今日はエルサティーナの王が、ついに正妃を迎えるための結婚式の日だった。城の中央広場は白い布で飾り付けられ、綺麗な花々がそこに色を添えていた。

城の外には市民が詰め寄り、歓声がここまで聞こえてくる。

式場では国中の貴族たちが居並び、今日結婚式をあげる二人を今か今かと待っていた。

その中にベアトリーチェもいた。

カシミール公爵から話を聞いたあと、ベアトリーチェは結婚式が行われるまで客室に滞在するよう言われた。第八妃となるまでは、フィラルド王国からの客人として扱われる。しかし、外出は許されなかった。公爵たちはレティシアの情報は徐々に公開していくつもりだが、ベアトリーチェが他者と接触すれば本意な形で情報が漏れるかもしれないということでもそれを好まなかった。事実上軟禁状態だったが、ベアトリーチェも出歩くような元気はなかった。

結婚式が行われるまでの間、与えられた部屋で密やかに過ごしたそんな中、心は寂しい気持ちにずっと支配されたり、今後のことを考え不安になったり、気持ちの整理をつけようとして逆に混乱してしまったりしていた。

暗い気持ちを少しでも払拭しようとする夜には魔笛を吹いた。胸に蘇るあの人の笑顔が、言葉が、胸の奥に少し暖かさを取り戻させてくれた。

一ヶ月後、ベアトリーチェは結婚式に招待された。フィラルドからの客人として。

参加しようか迷った。行かないほうがいいのかもしれない。それ

は自分にとって辛い光景だろうから。

でもいずれは向き合わなきゃいけないことだった。だから、今日それを確かめることにした。

周りの貴族の婦人たちはそれぞれに用意できる最高の衣装を用意してきている。ベアトリーチエの衣装もそれなりの仕立てだったが、いささか地味な格好だった。カイトからなるべく目立たないように、顔は隠しててくださいと言われていた。装飾の少ない薄青のドレスをまとい、蜂蜜色の髪は背に隠し、つばつきの帽子を深くかぶり顔を隠した。

興奮に浮き立ち笑顔で談笑を交わす人々の中、ベアトそうリーチエは一人佇み、静かな瞳で式がはじまるのを待っていた。

話し声だけが鳴り響いていた広場に、荘厳なアンサンブルが流れ始める。

人々のざわめきは一瞬だけ大きさを増すとやがて鎮まっていき、この日のために腕を磨いてきた楽団が奏でる祝福の音色が広場に響きわたる。

花嫁と花婿の入場だ。

広場に集まった皆の視線が一つの方向に向けられる。ベアトリーチエもおそろおそろそちらを見た。心が揺れ逃げ出したくなるのをこらえる。いつの間にか握り締めていたスカートにくしゃりと皺が入る。

そして白い門をくぐり、この式の主役、花嫁と花婿が登場した。最初に響いたのはため息だった。それは感嘆と歓声が混じっている。広場の全てが二人の登場と共に心を感動に染められた証だった。

(きれいだ…)

ベアトリーチエは思った。

レティシアは純白のウェディングドレスを身にまとっていた。シルクで作られたそれはレティシアの白い肌を透かすように栄えさせ、レースの飾りは彼女を美しく飾りたてていた。布が描くラインは、彼女の美しい肢体を滑らかななぞっているのに、とても清らかでど

こが儂い印象を与える。

銀色の髪、白い肌、ドレスのシルク、似た色で揃えすぎたはずのその装いは、それぞれが違う色味の白光を反射して、その輪郭を決して失わない。

ヴェール越しでもその美麗な容貌は見るものを魅了し、青いサファイアの瞳はどんな宝石よりも美しく彼女を彩っている。

長く壮麗に丈を取られたスカートは歩きにくいはずなのに、彼女は気高く美しい立ち姿のまま、優雅にその歩みを進めていく。

その姿は幻想的で、まるで物語に出てくる天使のようだった。

アーサーさまの装いは黒いフロックコートだ。金色の髪は日の光に輝き、翡翠の瞳と共に王の端正な顔立ちを皆に見せつける。細身ながらも体は鍛えられていて弱々しさは微塵もない。黒いスーツに包まれたその姿は王の気品と風格をまわりに示していた。

花嫁は花婿の腕に手を捧げると、互い寄り添いながら二人歩調を合わせに赤い絨毯を歩いていく。

アーサーはレティシアをその手で導き、二人は祭壇の前までたどり着く。

二人の結婚に祝福を授けるためにやってきた大司祭は、今日結婚をする二人に優しい笑顔を向ける。

金色の髪と翡翠の瞳を持つ花婿、銀色の髪とサファイアの瞳を持つ花嫁、美しい容姿はどちらが見劣りすることなく引き立てあい、互いに持つ色は全然違うのに並び立つその姿は見事なまでに調和している。長身の二人は背丈も釣り合い、世界に二つとないほどお似合いの二人だった。

ひとときわ静まり返る広場に、大司祭の神への祈りの言葉が響く。

アーサーとレティシアは手を固く結び、大司祭の前に静かに立つ。大司祭は祈りの言葉を終えると、目に優しい光をたたえたままアーサーへと向き直る。

「汝、花婿アーサー。エルサティン。汝はレティシア。フィールエンドを妻とし、聖なる婚姻を結び、生涯をこの女性と共に過ごし、愛

し、敬い、支え、二人の命がある限り永遠に愛し合うことを誓いますか？」

「はい、誓います。」

ずきん。ベアトリーチエは、自分の胸が痛みにくづくのを感じた。それでも大司祭の言葉に真剣な表情で言葉を返すアーサーさまの顔を遠くから見つめ続けた。

大司祭はその言葉に静かにうなずくと、レティシアのほうに体を向ける。

「汝、花嫁レティシア。フィルエンド。汝はアーサー。エルサティンを夫とし、聖なる婚姻を結び、生涯をこの男性と共に過ごし、愛し、敬い、支え、二人の命がある限り永遠に愛し合うことを誓いますか？」

「はい、誓います。」

レティシアの美しい声が、宣誓の言葉を紡ぐ。

二人は一度互いの手を離すと、客席のほうに向き直り手を結びなおす。

アーサーとレティシア顔を向き合わせ宣言する。

「ここに集っている人々を証人として、私アーサーは、あなたレティシアを私の正統なる妻として受け入れます。この先、幸福な時も、幸福でない時も、富める時も、貧しい時も、病める時も、すこやかなる時も神に誓いし宣誓に従い、死が私たちを分かつまではあなたを愛しいつくしみ変わらぬことをこの命にかけて宣言いたします。」

「ここに集っている人々を証人として、私レティシアは、あなたアーサーを私の正統なる夫として受け入れます。この先、幸福な時も、幸福でない時も、富める時も、貧しい時も、病める時も、すこやかなる時も神に誓いし宣誓に従い、死が私たちを分かつまではあなたを愛しいつくしみ変わらぬことをこの命にかけて宣言いたします。」

大司祭はもう一度微笑むと、あらかじめ置かれてた美しい彫刻の刻まれた箱を開けずは花婿に差し出す。そこに入っていたのは指輪だった。

「今日、神の名の下に私たちの敵かなる誓約に基づき成された結婚の絶えざる証として、この指輪をあなたの指にはめます。」

レティシアの白く細い指に、アーサーの手が指輪を通す。それはしつかりと、レティシアの薬指にはめられた。

「今日、神の名の下に私たちの敵かなる誓約に基づき成された結婚の絶えざる証として、この指輪をあなたの指にはめます。」

アーサーの大きくて力強い手。レティシアの綺麗な手が、その指を取り指輪をはめる。

二人の指に灯った指輪の光、それはここまで届きベアトリーチェの瞳に輝きを植えつける。

そしてベアトリーチェの瞳の先で、アーサーとレティシアは見つめあい。

お互いに目を瞑ると、唇を優しく重ね合わせた。

二人の姿はまるでひとつの絵画のようで、美しく、とても綺麗で。なのにベアトリーチェの胸をこんなにも痛くする。

最後に大司祭が高らかに宣言した。

「神の名によって、あなたがたが夫婦となったことを宣言いたします。この先、この夫婦に神の多大なる祝福があらんことを。」

そして二人の愛の誓いが終わるとともに、会場が今まで抑えていた感動に沸き立つ。

「アーサー陛下！ばんざーい！」

「レティシア王妃殿下ばんざーい！」

「アーサーさまああああ」「レティシアさまああああ！」

広場は歓声に埋め尽くされた。

国民たちが待ち望んだ王妃の誕生。しかも美しく気高いその姿に全てのものが喜んだ。

仲睦まじく寄り添う二人は、笑顔で周りの人間に手を振っていく。幸せな光景。

なのにベアトリーチェの心は痛かった。どうしようもないほどに。この国の王と王妃、二人の並び立つ姿は輝かしく、この国の未来

を明るく照らす太陽のようだった。

日の光に照らされ輝く二人の姿は、観客たちの影で暗く沈む自分からは果てしなく遠くに見える。

ベアトリーチェは泣きたくなかった。二人を見るほどに感じる胸の痛みにも、自分の弱さと醜さに、ここにいることの悲しさに。

それでもベアトリーチェは笑顔を作った。レティシアと友達でいたかったら。アーサーさまの少しでも近くにいたかったから。

「おめでとう、レティ。おめでとう、アーサーさま。」
心からの言葉にはならない。でも今はこれで許して欲しい。

これでベアトリーチェが参加できる式は終わった。

この後、アーサーとレティシアは市民に王妃をお披露目をするパレードへと向かう。

新しい王妃は国民から盛大な祝福を贈られた。

そうしてアーサーとレティシアの結婚は無事に終わった。その素晴らしさは皆の口からずつと語りつがれることだろう。

次の日、ベアトリーチェはひっそりと後宮に入った。誰に祝われることなく、誰に望まれることなく。

レティシアは大通りを走る馬車をきよきよと目で追っていた。通りを歩く人々は、レティシアを見るとあからさまに顔をしかめる。そうでない人も、関りあいたくなさそうに距離をあけて横を通る。

ここは王都の高級市街、道を歩く人々の身なりはとても綺麗で、レティシアの着ているぼろぼろで薄汚れた服は酷く目立っていた。レティシアは耐えず視線を動かす。巡回している兵士に見つかればここから追い出されてしまう。普段なら、レティシアもこんなところに来たりしない。でも、今日はここでやらなければいけないことがあるのだ。

レティシアが居る孤児院はもう限界だった。自分たちの孤児院は援助もろくに貰えず、たったひとりで孤児たちの面倒を見てくれた院長先生は、児童を寝かしつけた後も働きに出て子供たちの食費を稼いでくれていた。年長の自分たちはなんとか働いて院長先生を助けようとしたが、子供が貰えるような賃金ではるくな助けにはならなかった。

院長先生はついに無理がたたつて、肺炎で倒れてしまった。薬があれば直るのだが、孤児院にそんなお金はない。それどころか、院長先生が倒れてから、孤児院の財政はさらに悪くなった。院長先生の具合は日増しに酷くなり、子供たちはろくにご飯も食べられず飢え始めている。

もう、自分たちだけではどうにもできない状況。孤児院の子供の中で一番年長だったレティシアは決心した。王さまに直接お願いしよう、と。

孤児院の仲間たちは止めてくれた。危険だと。そんなことやらせるわけにはいかないと。実際何人かの人間が、王さまの馬車を止め直接話を聞いてもらおうとして処刑されたと聞いた。

それでもレティシアの決心は変わらなかった。

このままでは院長先生は死んでしまう。子供たちも体が弱い子から死んでしまう。そんな状況を変えたかった。

本音を言えば恐ろしい。ここにくるまで何度も怖気づきそうになった。でも、自分たちの窮状がちゃんと伝われば王さまも動いてくれるはず。レティシアはそう思った。

そしてこの場所に来た。今日この通りで王さまが乗られている馬車を通ると聞いて。

市街地の人間から嫌な目で見られているのを無視して、目を凝らして通りを通る馬車たちを見つめた。

それらしき馬車はひとつもない。

胸の中にある不安は時と共に大きさを増していく。

それでもレティシアは探す。わずかな希望を胸に。

そして遂にレティシアの目が、向こうから来る一つの馬車を捕らえた。その馬車には銀色の紋章が刻まれていた。片羽と宝玉の意匠。間違いない、フィラルド王家の紋章だ。

レティシアは拳を握り締め、覚悟を決めると、その馬車の進路に立った。

馬車が速度を落とし、レティシアの前で止まる。

レティシアは急いで地面にひざを付け膝き頭を地面に付けると、

一晩中考えた口上を述べようとした。

「馬車を止めてしまい申し訳ありません。ですが、国王さまにおねがいがあぐう！」

しかし最期まで言うことは出来なかった。

一瞬意識が飛び、気が付くと地面に仰向けに倒れていた。顔面を蹴り飛ばされたのだと気づいた。視線を下げると、すさまじい形相をした兵士が剣に手をかけ自分を睨んでいるのが見えた。

鼻から鉄錆びた血のおいがする。

「あ……」

何かしゃべろうにも、三日間何も口にしていなかった体はもう動

かなかった。

「乞食の餓鬼が！王家の馬車を止めるなどは！その不敬死をもつてつぐなえ！」

すらりと、護衛の兵士が剣を抜くのが見えた。

院長先生の顔が、孤児院のみんなの顔が頭の中をめぐる。

ごめんね、みんな。私何もできなかったよ…。

死への恐怖、蔑ろにされる悲しさ、何もできなかった悔しさ。レティシアの目じりに涙が浮かぶ。

剣が振りかぶられ、レティシアの命が絶たれようとしたとき。

「まって！」

甲高い少女の声が当たりに響いた。

「…さま、何を!？」

「お待ちください！」

何やら焦ったように騒ぐ女性たちの声が聞こえる。

「まちなさい！」

もう一度少女の声がし、たつたたと駆ける足音が近づいてくる。自分を殺そうとしていた兵士は、驚いた顔で後ろを見ていた。

そして仰向けで動けないレティシアの視界に、一人の少女が現れた。

「あなた大丈夫？怪我はない？」

ぺたぺたぺた、と自分の体を心配そうな顔でさわってくる少女を、レティシアは茫然と見つめた。

蜂蜜色の髪に、柔らかそうな白い頬、茶色の目はくりくりと大きい。小柄な体つきをしていて、綺麗な青いドレスを纏っている。その可愛らしさはまるで人形のようなようだ。レティシアに思わせた。着ているものはひと目でわかるほどの高級品で、位の高い貴族の子女だと感じさせた。

「大変、鼻血が出てるわ！」

少女は細かい意匠の付いたハンカチを、出血しているレティシアの鼻に当て血をぬぐいはじめた。白いハンカチが血の色に染まって

いく。

貧しい暮らしをしてきたレティシアの格好は、清潔とは言いがたい状態だった。そんな自分たちを見て、高級市街に住む良家の子供たちは触りたくないとはき捨てた。なのに目の前の少女はそんなの気にした様子も無く自分に触れてくる。ドレスが汚れるのにも構わずに。

少女はレティシアの血をぬぐい終わると、振り返りきつと兵士を睨みつけた。

「あなた、こんな子供にいったい何をしてるの！」

少女も自分と同じぐらいの年のはずなのに、兵士をしっかりとつけるその姿はある種の風格を纏っていた。

「いえ…、ですが…。」

しどろもどろになって、言い訳をしようとする兵士。

それを無視し、少女は再びこちらに向き直る。

「顔に傷がついちちゃったね…。」

頭の後ろに腕を添えられ、その綺麗な手で優しく顔を撫でられた。自分の覗き込む目は優しさで満ちていた。

レティシアは思った。この人なら助けてくれるかもしれない。この人なら自分たちの言葉を聞いてくれるかもしれない。

「あ…あの…、おね…が…」

何とか自分の思いを伝えようとしたが、言葉がでてこなかった。

切れた口がうまく動かなかった。殺されかけたシヨックで舌が固まっていた。

そんな自分を見た少女は安心させるように微笑みかけた。

「大丈夫。話はあとでちゃんと聞いわ。今は手当てをしないと。」

そう言うと、少女は後ろを振り向き、一歩引いたところで立っていた侍女に話しかけた。

「この子を連れて帰るわ。怪我の手当てをしないと。それにとっても痩せてる…。」

それを聞いた侍女の反応は芳しくなかった。

「ですが…。どう見ても貧民の子です。宮に入れるのは…。」
あからさまにレティシアを連れて帰ることを反対している。しかし少女は引かなかった。

「この子は私の友達よ。友達を招待するのなら構わないでしょ。」
「……。」

明らかかな嘘だったが、反論する証拠があるわけでもない。侍女は眉をしかめ不満げな様子だったが、少女の言葉にもう何も言わなかった。

揉めている雰囲気はレティシアは不安になる。大丈夫だろうかと少女はそれに気づいたらしい。レティシアの頭を抱え上げると、そっと少女の胸に押し付けた。その手のひらは、優しくレティシアの髪を撫で付ける。

「あなたが私に何を言おうとして馬車の前に立ったかは解らないわ。でも私が出来うる限りのことをすると誓います。だから今は休みましょう。」

少女の温もりにレティシアの頬を涙が伝い落ちた。髪を梳く手が、緊張とシヨックで引き攣った心を解きほぐしていく。

自分よりも小柄な少女に抱きしめられながら、レティシアはゆっくりと意識を落としていった。

13・『侍女の選択 2』

目覚めるとそこは今まで見たこともない綺麗な部屋だった。

ふとんの感触は驚くほどふわふわで気持ちいい。

そのまま、再びまどろみの中に落ちかけたが、眠りに落ちる前のことを思い出してあわてて体を起こした。

「あ、起きた？」

声のした方を見ると、ベッドの横で自分を助けてくれた少女が椅子に腰掛けていた。

「あ……。」

何を言えばいいのだろうか。明らかに生まれの違う少女を目の前に、レティシアは緊張し言葉が出なかった。

「気分が悪かったりしない？」

「はい……。」

気遣ってくれる少女に、まだ顔は少し痛かったが大丈夫だと答える。

その答えに安心したのか少女は微笑む。その姿はとても可愛らしく、昔絵本で見た花の妖精のようだと思った。

「じゃあ、食事を持ってこさせるわね。おなかすいてるでしょ？」

少女がテーブルの上のベルを鳴らす。すると、侍女がトレーを持って部屋にはいつてきた。

侍女はこちらまで歩んできたが、ベッドにいるレティシアを見て顔をしかめる。

「貧民の子をベッドに寝かしたのですか。汚らしい。シーツが汚れてしまうじゃないですか。」

その言葉を聞き、慌ててベッドから降りようとしたが少女に止められる。

「大丈夫よ。ちゃんと体を拭いたもの。汚れたりしないわ。」

レティシアは慌てて真っ白なシーツを見る。自分が眠っていた場

所に汚れないことを確認してほっとした。

侍女は気にくわなそうな顔をしながらも、トレーを置いて無言で去っていった。

トレーの上には暖かいスープと小麦色に焼けたパンが置かれた皿があった。

ぎゅるる。スープの匂いに空腹を自覚したレティシアの胃袋が情けない音をたてる。

「あっ……」

恥ずかしくて頬が朱に染まる。

少女はくすりと笑うと、トレーからスープの入った皿とスプーンを手渡してきた。

「あまり食事が取れてないみたいだったから。最初はスープがいいと思うわ。」

小皿に入ったスープは、濃い琥珀色をしていてとてもいい香りでした。孤児院で食べていた出汁を薄めきって、ほとんどお湯と変わらないようになっていたスープとは全然違っていった。

ごくろり。喉を鳴らし、スプーンを持ち、ひとさじすくい上げ、口に運ぶ。それを口に入れようとしたとき、孤児院の仲間たちの顔が浮かんできた。

手が止まる。

「どうしたの……?」

その様子を見て、心配そうに少女が問いかけてくる。

「あの……食べられない……です……。」

震える口から言葉が漏れる。

「嫌いなものが入ってた……?」

ぶるぶると首を振る。ちがう。とても美味しそうでお腹も凄くすいてて、食べたかった。でも。

「私以外にも……孤児院のみんながお腹すいて……だから私だけなんて……。」

孤児院の子はみんなここ数日ご飯が食べれてない。自分は彼らを

助けるために、ここに来たのだ。なのに、みんなが飢えて辛い思いをしているのに、ここで一人だけ美味しそうな食事を食べるのはみんなへの裏切りのように思えた。

「あなた孤児院の子なのね。そんなに酷い状態なの？本来なら国からの援助があるはずなんだけど…。」

「援助なんて全然なくて、院長先生が働いてみんなを食べさせてくれて。でも、無理してたから病気で倒れちゃって。大きな子たちで何とかしようとしたけど。薬も買えないし、お金もどんどんなくなっっていくって…。」

お腹がすいて泣く幼い子供たち、日に日に顔色が悪くなっていく院長、何もできない無力感。レティシアの目に涙が溢れてくる。

そんな涙を拭ってくれる自分と同じくらいの小さな手があった。

「辛かったのね…。」

少女はレティシアと同じぐらい悲しそうな顔をする。自分には関係のないことのはずなのに。

「ちよつとまつてて！」

少女はいきなり大声を出すと、ぴょんつと椅子から立ち上がった。どたどたと、と走りだし、引き出しをがばつとあけ、そこそと中をあさり始める。

いらぬものをひよいひよい投げ捨てるから、見る前に部屋が散らかっていく。

レティシアは少女の様子を啞然と眺めた。

さっきまでの少女は気品に溢れ高貴な生まれを感じさせていたのに、探しものがなかなか見つからないことに顔を顰め、どんどん投げ捨てるものの飛距離があがっていく少女は、なんとはいえ、いかお転婆だった。だがそれは年相応の愛らしさも感じさせた。

「あ、そうだわ！」

手を打ち鳴らした少女は、結局、部屋の反対側の箆笥に走り引き出しを開けると、今度は一発で目的のものを見つけたらしい。

「あったー！」

紐で口が結ばれた袋を頭上に掲げる。

少女はレティシアに駆け寄ると、その袋を手のひらにぎゅっと預けてきた。

レティシアは戸惑って、少女と袋を交互に見る。少女はレティシアの視線にただ頷いた。

レティシアは袋を開け中を覗き込む。

「え、えっ…。」

中に入ってたのは十数枚の金貨と銀貨だった。レティシアのようなものが働ける場所では、賃金の支払いはいつも銅貨だった。銀貨ですらめったに見たことが無かった。

驚いて目を見開くレティシアに少女は言った。

「これで当面は凌げないかしら。」

確かにこれだけあれば、院長先生の薬も買える。お腹をすかせた子供たちに、たくさんパン食べさせられる。

「で、でも…こんな…。」

いいのだろうか。こんなに貰ってしまった。はじめて目にする大金に、レティシアの心は縮みあがってしまった。

だが、何故かそれを見て少女はすまなそうな顔をする。

「ごめんなさい。こんな形でお金を渡されても嬉しくないわよね。でもね、本来ならあなたたちには国から支援が出ていたはずなの。

それが出ればこんなことには…。私は陛下に支援金がちゃんと出るようにお願ひするから。だからこれは今まで配られなかった分だと思っ…。」

レティシアはそんなこと全然思っ…なかった。だから少女の言葉を聞いてむしろ驚いてしまった。だが、その言葉からも少女の自分たちへの思いやりが伝わってきた。

後にこの時渡されたお金は、少女が想い人にプレゼントを贈るために貯めていた大事なお金だったことを知る。

「これで大丈夫かしら？」

少女は尋ねた。

「はい。」

レティシアは頷いた。十分すぎるほどだった。

誰も自分たちを助けてくれなかった。孤児院の周りに住む人間は、お腹をすかせた子供たちを見ると、まるで泥棒が来たかのように追いついてた。曰く、腹が減ったから自分たちのものを盗みに来たに違いないと。

金持ちらは自分たちの横を笑いながら通り過ぎた。何も見なかったかのように。

しかし少女は手を差し伸べてくれた。精一杯の力で自分たちを救ってくれようとしてくれている。

レティシアは再び泣き出しそうになった。すると、少女はまた涙を拭ってくれている。そして今度は微笑んだ。

「さ、それじゃあご飯たべちゃいませよ。あなたまで倒れちゃったらさらに大変なことになっちゃうわ。」

少女はそういつてスープを差し出してくれる。

それを受け取り、スプーンで口まで運ぶ。今度は止まることはなかった。

スープは冷めていたがそれでも美味しかった。口の中に優しい味がひろがっていく。

「おいしい…。」

その言葉に少女の微笑みが増すのがわかった。

今度はパンを差し出してくる。適度な大きさをスライスされてバターが塗られていた。

口に含むと信じられないほど柔らかい。噛むとバターの芳醇な香りが出た。

レティシアは夢中で用意された食事を平らげた。

三日ぶりの食事を取り元気を取り戻したレティシアを、少女は門の前まで送り届けてくれた。

「もう、馬車を止めようとしたりしないですね。私だったからよかったけど、もしお父さまや姉さまの馬車だったら…。」

少女は辛そうな顔をしてそう言った。

「また何かあったら、私の所にきて。衛士の人に話して通してもらえるようにしておくから。」

レティシアは頷きかけて、留まった。少女の名前を知らないことに気づいたのだ。そうそう頼ったりして迷惑をかけるつもりはなかったが、恩人の名前ぐらい知っておきたかった。

少女もそれに気づいたのか、あつとした顔で自分の名前を明かした。

「私の名前はベアトリーチエ。この国の第四王女よ。」

「ベアトリーチエさま……。」

王族の馬車を止めたのだから、考えてみれば当然だったが王女だったのだ。あらためて雲の上の人だと知らされたが、心に緊張はなく不思議な安心感に包まれていた。

「ベアトリーチエさま、このご恩は一生忘れません。」

微笑を返すベアトリーチエにレティシアは頭を下げ、孤児院の方へと走っていった。

ベアトリーチェさまから貰った援助のお陰で、孤児院の窮地は救われた。

貧しい生活から脱出出来たわけではなかったが、子供たちは飢えをしのぎ、院長先生は薬で病気を治し、しばらくの間も療養することが出来た。

そのことをベアトリーチェさまに報告すると、彼女は安心したように微笑んでくれた。

でも、根本的な孤児院の資金不足は改善されていなかった。それが変わらなければ、また同じような危機的状況に陥ってしまうかわからない。

「私が援助出来ればいいのだけれど……。」

ベアトリーチェさまは申し訳なさそうな顔をして言った。王女といってもまだ子供のベアトリーチェさまには、自由に出来るお金というものがほとんどなかった。国王からあまり愛情を抱かれていなかったことも、それに拍車をかけた。あの時渡したお金も、なんとかやりくりして貯めていたものだった。

「孤児院の支援が十分でないことを、陛下にお伝えしてみるわ。」
そう言った通り、ベアトリーチェさまは陛下と謁見できる少ない機会を使い、私たちだけでなく多くの孤児院の子が十分な援助を受けられず苦しんでいることを幼いながらにフィラルド国王に訴え、彼らを救うようお願い出たらしい。

国王の反応はあまり芳しくなかった。訴えを聞いて何かしようとする気配もなく、興味なさそうに、時には不愉快そうにベアトリーチェさまの話聞き流そうとした。しかし、ベアトリーチェさまは何度も諦めず私たちの窮状を救うよう嘆願し続けてくれた。

そして……ついに王の不興を買った。

第四王女が北の離宮に移されると聞き、レティシアは急いでベア

トリーチェの下に向かった。

すぐに門を通され入った部屋は、前と比べて物が無く寂しい印象を受けた。

ベアトリーチェさまは、寂しそうな悲しそうな顔をして言った。

「陛下を説得することはできなかつたようだわ。ごめんね、力が及ばなくて。」

「そんなことないです。」

レティシアは首を振った。ベアトリーチェさまが精一杯力を尽くしてくださったことは、十二分にわかっていたから。むしろ、自分たちのせいで離宮に追いやられてしまった彼女に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

暗くなりかけた部屋の空気を取り払うように、ベアトリーチェさまは急に明るくいった。

「そうだ！あなた私の侍女をやってみない？」

手をぽんと打ち、首をかしげ、少しいたずらっぽく笑う。

レティシアはベアトリーチェさまの言葉の意味がわからず、同じように首をかしげてしまった。

「今、私の侍女って一人もないの。あなたが侍女になってくれたら助かるわ。ちゃんと給金も出るし、条件は悪くない仕事のはずよ。」

離宮に追い出されたベアトリーチェさまに付いて行こうとした侍女は一人もいなかった。もともと王からの愛情が薄い第四王女。ベアトリーチェさまに仕えていた侍女たちはもとの王女に遣える侍女になるうとしてあぶれてしまったものたちだった。王の不興を買いさらに立場を落とした末の王女に付いて来ようとするはずもなかった。

ようやく意味を理解したレティシアは、手をあわあわさせて慌てて返事をする。

「む…無理です！私、平民のしかも孤児の出ですし、礼儀も作法も知りません…。」

でもベアトリーチェさまの笑顔は変わらない。

「出自は関係ないと思うわ。平民からでも侍女になる子はいるし。礼儀や作法も侍女になるのは、みんなレティシアみたいな年からよ。これから学んでいけばいいわ。」

「でも……」

断ろうと思った。王女さまの侍女なんて恐れ多いし、自分がきちんとできるなんてとても思えない。

そう思いかけて、ふとベアトリーチェさまの部屋を見回した。

王宮で招待された部屋より、寂しくなった部屋。掃除が行き届いているとは言い難く、ところどころに埃が残ってしまっている。

前は侍女が入っていたお茶も、今日はベアトリーチェさまが入れていた。余り慣れてないのか、渋みを少し感じた。

何よりこの離宮はほとんど人がいなかった。見かけたのは年老いた庭師と、門番の衛士ぐらい。

こんなところでベアトリーチェさまは一人で暮らしていかなければならない。王族の姫なのに。

レティシアはこの人の傍にいたいと思った。自分に何か出来るとは思わない。でも彼女が精一杯自分たちを救ってくれたように、自分の精一杯で彼女を助けたいと思った。

「わ……わたしががんばります！ベアトリーチェさまの侍女になります！」

その言葉を聞いたとき、ベアトリーチェさまはぱつと花が綻ぶように笑った。それは今まで見た彼女のどんな笑顔より素敵で、同時に理解した。やっぱり寂しかったのだと。どんなに立派に振舞われていても、自分と同じ年ぐらいの少女なのだ。北の離宮に一人追いつ出され、寂しくないわけがなかったのだ。

「ありがとう、レティシア。これからよろしくね。」

差し出された手を、レティシアはおずおずと握った。

そして私はベアトリーチェさまの侍女になった。

それから大変だった。一人が二人になったとはいえ、どちらも

何も出来ない少女。いろいろ試行錯誤して、部屋を掃除し、服を洗い、二人で必要なものを考えた。

ベアトリーチェさまは礼儀作法やお茶の入れ方の本を図書室から見つけてきた。それを二人で読んで勉強した。院長先生から文字を習っていたのは幸いだった。

何故かベアトリーチェさまも、侍女がやる仕事を自分と一緒に練習していた。「ついでよ。」と笑うベアトリーチェさま。ちよつと困ったけど、ベアトリーチェさまと一緒にやるのは楽しかった。同時に早く一人前になって、ベアトリーチェさまに苦勞をさせないようになりたいと思った。そのために侍女に必要とされるあらゆることを必死で勉強した。

侍女の給金はとんでもなく高額と言うわけではなかったが、今までやってきた仕事とは比べものにならないくらい良かった。

院長先生も無理しなくて良いようになり、みんな慎ましくも安定した生活を送れるようになった。

一年経つころには、がんばりの成果もあつて王宮にいる侍女たちに負けないぐらいの仕事が出来るようになっていた。

すると、他の王女や国王に仕えている侍女から勧誘を受けるようになった。「第四王女に仕えるのなどやめて、うちで働かないか。」と。

どうも、ベアトリーチェさまに仕えてから身綺麗にするようになった自分の容姿は、他者に魅力的映るらしい。ベアトリーチェさまは「レティは本当に美人だし、いつの間にか礼儀や作法も私より上手になっているし。私よりレティのほうが本当のお姫様みたい。」と冗談めかして言われた。

でも、思うのだ。

ベアトリーチェさまは確かに、貴族や王族に必要とされるいくつかの教養についてあまり優れていらっしやらない。しかしベアトリーチェさまには、身分に関係なく困った人に手を差し伸べる優しさがある。周りの王族や貴族が持つ傲慢な偏見に惑わされず、真実を

見抜きそれを訴える心がある。この方こそが、真の王族にあるべき方だとレティシアは確信していた。

ベアトリーチェさまと過ごす日々は楽しかった。よくベアトリーチェさまは、アーサーさまのことについて話してくれた。今の自分があるのはあの方のお陰だ、と。あの方が自分にさまざまなことに立ち向かう勇気をくれたのだ、と言っていた。アーサーさまのことを語るベアトリーチェさまの目には、優しい恋の輝きがあった。それを見ると、いつの日かベアトリーチェさまの想いが適うことを、切に願った。

ベアトリーチェさまはよく魔笛を私に聞かせてくれた。アーサーさまがくれた、大切な思い出の魔笛。その音色は綺麗で素晴らしく、孤児院暮らしで芸術なんてわからなかった私にも感動を与えてくれた。レティシアはあっというまに音楽が好きになった。

この優しく、可愛らしく、ときにはお転婆で、それでいて王族の気品と誇りを持つお姫様をレティシアは愛していた。この方に遣え、親友と呼んでもらえる自分が誇らしかった。

いつまでもこの方の傍で、ビーチェさまが幸せになるのを見守っていききたい。そう思っていた。

あの会談の後、城の地下に連れていかれた私は大掛かりな魔方装置の上に乗せられた。

魔法装置は私が乗ると、青い光を放ちずっと輝き続けた。それを見て、カシミールさまとアーサーさまは頷き合つと、今度は私を城の最上階へと連れて行った。そこはなんと陛下の私室だった。

「レテイシア。私と結婚して欲しい。」

その言葉を聞いたとき、わけがわからず茫然となった。

目の前にいるのは、アーサーさま。このエルサティーナ国の国王。ベアトリーチェさまの大切な想い人。もうすぐベアトリーチェさまと結婚するはずの方。

なのに…。

「何をおっしゃるのですか…?」

エルサティーナの事情は聞いた。自分が昔あった大国の王族の末裔であることも聞いた。だが、それがなんだというのだ。

「この国の王妃として迎えよう。私の妻になつて欲しい。」

アーサーさまは表情を変えず同じことを言う。

「そんなことをしたらベアトリーチェさまはどうなるのですか!？」

私は叫んだ。信じられずアーサーさまを見る。アーサーさまの顔は固く何も表情は見えなかった。

「ベアトリーチェとの婚姻は破棄させてもらつ。」

「…!」

息を呑んだ。そんな馬鹿な話あるか。ベアトリーチェさまはあんなに嬉しそうにしたのに。あんなに喜んでいたのに。

「お断りします。その話をお受けすることはできません。」

私はアーサーさまをにらみつけるようにしながら言った。当然だった。ベアトリーチェさまを裏切る選択なんてしようと思わない。

私の言葉を聞いても、アーサーさまの表情は変わらなかった。そ

の瞳に感情は見えず、ベアトリーチェさまと笑顔で話していたときとは別人のようだった。

「ふむ…。」

すると、王家の事情を話してから、一切しゃべることのなかったカシミールさまが私のほうを厳しい眼差しで見してきた。

「どうやらレティシアさまは、ベアトリーチェさまのためにこの話を断ろうとしていらっしやるようだ。」

「当然です。」

国の為とはいえ、ベアトリーチェさまを裏切ろうとしたアーサーさまの行動には考えさせられるものがあつた。しかしベアトリーチェさまにとつては、アーサーさまと結ばれることが何よりの幸せ。その幸せを奪う選択肢などあるはずがない。

「残念ですが、あなたが断ろうとベアトリーチェさまとの婚姻の話が破棄されることは変わりません。」

「なっ…!?!?」

私は目を開いた。公爵の言葉は続く。

「皇家の生き残りが見つかった以上、正妃として迎えるのはもうその方だけです。ベアトリーチェさまを正妃としてお迎えすることはできません。」

「あなたたちが！あなたたちがベアトリーチェさまを呼んだのではないですか!」

私は叫んだ。怒りを持って。あまりにも酷すぎるベアトリーチェさまへの仕打ちに。

だが、老練の貴族の心はそんなもので揺れることはなかった。

「はい、ベアトリーチェさまには非常に申し訳ないことをしたと思っております。ですが、申し上げたことは変えることの出来ない事実です。」

眩暈がした。

ベアトリーチェさまが望んだ幸せな未来が今閉ざされようとしている。そしてその原因となつたのは私という存在なのだ。何故…、

ベアトリーチェさまを幸せにしたいと思ってがんばってきたのに…。
何故こんな！

シヨックにうち震えるレティシアに、公爵がかけた言葉はさらなる追い討ちだった。

「もし、あなたが陛下との婚姻を断られた場合、あなたを自由にすることは出来ません。我々の目の届くところで暮らしてもらうことになります。」

それは自分がベアトリーチェさまと引き離されるということ。

「それに皇家の情報についても秘匿し続けることになります。そうなればベアトリーチェさまとの婚姻を破棄した理由も発表出来なくなります。」

婚姻が破棄された場合、ベアトリーチェさまはフィラルドの顔をつぶすことになる。しかもその理由が不明となれば、人々はこぞつて悪い噂を囁きあうだろう。

レティシアはぞつとした。

そうだったら、ベアトリーチェさまに冷たいフィラルド王宮の間たちが、彼女にどんな仕打ちをしようとするか。疎まれつつも無関心であった以前とは比較にならない、明確な悪意が彼女にぶつけられる。フィラルドに彼女の味方をするような人間はいなかった。そしてそのとき私は隣にいられないのだ…。

「もし、あなたが婚姻を了承してくださいるのなら、フィラルドへの説明はきちんとしましょう。あなたをフィラルド国王の養子としてから、エルサティーナの正妃に迎えることによってあちらの面子を保つこともできます。」

カシミールの言葉を聞いた、レティシアの唇はわなわなと震えた。そんな馬鹿な話あるかと叫びたかった。すべてを投げ出して拒否してしまいたかった。

でもそうすれば、今崖のふちに立たされているベアトリーチェさまは、どこから突き落とされてしまうのだ。

どうすればいいかなどわかっている。この状況で最善の選択が何

かも。

でも、でもだ。

うれしそうに笑っていたのだ。ベアトリーチェさまは。アーサーさまと結婚できると聞き、呆然とし、やっとその状況が飲み込めたとき。花が綻ぶような笑顔で。あの時以上の笑顔で。

本当にうれしそうで、幸せそうで、私も幸せな気持ちで。これからベアトリーチェさまが歩いていく幸福な道の端で、この綺麗な笑顔を眺めていけるのだと思っていた。

自分の大切な主が5年以上大切に抱き続けていたその思いが、ついに叶ったのだと。

レティシアは呼吸をしようとしてえづいた。

手は強く握り閉められ、その手のひらは汗で濡れていた。

もし自分がここで嫌だといえ、ベアトリーチェさまはとてつもない苦境に落とされる。フィラルド国王はベアトリーチェさまをもともと気に入られていなかった。最悪その命すら脅かそうとするかもしれない…。

ぎりっ。食い締めた歯から血が滲んだ。心の痛みに顔が歪んだ。

涙は出なかった。泣く資格などなかった。今から大切なあの人のいちばんの幸せを奪う自分に泣く資格などなかった。涙を流していないのは、あの人だけだ。

自分の唇がゆっくりと動く、ひゅっと空気を吸い込む。喉を伝う空気が鉛のように重く感じた。

目をつむるとベアトリーチェさまの姿が心に浮かんだ。胸にひとつ大きく痛みが浮かんだ。

ベアトリーチェさま…。

レティシアは両手を合わせ握った。何かに祈るように。

そしてアーサーに告げた。

「婚姻の話お受けします。」

レティシアは選択した。ベアトリーチェさまが最悪の状況に陥るのを避ける道を。自らの手でベアトリーチェさまの幸せを奪い取る

道を。

16・『第八妃』（前書き）

なるべく辛い部分から早く抜け出せるよう、ここから巻き気味に書いていきたいと思います。

ボリューム不足、説明不足に感じる部分などあったら申し訳ありません。

加筆などする場合はこの作品を完結させてからしたいと思います。

金曜更新する場合は土曜更新はなしでご容赦ください。

誤字、脱字などを発見した場合は報告していただけたらと思います。

第八妃になったベアトリーチェが案内されたのは殺風景な部屋だった。最低限の家具と調度品だけが用意されている。広さは申し分なかったが、それが逆に部屋の寂しい印象を強調していた。

「ここがベアトリーチェさまの部屋に御座います。」

この部屋まで案内してくれたのは、女官長のルーネという女性だった。50歳ぐらいの女性で、あまり動かない表情、切れ長の瞳に銀縁のめがねが固い印象を与えてきた。

「ありがとうございます。」

ベアトリーチェは部屋に自らが運んだ荷物を置いた。ルーネにも手伝ってもらって驚いた。他の侍女に手伝わせないのだろうかと疑問に思ったが、その疑問はすぐに解決した。

「ベアトリーチェさま、申し訳ありませんが今はあなたに侍女を付ける事はできません。この後宮ではすべての侍女は、第二妃から第七妃までそれぞれの方に直接遣えるようになっていのです。ご不便をおかけしますが、必要な場合陛下にご所望ください。」

（ああ、そうか…。）

ベアトリーチェは納得した。アーサーさまは自分の境遇に同情して特別に後宮に向かえいれてくれたのだ。後宮の側妃が増えれば、それは国庫の負担になる。出来うる限り負担をかけずに暮らすのが自分の役目だと思った。

（良かった。あのときレティを手伝っていて。）

レティシアが侍女になってしばらくの間は、侍女がやるようなことも二人でやってきた。

それが幸いし、自分でそこそこの自分のことが出来るようになっていた。もし王族としてのうのうと暮らし続けていただけだったら、アーサーさまに迷惑をかけてしまったかもしれない。ベアトリーチェはほっと息を付いた。

「わかりました。あの、他の側妃の方への挨拶はいつごろすればいいのでしょうか。」

ルーネの返答は簡潔だった。

「どの方もご予約を取られておりません。」

考えてみれば当たり前かとベアトリーチエは思った。陛下の同情でなっただけの第八妃。この状況からも解るとおり側妃としても認められたわけではないのだ。

だが正直、自分も会いたいとは思わなかった。美妃揃いだと聞いたアーサーさまの側室。アーサーさまが故郷に戻り、一目見ることすら叶わず過ごした五年間、陛下に愛され続けてきた美女たち。見てしまうと元々なかつた自信が、根こそぎ消失してしまいそうだった。

ルーネは部屋や食事のことについて説明すると、失礼しますといて退室していった。

部屋にひとり残されたベアトリーチエ。殺風景な部屋は王宮を追い出されたあの頃を思い出させた。

でもあの頃とは違う。もうレティシアは隣にいない。自分はこの後宮で一人で生きていかなければならない。

「がんばらなきゃ……。」

ベアトリーチエは自らを励ますように呟いた。

何もしないでいると気が滅入ってくるので、ベアトリーチエは荷解きをすることにした。祖国から持ってきた荷物はそれほど多くなかつたが、一人でやるには十分多かつた。すべてが終わる頃には夜になつていた。

夜、ベアトリーチエは一人でベッドに入った。ふと、離宮での日々を思い出す。レティシアとはよく寝る前に、いろんなことを話した。二人で眠くなるまで、笑いながら話した。時には寝過ごしてしまいそうになることもあつた。

夜の冷たい空気が、胸の隙間にまで染み渡ってくるような心地がした。

ぶるつと身を震わせると、ベアトリーチェは上着を羽織りベッドから抜け出した。

小物入れの引き出しを開けると銀の笛を取る。寂しいとき辛いき元気をくれ、楽しいとき嬉しいとき笑顔をくれたあの方からの贈り物。

（お願い私に勇気を頂戴…。）

みんなが寝入った深夜、ベアトリーチェは魔笛を吹く。

その音色は暖かく、ベアトリーチェの凍えそうな心に温もりを取り戻してくれた。

17. 『後宮での日々』

それからベアトリーチエは後宮で一ヶ月過ごした。

後宮の人間のほとんどは彼女を無視した。彼女に言葉を向けるのは、噂好きの口さがない侍女たちぐらい。しかも、直接言葉をかけるわけではなく、ベアトリーチエが通りかかると声を大きくして「同情で迎えられた側妃」などと仲間たちと笑いあうのだ。

予想していたとはいえ寂しい日々。寂しさに押しつぶされそうになる。

少しは経験があるとはいえ侍女なしで過ごす日々は、王族に生まれたベアトリーチエには大変だった。レティシアはとても優秀で、すぐに侍女の仕事を身に着けていった。だからわずかな間、レティシアを手伝った経験だけを頼りに、ベアトリーチエは自らの周りのことをすべてこなさねければいけなかった。

それに側妃としての体裁もある。洗濯は昼には許されず、人目のない深夜にやった。夜の水は冷たく、手が痛くなることもあった。干す場所も外から見えないよう、陛下が訪れたとき目につかないよう場所を選ばなければならぬ。身だしなみや部屋の掃除、慣れなくとも毎日こなさなければいけないことだらけだ。

一ヶ月の間、アーサーさまの訪れはなかった。でも、それは当然のことだ。新しい妃を迎えた時は、最初の一ヶ月はその妃の元に通うことは慣例であった。自分も入ったばかりだが、第八妃と正妃の立場では比べ物にならない。

だが、同時に思う。例えレティシアと嫁ぐ時期がずれていたとしても、レティヤや美人揃いの側妃たちを差し置いて自分のところに来てくれただろうか。

不安な想像をベアトリーチエは慌ててかき消した。

こんなことじゃいけない。私は自分の意思でこの場所に来たんだから。アーサーさまへの思いも、レティとの絆も、私自身ががんば

らなければいけない。

いろんな思いが頭を巡って眠れない夜、魔笛を吹くと心に少しの勇気が浮かんできた。

（明日もがんばろう…。）

ベアトリーチエはそう誓い、一人っきりの部屋で眠りについた。

ベアトリーチェがレティシアと再会したのは、後宮に入ってから一週間過ぎたころだった。

後宮と王宮を繋ぐ白薔薇園、見渡すかぎりのバラが植えられ美しく迷路のようにすらなっている場所。そこを何もすることがなく散策していたベアトリーチェは一人佇むレティシアの姿を見つけた。レティシアはこちらをずっと見ていたのか目が合った。辛そうな顔で何か言おうと口を開きかけ、結局言葉を口にするこなく閉じてしまうレティシア。

ベアトリーチェは笑顔を作り、レティシアの元へ駆け寄って抱きついた。

「レティ、久しぶり。元気だった？少し痩せた？ちゃんと食べなきゃだめだよ。」

美しく王妃に相応しい格好をしたレティシア、容貌の美しさにも磨きがかかっていたが、その頬がさらに細くなっていることにベアトリーチェは気づいた。

「ビーチェさま、私は…わたしは…。」

悲しそうな表情になり何かを言おうとする。レティシアの表情が悔恨の色で彩られているのを見て、ベアトリーチェはレティシアの口をそつと塞いで首を振った。

「いいの。謝らなくて。レティは何も悪くないわ。」

それでもレティの顔から悲しみの色は消えない。

「レティは時間あるの？久しぶりにお話したいわ。」

ベアトリーチェはレティシアに自分のことで罪悪感を感じてほしくなかった。元のように笑顔で話し合える友人でいたかった。だから変わらず接し続けようと決めていた。

「はい。大丈夫です。」

いつもの笑顔で話しかけるベアトリーチェに、レティシアの顔の

こわばりも少し取れてきた。ベアトリーチェはそれを見て内心ほつとした。

それから二人はいろんなことを話した。最近読んだ本、エルサテイーナの食事、王宮の庭の美しさ、王妃の仕事について聞くこと、レイシアは一瞬悲しそうな顔をしたが、ちゃんと話してくれた。大変そうだが、うまくやれてると聞いて安心した。ベアトリーチェはなるべくレイシアとの関係に溝を作りたくなかった。今のお互いの立場をそのまま受け止めたかった。

会話は良くはずみ、ベアトリーチェは久々に暖かい会話を楽しんだ。

以前と同じく身分を越えた友達として話すことが出来た気がした。それでもアーサーさまのことはどちらも話題にだそうとはしなかった。ベアトリーチェは自分があの時と同じように冷遇されていることを隠した。それを知ればレイシアはとても傷つくだろうから。

ベアトリーチェとレイシアは、また二人きりで会うことを約束した。

他人の視線があるところで会えば、二人は王妃と第八妃となる。身分の差は歴然としていて、いままでのように話すことは許されない。

人目のない場所だけが、二人が親友に戻れるときだった。

ベアトリーチェが後宮に入って二ヶ月だったある日、廊下を歩いていると向こうからアーサーさまが侍女を連れて歩いてくるのが見えたのだ。

この国に来て以来会っていない愛しい人の姿に、ベアトリーチェの心臓は痛いほど締め付けられた。

二ヶ月ぶりに見る自ら光輝いているような美しい金色の髪、侍女を連れて歩く姿は堂々としていて王者の風格をまとうている。あの

翡翠の瞳は、以前のように私を優しく見てくださるのだろうか。愛しさと不安が胸の中に渦巻く。

逃げ出してしまいたい…。そう思った。アーサーさまの傍にたいがためここにいるのに。手も足も震えている。突然の再会に胸がいっぱいのベアトリーチェの心はやくもくじけてしまいそうだった。でも逃げることは許されない。いま、陛下の前から勝手に立ち去れば不敬になる。

「お久しぶりです、陛下。」

スカートを掴み、頭を深々と下げる。以前のようにアーサーさまとは呼べなかった。人の目もある上に、ベアトリーチェの心はここ二ヶ月で臆病になっていた。

「ベアトリーチェか。」

「はい。」

顔を上げて目に入ってきたアーサーさまの顔に以前のような笑顔はなかった。ベアトリーチェの体を一瞬見回すと、目を瞑って厳しい表情で言った。

「服が乱れているな。側妃にふさわしい格好をせよ。」

ベアトリーチェは、八つとなって自分の姿を見た。侍女がいないベアトリーチェは自分で身支度を整えている。自分なりにきちんとしたつもりだったが、慣れていないので本職の侍女たちのようにうまくはできていなかった。

甘えていたのかもしれない…。ベアトリーチェはそう思った。侍女がいないからといって、陛下の側妃であることは変わらないのだ。妃は国王の権威の象徴でもある。ずばらな格好など許されるはずもなかった。ベアトリーチェは自分の格好が恥ずかしくなった。

高級なドレスは扱いが難しいので、そこそこの手入れがしやすいものを選んでいった。がんばってアイロンをかけたが、皺をすべて消すには至っていない。陛下に付いている侍女のほうか、よっぽどきちんとした格好をしているのかもしれない。

「申し訳ありません。」

頭を下げた謝罪に返事はなく、アーサーさまはすつと立ち去る。そしてベアトリーチェの目の前で、側妃の部屋に入ってしまった。

(あれは第二妃さまのお部屋…。)
ずきつ、と胸が痛んだ。

やっぱり自分はほかの美妃を差し置いて選んでもらえるような存在ではないのだ、と思った。

心のどこかでは期待していたのかもしれない。恋仲ではなくても、幼いころに良くしてもらったのだから。

でも考えてみれば違うのかもしれない。フィラルドにいたとき、ベアトリーチェはまだ幼い子供だった。その上、アーサーさまにとつては、留学している国の王の娘だったのだ。優しくしてもらえて当然だった。

そしてエルサティーナに来たときは、将来の正妃となる立場だった。妻となるべき人間に優しくしないはずがなかった。どちらも自分の力で得たものではなかったのだ。

今、自分には何もなかった。あるのは第八妃としてのかろうじてあるつながりだけ。なのに、私は側妃としてすらちゃんと振舞えていない。

(もつとがんばらなきゃ…。)

ベアトリーチェは思った。たとえどんなにがんばっても、レティシアや他の妃たちに追いつけるとは思えない。それでも、一瞬でもアーサーさまに振り向いて貰えるように。

(アーサーさま…。)

胸に手を当てるとあの人の笑顔が浮かんだ。がんばろう。もう一度、あの笑顔が見れるように。あの笑顔に向けて貰えるように。

ベアトリーチェは零れそうになっていた涙を堪えると、口元を引き結び第二妃と侍女たちの楽しそうな声が聞こえる場所から立ち去った。

それから二ヶ月の時間がさらに過ぎた。

アーサーさまとはたまに廊下で会うと、事務的な言葉をただ2、3言交わすだけの日々。他の側室の部屋に入っていくアーサーさまを見るたびベアトリーチェの心は痛んだ。

レティシアとはあれから何度も会っていた。レティシアのエルサティーナでの評判はとても良く、王妃としての仕事を着実にこなし、賢く優しいその人格は周りの人間だけでなく国民全員から尊敬を集めている。レティシアへの好意的な噂が耳に入る度、ベアトリーチェは安心し、親友が褒め称えられるのを嬉しく思った。王妃としての仕事は忙しいらしく、なかなか会うことはできなかったが、それでもベアトリーチェはたびたび薔薇園を訪れ親友の姿を探した。

以前に戻ったような楽しい時間は、後宮の生活で疲れたベアトリーチェの心を癒してくれた。

「クルーダ伯爵夫人はバイオリンの名手です、よくエルサティーナで流行っている曲を聞かせてくださるのです。」

今日も、ベアトリーチェはレティシアと薔薇園で会っていた。

「エルサティーナの音楽ってどんなのが流行ってるの？」

「フィラルドではオーケストラや合唱が多かったです、エルサティーナではそれ以外の楽器や声を組み合わせた歌唱曲やオペラなんかも盛んみたいです。あと個人で数人あつまっての音楽会なんかもあるそうです。」

「へえ、楽しそう。」

「ビーチェさまも、魔笛で城の音楽会に参加されてはどうですか？」

「だめよ。私はそんなに上手じゃないから。迷惑になっちゃう。」

「そんなことないです。ビーチェさまの魔笛の音色はとても素晴らしいです。」

「うふふ、ありがとうございます。」

今日は音楽の話が盛り上がり、ベアトリーチェもレティシアもお互いに楽しみに話していた。

ふと、ベアトリーチェはレティシアの首筋に赤い跡を見つけた。色事を実際に経験したことのなかったベアトリーチェはそれが何かわからなかった。

「レティ、それ大丈夫？虫に刺されたの？」

ベアトリーチェの示したものが、何かわからずレティシアは首筋をなぞった。そこからの反応は劇的だった。はじかれるようにガバツと首筋を隠し、動揺して視線をうるたわせる。

「レティ…？」

最初はなぜレティシアがそんな反応をしたのかわからなかったベアトリーチェも、疎い知識の中から答えに行き着いてしまう。

「あ…。」

恋人同士が互いの体につける愛の証。それを誰がつけたのかもすぐに思い至った。

急に胸が苦しくなる。考えたくないのに、考えちゃいけないのに、二人の寄り添う姿が心の中に浮かんでベアトリーチェの心をかき乱す。

レティシアの動揺はまだ収まらなかった。よりにもよってベアトリーチェさまに、こんなものを見せてしまうなんて。その後の態度もあからさますぎた。悔恨の思いが胸に募る。

「レティは愛されてるんだね…。」

「ベアトリーチェさまっ…。」

口から漏れでた暗い言葉。親友が呼んだ自分の名前は小さな悲鳴のようで、はっと正気に返る。

「レティ、ごめん…。」

「いえ、わたしが…私が悪いのです…。」

レティシアの表情は苦しみに彩られていた。そんな表情をさせたわけじゃないのに。二人で楽しく笑っていたかったのに。なのに生まれ出でた暗い感情は胸の奥から消えてくれない。

唇は楽しい言葉を探そうとするが、うまく動いてくれなかった。二人の間に気まずい沈黙が落ちる。

「レティは悪くないよ…。ごめんね、変なことって。今日はもう帰るね。」

ここにも苦しい気持ちは消えてくれそうになかった。一人になつて気持ちの整理をしたかった。

レティシアの悲しそうな顔が目に入る。

彼女だつて別の国に来て、王妃という立場に一人立たされている。自分なんかとは比べものにならないほど大変なはずなのに。それなのに自分はなんてことを言ってしまったんだろう。

「はい、わかりました…。」

親友は聡く、優しくつた。ベアトリーチェの心情を察して、ほしい言葉をくれる。なのに、今日はそれが無性に悲しかった。

「またね。」

そういつてベアトリーチェは薔薇園を後にした。

再会を約束する言葉はせめてもの抵抗だつた。親友を羨んでしまつた自分の醜い心への。二人の間に出来かけている今はまだ浅い溝への。

油断していたのだ。

あの方があまりにもいつも通りに笑うから。やさしく私に笑つてくださつていたから。

二人で楽しく一緒にいれたところに戻れた気がして。二人の間には何も悪いことなど起こらなかつた気がして。

そして見られてしまった。あの方の想い人と閨を共にした痕を。

あの方がどれだけアーサーさまを愛してらつしやるか、どんなに想つていらつしやつたか自分は知つていたはずなのに。

アーサーさまが一度もビーチェさまの元を訪れないことは、噂と

なり王城の中まで伝わっている。レティシアも知っていた。そんな中、こんなものを見せればビーチエさまが傷つくことなどわかりきったことだった。

レティシアは自分の愚かさを呪った。王妃としての仕事をこなし、周りの人間に褒め称えられても、その実大切な人の心の平穏を守ることすら出来ないのだ。それどころか自分という存在が、その人を傷つけている。

レティシアはアーサーさまの訪れがあった日は、ベアトリーチェの元を訪れるのを躊躇うようになった。もう気づかれてしまったからには、いくらその痕を隠そうと気づかれてしまう気がして。

二人が会う頻度は少なくなった。お互いの間に出来た壁に二人は気づき、それにまた心を痛めた。

19・『ざわめく鼓動』（後書き）

更新おくれてごめんなさい。

11月21日に資格試験を受けるため、その日までを目処に更新を停止します。書き溜めもないので、実際の再開は12月ごろかもしれません。

「うるたわせる」って日本語たぶんありませんよね。イメージした表現が思いつかず、これでいいやって勝手に書きました。すいません。

感情の変遷までの仮定が、ちょっと強引かもしれませんが。率直な意見を下されると嬉しいです。

「演奏会？」

「ええ、そうです。この前お話ししたクルーダ伯爵夫人と、そのお知り合いのレンデイ侯爵などが集まって開く小規模な演奏会です。ビーチエさまも参加されませんか？」

久しぶりにレティシアと薔薇園で会ったベアトリーチエは、レティシアの口から出された提案に少し悩んだ。あれ以来、気まずい感情を内に挟んでしまった二人の関係。

お互い笑いあってもどこか、悲しい感情がつきまとう。そんな空気を振り払いたくて、レティシアはベアトリーチエを音楽会へと誘った。

「でも、大丈夫かしら。勝手に後宮から出て……。」

通常、王の妃たちは後宮から出ることを許されない。他の男と通じ合い、子供が出来たなどとなったら困るからだ。唯一、王宮に居室を構える正妃だけが、後宮と王宮を自由に出入りできる。

「大丈夫です。陛下には秘密にしていますから。参加する方にも、ビーチエさまの正体は明かさず客人として扱っていただくようにします。」

それなら参加しても問題はなさそうだ。ベアトリーチエは思った。アーサーさまから銀の魔笛を貰って以来、ベアトリーチエは音楽が大好きだった。それにこの国では孤独だったが、演奏会に参加できるようになれば親しい人も出来るかもしれない。何よりレティシアと一緒にいられる。

ベアトリーチエは少し心を弾ませながら、レティシアの申し出を受けることにした。

「何故こんなところにいる、ベアトリーチエ。」
楽しく時間になるはずだった演奏会のとき。だが、その場の空気は重く凍えていた。

レティシアと一緒に演奏会の場所へと訪れたベアトリーチエ。王宮に数多くある談話室の一室。余計な家具などが取り払われ広々となった部屋が演奏会の舞台だった。主催者であるクルーダ伯爵夫人は既に来ていて、レティシアが訪れると演奏しやすそうな木椅子から立ち上がり優雅な挨拶を交わした。まだレンディ侯爵が来ないらしく、三人で差し障りのない談笑をしながら侯爵を待つことになった。

談話室の扉が開いたのはそれから間も無くのこと。三人は振り向き、レンディ侯爵へ挨拶しようと立ち上がった。

だが、姿を現したのは三人が予想だにいなかった人だった。

その人物は普段の冷静な雰囲気とは程遠い、凍りつくような視線で部屋を見回した。

「何故こんなところにいる、ベアトリーチエ。側妃は後宮から出ることを禁止されているはずだ。」

睨みつけるような視線にベアトリーチエの体がびくつと震える。扉から現れたのは、この国の王アーサーだった。レティシアは茫然としたように、その姿を見つめた。

ベアトリーチエを誘うので、今日の会はアーサーに秘密にしていた。しかも今日、アーサーさまは政務で街の方に下りているはずだった。

何故、と混乱に陥りかけかけたレティシアだが、ベアトリーチエを冷たく睨みつけるアーサーを見てすぐさま意識を戻す。

「お待ちください、アーサーさま。ベアトリーチエさまは悪くありません。私がベアトリーチエさまに無理を言ってお誘いしたのです。」

レティシアはアーサーに睨みつけられ、顔を青くするベアトリーチエを庇うように立った。しかし、アーサーの表情は変わらない。

「だが、了承したのはベアトリーチェ自身のはずだ。側妃という立場として許されないと知りながら。」

「も…申し訳ありません。」

ベアトリーチェは言い訳も思いつかずひたすら頭を下げた。声が震え、その目じりに涙が浮かぶ。

王の突然の登場に、またその激怒にクルーダ伯爵夫人はただただ固まっていた。

「側妃としてふさわしく振舞うよう言っただはずだ。」

「はい…。」

震えてアーサーを見上げるベアトリーチェに、アーサーは一步步近づいた。

びくりつとベアトリーチェの肩が揺れる。

怖かった…。ただでさえ同情で妃にしてもらい、迷惑をかけている自分。それなのにアーサーさまの言葉を無視して、側妃としての決まりごとを破ってしまった。もういらぬと言われるのでは、見捨てられてしまうのでは…。

幼い頃優しく微笑んでくれた表情が、怒りを含んだ冷たい顔で自分を睨んでくる。どうしようもなく怖かった。

「……………」

アーサーはそんなベアトリーチェを黙って見つめると、ふいに視線を外した。

「もうよい。今すぐ後宮に戻れ。それで不問とする。」

そう言うのと、アーサーはレティシアの手を取り「演奏会へはもう参加するな。」と言って去っていった。手を固く結んだまま去っていく二人を、ベアトリーチェは見送ると、クルーダ伯爵夫人に挨拶をし逃げるように後宮へと戻った。

自分のせいでレティシアが演奏会に参加できなくなってしまったと、ベアトリーチェは心を痛めた。だが後日、後宮の侍女たちがそのことで噂話をしていた。

王妃が演奏会への参加を王に止められたらしい。なんでも、レン

デイ侯爵は音楽会を利用して、さまざまな女性に手を出し浮名を流す男性だったらしい。王妃を愛する王は、それを心配し王妃の演奏会への参加を禁止したらしいと。

ベアトリーチエはレティシアの手を取り去っていったアーサーさまの姿を思い浮かべた。

アーサーさまはレティを愛していらっしやる。

なら自分が入り込む余地など、アーサーさまに愛される可能性などもないのかもしれない…。そう思った。

レティシアはその歌を聴いた時、呆然とした。

王妃さまを讃えるものとして、国民の間で流行っている歌です。そういつて謁見におとずれた貴族が連れてきた楽団から聞かされた歌。

だがそれはレティシアを喜ばせるようなものではなかった。

その歌はうたものがたりの形をとってひとつのストーリーが唄われる。

フィラルドにレティシアという少女がいた。

孤児として生まれた少女は、とても優しい子だった。

一生懸命働き孤児院を支えていた少女は、その優しさで美しさを見込まれ王宮の侍女に召し上げられることになった。

その優しさと魅力で平民にもかかわらずすぐにお城の侍女と馴染んだレティシア。その美しさと魅力的な性格は、上級貴族や王族たちからも愛された。

しかし、そんな彼女に不幸が訪れた。

意地悪なこの国の第四王女ベアトリーチェに目をつけられたのだ。醜いベアトリーチェはレティシアの美しさと人気に嫉妬した。権力を使い無理矢理レティシアを自分の侍女にしたベアトリーチェは、レティシアにさまざまな無理難題を押し付けた。そしてそれが出来ないという罰としてレティシアに水をかけ鞭をふるい彼女を痛めつけた。

仲間の侍女たちはレティシアを助けようとしたかったが、ベアトリーチェは彼女を助けようとしたものまで酷い目に会わせた。

心優しいレティシアは助けを遠ざけ、王女のいじめをその一身に受け続けた。

フィラルドの人々は見守るしか出来なかった。

ある日、そんな王女に婚姻の話が持ち上がった。

エルサティーナの王アーサーさまがベアトリーチェを正妃として迎えるというのだ。王宮のものたちは喜んだ。

ベアトリーチェが良縁を手に入れたことではなく、これでレティシアが王女のいじめから開放されるということに。

だがベアトリーチェはレティシアをエルサティーナへ連れて行くと言い出した。

故郷を離れたくないレティシアはなんとか断ろうとした。見かねた他の王女たちもそれに協力してくれた。

しかしベアトリーチェは卑怯にも、ついでになければ彼女がいた孤児院を潰すと脅しをかけた。

孤児院の子供たちを家族のように思っていたレティシアはついていくしかなかった。

アーサーさまはベアトリーチェの姿を見てため息をついた。ひどく醜い容姿をしていたからだ。そして振る舞いや性格も横暴極まりなかった。

こんな王女が正妃では国の未来に影を落とすだろうと思った。

アーサーさまはベアトリーチェの後ろにひっそりと佇む侍女を發見した。その少女はとても美しい容姿と優しい雰囲気をもとっていた。しかしその表情はとても悲しそうだった。

少女のことが気になったアーサーさまは、その少女のことを臣下に調べさせた。

そして少女レティシアがその容姿と人気を妬んだベアトリーチェにいじめられていることを知った。

そのことにとっても心を痛めたアーサーさまは、なんとか彼女を守ろうとした。しかしベアトリーチェのいじめは苛烈だった。

アーサーさまはベアトリーチェがいない折を狙って彼女に何度も会い励ました。いつか必ず助けるからと。アーサーさまはレティシアに恋をしていた。

レティシアも優しく自分を励ましてくれるアーサーに恋をした。

そしてついに彼女を助ける方法が見つかった。

王の一番の味方の老公爵により、彼女が古の皇家の血筋を引くことがわかったのだ。アーサーさまはレティシアを正妃として迎えることにした。

フィラルドの王もベアトリーチェの目に余る振る舞いと、レティシアへの好意からすぐに賛成してくれた。

かくしてレティシアさまは王妃となり、ベアトリーチェの婚姻の話は破談となった。

ベアトリーチェは放逐される予定だったが、やさしいレティシアさまは彼女に情けをかけ王宮に留まれるようにした。ただしその酷い振る舞いの罰として最下位の側妃として後宮に閉じ込められ冷遇されることになる。

アーサーさまとレティシアさまは愛し合い結ばれ、賢き王と優しい王妃としてエルサティーナを良く治めることとなった。

それがこの歌の内容だった。

レティシアはこの歌を聴いたとき、ビーチエさまへの罪悪感と出鱈目な歌詞への怒りに眩暈がしそうになった。

「わたしとベアトリーチェさまはこのような関係ではありません。」

苦しい胸のうちから搾り出すような声で言った抗議の言葉に、何かお褒めの言葉を期待した貴族は困ったように返答した。

「市井の民の間で歌われているものですから。」

自分が作った歌ではないので…。王妃の反応の芳しくなさに誤魔化し笑いを浮かべ責任逃れをする貴族の男。だが次いで繋げて放たれた言葉に、レティシアの心は悲鳴を上げた。

「王妃さまを慕うが故に作られた歌です。どうかその思いをお納めください。」

レティシアを讃えるがために何も罪がないのに悪役へと追いやられたベアトリーチェの名声。自分が何より慕う人に向けられた民からの無為の悪意に心が震えた。だがそれも大本は自分のせいなのだ。

自分さえいなければ、あの人がこんな目にあうことはなかった。

自分はその人から最も大切なものを奪っておきながら、その名誉すら汚すのだ。

だというのにござとい私は、公の謁見の場で泣くようなことは出来なかった。言い訳をしながらも王妃として失態のないように振舞う自分に吐き気がした。

「すいません、少々疲れました。今日はお下がりにください。」

「は、はあ……。王妃さま、気分の優れないところを無理していただきありがとうございます。ど、どうか我が家のことをお見知りおきください。」

往生際悪くなんとか王妃に名を覚えてもらおうとする貴族を、兵士たちが謁見の間から連れ出した。

「大丈夫ですか？」

まだ王妃となつて日が浅いレティシアのためにつけられた側近が、彼女の青い顔色をみて心配そうに問いかける。

「ええ……。」

レティシアの口からもれ出た声は掠れていた。

「あの歌……。」

側近の目から見て、レティシアさまは非常に優れた王妃だった。

平民として暮らしていたとは思えないほどその所作は優雅で、博識さは専門の学者ですら舌を巻くときがあった。めつたに暗い感情を表にださず、他者の感情は良く汲み取り、微笑みは絶やさない。

国民にも、臣下にも、侍女たちにも慕われるものがたり通りの優しく完璧な王妃。だが今その表情を覆うのはかつてない暗い霧だった。

「あの歌がどうかされましたか？」

美しい王妃の憂いの表情は、臣下にその願いを何でも叶えてみせなくなる。

「あの歌を歌うことを禁止することはできませんか。」

だが、続く王妃の言葉に表情を歪めた。

「わがエルサティーナでは、芸術や文化の自由を大切にしております。だからこそ、いろんな国の才能のある芸術家たちが流れ込み、この国を歴史ばかりでない文化にも経済にもすぐれた大国へと押し上げているのです。もしそれらに国家から何らかの圧力をかければ、才能のある人間に見捨てられ国は徐々にその力を失いはじめるでしょう。」

そしてそうなれば、王妃への強い批判があがるだろう。何よりこの王妃殿下を守るために、それだけは防がなければならなかった。

「わかりました…。」

無理だと言われ、レティシアの心はさらに沈みこんだ。

「民たちの流行はすぐに過ぎ去ります。一月もすれば、新たな話題が広まり忘れ去られてしまいますよ。」

王妃の深く沈んだ表情に、側近は励ましの言葉を言う。

レティシアはそうあって欲しいと願い、またビーチェさまの耳に

この歌が届かないことを祈った。

レティシアの心配をよそに、その歌のことはベアトリーチェの耳にまで届いていた。

噂好きの侍女たちはいつもは無視するベアトリーチェに珍しく話しかけると、その話を嬉々として本人に聞かせたのだ。ベアトリーチェは表面上は平静を保ったものの、侍女たちの姿が消えると部屋に駆け込み泣いた。

違う！私とレティシアは親友なのだ。大切な一番の友達なのだ。いじめたり憎しみあつたりなんかしてない。今は離れていても、仲が良くて、いつでも自分を思いやってくれて、長い時間を共に過ごし、一緒に笑いあつた。

そんな二人の仲を、勝手に酷いものとして扱われたことが悲しかった。

でも、私は身勝手な嫉妬からレティシアにうまく接することができないでいる。自分の想い人から愛されている彼女を羨み、壁を作ってしまった。

自分はレティシアの親友たる資格がないのかもしれない。だから、こんな歌まで作られたのかもしれない。

ベアトリーチェの心は闇夜を彷徨ったまま、いつの間にか意識を失い朝を迎えた。

ベアトリーチェとレティシアは久しぶりに二人で会った。

ベアトリーチェは再会したレティシアの疲れた様子に驚いた。

レティシアはあの歌をどうにか止めさせたくてさまざまなお話をしていた。だが、いくら自分とベアトリーチェさまは仲が良いのだと言っても、「レティさまはお優しいですね。お庇いになるなん

て。」「とあのものがたりが真実であるかのように自分を見てくる。

ベアトリーチェと本当に仲が良いことを証明しようとしても、ベアトリーチェは後宮から出られない。アーサーさまにもお願いしたが、「ただの民の噂だ。」として聞き入れてもらえなかった。

せめてもの抵抗は王妃を讃える歌を、王妃自身が聞かないことだが、そんなレティシアの態度を気にすることなく、歌は貴族たちの間にまで流行りだした。

「レティ、顔色悪いよ。大丈夫？王妃の仕事がいそがしいの？」

ベアトリーチェの心配した声に、レティシアは笑顔で答える。せめてあの歌がこの方の心の平穏を乱すことがないよう祈りながら。

「ええ、少し。でも心配するほどではないので大丈夫です。」

だが、ベアトリーチェはその笑顔に別のものを見た。

レティシアがベアトリーチェの侍女になって2年ほど経ったころ、その美しさと優秀さでレティシアは他の王族や貴族たちからも自分のものにと望まれる侍女になった。だが、レティシアはその誘いすべてを断りベアトリーチェの下に居続けた。

自分たちの誘いを断り続けるレティシアに業を煮やした貴族たちは、嫌がらせをはじめた。その嫌がらせの対象には、レティシアの主人であるベアトリーチェも入っていた。

でもレティシアはベアトリーチェに気づかせまいと、その嫌がらせを一身で受け続けたのだ。そしてベアトリーチェを心配させまいと、彼女のまえでは微笑んでいた。

そのときの笑顔が、ベアトリーチェの記憶を過ぎった。

「もしかして私のせい？あの歌のこと？」

レティシアの顔色が変わる。それがベアトリーチェの疑念を確信へと変える。

「そうなんだ……。ごめんね……。わたしのせいで。」

一番知られて欲しくなかった相手にあの歌が伝わってしまったていることに、レティシアの胸はキリキリと痛む。

「ビーチェさまのせいではありません！必ずあの歌はやめさせてみ

せませす…。もしものときは王妃の権力を使って禁止してしまえば。」
「やめて！」

レティシアの言葉に、ベアトリーチェは顔色を変える。
後宮でもレティシアの評判は聞こえてきていた。賢く有能で優しく美しい王妃。後宮で別の側妃に仕える侍女たちにもレティシアのファンは多く、外交や内政で活躍している噂を耳にするたびベアトリーチェは嬉しくなった。

アーサーさまとの仲睦まじい噂を聞くたびに胸は痛むけど、自分の親友がこんなに素晴らしい人間なんだとみんなに評価されることが嬉しいと思った。

「大丈夫だよ。ただの噂だから、そのうち収まると思う。レティもこんなこと気にしないで。無茶なことをしようとしたりしないで。」
だからこんなことでみんなに嫌われる危険を犯して欲しくなかった。

「でも、私は…。私は…。」
「絶対に権力を使って止めたりするのはやめて。自然に落ち着くのを待ちましょ？私は大丈夫だから。」

彼女がみんなに愛される王妃でいて欲しいと思った。
「レティ、お願い。この問題にはもう関わらないで。」
そうお願いしてベアトリーチェはレティシアと別れた。

エルサティーナで流行ったその歌は、一ヶ月経っても収まることはなかった。

王妃レティシアの評判と共に、周辺諸国まで広がり国民的な歌となっていた。その歌が王や王妃の元では決して歌われないことを誰も気にすることは無く、誰もが素晴らしい王妃の物語を愛するようになった。

創作として作られたはずの詩の内容は、いつの間にか真実である

かのように語られはじめる。

ベアトリーチェが側妃として冷遇されていること、王の訪れを一度も受けたことがないことはその噂に真実味を与えた。

優しく美しく王に愛され見出された王妃レティシアと、彼女をいじめその罰として王により後宮に閉じ込められた醜い魔女ベアトリーチェとして。

22・『魔女 2』（後書き）

活動報告にて今後の展開について決めるアンケートを行おうと思います。

楽しいアンケートではなく、重い内容を決めるものでネタバレになり不快な気分になるかもしれません。

それでも良いという方はご協力ください。

王国に広まった噂は、後宮にも影響を及ぼしていた。

侍女たちのベアトリーチェを嘲笑う態度は当初から変わりなかったが、たまに会う下女や料理人はベアトリーチェのことを憎々しげに睨み付けるようになった。

そういうことには慣れきっていたベアトリーチェだが、このことにレティシアが傷ついていることや、レティシアとの仲を誤解されていることを思えば心が沈んだ。

レティシアとの仲には前よりさらに壁ができた気がして。

そしてレティシアとの対立を疑われているこの状況は、自分がアーサーさまを思い続けることはレティシアの足を引っ張ることであることを思い知られる。自分は王妃から王の寵愛を奪いたいと願っている人間なのだから。

憂鬱な心を引きずりながら、ベアトリーチェは寝台から起き上がり身支度をする。

一日中寝ていたって、誰も気にしない第八妃。だが、それでもアーサーさまに言われたとおり精一杯、側妃としての体裁を整える。

外には出る気がおきなかったので、シーツを整え部屋の清掃をしていると扉の外に人の気配がした。足音はばたばたと部屋の前で立ち止まると、すぐさま同じように足音を立てて立ち去った。

「どうしたんだろう。」

ベアトリーチェは扉をそっと開けた。そこには白いラッピングされた箱がひとつ置かれていた。

後宮では外からの贈り物を届ける下女がいる。普通は侍女に手渡されるのだが、ベアトリーチェに侍女はいなかった。そもそも祖国にもこの国にも支援者などいないベアトリーチェにとって、荷物が届けられることなどなかったのだが。

ベアトリーチェはそっとその箱を拾い上げてみた。箱の外に送り

主の名前が書いてある。

アーサーさまとレティシアの名前が連ねて書いてあった。そして思い出す。

「私、今日が誕生日だった。」

後宮での寂しい日々を淡々と過ごすうちに忘れてしまっていた。

毎年、この日はレティシアと一緒にケーキを食べて夜遅くまで話をした。

自分ですら忘れかけていた誕生日。それを忘れずに贈り物をくれた親友と愛しい人の名前をみて沈んだ心が浮かんでくる。

ベアトリーチェは机のほうに早足で向かうと、椅子に座り、丁寧に箱を開いていく。そして箱を開き硬直した。

目に映る赤黒い色、鼻に付く鉄錆びた臭い。

箱の中には血が飛び散っていた。

ベアトリーチェは震える手で、血の中に指をいれ箱の中のものを取り出した。上等なシルクの生地で作られた可愛いリボン。宝石などはあまり好まない自分のために、二人が考えて用意してくれただろうプレゼント。

でもその布も血で染まっていた。元は綺麗な白色だっただろうそれは、血の染みでほとんど汚れてしまっていた。

プレゼントの箱をみると、横に小さな穴が開いていた。そこから血を入れたのかもしれない。

あの噂が広まったところから始まった嫌がらせだった。

この贈り物も標的にされたのだろう。下女たちは親しいので、料理の下働きの女から何かの動物の血を調達したのかもしれない。ここまで届けてくれた下女がやったのか、それともその前にされたのかはわからない。もしくはみんなが結託してやったのかもしれない。「うっ……」

堪えようとしたのに、ベアトリーチェは顔が歪むのを抑え切れなかった。

笑いたかった。

ここに来て、愛しい人に想いが通じることはなく、親友とは引き離され、後宮では深い孤独にさらされた。親友との間にも壁ができ、悲しい噂を流され、自分が親友にとって邪魔な存在だと思い知らされた。

辛いことが多すぎた。

だから、笑いたかった。

誕生日に、友達に、愛しい人にプレゼントを貰い、今日と言う日を祝福してもらった。この日ぐらい笑いたかった。

「うっ、ひっく…。」

なのに、目の端からは涙がこぼれてくる。泣くことを止められない。

大切な贈り物。大切な二人から贈られた大切なプレゼント。

なのに台無しになってしまった…。悲しみに崩れる自分の心とともに。

ベアトリーチェは泣きながら、一晩中、血に汚れたリボンを洗い続けた。

だが、血の染みが落ちることはなかった。

その日ベアトリーチェは、とても大切な用があり後宮から抜け出していた。

女官長を通して頼んだ大切な荷物を取りに行くためだ。それはとても大切なもので、絶対嫌がらせなどで台無しにされたりすることの無いようにしたかった。だからなんと少しでも直接取りに行きたかったのだ。

侍女に変装したベアトリーチェは、あっさり門番の下を通過することが出来た。そして誰にも気づかれることなく、荷物を受け取ることが出来た。誰も第八妃の顔など知らないから……。

中庭を駆け早く後宮に戻ろうとしたベアトリーチェは、聞き覚えのある声が聞こえることに気付いた。

振り向いた先には、二人で笑いあうアーサーさまとレイイがいた。何を話しているかまではわからない。でも二人ともとても優しい笑顔をしている。それはベアトリーチェが久しく見ていない二人の顔だった。

アーサーさまはこの後宮に来てから、一度も笑顔を見せてくれたことはない。レイシアも最近では談笑しているときですら気まぐげにぎこちなくしか微笑まなくなっていた。

今、ベアトリーチェのいない場所で、二人は自然な笑顔で楽しげに談笑を交わしていた。

ベアトリーチェはしばらく茫然と二人の姿を眺め続けた。

「ね、ねえ、その君。」

そんなベアトリーチェに、後ろから声がかかった。びくっとして振り返ると、そこには兵士の姿をした青年がいた。

一瞬、後宮を抜け出したことがばれたかと思っただが、青年は別にベアトリーチェが後宮の側妃だとは気付く様子ではなかった。

「ぼーっとしてたみたいだけど、どうかしたの？」

「いえ、何でもありません。」

早く後宮に戻らなければいけない。そう思ったベアトリーチェは青年の質問に手短かに答える。だが、青年はなぜかベアトリーチェを離してくれない。

「そ、そう。困ったりしてない？俺でよかったですら力になるよ。」

ベアトリーチェの短い返答に、青年は何やら焦ったようになる。

「何もありません。私そろそろ行かないと。」

ベアトリーチェは青年を振り切って行くこととしたが、青年は慌てたようにその手をガシツと掴む。その頬は、少し朱を帯びていた。

「ま、待って。君どこで働いてるの？別に怪しいもんじゃないんだ。こう見えても俺、見習い騎士としては有望株なんだよ。今度一緒に食事にも行かない？」

焦ったような態度で、早口にまくしたてる青年。その力は強く、

ベアトリーチェは手を振りほどくことができない。

「ベアトリーチェ！そこで何をしている。」

困り切ったベアトリーチェの後ろから、声が聞こえた。何度も何度も聞いてきた忘れようのない声。先ほどまでレティシアと暖かく楽しげに話していたその声は、今は冷たく硬質な響きに変わっていた。

ベアトリーチェの体がびくりつと震える。

「アーサーさま……。」

恐る恐る震えながら振り返ると、そこにはベアトリーチェの思い人が立っていた。その顔から優しい笑顔は消えうせ、こちらを冷たい怒りを持ってにらんでいる。そんな表情を向けられ、ベアトリーチェの心はズキズキと痛む。

「その男はなんだ。」

自らの王に怒気をはらんだ目で睨まれた青年は、混乱したようにベアトリーチェとアーサーを交互に見る。

「へ、陛下……。べ、ベアトリーチェ！？」

それが、この国で噂になっっている第八妃の名前と気付いたのだろ

う。

だが、何故目を剥いてまで自分を茫然とみるのか、ベアトリーチエにはわからなかった。

元よりベアトリーチエの意識は青年のほうに向いてなかった。ただ、恐れるようにアーサーのほうを見ていた。

だから青年が「こんなに可愛い娘が…。」とつぶやいたのにも気づかなかった。だが、アーサーのほうは青年の言葉にぴくりと反応する。

「もう良い。お前は去れ！」

「は、ハイ！」

王に強い語調で言われ、青年は慌てて去っていく。

「何故、後宮から抜け出した。」

「も、申し訳ありません…。」

アーサーの激しく怒った様子に、ベアトリーチエは泣きそうになり、それしか言うことができなかった。

「後宮に不満があるのか。」

ベアトリーチエは慌てて首を振った。出ていけと言われるのが怖かった。

「そんなことはありません。」

アーサーはしばらく沈黙すると、重々しく口を開いた。

「さっきの男とはなんでもないんだな。」

「は、はい。はじめて会いました。」

もしかして逢引を疑われたのだろうか。自分については軽率な行動を取ったのだから仕方ない。でも、あの青年まで巻き込むのは気の毒だった。

「本当になんでもないんです…。あの人は中庭を歩いていた私に、親切にしようとして話しかけてくださっただけで。何も悪くないんです。だから…。」

「もういい！」

ベアトリーチエの言葉は、不機嫌なアーサーの言葉で遮られた。

アーサーは頭をガシガシ書くと、怒気を抑えた声で言った。
「後宮に戻るぞ。もう二度と抜け出したりするな。」
そうしてベアトリーチェは後宮まで戻された。
門番には顔を覚えるように写真が渡されてしまった。もうあの門
を抜け出すのは不可能だろう。

夜、ベッドの中でベアトリーチェは考えた。

アーサーさまはきつとレティのことが好きだ。たぶん、あの時あんなに怒っていたのも、私が側妃として相応しくない行動をとっただけではなく、レティとの時間を邪魔されたせいなのかもしれない。そしてレティもアーサーさまのことが好きなのかもしれない。自分が久しく見るができなかった親友の笑顔。彼女が笑えなかったのは、私のせいなのかもしれない。私がいるから、レティは笑えなかったのかもしれない。私のいないあの場所で、アーサーさまの傍で彼女は幸せそうに笑えていたのだから。

アーサーさまとレティはお互い思い合っている。それは、この国にとっても、国民たちにとっても、二人にとってもとても良いことだ。

なのに、自分は喜べなかった。笑いあう二人の姿を見て、悲しい気持ちになった。

大切な人と親友が思いを交し合ってるのだ。祝福してあげなければいけないはずなのに。

なのに……。レティがアーサーのことを思っているのを知っているのに。それでもアーサーさまへの思いを忘れることができない自分。アーサーさまに愛されたいと願ってしまう自分。

ベアトリーチェは悲しかった。そんな自分の心の醜さが。アーサーさまに愛されることのない自分が。自分を置いて二人が遠くへ行ってしまったことが。

置いていかないで。そう叫びたかった。傍にいさせて。そう言いたかった。それが二人の邪魔になることを知りながら。そして思った。こんな醜い心を持つ私は、みんなの言うように魔女なのかもしれない。と。

中庭でアーサーさまと話をした。

聞すら共にしたというのに、公的な関係は夫婦だというのに、不思議とそういつた会話をしたことはなかった気がする。

最初は事務的な会話だったが、ビーチエさまの話がでると変わった。

アーサーさまは私が知らないころのベアトリーチェさまの話をたくさんしてくれた。私もアーサーさまが帰った後のビーチエさまの様子をたくさん話した。それは久しぶりに楽しいと思える時間だった。

アーサーさまについていって、一緒に剣の訓練までしようとした下りは本当に笑ってしまった。

昔のビーチエさまのことを話すアーサーさまの顔はとても優しい顔をしていた。

今、アーサーさまの気持ちは、ビーチエさまに向いていないのかもしれない。それでも感情が違ってても大切な思いがあれば、いつの日かビーチエさまと結ばれる日がくるかもしれない。

それがなるべく早い日であることを私は祈った。

「もうすぐ、陛下の誕生日でいらっしやいますね。」

レティシアは侍女に言われて、はじめてそのことに気が付いた。

去年までなら毎年この時期は、ビーチエさまと二人でアーサーさまに贈るプレゼントを相談していた。ビーチエさまとはもう1ヶ月も話していなかった。王妃としての政務が立て込んでいる上に、ビーチエさまの悪い噂をどうにかしようともがき、心に疲れがたまっていた。

「王妃さまは何をプレゼントされるのですか？」

侍女はにこにここと笑いながら、レティシアに訊ねる。

「何も考えていなかったわ…。」

人当りの良いレティシアらしくない呟くような答えに侍女は一瞬驚いた顔をするが、瞬時に微笑みを取り戻すと、取り成すように言った。

「お忙しかったですからね。でも、レティシアさまが贈られるものなら、陛下はなんでもお喜びになられると思いますよ。」

正直、何かを贈りたいと思ったことはなかった。アーサーさまの誕生日は、ビーチエさまと一緒にプレゼントを選ぶ日。そう考えていた。

しかし、今の自分は王妃なのだ。何か贈らなければ、周りから王と王妃の不和の噂になるかもしれない。それは国の乱れにつながるものだ。

無理やり王妃にされたのに、望んでいたわけではないのに、レティシアは王妃としての役割を忠実にこなしていた。個人の感情はすべてを投げ出して、ベアトリーチェさまと逃げてしまいたい。そう思っても、王妃という役割はたくさん国民の生活や命を背負っている。それは王妃としての仕事をこなせばこなすほど、レティシアの身にのしかかっていき、その行動を縛って行った。

そしてそれは本来、王妃になるはずだったベアトリーチェさまとの溝が深まることでもある。理性、保身、責任、義務、自らでも理解できないそれらのものがレティシアをここに留め、同時に苦しめていた。

「ごめんなさい、陛下へのプレゼントをあなたにお願いできないかしら。」

とにかく今は、アーサーさまへの贈り物を考えられるような心境ではなかった。

「わ、わたしがですか？」

侍女は驚く。

「まだ私はこの国のことをあまり知らないし、王族や貴族の間でどのようなプレゼントを贈ればいいのかもわからないの。」

その言葉に侍女はハツとする。普段、王妃として素晴らしい能力と威厳を発揮するあまり忘れがちになるが、自分たちの主は孤児の出であったのだ。侍女をしていたと言っても、あのベアトリーチェに使われていたのだ。ろくな目にあってはいなかったのだろう。こういう時支えるのが自分たちの役目ではないか。

侍女の誰もが王妃であるレティシアを慕っていた。

だから思った。陛下のプレゼントを選ぶなど恐れ多いことだが、王妃殿下のためにがんばろうと。

「お任せください。」

侍女は王妃を安心させるように微笑むと、レティシアの頼みを承った。

だが、レティシアの表情は晴れることはなかった。

王妃殿下が国王陛下の誕生日にプレゼントを贈る。

その大役を仰せつかった侍女は、連日仲間たちと話し合った。

国王は賢王と呼ばれ国民に慕われ、絶大な人気を誇る。その誕生

日にはプレゼントもたくさん届く。邪なものも、純粹な行為を持つものも、貴族たちは大金を使い珍しいものを用意し、職人たちは自らの手で最高の作品を作りそれを贈ろうとする。

そんな中、陛下の目を射止めることができるプレゼントは何か。もちろん、陛下の寵愛を受けるレティシアさまが贈ればなんであろうと最高のプレゼントになるに違いない。

でも任された以上は、用意するものも素晴らしいものにしたかった。

いろんな意見が出るが、そのどれもがピンとくるものではない。

その時、非番の侍女が仲間たちが集まる控室に飛び込んできた。

「たいへんたいへん！」

「どうしたの？はしたないわよ。」

王妃殿下に仕える侍女は、最高の侍女でなければいけない。その振る舞いは常にまわりから見られ、おかしなことをすれば王妃殿下の評判に響く。廊下を走るなどもってのほかだった。

だが、飛び込んできた侍女は興奮した様子でまくしたてる。

「国王陛下へのプレゼントのことで、いいことを聞けたの。もう贈り物はそれで決まりよ。」

部屋の侍女たちは不審げに眉をひそめる。自分たちがこれだけ話し合っても決まらなかったのに何をいうのだらう、という表情だ。

だが、そんな視線に侍女の自信にあふれた様子は変わらなかった。

むしろその興奮は増し、まるでとっておきの宝物の紐をといっていくように、頬を紅潮させたまま言葉を続ける。

「陛下の乳母をしていたマクネスさまに聞いたの。レティシアさまにやらせても良いって。あのね……」

侍女が言った台詞に、ほかの侍女たちもぱあっと明るく表情を変えらる。

そして侍女たちはみな興奮した様子で口早に言葉を交わすと、じつとしていられないといった感じで席を立ち、それぞれ行動をはじめた。

アーサーさまの誕生日の日、ベアトリーチエは部屋でひとつの小さな箱をみつめていた。

リボンと紙できれいに包まれている手のひら大の箱。箱に入っているのは、銀製のシンプルな装飾が施された上品な時計。それはベアトリーチエがアーサーのために買ったプレゼントだった。

母国からも誰からも援助のないベアトリーチエは、お金もたくさんあるわけではなかったが、その中で許される限り立派なものを買った。

王宮を抜け出してまで取りに行ったアーサーへのプレゼント。フィラルドにいたところは、アーサーさまに送ることしか出来なかった。それでもアーサーさまは丁寧なお礼の手紙を返してくれた。エルサティーナにいた今は、手渡しでアーサーさまに渡したいと思った。

それは簡単なことではないとわかっていた。賢帝として国民にも貴族にも人気があるアーサーさまには、この日数えきれないほどのプレゼントが届く。街でも城でもパーティーが開かれ、たくさんの人が陛下の下を訪れる。そんな日に、城のパーティーにも呼ばれていない、第八妃である自分がアーサーさまと会える可能性は皆無に等しかった。

それでも大切な人へのプレゼントはなるべく直接渡したかった。

「喜んでくださるかな。」

あの人の笑顔は久しく見ていない。それでもまだちゃんとベアトリーチエの心の中にその笑顔は刻まれている。こんなプレゼントじゃ喜んでもらうどころか、興味すら持ってくれないかもしれない。それでも大好きな人の誕生日を祝えることが嬉しかった。

そうは言ってもベアトリーチェに何ができるわけもない。

後宮から出ることすら禁止されているベアトリーチェは、他の側妃たちやその侍女たちも城のパーティーに参加しているので後宮はとても静かだった。

後宮の庭を散策していたベアトリーチェは、ある場所で目を止めた。

「わあ…、カンティアの花…こんなにいっぱい。」

その場所に紫の小さな花がたくさん咲いていた。側妃たちの庭と離れていたため、雑草として処理されることがなかったのだろう。小さな規模ながら、自然にできたカンティアの花畑だった。

アーサーさまの誕生日に、偶然、思い出の花がたくさん咲いてるのを見つけた。ベアトリーチェの心に温かい懐かしい思い出があられてくる。

「ちよつとだけ貰うね。」

ベアトリーチェは花畑で膝を付き、少しかンティアの花を摘み取って小さな花束を作った。もし、アーサーさまに今日逢えたら、この花束も一緒に渡そう。そう思った。

立ち上がったベアトリーチェは、薔薇園のほうに人の姿を見つけた。

金色の髪に凜々しい後ろ姿、遠くにいてもわかる。アーサーさまだった。

ベアトリーチェはその後ろ姿を、しばらく茫然と見つめていた。

「アーサーさま…。」

アーサーさまに会いたいそう願っていた。でも叶うとは思っていなかった。

「アーサーさまっ！」

ベアトリーチェは笑顔を浮かべ、愛しい人の元へ走りだした。

アーサーの誕生日、レティシアはパーティーの会場で各国の要人と挨拶をしていた。会う人皆がレティシアの美しさに賛辞を述べる。レティシアの心とは裏腹に、あの歌はレティシアを各国の女性の憧れの存在に仕立て上げた。少女たちはレティシアを物語の姫を見るような憧憬の瞳で見る。その人気にあやかろうと、男たちまで今話題の貧民の出の王妃に群がる。

いくら彼らにベアトリーチェさまはそんな人ではないのだ。自分の恩人なのだと言っても、誰もがそれを信じようとはしない。こんな悪意と好奇心しか持たない人の間で、ベアトリーチェさまは無事に過ごせているのだろうか。

心配なのに悪い噂一つ払拭することのできない自分に溜息がでる。「レティシアさま、おつかれでいらっしやいますか？」

いつの間にか隣に来ていた宰相が、ため息をつくレティシアに声をかける。

「はい、少し。思いのほかたくさんの方がいらっしやったので。」
「陛下の人気もともと高かったのですが、レティシアさまが王妃になられてからは二人の人気は鰻登りです。陛下の生誕パーティーにもかなりの数の招待状を配ったのですが、ほとんどの国から足りないと言われてしまいました。」

王室の人気はそのまま国力につながる。宰相の顔は誇らしげだった。

レティシアはその言葉にも素直に喜ばず、困ったように微笑むしかなかった。

「しかしたくさんの方に囲まれてお疲れでしょう。一通り主な人との挨拶はすんだようですし、ご休憩されてはどうですか？」

「そうですね。では、お言葉に甘えて。」

宰相が合図をすると、いつも自分に仕えてくれている侍女がやつ

てきた。

「レティシアさま、こちらへ。」

そのまま休憩室まで案内してくれると思ったのだが、連れてこられたのは別の場所だった。

「ここは……。」

ベアトリーチェさまと会うために何度か通った後宮の門。何故こんな場所に。

「まあまあ、中にお入りください。」

侍女は楽しいな笑顔を浮かべ、自分を引っ張る。

案内されたのは後宮の薔薇園だった。そこには、普段は無い敷き布とテーブルが用意されている。テーブルの上には入れたばかりの紅茶やお菓子があった。

そして。

「アーサーさま……。」

何故か同じように側近に手を引かれやってきたアーサーさまの姿があった。

驚いて呟くレティシアに、侍女はいたずらっぽく笑う。

「アーサーさまの生誕祭には、後宮の側妃たちもみんな出払ってしまつので穴場になるんですよ。ここならごゆっくりお過ごしになります。もちろんアーサーさまと二人つきりです。」

そう言つて侍女は何かの包みを渡す。

「アーサーさまへのプレゼントです。侍女のみんなで精一杯準備させて頂きました。私たちも離れて待機しておくので御用のときはお呼びください。」

包みを受け取つたレティシアは、アーサーの傍まで侍女につれていかれる。

「おはようございます。アーサーさま。」

パーティーの前にも一度会っているのだが、再び挨拶する。

「レティシアか。いきなり連れてこられてびっくりしたぞ。」

「実は私も侍女に連れてこられてしまつてびっくりしてしまいました

た。」

「お前の侍女たちと私の側近が連絡を取っていたらしいからな。何をしているのかと思えば……。」

少し溜息を尽くと、アーサーはレティシアの手の中のものに目を向けた。

「それは？」

「これは、陛下の誕生日プレゼントです。」

それは何かの花束のようだった。

渡そうと包みを開いたレティシアの目に鮮やかな紫の色彩が飛び込む。

「カンティアの花か……。」

中ものを見たときレティシアは固まった。それはベアトリーチエさまとアーサーさまの思い出の花。でも違う。本来のカンティアはもつと素朴で小さく綺麗な花。でもこれは観賞用に改良されたのか、派手で大きな紫の花をつけていた。

侍女たちがアーサーの乳母からの情報により用意したのはカンティアの花のプレゼントだった。野の花では陛下へのプレゼントに適さないと考え、わざわざ遠国から観賞用に改良されたものを取り寄せたのだ。

形は少し違う、でも確かに大切な人が持つ思い出の花と同じ花。それをプレゼントとして用意してしまったことに、レティシアの頭は真っ白になる。

アーサーはその花を懐かしむように見つめると、レティシアに近づき花束を受け取るうとする。

その時、レティシアの瞳に二人を茫然と見つめるベアトリーチエの姿が映った。

薔薇園の向こうに大好きなアーサーさまの背中が見えた。アーサーさまの誕生日、神様に与えて貰えた奇跡だと思った。

「アーサーさまっ……！」

両手で大事に持つのはカンティアの花とこの日のために用意した時計。喜んでくださるだろうか。久しぶりに笑顔を見せてくださらないだろうか。取りにいくとき怒られてしまったけど、それでもアーサーさまのために用意した大切なプレゼント。

息が切れ、声も出せなくなったけど、それでもアーサーさまの背中だけを見つめて走り続ける。

大好きな人に、一番大切な人に、その人の生まれた日に、自分も祝いと贈り物を届けたくて。

今日は会えるとは思っていなかった。それでも手渡したかった。他の方法では嫌がらせに会わないか不安だったのもあった。

その思いが叶う。アーサーさまにプレゼントをちゃんと渡せる。だから一生懸命走った。この日のために用意したプレゼントをしっかりと、でもつぶさないように優しく抱きしめながら。

息を付きながら駆け寄った。

その先、見えたのは、寄り添いあうアーサーさまとレティの姿。浮かべていた笑顔は凍りつき、足は地面に固まる。

美しい薔薇園の中、誕生日に誰もいない場所で逢瀬を交わす王と王妃。側妃の自分がこの場所にはいけない存在だということは分かる。アーサーさまを見つけたとき胸に膨らんだ嬉しさは無残に潰れ、潰れた隙間から刺すような痛みと寒さが入り込んでくる。

早く立ち去らなきゃ。そう思うのに、足は少しも動いてくれない。そして目に映る。レティの手からアーサーさまに渡されようとしているプレゼントが。

カンティアの花。アーサーさまが大好きな花。私の大切な思い出

の花。

それは綺麗な布に包まれ、美しく咲き誇っていた。一目で手間とお金がかけられた立派なものだと分かる。自分の手の中にあるのはただの野の花。美しくても、小さく不揃いで数もない。ベアトリーチエは自分の手の中にある花束が酷くみじめに思えてきた。

「なんで…」

口から小さく漏れでた言葉を、ベアトリーチエは慌てて飲み込んだ。

だが、目が合う。自分を驚いた顔で見つめるレティシアと。

ベアトリーチエは振り返り駆け出した。後ろから声が自分を呼ぶ声が聞こえた気がしたが立ち止まることはなかった。走るベアトリーチエの目じりに涙が浮かぶ。

『なんで…。』どうしてそう言ってしまったのだろう。

続く言葉が頭に浮かぶ。『なんで…カンティアの花なの？私とアーサーさまとの思い出の花なのに！レティシアだって知っているのに！』

そんなこと言う権利なんてないのに。

アーサーさまとレティが愛し合うのは何も悪くないことなのに。カンティアの花だって自分が勝手に思い出にしているだけ。二人がその思い出を共有するのを咎める権利なんて自分にはないのに。

なのに自分は叫んでしまった。呟くような小さな声でも…。

それは自分の醜い心。親友であることを利用してレティの足を引っ張ろうとする汚れた心。

ベアトリーチエは怖かった。自分の心の醜さが。悲しかった。アーサーさまへの思いが通じないことが。二人が自分を置いて先に進んで行ってしまったことが。さびしくて悲しくて辛くて、胸が痛くて仕方なかった。

走り続けたベアトリーチエは、後宮の木が生い茂った場所にたどり着いた。日当たりが悪く、側妃たちの侍女から見捨てられ誰も管理してない後宮の隅。鬱蒼とした木と陰性植物たちが静かに生きる

場所。

ここには国中を覆う誕生祭の喧騒もない。

手の中にあつた手作りの花束はどこにもなかった。自分が無駄にした小さな命にベアトリーチエは謝る。

ベアトリーチエは大きな木の根に座り込むと、膝を抱え静かに涙を流し続けた。

かさりっ

しばらく時間が経ったころ、草を踏みしめる音がした。

「ビーチエさま……。」

声が聞こえた。

でもベアトリーチエは顔を上げなかった。上げられなかった。

「ごめん……レティ……。」

近づこうとする気配に先手を打つようにベアトリーチエは言う。

そして自分の願い通りたちどまってくれた親友に決定的な言葉を告げる。

「私……レティと一緒にいるのがつらいよ……。つらいよ……。」

それはどうしようもなく漏れ出た本心だった。

思いをかさねていく二人を見るのがつらかった。二人を見ていたら、いつか自分はレティを酷い言葉で傷つけてしまうのではないかと怖かった。

側妃になると決めたとき覚悟していたはずなのに、自分は耐えられなかった。だからレティを遠ざけたかった。

こうして拒絶することが同じくらいレティを傷つけることを知っているのに。

「ごめんね……ごめんね……レティ。」

自分勝手に醜い心のまま、己の心だけを守ろうとする酷い自分。それでも優しい親友は醜い自分の心を汲み取ってくれる。

風が揺れるちいさな音が耳に届いた。それが何か言葉を発しようとした音なのか、言葉を飲み込んだ音なのか、親友を見ることをやめたベアトリーチエには分からなかった。

ただ静かに、悲しそうに足音は消えて行った。

レティの足音が消え、鳥たちの声が止み、夕闇の音が夜の静寂に塗り替えられても、ベアトリーチェは一人ぼっちで泣き続けた。

レティシアはベアトリーチェが走り去った場所を驚きのまま見つめた。

ベアトリーチェがいた場所には小さな花束が落ちていた。素朴な美しさを持つカンティアの花束。だが、それは地面に落ちぐしゃぐしゃになっていた。

「ビーチェさま！」

レティシアはベアトリーチェの去った方へ駆け出した。夕刻からまたパーティーに参加しなければならぬことはもう頭になかった。人気のない後宮を走り回る。薔薇園以外にはあまり知らない後宮。ビーチェさまが何処に住んでるのかすら知らない。今、何処にいるかもわからない。

それはレティシアに、ベアトリーチェとの間に開いた距離を思い知らせる。

ベアトリーチェさまを見つけたのは、鬱蒼と茂る後宮の木の陰だった。

レティシアはいつもどおりベアトリーチェに歩み寄る。そう、いつも通り。

いつだってそうしてきた。ビーチェさまが辛いときは傍にいて励まし、慰めるのはいつも自分だった。

でも。

「ごめん…レティ…。」

ベアトリーチェの声に歩みが止まる。

追いかけて、追いついて、どうしようとしていたのだろう。愚かにも近づいて、抱きしめて、いつもみたいに慰めようとしていたのか。

「私…レティと一緒にいるのがつらいよ。」

この人を不幸に追いやったのは自分なのに。

親友と呼ばれるのが嬉しかった。悩みを打ち明けてもらえて、悲しい目にあつたときは抱き合つて、あのほとんど味方のいない王国で二人で支え合つて生きてきた。

でも、今の自分にはこの人を慰める資格なんかなかった。抱きしめようとしても、自分の腕にはいばらの棘が生えて、この人を傷つけるだけなのだ…。

愚かな自分。臆病で、間違つて、何もできなくて、いつも助けてもらつてばかりなのに、肝心な時には力になれない、それどころか障害にまでなつてしまつ。

「ごめんね…ごめんね…レティ。」

ビーチエさまは優しく、この時ですら私のことを思いやつている。拒絶されて当り前の私を突き放すときですら、私のことを思つて傷ついている。

なのに自分の心は弱くて、今にもビーチエさまに縋り付きたくて、『違うんです。』そう言おうとした。でも知っている。その言葉はビーチエさまには何の救いにならない。

レティシアは絶る言葉が漏れそうになるのを必死に抑えた。

ずっと伏せられたままの顔はレティシアには見えない。後宮に来て以来本当の笑顔を見たことはなかった。そして泣き顔を見る資格も失つた。瞳に映ることも、もう許されないのかもしれない。

レティシアは静かにその場から立ち去つた。その顔に映るのは道に迷つた幼子のような表情だった。

泣いていたベアトリーチェが立ち上がったのは、月が空の真上にきたころだった。

アーサーさまの誕生祭は盛大で、3日ばかりで行われる。だからまだ後宮に帰ってくるものはいない。外で座り込んでいたせいで体が冷えてしまつていた。そろそろ部屋に戻らなければ、風邪をひい

てしまうかもしれない。

看病してくれるものが誰もいない今、体調を崩すのはまずかった。立ち上がると夜の冷気がはつきりと感じられるようになり、体がふるえる。それでもまだここから出たくなかったのだろう。

ベアトリーチェは林の奥のほうまで歩いた。誰も管理していないスペースにできた後宮の林、その広さはたかが知れてるのであつさり壁のほうまでたどり着く。

後宮を覆う白亜の壁。ベアトリーチェはそれをじっと見て違和感を覚えた。木々のまばらな所から差し込む月明かりに照らされ白く輝く壁。その下の方に黒い場所があつた。黒く塗られているのではない。よく見ると、それは壁に開いた小さな空洞だつた。

ベアトリーチェは驚く。後宮には許可されたもの以外侵入できないように、高い壁に覆われ人が通れる場所は兵士が守っている。外から侵入するのは不可能だし、側妃が特別な日を除いて外に出るのも許されていなかった。

だがこの壁の穴は外まで続いているようだつた。後宮の住人に見捨てられた場所で、草木が生い茂り覆い隠している。だから誰にも見つからなかったのだろう。

アーサーさまに愛される望みはほとんどなく、レティを自ら拒絶した今、ベアトリーチェが後宮にいる意味はほとんどない。残酷な日々が毎日繰り返されていくだけだ。

この闇を抜けていけば、自由になれるだろうか。あの人への叶わぬ思いから。

暗い闇はベアトリーチェを誘うようにそこにある。

ベアトリーチェはその闇をじっと見つめ続けた。

30・『胸に或るもの』

結局、ベアトリーチェは後宮の隅の自分の部屋にいた。

つらい日々が待ち受け、目的の半分が失われても、まだここにいた。誕生祭が終わっても、ベアトリーチェはずっと部屋の中にいた。ベッドに寝たまま、膝を抱えうずくまっている。

耳の奥に響くのは、レティが去っていくときの悲しげな足音だった。

親友を拒絶し、傷つけたことがベアトリーチェの胸に重くのしかかっていた。さらに寒空のしたずつと外にいたせいか体調が悪かった。側妃として恥ずかしくないよう、ドレスを着て部屋を綺麗にしてがんばっていたベアトリーチェだが、今はその努力も放り出してしまっていた。

覚悟していたはずなのに。耐えなければいけないことだったはずなのに。

楽しそうに笑いあうレティとアーサーさまの姿が浮かぶ。

親友なら応援してあげなきゃいけないはずなのに。それすらできず、忘れることもできず、まだここにいる自分。

見ていないはずなのに、レティの去るときの悲しそうな顔が鮮明に思い浮かぶ。

自分が傷つきたくなくて、勝手に拒絶して、レティを傷つけた。胸が痛くて、涙が止まらない。

コンコン

ノックの音が思考の渦に沈んでいたベアトリーチェの意識を覚醒させる。

「誰かしら……。」

後宮の隅にある自分のドアをノックするものはほとんどいなかった。後宮に捨て置かれている第八妃に用など誰も無かったから。

扉に近づいたベアトリーチェが聞いたのは意外な声だった。

「ベア…いるのか？開けてくれないか？」

それはアーサーさまの声。

ベアトリーチェの目は驚きで見開く。ベアトリーチェの部屋へのアーサーさまの初めての訪れ。

だがベアトリーチェの胸に帰来したのは喜びでは無かった。

怖い…。なんと言われるのか。

レティを傷つけたことについて責められるのだろうか。アーサーさまの大事な人を傷つけた自分は後宮から追い出されてしまうかもしれない。

それで無くてもここ数日無気力に過ごし、散らかり放題になった部屋を見たら、側妃にふさわしくないと激怒するかもしれない。心が弱り切った今、アーサーさまに辛い態度を取られたら耐えられそうになかった。

「ベア…。いたら返事をしてくれ。」

扉の向こうから声が響く。

ベアトリーチェは扉の前から音をたてないように逃げ出し、ベッドにもぐり布団をかぶった。何も聞こえないように、何も聞かないように。

そのままじつとつづくまり続けた。

ベアトリーチェは心の疲れのまますぐに眠りに落ちた。

数刻たち起きたときには陛下は当然いなくなっていた。窓の外の夕日は沈みかけ、地平線の向こうに消えかけている。

アーサーさまにさらに不興を買ってしまっただろうか。それとももう失望されてしまったのだろうか。胸にあるのは寒い絶望と孤独。

ここに初めて来たところからベアトリーチェは孤独だった。それでもレティとアーサーの傍にいられる。そんな希望があった。そんな希望があったはずの未来さえもうベアトリーチェの手には無い。

砕け散った欠片は、ベアトリーチェの胸に突き刺さり、血を流し続けている。

本当にベアトリーチェは孤独になってしまった。

ベアトリーチェに与えられた小さな部屋。曲がりなりにも側妃が暮らすにはあまりにも小さな部屋。でも、ベアトリーチェ一人にはその部屋はあまりにも大きすぎた。

夜の冷気が浸み渡り、ベアトリーチェの心を凍えさせる。

ベアトリーチェは引出しを開けると、一つのペンダントを取り出した。

それは去年の誕生日にレティがくれたペンダントだった。綺麗な花の細工が施された装飾は中が開き写真をいれることができる。アーサーさまの写真を入れようとした自分は、うまく写真を切ることができず、レティが代わりに切ってくれたのだ。

笑顔の写真は手に入らず、写真の中のアーサーさまも微笑みかけはくれない。でも、アーサーさまにいつも会えるわけじゃないベアトリーチェにとっては貴重なもの。

アーサーさまとレティ、二人のぬくもりが感じられる大事な宝物。ベアトリーチェはペンダントを首からかけ、ぎゅっと胸におしつけた。

凍えそうな心を温めるように。二人のぬくもりを忘れないように。この冷たい後宮で、一人で生きていくために。

31・『新しい侍女』（前書き）

ここまでエルサティナーの笛吹き姫を読んでいただきありがとうございます。
ございます。

ここからこの作品は一番辛いエピソードに突入します。これまで読んでくださった方の中で、もう精神的に限界だという方は読まれない方がいいかもしれません。

アンケートにてヒロインを不幸にして悦に入っではないようにというお言葉がありました。実際プロットを考えた時の私はまさにその状態だったと思います。

そしてそのまま書き進めるのは、考えたものは形にしたいという作者のエゴです。

辛さのあまり気になって読まざるを得ない方も多くいると思います。誠に申し訳ありません。

読み進める方も、止められる方も、ここまで読んで頂き本当にありがとうございます。ありがとうございました。

31・『新しい侍女』

あれから1年間、ベアトリーチェはずっと一人で過ごし続けた。後宮の隅で誰から必要とされることもなく。アーサーさまがあの日自分に何を言おうとしていたのか、次にアーサーさまを見たのは一ヶ月後のことで、アーサーさまももう自分に何か言うことはなかった。

ある日ベアトリーチェが、後宮の廊下を歩いていると声を掛けられた。

「おはようございます。」

ベアトリーチェは驚く。後宮でベアトリーチェに話しかけるものなど、誰もいなかったからだ。目を向けてみると、それは見知らぬ侍女だった。肩のところまで切られた赤い髪に、緑の瞳を持つ切れ長の目、細い顎のラインはどこかキツネを連想させる。

「ベアトリーチェさまでいらっしやいますよね。」

「え、ええ……。」

挨拶されたばかりか、普通に話しかけられてベアトリーチェは戸惑う。後宮の侍女たちは自分を無視するか、聞こえよがしに巷で流れる自分の悪い噂を言うかのどちらかだった。

「あなたは……？」

ベアトリーチェの言葉に、その侍女は笑顔を浮かべ礼をすると自己紹介した。

「失礼しました。第三妃の侍女に新しく配せられたマルチダです。」その言葉を聞いても、ベアトリーチェから戸惑いの感情が抜けることはなかった。側妃付きの侍女は、ほぼ担当する側妃に雇われている。だからほかの側妃やその侍女には、悪意を持つか、無関心かのどちらかである。そして悪意を持っていたとしても、侍女という身分なのでそれを表に出すことはめったにない。後ろ盾も何もないベアトリーチェという例外を除いて。

ベアトリーチェは侍女が何を考えているのかわからず、何も言えずにマルチダを見ていた。

「これから後宮に勤めることになるので、お見知りおきください。それでは失礼します。」

マルチダはそんなベアトリーチェの態度にも、笑顔の表情を変えることなく礼をして去って行った。

「え、ええ。さようなら…。」

ベアトリーチェの返事はかなり戸惑ったものだった。

「ベアトリーチェさま！」

外の水場で洗濯をしているとき、またベアトリーチェはマルチダに声を掛けられた。

冬の冷たい水で洗濯していたベアトリーチェは、手にあかぎれが出来ていた。マルチダはベアトリーチェのその姿を痛々しげに見ると、近づき水桶の冷たい水に手を入れた。

「王族の方にそのようなことをさせるわけにはいきません。わたくしがやります。」

ベアトリーチェは驚いて目を見開いた。

「いえ、そんなことさせるわけにはいかないわ…。あなたはアーリシアスさまの侍女でしょう？」

アーリシアス「エランは、マルチダの仕える第三妃の名前だ。エラン公爵家のクレイドールの妹君に当たる。」

「アーリシアスさまにはたくさん侍女がいますので、私がやることなんてほとんどありません。ベアトリーチェさまのお手伝いをして、その分自分に役目が回ってくると喜ぶ侍女はいても、怒る侍女は一人もいませんわ。」

そう言っただけマルチダはベアトリーチェの洗濯物を手に取り、洗いかかる。

ベアトリーチェはその緑の瞳を見つめ聞いた。

「何故、私に親切にしてくれるの？」

すると、マルチダは悲しそうに顔を伏せて言った。

「こういうのは失礼かもしれませんが、ベアトリーチェさまがあまりにも不憫であらせられるので。私、巷での噂を信じていませんわ。私がおこにくるまで仕えていたクレイドールさまは、ベアトリーチェさまとお会いしてそんな方ではなかったと言っていました。実際、会って私も同じことを思いましたわ。」

マルチダは目に涙を浮かべ、ベアトリーチェの手を握った。

「何の罪もないのにアーサー陛下から酷い扱いをお受けになっているのですよね。だから、少しでもお力になりたく思ったのです。」

ベアトリーチェはマルチダに言葉を返した。

「あなたの気持ちはわかったわ。でも、これは自分でやらなければいけないことなの。申し訳ないけど、手伝ってもらうわけにはいかないわ。」

アーサーさまは自分に侍女を付けず、側妃らしくあれといった。

洗濯も自分でやらなければいけない。それに…。

マルチダはベアトリーチェの言葉を聞き、素直に洗濯物をベアトリーチェに返した。

「そうですか…。でもお困りになったときはご相談くださいね。私はベアトリーチェさまの味方ですので。」

そう言って去って行った。

それから、マルチダはベアトリーチェにたびたび話しかけ、手伝いなどを申し出るようになった。

後宮で孤独なベアトリーチェにとって、それはとてもありがたいことのはずだった。なのに何故か…、心を許す気にはなれなかった。マルチダのあの瞳の奥に、一瞬冷たい光を見たせいだろうか。

それにあのときマルチダはベアトリーチェの扱いについてアーサーさまを非難した。公爵家にも仕えていた侍女が、捨て置かれていた側妃の待遇について国王を非難する。これはあり得ることなのだ。

ろうか。

ベアトリーチェは胸騒ぎが収まらなかった。

レティシアはその光景を見た時驚いた。

ベアトリーチェに近づくことをやめたレティシアだったが、それでも未練がましく後宮を訪れては見つからないようにしながらベアトリーチェの姿を見ていた。その日もお忍びで後宮を訪れたおり、レティシアは驚くべき光景を目にした。

自分と離れてからはずっと後宮で孤独に暮らしていたベアトリーチェ。だが、この日見たのは、そんなベアトリーチェに笑顔で話しかける一人の侍女の姿だった。

その笑顔も会話の内容も決してベアトリーチェに悪意があるようなものではなかった。

やがてベアトリーチェとその侍女は挨拶をして別れた。これも今までにはなかったことだ。

レティシアはベアトリーチェと話していた侍女に近づいた。

「もし、あなた。少しいかしら。」

侍女は振り向いて、一瞬驚いた顔をしたが、すぐ笑顔に戻り侍女の礼をした。

「こんにちは、レティシアさま。どうされたのでしょうか。」

「あなたはビーチェさまと親しいの？」

ビーチェさまと聞いて、侍女は一瞬誰のことか分からない顔をしたが、はっと気づいたように表情を変えた。

「ビーチェさまとはベアトリーチェさまのことでしょうか。」

「え、ええ。」

知らぬうちに愛称で呼んでしまったことに、レティシアは切なげな表情を浮かべた。

「やっぱりお噂は真っ赤なウソだったんですね。レティシアさまと

愛称で呼び合う仲でしたなんて。」

侍女も同調するように、眉を寄せた悲しげな表情を作る。

「そ、そうなのです。私とビーチエさまは、決してあの噂のような関係ではなかったのです。むしろ私にとってビーチエさまは恩人で……。」

侍女は同情した顔で、レティシアの手を握った。

「民の噂は無責任なものですから。レティシアさまもベアトリーチエさまもお可哀想ですわ。私、第三妃の侍女ですが、前に仕えていた主人から二人はそのような仲には見えなかったと聞かされていたんです。だから、ベアトリーチエさまを実際に見て、少しでもお力になりたいと思ったのです。」

レティシアは侍女の言葉に、やっと理解してくれるものが現れたことを喜んだ。

「ですが……なかなかベアトリーチエさまは心を開いてくれません。」

目を伏せて言う侍女に、レティシアは思った。確かに先ほどのビーチエさまの表情は決して心を許したものではなかったと。

「それは、私のせいかもしれない……。親友だったはずの私がビーチエさまを傷つけたから。」

ビーチエさまを守るためとはいえ、自分はビーチエさまを裏切った。そして、王妃としての役目を果たしていく中で、さらにビーチエさまを傷つけた。

「でもお願い。諦めずビーチエさまの傍にいてあげて。あの人はとても素晴らしい方なの。でもこの国では誰も味方がいないの。だから、あなたのような人が傍にいてあげてほしい。」

「そうですね、私がんばります。決して諦めません。」

侍女はレティシアの必死の言葉に頷き、望みどおりの答えを返した。レティシアの心にほっとした感情が流れる。この後宮でやっとベアトリーチエさまの味方が出来たのだと思った。そしてこの侍女の名前すら聞いてないことに気付いた。

「あの、そういえばあなたの名前は？」

「あ、失礼しました。マルチダと申します。」

そう言ってマルチダはレティシアに礼をした。マルチダ、この侍女が少しでもベアトリーチェさまを救ってくれたらと思った。

「あの、レティシアさま。ひとつお願いがあるのですが。」

マルチダはレティシアを伺うように見上げて言った。

「何かしら？」

「私は一介の侍女なので、何も力がありません。ですからどうしようもない事態が起きた時はレティシアさまのお力を借りたいのです。ですから、常にレティシアさまと連絡を取れるようにしたいのですが。」

確かに侍女の力ではどうにもならないことに、ベアトリーチェさまが巻き込まれることもありえるかもしれない。すぐにレティシアはマルチダの申し出を承諾した。

「ええ、すぐに手配するわ。」

その答えを聞いて侍女は笑顔になった。

「ありがとうございます、レティシアさま。私、ベアトリーチェさまを出来る限り支えて見せます。」

「ええ。ベアトリーチェさまのことをお願いね。」

レティシアはあの日以来、誰かがビーチェさまの味方になってくれることを望んでいた。宮廷で孤独に暮らすベアトリーチェさまの傍にいてくれる人間が欲しかった。その強すぎる願いは、彼女の瞳を曇らせた。だから平常の彼女であれば気付けたことにも気付けなかった。

笑顔になったマルチダの瞳の奥に光った冷たい光に。その人の好さそうに作られた笑顔に、はかりごとをするものの冷笑が滲んでいたことに。

何故、信じてしまったのだろう。自らに都合の良すぎる事を。レティシアはこの日のことを、一生後悔し続けることになる。

「舞踏会ですか？」

女官長のフランシーヌがわざわざ自分の部屋にやってきて、伝え知らせにベアトリーチエは驚いた。

「はい、王弟殿下のご帰国を祝うパーティーです。」

「何故、私にも？」

大陸で最も栄えている国エルサティーナでは、今までも様々な催しが行われてきた。しかし、それに側妃が参加することは少ない。国の顔である正妃という例外を除いて国王の妃は、後宮から出ること自体を良しとされていない。

特にベアトリーチエは今まで他の側妃たちが参加する催しすら、出席することを許されることはなかった。なのに、何故今回は出席することが許されたのか。

「カルゼスさまのご意向で、すべての貴族、王族の方に出席してほしいそうです。側妃も例外無く。」

カルゼスとはアーサーさまの異母弟に当たる殿下の名前だった。今まで隣国のレイツオンに留学していたのだが、この度、帰国されたのだった。

正直、あまり気が進まなかった。この国で自分の味方という存在はほとんどいなく、貴族たちの社交場というべき舞踏会に出てもつらい思いしかしないことは明らかだった。でも、王弟殿下の招待では、断れば失礼になるだろう。

「わかりました……。」

少し参加して、出来るだけ早く場を辞そう。そう考えベアトリーチエは承諾の返事をした。

フランシーヌが部屋から去り、ひとりになったベアトリーチエは溜息をついた。そして、はたと気づく。

「どうしよう。パーティーに着て行くドレスなんてないわ。」

ベアトリーチェには後ろ盾となってくれている貴族も、王国からの援助もない。だから節約せねばならず、服なんてここ2年仕立てたことがなかった。

日常生活はこの国に来たとき持ってきた服を繕ってなんとかしていたが、舞踏会となればそんなドレスを着て来たらとんでもない失礼になる。しかし自分が今持つてるお金では、新しく仕立てるのすら難しいだろう。それにとつもない悪評を持つ自分のドレスなど仕立てたいと思う仕立て屋もいまい。

これではどちらにしろ、失礼になってしまうかもしれない。ベアトリーチェは今更だが参加の承諾をしたことを後悔した。

しかし、後悔しても問題が解決するわけではない。

「どうにかしないと……。」

ベアトリーチェは、フィラルドにいたところから溜めていたお金をじっと見て考えた。

「よいしょつ。」

がさごそと土の中で少しもがき、ベアトリーチェは穴の外へ出た。

「ふう、抜け出せたわ。」

ベアトリーチェが考えた手段は既製服を買うことだった。既製服は仕立てるより安く買うことができる。エルサティーナの既製服は質がとて良い。貴族のパーティーでは仕立服を着るものがほとんどだが、仕立て屋のいない地方の貴族などは既製服ですませてしまうこともある。

自慢できるようなものではないが、少なくとも失礼にはならないだろう。

ベアトリーチェは以前見つけた抜け穴から抜け出し、既製服の店に行くことにした。抜け穴から出た先は、後宮の裏手だった。厚い壁に阻まれ、見張りの兵士もほとんどいない。

だからこの抜け穴も見つかることがなかったのだろう。

いくら既製服とはいっても貴族相手の店だ。ちゃんと身ぎれいにしなければいけない。

ベアトリーチェは準備しておいたバッグの中から、タオルを取り出し体の汚れを拭った。

「さて、急がないといけないわ。」

後宮で自分がいなくなっても気づくものなどないだろうが、見知らぬ王都でお店を見つけドレスを買い帰らなければならぬのだ。夜になれば厄介事にまきこまれる確率もたかい。

もしそれで側妃だとばれば、大事になりかねなかった。

ベアトリーチェは街の方を目指して走った。

見知らぬ王都の街を歩き回り、貴族相手の既製服の店を見つけたのは夕日が街を赤く照らしはじめたころだった。

慌てて店に入ったベアトリーチェを、店員の女性は笑顔で迎えた。

「いらつしゃいませ。」

「パーティー用のドレスが欲しいのですが。」

ベアトリーチェの言葉に、店員は頷く。

「かしこまりました。お嬢様の体型ですと、ここにあるものが合うと思いますよ。」

大人っぽくドレスで着飾った店員に案内され、ベアトリーチェは女性というよりはまだ少女という年齢の娘が着るドレスが並べられている場所だった。

やはりベアトリーチェも女性なので服を見るのは好きだった。仕方なく買いにきたとはいえ、お店に並べられたドレスに思わず目移りする。

少し大人っぽいデザインのものに目が行き、自分では背が足りないのが遠目でもわかり溜息をつく。

そんなベアトリーチェの姿に、店員の女性はくすつと笑う。店員はベアトリーチェを地方貴族の娘だと思っていた。

カルゼス王弟殿下の帰国パーティーには多くの貴族が招待された。既にこの店には招待されたそんな貴族たちがたくさん訪れていた。意中の相手でも来るのだろうか。大人向けのドレスを見て溜息をはいた少女を見つめる。やわらかそうな蜂蜜色の髪に、少し幼げだが十分に可愛い容姿。着ているものはあまり上等ではないが、地方貴族の娘ではこういう格好をしているものも数人いた。

ちゃんと着飾れば、意中の相手の心を動かすことも十分に出来るだろう。

「お嬢様、迷われていらつしやるなら、こんなのはどうでしょうか。」
店員が差し出してきたドレスを見る。

青い生地で作られたシンプルなラインのドレス。肩が出ていて肌の露出がいくつかがあるが、下品なことではなく上品にまとまっている。大人っぽいドレスだが、ベアトリーチェの背格好でもちゃんと着れそうだった。

進んで参加したいパーティーではなかったが、どうせ着るなら気に入ったものがないと思っただ。どうせ、服を買う機会などしばらくはないだろうし。

「それをお願いします。」
「かしこまりました。」

店員の差し出したドレスを気に入ったベアトリーチェは、すぐに買うことに決めた。

ドレスを包んでくれた店員に金貨を支払い、店を出た。外はもう日が落ちかけている。

城の方へ急いで歩き出した。

行商などが行われている区画を通り過ぎようとしたとき、ベアトリーチェの耳に喧騒が聞こえた。

「おい、てめえ！人に馬車をぶつけておいてただですまそうっての

か。」

「す、すいません。だけど、あんたの方から馬車の方に…。」

「なに！？俺がわざとぶつかりにいったってのか？」

「い、いえ…。そういうわけじゃありませんが…。」

野菜を載せた荷馬車に乗った初老のおじさんが、柄の悪い男に胸倉をつかまれていた。

「じゃあ、俺はお前のせいで怪我しちまったってわけだ。治療費ぐらいもらっていいよな。」

男はニヤニヤ笑いながら、おじさんの懐を探り貨幣の入った袋を取り出す。そして中身を確認してにやつと口を吊り上げる。

「まあ、これだけで勘弁してやるよ。」

辺りの野次馬は、その姿を見て口々に話す。

「あの人自分から馬車にぶつかっていったのよ。怪我だってかすり傷だし。かわいそうよ。誰か助けてあげて。」

「そうはいってもあいつ剣をもってるぞ。たぶん、北の戦争が終わって流れてきた元傭兵だ。俺たちじゃどうにもできねえ。」

「警邏の兵士が来るのを待つしかないよ…。」

今まで大人しくしていたおじさんだが、お金の入った袋をとられ男にすがりつく。

「それだけは勘弁してください。一週間分の稼ぎなんです。」

その態度に気の短いそうな男はむっと顔色を変える。

「うるせえ。大人しくわたさねえと痛い目見るぞ。」

どんつとおじさん突き飛ばすと、腰から剣を取り振りかぶる。

鞘にはおさまっているが、殴られればただではすまない。

「きゃあっ」

周りの群衆から悲鳴があがる。

鞘に収まった剣は、そのままおじさんの頭に振り下ろされる。

しかし、その剣は横から弾かれ、地面にたたきつけられた。

そこに立っていたのはベアトリーチェだった。咄嗟に荷馬車に置いてあった棒を取り、相手の剣を横から弾いたのだ。

「なんだてめえ！つて女、しかも貴族か？」

野次馬たちはベアトリーチェの登場にざわつく。まだ少女といつてもいい年齢の娘が初老の男性の助けに入ったこと。そして容姿や服装から見てその少女が貴族だったからだ。

男も一瞬その姿を見て驚いたが、再びにやついた笑みを取り戻す。

「なんだ？もしかして俺の相手でもするつてのかい？お嬢ちゃん。」

片手に持った剣をちらつかせ、目の間の少女を威嚇する。しかしベアトリーチェは動じず、棒を構え相手を真剣な目で見る。

「その人の袋を返してあげてください。大切なものだそうです。」

そんなベアトリーチェの言葉を、男は鼻で笑う。

「貴族のお嬢ちゃんが正義の味方気取りか？痛い目みるぜ？」

「あなたにできるのですか？」

男は挑発の言葉をベアトリーチェに返され、顔を真っ赤にする。

「生意気な餓鬼が。俺が世間つてものをおしえてやるよ！」

剣を大きく振りかぶりベアトリーチェ目がけて振り下ろそうとする。

だが、その前にベアトリーチェが下段から弧を描くように突き上げた棒が男の顎を直撃した。死角から顎への一撃が脳を揺さぶり、男は足元から崩れ地面に倒れ伏す。

それはベアトリーチェがアーサーから習った護身術だった。フィラルドにいたころ、アーサーの剣の稽古にまで付き合いたがったベアトリーチェだが、アーサーは難色を示した。剣の技術は、生死のやり取りでもある。生半可な技術を身に着けていても、逆に命取りになりかねないし、人を殺めてしまうこともある。

アーサーが唯一教えたのは、得物を使って相手を昏倒させるこの技だった。

もちろん、元傭兵の男が本気にさせたならばベアトリーチェが勝つことは無理だっただろう。しかしベアトリーチェは、相手の感情を乱し、油断を突き、一度のチャンスでその攻撃を成功させた。

「おい、あの娘あいつを倒しちまったぞ。」

「凄いぞ！」

小柄な貴族の少女が、大きな男を倒してしまったのを見て周りには騒ぎ出す。それはやがてベアトリーチエへの賞賛の声になる。人々はその少女が誰なのか噂しあい、彼女に話しかけたそうな様子だった。

しかし、ベアトリーチエは周りの様子に気を止めることなく、日が半分陰ってしまった空を見て顔を曇らした。

「急いで帰らないと。おじさん、これをどうぞ。」

「あ、ああ、ありがとう。」

ベアトリーチエから袋を受け取った初老の男性は、こんな少女が自分を救ってくれたことが信じられず、呆然としたままお礼を言う。「すみません、私は帰らなければいけないので、この人を警邏の兵士に引き渡すのを願います。それでは。」

ベアトリーチエは挨拶をすくなく立ち去った。日は暮れかけていたし、警邏の兵士に接触すれば、自分自身もまずいことになる。

ベアトリーチエは城の方へ向かって走った。落ちかけた夕日に照らされ、大きく美しい城はオレンジと薄やみのコントラストで彩られている。その後ろにあるのがベアトリーチエの変える場所、後宮だった。

「おい、待ってくれ。」

走っているベアトリーチエの後ろから声がかかった。それはさっきの初老の男性だった。

「どうしたんですか？」

「いや、あんた、お礼もする暇も無く立ち去っちゃうから。」

「お礼なんていららないです。」

ベアトリーチエは笑って首を振る。その人の良すぎる態度におじさんは溜息を尽く。

「確かに貴族のお嬢さんにちゃんとお礼するのは難しいが。あんた急いでるんだろ？わしの荷馬車に乗って行かないか？荷馬車といつても野菜を乗せる馬車だから汚いことはないよ。」

おじさんの申し出にベアトリーチェは戸惑ったが、頷くことにした。断るのは申しわけないし、自分も走って息が切れてきたころだ。急いでるのだからとても助かる申し出だった。

「いやあ、最近はあるなやからが増えて王都も物騒になってきたなあ。」

「そうなんですか？」

「ああ、北の戦争が終わったせいで職にあぶれた元傭兵たちが、王都に流れ込んできてるんだ。何故かここエルサティーナには特に多く入ってきてね。おかげでそこかしこで騒動が起きているんだよ。」

荷馬車に乗り流れる景色を見ながら、おじさんと話す。夕日に照らされる王都の街並みは綺麗だったが、おじさんの話では見た目通りの平穏さではないらしい。

そんなベアトリーチェの耳に、通りかかった酒場から歌が聞こえてきた。あの、歌だ…。

「ああ、良い歌だねえ。いつ聞いてもいい歌だ。わしも大好きさ。レティシアさまは結婚式のときに一目見たが、とても美しい方でした。」

「はい、とても美しい方です。」

「そうか。あんたは貴族だから目にする機会も多いのか。優しい方なんだろう。」

「ええ、本当に優しい方です。」

親友が褒められてるのに、あの歌が聞こえると、胸が痛む…。

「ベアトリーチェって女は本当にひどい奴だ。あんなに素晴らしい方をいじめるなんて。それも今じゃ罰を受けてるらしいが、自業自得だよ。本当に良かったよ。アーサーさまがレティシアさまを助けてくださって。」

「……。」

その言葉にベアトリーチェはうつむいて言葉を返すことができなかった。おじさんはベアトリーチェの沈黙に気付かず話を進め、ベアトリーチェも気付かれないように相槌をつつた。

流れる景色の中、ベアトリーチェはふと山の方の妙な建物が目に付いた。城のような構造だが高さはずいぶんと低い。沈みかけた夕日に照らされ山奥で赤々しく光っている。

「あれは…?」

ベアトリーチェのつぶやきが耳に入った男性が振り向く。

「ああ、あれかい。あれはずっと前の王様が作った建物さ。なんでも側妃にも出来なかった愛人をあそこに困っていたらしい。今じゃ閉鎖されてるよ。」

「そうなんですか…。」

その建物は石造りの砦のようだった。

「あそこには近づかない方がいい。最近、妙な連中がいるって話だ。王都からずいぶん離れてるからな。」

「妙な連中?」

「ああ、そいつらも元傭兵だって噂はあるけど、いったい何をやってるんだか。」

山肌を赤く照らす夕日は、その建物を赤い闇に染め上げていた。

自分がエルサティーナに来たところは王都はずっと治安の良い場所として有名だった。それは警備の厳しさというより、王の人徳によるものが多かった。

だが、男性の話聞き、実際に目にするるとそこにわずかな闇が浸食しはじめていることがわかる。それがすぐ消えてしまう闇なのか、何か大きな災禍の前兆なのかはわからなかった。

(アーサーさまは気付いてらっしゃるのかしら…。)

不安に締め付けられた胸は、大切な人のことを思う。

「ここでもいいのかい?」

初老の男性は、ベアトリーチェが馬車を降りた場所を見て驚いた。てつきり王城まで行くと思ったのだが、そこから横道にそれ、ここは王都のはずれだった。

「はい、大丈夫です。」

ベアトリーチェは王宮に正面から入ることはできない。こっちの

ほづが自分の目指す後宮には近かった。

「ありがとうございます。」

ペこりとお礼を言うベアトリーチェに、おじさんは頭をかくと。

「まあ、いいけどよ。こちらこそ、あんたに助けてもらってありがとう。」

男性はさらに王都の端の方へ走って消えていく少女を見送った。

「そういえば、名前も聞いてなかったな。」

その少女が王都でひどい悪評を持つ最下位の側妃だったと、知ることにはなかった。

抜け穴から後宮に戻ったベアトリーチェは、誰にも見つからないように自分の部屋に戻るうとした。ベアトリーチェが何をしていたも気にするものなどいはいはすが、それでも用心するに越したことは無い。

「ベアトリーチェさま、今日は一度も見ませんでしたけどどうされていたんですか？」

声を掛けられ振り向くと、マルチダがいた。ベアトリーチェはさりげなく荷物を隠す。

「そう？ちよつと散歩したりしてたし、すれ違って会えなかったのかしら。」

「そうですか？」

マルチダはベアトリーチェのその動作に気付いた様子が無く安心した。

「ベアトリーチェさま、もうすぐ舞踏会でいらっしゃいますね。」

「ええ、そうだけど。」

「私も第三妃さまのお付きとして参加するのです。楽しみですね。」

「そうね。」

気鬱さからベアトリーチェの返事はぎこちないものになる。その

様子を見て、マルチダは笑顔になると。

「ご安心ください。パーティー主演であるカルゼスさまはとても良い方です。それに噂も信じていらっしやいません。決してベアトリーチェさまに不快な思いはさせないかと。」

「そうなの。」

「はい、舞踏会では一度話されてみてください。」

マルチダの言葉に、ベアトリーチェは疑問を覚える。

「カルゼスさまをご存知なの？」

「クレイドールさまと親しくいらっしやったので。」

「そう…。」

ベアトリーチェはその態度にも違和感を感じた。そもそも舞踏会でのお付きの侍女は、側妃たちの中からお気に入りのお供の侍女が選ばれるはずだ。彼女は第三妃に対して、そうなるよう働きかけてるようには見えない。

また主人の友人だからといって、侍女たちまで人となりを知るわけではない。まともな交流が持てるのは、主人に近い立場の高い侍女たちだけだろう。彼女はそうだったのだろうか。ではなぜ、今は第三妃の侍女に移されたのだろうか。

そして彼女はベアトリーチェが舞踏会に参加するという前提で話していた。断ると思わなかったのか。それとも承諾したことを知っていたのか。

ベアトリーチェの中に沸きだした疑問は消えることは無かった。

舞踏会が開催される四日前、王国に緊急の知らせが入った。

エラン公爵領に位置する南西の国境にて大規模な隣国の軍が侵入したという報告。ただちに召集された会議によって、国軍を送ることが決定された。

間もなく王弟殿下の帰国を祝う舞踏会が行われるということ、国軍の派遣はひそやかに行われ、その情報も重臣たちだけに知らされた。

城の守りには近衛騎士団だけが残されることになった。

周りの騒ぎを置いて、舞踏会ははじまった。

王宮の大広間だけでなく、中庭まで使い、招待した貴族の数に見合うように盛大に舞踏会は開催された。きらびやかな衣装を纏い、舞い踊り、歓談し、宴を楽しむ数多の貴族たち。

その中心にいるのは、国王であるアーサーとその妃レティシア、そしてパーティーの主役であるカルダス王弟殿下だ。たくさんの人が彼らを取り囲み、笑顔で会話を交わす。その周りにも国王や王妃と会話したそうに見つめるものたちや、憧れの視線で眺めるものたちがたくさんいた。

側妃たちにも彼らの支援者たちが群がり、楽しそうに話をしている。パーティー会場は広くとも、知り合いを見つけた貴族たちは寄り集まり噂話に興じたり、食事をしたりしていた。

ベアトリーチェはそんな光景を、会場の隅っこでぼんやりと眺めていた。ベアトリーチェの周囲には誰もいない。

しかし、ベアトリーチェは正直ほっとしていた。あの噂が流れて

いる今、パーティーでの周りの視線が不安であった。

でも、それは杞憂であったことに気付く。ほとんどのものはベアトリーチェの顔など知らなかった。

「この舞踏会にあのベアトリーチェが参加しているらしいわ。」

「まあ、何処にいるのかしら。レティシアさまがいらっしやるのによく参加できたものね。」

「どこにいるのかしら？」

「それが、見つからないらしいのよ。一目でわかるほど醜い顔立ちをしているって話なのに。」

「逃げかえつちやったんじゃないの？」

「あはは、きつとそうね。」

そう噂し合う貴族たちが、ベアトリーチェの前を通り過ぎる。彼女たちの瞳が、ベアトリーチェを見ることなど一度も無かった。

ベアトリーチェは安堵の息をついた。これならパーティー終了まで問題なく過ごせそうだ。

「あの、あなた…。」

後ろから声を掛けられ、ベアトリーチェは驚いて振り向く。自分の顔を知っているものがいたのだろうか。

振り向いた先にいたのは、茶色い髪に、地味な色合いのドレスを着た少女だった。少しおどおどした緊張した表情でこちらを見つめている。

「あなたももしかして、初めての参加じゃないですか？私、田舎の方の貴族で、王都の舞踏会に参加したのは初めてなの。見知った人もぜんぜん見つからなくて、心細くて…。もしよかったら一緒にいてくれない…？」

少女の格好はここに集まる貴族としては少しやぼったい恰好だった。たぶんベアトリーチェが来ているドレスが既製品なので、同じ事情だと思っただらう。

気恥ずかしそうに頼む少女に、ベアトリーチェは困った顔をした。少女の心細そうな表情は、力を貸してあげたいと思う。でも、この

少女は自分がベアトリーチェだと知らないから話しかけてきたのだろう。それに自分がベアトリーチェだと周りにしれた時、この少女まで悪評を被ることになるかもしれない。

返答をためらったベアトリーチェに、少女は悲しそうな顔をした。「ご、ごめんなさい。急に話しかけて迷惑でしたよね。あつっ。」そういつて振り向いて去って行こうとした。すると、注意が散漫だったのかテーブルに体をぶつけてしまう。

どんつとぶつかった拍子に、飲みかけのまま置かれたワイングラスが倒れてしまう。残された液体は少なかったが、それでも滴が落ち少女のドレスを汚す。ベージュの生地に赤い染みがポツポツと写る。

「どうしよう……。」

少女はそれを見て泣きそうな顔をする。あわててハンカチを出して拭おうとするのを、ベアトリーチェは止めた。

「待つて。こすっちゃだめよ。ちよつと待つててね。」

ベアトリーチェは給仕を見つけ、白ワインを受け取ると、それをハンカチにしみこませた。

「少しごめんね。」

そしてハンカチで染みになった部分を優しく叩いていく。困惑した顔でベアトリーチェを見つめていた少女だが、染みが少しづつ消えていくにつれ目を丸くする。

「すごい！」

「これで一応は大丈夫だと思うわ。」

レイシアとフィラルドにいたころ、こういつしみ抜きの方法も一緒に学んだのだ。

「すごいわ！まるでうちのばあや見たい。」

きらきらと尊敬の目で見ってくる少女に、少し心が痛くなる。ベアトリーチェは少女の名前を尋ねた。

「あなた名前はなんていうの？」

「えっと、アリエーヌ＝メルシです。」

メルシと言えば、エルサティーナの北方に位置する子爵の名前だ。ベアトリーチエはパーティー会場からここまで来た時の記憶を巡らす。そして、広大なパーティー会場の一方を指示しアリエーヌに尋ねた。

「あそこに北方のベリユーシ伯爵の集まりがあるけど、あなたの見知った方はいないかしら？」

少女はそちらに目をむけ、数回瞬くと、嬉しそうな声を上げた。

「あっ！いました！」

その表情を見てベアトリーチエはホツとする。

「良かった。もう大丈夫？」

「はい！」

アリエーヌはベアトリーチエの教えた方角に駆け出そうとするが、ふと気づいて振り返る。

「あの、あなたは？一緒にいきませんか？」

「ごめんなさい、私はちよつといけないの。」

アリエーヌはその答えを聞いて残念そうな顔をしたが、気を取り直しベアトリーチエに訪ねる。

「あの、せめて名前だけでも教えてください。」

ベアトリーチエはその言葉にまた困ってしまう。偽名でも名乗った方がいいのだろうか。だが、ベアトリーチエが答えを決めるまえに後ろから声がかかった。

「ベアトリーチエさまでいらっしやいますね。」

ベアトリーチエが驚いて振り向くと、そこにいたのは金色と翡翠の瞳。だが、ベアトリーチエの知っているあの人とは違う。面立ちも似ているが、その瞳はアーサーのものとは違い、どこか高慢な雰囲気を感じている。

ベアトリーチエはその人を見て、すぐに名前を思いついた。

「カルゼス王弟殿下でいらっしやいますか？」

「はい、その通りです。」

その貼り付けたような笑みは、マルチダと良く似ていた。

「カルゼス殿下…。それにベアトリーチェって…。」

アリエー又は急な王弟殿下の登場、それに自分が話していた少女の名前をしり目を見開く。そしてベアトリーチェをまじまじと見つめる。アリエーもあの歌を知っていた、むしろ王国の他の少女と同じように憧れていたりもした。あのベアトリーチェがこのパーティーに参加すると聞いて、怖いとおもいつつも一度ぐらい見てみたいと思っていた。

でも、自分にとっても親切にしてくれた優しげな少女が、あのベアトリーチェなんて…。

「その君は少し向こうにいつてくれないかな。ベアトリーチェさまとお話ししたいことがあってね。」

固まっていたアリエーのだが、王弟殿下の言葉を聞き、びっくりと立ち直る。

「は、はい。」

そしてベアトリーチェの方を最後にちらりと見て、侯爵たちがいる方に駆けていった。

「一体私に何の御用でしょうか。カルゼスさま。」

ベアトリーチェはカルゼスの方を向き尋ねる。その表情を見て、カルゼスは再び笑みを作るとベアトリーチェに言った。

「そう警戒しないでください。私はあなたの味方です。」

そういつてカルゼスはベアトリーチェを人気のないバルコニーまで誘い出した。

カルゼスの言葉にベアトリーチェの胸に嫌な予感が渦巻きだす。

私の味方というなら、誰が敵だというのか。

「最近まで他国に留学していた私ですが、あなたへの酷い待遇は聞いてます。とても辛い思いをされているでしょう。」

カルゼスはベアトリーチェに同情するという表情を作った。

「そうでしょうか…。」

「はい、陛下のあなたへの冷遇は、とても一国の王女に対するものではありません。いくら陛下とはいえ、横暴すぎます。あなたも不

満をお持ちになっただけではないでしょうか。」

「……。」

そんなことはない。アーサーさまは同情でも自分を側妃として置いてくれた。感謝こそすれ恨むことなんかない。そう言いたかったが、ベアトリーチエはぐつと堪えた。

王弟殿下までが陛下を批判する。これはとても大きな危機なのかもしれない。少しでも情報が欲しかった。そしてなんとかこのことをアーサーさまに伝えたい。

「私にはあなたをお救いする策があります。」

続いたカルゼスの言葉に、ベアトリーチエは反応した。

「どういうことでしょうか。」

「そのためにも、あなたの協力が必要なのですよ。そうすればあなたの待遇をぐつと良くすることができます。」

「いったい何を……。」

「はは、警戒しないでください。そんな恐ろしいことはありません。簡単なことです。」

もう少しだ。ベアトリーチエは思った。しかし。

「ベアトリーチエ！」

カルゼスの言葉を遮る、強い声が会場に響いた。金色の髪に、翡翠の瞳、美しい容姿と威厳を漂わせた王の姿。だが、舞踏会で来賓の貴族たちと接していた時とは違い、その雰囲気は硬質なものとなっている。

「これはこれは、兄上。どうされましたか？」

カルゼスは慌てて笑みを取り繕う。

「カルゼスか……。いったい何を話していた。」

「少し歓談させて頂いただけですよ。ねえ、ベアトリーチエさま。」

笑顔で話しかけるカルゼスに、ベアトリーチエは迷った。ここでアーサーさまにカルゼスさまを怪しいと思ったことを伝えるべきか。でもまだ決定的な発言は得られていない。自分の思い違いかもしれない。何を馬鹿なことを言っているのかとさらに失望されるかもしれない。

れない。

一方、周りではベアトリーチェという言葉聞きつけた人々が集まっていた。あの噂の魔女を一目みてみたい。陛下の御前なのであからさまに見ることはできないが、まわりの貴族はそちらをちらちらと見る。

初めてそれを見て受けた印象は、みな驚きだった。

ベアトリーチェの噂から皆が想像していたのは、いじわるな顔をつきをした醜い女だったからだ。だが、今、ベアトリーチェと呼ばれている少女は、蜂蜜いろの髪をした優しげで可愛らしい少女だった。

呆然とその容姿を見つめていた周りの人々だが、ベアトリーチェの格好を見回しやっとな噂との妥協点を見つけていく。

「ほら、あのドレス見て、良くできているけど既製品よ。側妃が着るようなドレスではないわ。やっぱり冷遇されているのね。」

「確かに顔は可愛いかもしれないけど、魔女って呼ばれる女だものよっばどうまく化けているのよ。」

まず貴族の女たちが、そういつて彼女を貶す言葉を見つけていく。「しかし、意外な顔立ちだったな。」

「あの容姿なら陛下から捨てられた後は下賜されたいというものもあるかもしれない。」

そんな下卑たる言葉まであった。

耳にするのもつらい言葉が、ベアトリーチェの周りで囁かれる。

救いは会場が広く、一部の貴族にしか知られることが無かったということだろうか。

そして何故かアーサーの機嫌は先ほどよりもさらに悪くなっていた。

だが、ベアトリーチェはこぶしを握り締め、陛下に進言しようと思っただけ。ただ今この場で不確定な疑惑を告げるわけにはいけない。

だから後から陛下に、話だけでも聞いてもらおうと。この嫌な予感だけでも伝えておきたいと。

「アーサー陛下」

「もう良い。ベアトリーチエ、もうお前は帰れ。」

しかし、ベアトリーチエの言葉を遮るように、アーサーさまから言葉が告げられた。

「兄上、それはあんまりです。ベアトリーチエさまは私が招待したのですから。」

カルゼスはベアトリーチエを引き留めようとする。

「だめだ。もう戻れ。ベア。」

それでもアーサーの態度は変わらない。

「はい…。わかりました…。」

そもそも自分の杞憂なのかもしれない。王と王弟殿下を引き裂くようなことを告げるのは、やめたほうがいいのかもしれない。そう思ったベアトリーチエは折れた。

周りの人間は嘲笑を浮かべ、うつむくベアトリーチエを見る。

「やっぱり、アーサーさまに嫌われているのね。舞踏会にも参加して欲しくなかったそうよ。」

「レティシアさまを酷い目に合わせた罰だ。いい気味だよ。」

俯いたまま舞踏会の場を去ったベアトリーチエを、群衆たちは見送った。その中には、あのアリエーヌもいた。

「ベアトリーチエってあんな女だったんだね。ちよつと意外。でもそれ以外は噂通りだったね。」

アリエーヌと合流した友達の少女はいった。

「ちがうもん…。」

「え、なにかいった？」

アリエーヌが呟いた言葉に、少女は聞き返す。

「あの人はとても優しい人だったもん。みんなが噂するような、ベアトリーチエじゃない…。」

アリエーヌの呟きは、魔女をあざける喧騒の中ではあまりにも小さく、誰にも気づかれることなく飲み込まれていった。

レティシアは落ち込んでいた。

今度の舞踏会、レティシアは張り切っていた。

これこそ、みんなの誤解を解くチャンスだと思っていたのだ。ベアトリーチェはいままで、パーティーに参加することが無かった。だからレティシアがどんなにベアトリーチェさまを擁護しても、レティシアの同情と優しさから来るものと勘違いされ、真剣に受け取られることはなかった。

でも実際にみんなの前で二人が親しいことを見せれば……。アーサーさまとのことで溝ができてしまっていたとしても、一日だけでも元の二人の姿を見せることができればみんなの誤解も解けるに違いないと。

それに、今度の舞踏会をきっかけにベアトリーチェさまが行事に出来るようになれば、アーサーさまの気持ちもベアトリーチェさまのほうに向くチャンスも増えるかもしれない。

はやく王妃としての役目を果たし、ベアトリーチェさまの傍に行こう。

そう思ったレティシアは、アーサーとも離れ精力的にたくさん貴族たちと話した。そして帰ってきたときには、ベアトリーチェは舞踏会の会場にはいなかった。

噂を聞いてみれば、アーサーさまに会場から追放されたと。

冷や水をあびせられた気分だった。なんで、ベアトリーチェさまの傍にもつといようとしなかったのだろう。王妃の役目など後からでもできたはずなのに。

舞踏会が終わり部屋で沈むレティシアを侍女たちは心配そうな目で見る。

コンコンコン

そんなおり部屋の扉がノックされた。

「なんでしようか。」

侍女が扉を開け応対する。扉を開けた侍女は、一通の手紙を持ってきた。丁寧に折られたまかれた紙に、貼ってあるシールを見てレティシアは目を開いた。

「それは！」

それはマルチダとの間にやり取りできるように作った直通の文だった。

「見せてちょうだい。」

レティシアは侍女から手紙を受け取ると、せわしなく文を開けていく。そしてその文章に目を通し固まる。

『ベアトリーチェさまに大変なことが起こりました。今夜中にベアトリーチェさまの部屋にお越し頂けないでしょうか。』

その文章と共に、ベアトリーチェの部屋の様子を示す図が書かれていた。

「出かけてくるわ！」

顔色を変えて、立ち上がった王妃を見て侍女たちは慌てる。

「今からでございますか？」

「ええ、急がなければ。」

そう言って、今にも駆け出そうとする主人に、侍女たちは慌てて言う。

「せめて侍女をお付けください。」

正直、ベアトリーチェさまと会うのに侍女は付けたくなかった。

でも、それよりも今は一刻でもはやくベアトリーチェさまのもとに行きたい。

「では、フラミとカーラをお願いします。」

「は、はい！」

呼ばれた侍女は、部屋を飛び出してしまった王妃に慌ててついていく。

「どこに行かれるのですか？」

「後宮よ。」

（ビーチェさま…。）

深夜の人気の静まった王宮を、レティシアは駆けた。

ベアトリーチェは部屋の中に一人でいた。

結局、カルザス殿下が何を考えているのかもわからなかった。悪い予感はある。でもそれが何なのか、はっきりとした形は見えてない。

首にかけたペンダントがかしゃりと揺れる。その中に写っているアーサーさまの写真。

(大丈夫……。きっと大丈夫よね。。。)

ベアトリーチェは大切な人を想い、憂い、思考の海に陥る。

しかし、それは扉を叩く音で、現実に戻された。

誰かしら、侍女長？それともマルチダ？

そう思い扉を開けたベアトリーチェの目に映ったのは、意外な人物だった。

「大丈夫ですか！？ベアトリーチェさま！」

「え、レティ？？」

そこにいたのは舞踏会でも顔を合わせることがなかったレティシアがそこにいた。心配そうな顔で部屋に入ってくる。

そして部屋を見回して呆然とした顔をする。

「なんですか、この部屋は！？」

冷遇されているとは噂に聞いていた。でも、これほどとは思っていなかった。侍女もいない、家具も衣装もほとんどないこの部屋に、フィラルドでベアトリーチェさまの離宮にはじめて訪れたときを思い出す。

こんなにひどい扱いを受けていたなんて…。

レティシアの連れてきた侍女たちも部屋に入り、わけもわからず部屋を見渡す。

「急にどうしたの？レティ？」

その言葉にレティシアは正気に引き戻される。

「あ、私、マルチダからビーチェさまが大変なことになったって聞いて。でも何故こんな酷い扱いを。アーサーさまひどい…。」

しかしその意識は、現状のベアトリーチェの扱いと行き来して定まらない。

「マルチダから…？どういうこと…？」

そのときハツと気づく。レティシアの後ろに、マルチダがいつの間にか立っていることに。

マルチダは笑みを浮かべていた。いつものような張り付いた笑みじゃない。本当の、本物の笑いを。そしてベアトリーチェは予感した。

「まさか…、狙いはレティだったの？」

「え、ビーチェさま？マルチダ、ビーチェさまが大変なことになってどういうこと？」

ベアトリーチェはレティシアへ捲くし立てるようにいった。

「はやくここから離れて！レティ！はやく！」

「え、どういうことですか…。」

困惑するレティに、マルチダは笑っていった。

「もう、遅いですわ。」

ガチャ

部屋の扉が閉じられる。

「あ、あれはなに！」

薄暗いベアトリーチェの部屋に魔法陣が現れた。そして黒い鎧を着た男たちがその中から出現した。

「いやあっ」

「レティシアさま！」

男たちは逃げる間もなく、その場にいたレティシアたちを拘束した。ベアトリーチェはとっさの判断で、マルチダがいる扉をなんとか抜けようとする。

自分だけでも逃げて、アーサーさまに状況を報告しなければいけ

ない。

しかし後ろから男たちにとらえられ、口元に布を当てられる。睡眠薬が含まれていたのだらう、わずかに息を吸い込んでしまったベアトリーチエは意識を失った。

34・『ひとりのたたかい』

ベアトリーチェが目覚めると、そこは牢屋の中だった。

「おはよう。ビーチェさま。」

体を起こすと、鉄格子の向こうでマルチダがいた。嫌味な笑みを浮かべこちらを見ている。

「……。」

「そう睨まないでよ。」

口を閉ざしマルチダを見返すベアトリーチェにも、マルチダは余裕の表情を浮かべている。

「あなたにいい話を持ってきたのさ。カルザスさまに協力するチャンスを上げようと思ってね。」

「断るわ。」

ベアトリーチェの即断に、マルチダは口角を上げる。

「だろうね。正直、あなたにアーサーへの敵意がないってわかったときは困ったよ。そのかわりにもっといいものがかかってくれたけどね。」

「なんでレティをさらったの？何が目的なの？」

「すべてはカルザスさまが国王になるためさ。」

「どういうこと？」

「あの王妃さまには大層な血が流れているそうじゃないか。だから王妃を手に入れば、カルザスさまが王権を得ることができる。そのために王妃をさらった。」

「そんな……。」

ベアトリーチェはそんな計画が成功するとは思えなかった。でも同時に思う。野心をもつものが夢に溺れるには十分すぎる血の力だったのかもしれない。

(レティ……)

陰謀の材料にされた親友を思いベアトリーチェの心は痛んだ。

「ここは何代前かの王様が、側妃にすらできなかった愛人を囲っていた建物なんだがね。毎日、その女に会いたいがために、王様は後宮とこの建物を繋いじまったのさ。貴重な魔法装置までつき込んでね。」

マルチダはもはやベアトリーチェには何を話しても大丈夫と思っ
ているらしい。その口調は饒舌だった。

「王様が死んじまって建物も閉鎖されて、誰にも忘れられちゃって
ただけど、エラン公爵家にはその情報が残ってたのさ。王妃の誘
拐に利用できると思ったんだけど、転送先につながってたのはあ
んの部屋。だからあんたを懐柔するために、私が送り込まれたんだ
よ。アーサーに冷遇されて恨みをもってるだろうあんたなら、協力
が得られるだろうとおもってね。見込みが違ったけどね。代わりに
食いついたのがなんと王妃だったのさ。滑稽だったよ。まわりから
是最悪の仲だと思われている二人が実は仲良しで、心配のあまりあ
つさり罠に落ちるなんてね。おかげで計画は大成功さ。」

「こんな計画が成功すると思うの。考え直しなさい！」
「こつちに王妃がいる以上、あちらは手出しできないさ。国軍は既
に遠くにいって、王のまわりには近衛騎士団しかない。こつちも
雇った傭兵たちがいる。戦力は互角さ。あいつらは指をくわえてみ
ているしかないんだよ。カルザスさまが新しい国王になれるのさ。
あんたも今から媚をうってみたらどうだい？もっと待遇のいい側妃
ぐらいにはしてもらえるかもよ。」

こんな方法で王権を奪ったとしても、そんな国が認められるはず
がない。それでもマルチダは信じ切っていた。そしてそれはマルチ
ダの後ろにいる王弟と公爵も同じなのだろう。そこには狂気と妄信
があった。

マルチダが去ったあとには、静寂があった。ベアトリーチェの見
張りはいいない。監視する価値すらないと思ったのかもしれない。

幸運だと思った。

レティを助け出さなければならぬ。カルザスたちの計画に成功

することはないだろう。

しかし、それはアーサーさまやレティの安全が保証されていることとはまったく違う。この狂気を止められなければ、この国そのものが大きな傷を負うことになる。

見張りがいない今なら、牢屋から抜け出せば自分にも何かできるかもしれない。

鉄格子は頑丈で、自分の力ではどうにもできない。扉をおしたり引いたりしてみるが、鍵はきっちり締められている。この牢屋には窓も無い。

「無理なの…？いえ、まだよ。」

諦めかけたベアトリーチエだが、首を振る。だめだ、大切な親友の、そして最愛の人の危機なのだ。自分に出来ることなんてたかが知れているとしても、それでも諦めてはいけない。

ベアトリーチエはもう一度、牢屋を一からチェックしはじめた。

ここはずっと前の王が、愛人を閉じ込めるために作ったものだという。何故、牢屋があったり砦のような構造をしているのかはわからない。物騒な時代だったのかもしれない。

しかし、王が作ったというならば、そこに自分が閉じ込められたときの対策などもしているのではないだろうか。

何か仕掛けがないか壁を探っていたベアトリーチエは、壁に薄くほられた紋章を見つけた。

「これは、エルサティーナ王家の紋章。」

それは元は分家であるフィラルドの紋章に似ていた。それを良く見ようと手でこすったとき、その紋章がぼわーっと青白い光を放った。

石造りの壁が割れる。そしてベアトリーチエの前に急な階段があらわれた。

「魔法装置による扉？王家に関わるものを認証にしていたの？」

この建物を作った王は、貴重な転送魔法の装置ですらつき込んだのだ。これぐらいの仕掛けはしていたのかもしれない。そしてフィ

ラルド王家はエルサティーナの分家だ。その血が離れてからは、時間が経っていたが、それでも認証に必要なものが残っていたのかもしれない。

ベアトリーチェは初めてフィラルド王家に生まれたことを感謝した。牢屋の向こうから部屋を見回し、誰もみていないことを確認すると階段を上っていった。

自分ひとりではレティを救出できないかもしれない。その時は、情報を持ち帰ることが何よりアーサーさまの助けになるはずだ。牢屋から見た景色を、ベアトリーチェは頭に刻み込んだ。

階段の先は細い穴になっていた。通気口か何かなのかもしれない。縦長の穴が開いた部分を通ると、下の様子が見えた。建物の廊下を、ガラの悪い傭兵たちがうろついている。

通気口はたくさん枝分かれしている。もしかしたらレティのいる部屋にもつながっているかもしれない。この通路を使えば、レティを助けられるかも。しかし、通気口から床までの距離は高い。一度下りれば、再び上るのは難しいだろう。そうになると、傭兵たちの包囲網を脱出せねばならない。それはベアトリーチェ一人では無理だった。

アーサーさまに知らせて騎士団の人を連れて来よう。そう考えたベアトリーチェは、外にでられる道を探した。途中、レティシア付きの侍女たちが囚われている部屋を見つけたので、そのおおよその配置も記憶した。

やがて出口が見つかった。牢屋と同じく魔法での開く構造になっていたらしい。ベアトリーチェが手を触れるとあっさり開いた。外は鬱蒼とした森がしげっている。すでに真っ暗だ。周りに見張りはいない。ベアトリーチェは出口の場所から飛び降りた。

タンツと小さな音がたった。周りをみまわす。誰かに気付かれた様子はない。

とにかくアーサーさまのもとに急がなければならない。ベアトリーチェは夜の森を王宮に向かって駆け出した。

レティシア王妃殿下がいなくなったことは侍女たちによって王国に知らされた。行先は告げられていなかったが、見張りの兵士たちの証言で後宮にはいったとわかる。

しかし後宮のどこにも王妃の姿は無かった。王宮は大騒ぎになる。王宮中をさがしても、レティシアの姿は無かった。それと同時に気付く。カルザス王弟殿下とクレイドール公爵も姿を消していることに。

混乱する王宮に知らせが届けられたのは、それから一刻ほど経つてからのことだった。

『カルザス殿下は正当なる王位継承権を有し、レティシアさまを妻として迎え真なるエルサティーナの国王となる。アーサー陛下におきましては、潔く王権を移譲するようお願いします。』

招集された重臣会議によって、対策が話し合われた。そして集められた情報により、カルザスたちが先代の王が作った砦に傭兵たちを集め立てこもったことを知る。

近衛騎士団がただちに召集され、砦のまわりに配置された。しかし、王妃が人質として取られている以上、それからは動きようがなかった。

アーサーの近衛騎士団と、カルザスの雇った傭兵たちはそのままにらみ合うことになった。

「まで！怪しいやつだ！」

森を長いこと走っていたベアトリーチェは、いきなり拘束された。

一瞬、傭兵たちに捕まったのかと思ったが、鎧を見て知る。エルサティーナの近衛騎士団だ。良かった、なんとかかなりそうだ。

「待つてください。私は第八妃のベアトリーチェです。」

そう名乗ったベアトリーチェに、騎士たちは驚く。

「なんで第八妃がこんなところにいる。」

「レティシアさまと一緒にさらわれました。なんとか逃げ出すことができませんでした。アーサーさまにお伝えしたいことがあります。どうか、陛下にお目通りさせてください。」

隠し通路の情報を教えれば近衛騎士たちの力で、レティを助けることが出来るはずだ。ベアトリーチェはほっと息をついた。
しかし。

「怪しいぞ。ベアトリーチェといえば、レティシアさまを恨んでいる魔女じゃないか。奴らに協力しているのではないか。」

一人の騎士が言った。

「違います！レティを助けられるかもしれない情報があるんです。

お願いです。アーサーさまの所へ。」

「レティなどと王妃殿下に馴れ馴れしい。やはりアーサー陛下を畏にはめようとしているに違いない。拘束して閉じ込めておこう。」

そんな…。それではレティは助からないではないか。

「お願いです。信じてください。」

ベアトリーチェは必死で訴えた。

「お前のような魔女など、信じられるものか。」

だが、騎士たちの冷たい瞳は変わらない。

ベアトリーチェは俯いた。だめだ…。信じて貰えない…。このままじゃ、レティは囚われたまま、アーサーさまもこの国も大変なことになる。絶望が心を浸食する。でも、諦めてはいけない。絶対に、諦めたりはしない。

「では…。信じなくていいです。」

再び顔を上げたベアトリーチェの瞳には強い光が宿っていた。

「なんだと？」

「信じなくてもいいです。それでも私についてきてください。私はカルザスの手先で、これは畏かもしれません。でも、万に一つ本当

なら、レティシアさまを助けられることができる。私がどんなに怪しくても、騎士の命ひとつで王妃の命を買い取る可能性があるなら安いはずよー！」

ベアトリーチエの放つ強い気配に、騎士たちは気圧される。

「なにを…馬鹿なことを…。」

騎士たちはうめくように呟いた。

「その提案、乗ろう。」

声が聞こえてきたのは、騎士たちの向こうからだった。そこには一人の女騎士が立っていた。

「レイア副隊長！？」

騎士たちは驚いてざわつきだす。

「確かにその女の言うとおりだ。アーサー陛下のもとに連れて行くことは出来ないが、私たち騎士が命を張る分には問題ない。」

「ですが…しかし…。」

「もちろんお前たちがついてくる必要はない。こんな話に乗るのは私一人で充分だ。お前達は戻れ。」

レイアの命令で拘束が解かれ、ベアトリーチエは解放された。騎士たちは帰り、ベアトリーチエとレイアだけが残された。

「ありがとう。」

そう言ったベアトリーチエをレイアは冷たく見返した。抜き放たれた剣が、ベアトリーチエの首筋に触れる。

「お前を信用したわけではない。それでも、レティシアさまを助けられる可能性があるなら、命をかけるのが騎士だ。だが、もしお前の言うことが嘘だったら、この首が胴とつながっているとは思えないよ。」

レイアの言葉に、ベアトリーチエは目をそらさずに答えた。

「ええ、わかったわ。」

たとえ一人でも、信用されなくとも味方ができた。レティを助けられる可能性がなかった。ベアトリーチエはレイアに感謝した。

「私についてきて。」

そう言った走り出した女をレイアは見つめた。ベアトリーチェ、その名前は国王、王妃に並び有名だ。レティシアさまをいじめ、後宮に閉じ込められた魔女。

なのにこの女はいまレティシアさまを救うために力を貸せといった。

砦に近づいてきたので、二人は息をひそめる。暗闇の中、傭兵たちの気配を探り進んでいく。

噂ではとてつもなく醜い女だといわれていた。しかし、実際に目にした女は可愛らしい容姿をした普通の少女だった。その容貌は幼げな雰囲気があるものの、十分美姫と呼ばれるに値する。

何故ついていくことにしたのだろう。レイアは自問自答した。

彼女には疑うべき要素の方が多い。その人物にしても評判にしてもそうだし、レティシアさまやアーサーさまに恨みをもっていると考えた方がいい。レティシアさまが消えたのも後宮だという。カルザスたちに協力していると考えた方が自然だった。

それでも彼女の強い意志を持った瞳。それが自分の心を動かしたのだろうか。

もちろん、今もなおレイアはベアトリーチェを疑っていた。何かおかしい行動をしたら、即座に斬り捨てるつもりでいる。ベアトリーチェの背後を走り、常にその動きを見張った。

しかし、ベアトリーチェはそんなレイアの様子を気にした様子も無く、砦にむかってひたすら走って行く。

「ここよ。」

ベアトリーチェが立ち止った場所は、一面壁になった場所だった。どこにも彼女というような隠し通路があるようには見えない。

「ちょっと待っててね。」

そういつとベアトリーチェは、壁に手をつきくぼみを利用してするすると上って行った。そして壁のある場所に触れると小さな扉が開き、穴の中に入って行く。

こちらに向きを変えて手を差し出す。

「あなたも早く上って。」

レイアは呆気にとられた。砦の構造からして上りやすいように作ってあったのだろう。だが、普通の貴族の令嬢ならば、壁伝いに上ったりしないし、できるはずもない。青いドレスに身を包んだ少女は、傍目から見ればそういう貴族の少女に見える。なのにその手並みはやけに鮮やかだった。

そもそも貴族である少女が、自分が逃げ出せたからといって王妃を助け出そうと戻ったりするだろうか。他の人間に助けを求めた後、安全な場所でふるえているのがせいぜいなのではないだろうか。

噂とは違うベアトリーチェという女の姿。しかし普通の貴族の令嬢として見ても、その行動はあまりにも型破りだった。

「まず、レイアを探して助け出さない」と。

狭い通路を屈みながら進む二人。それを先導するのは、騎士の自分ではなく、ひとりの少女。確かフィラルド王国の姫君だったという話。

レイアが実際目にしたベアトリーチェは、魔女とも、お姫さまとも、まったく違う少女だった。

レイアが部屋に軟禁されてから、何時間経っただろうか。

扱いは酷く丁寧で、乱暴にされることは決してなかった。部屋の内装も、王妃である自分の部屋と同じように整っている。

扉は魔法により閉ざされているが、レイアには開けることができる。エルサティーナで王妃になったときに受けた洗礼のお陰らしい。

ただし扉の前には兵士がいて、逃げることはできない。

レイシアの心を埋め尽くしているのは、ベアトリーチェの心配だった。カルザスたちの目的は自分だったという。その策謀にあっさり騙された自分。そしてその誘拐劇に、あるうことかベアトリーチェさまが巻き込まれてしまった。

なんて自分は愚かだったのだろう。大切な人の傍にいてもらうなら、まずその人間をちゃんと見定めなければならなかったはずなのに。あらわれた希望にすぎるように頼ってしまった。

自分はある人を不幸に追い込んでばかりだ。

レイシアは閉じ込められた部屋で、暗く頭を抱えた。

そのとき、ガチャリと扉が開かれ、一人の男が入ってきた。アーサーさまと同じ髪と瞳を持つ男、カルザスだった。

「ご気分はいかがですか。レイシアさま。」

不気味に笑うカルザスは、レイシアに馴れ馴れしく近づいてきた。

「いったい私をさらって何が目的のですか。」

そう言ったレイシアに、カルザスは答える。

「あなたを妻に迎え、私がエルサティーナの王になるのですよ。」

「そんなことうまく行くと、本気で思ってるのですか…。」

「ええ、もちろんです。あなたは世界でもっとも高貴な血筋を引いている。その血の力があれば、エルサティーナの王権を覆すことができる。クレイドールの工作により、今のエルサティーナには近衛騎士団しかいません。アーサー陛下にはこの状況を打開する手札はありませんよ。それに私には協力者もいる。レイオンの者たちが私が王権を奪回したときには後ろ盾となってくれらると言っていました。」

カルザスは夢中になったように言葉をつづける。

「皆が私の方がアーサーよりも正当なる後継者だと言っている。私の方が、奴よりも高貴な血筋を引いているのだ。なのにあいつはわすればかり先に生まれただけで、王の地位を、すべてを手に入れた。」

だから私はそれを取り戻すのだ！正しきこの国の後継者として！」
カルザスの言葉を聞いて、レティシアは理解した。この男はたばかられたのだ。国の上層にはびこる権謀の亡者どもに。

この男に甘言を吹き込んだものは、彼が一時的に王権を手に入れても協力したりはしないだろう。しらばっくれて、彼の悪行を糾弾し、自らの利益に誘導しようとする。失敗しても隣の大国の足を引っ張れるのだ。彼らには格好の獲物だっただろう。

どう考えてもカルザスの行く先にあるのは多くのものを巻き込んだ破滅だった。

だが、既にその狂気の矢は放たれてしまった。もうカルザスは何を言っても聞きはしないだろう。

「さあ、レティシア、私のものになるのだ。」

そう言つてカルザスはレティシアをベッドに押し倒し、その体に覆いかぶさろうとする。その瞳には自らの考えへの狂信の色が焼き付いている。

自分の血、それはそんなに価値があるものだろうか。大切な人の幸せを奪い、不幸に追い込んだ血。この男を狂気に追い込み、こんな事件を引き起こした血。誰も幸せにできない血。

レティシアの瞳に、カルザスが腰に差した短剣が映る。

そうだ…。死んでしまおう。私が命を断とう。それがいい。それですべてが終わる。この男の愚かな企みも、自分が巻き起こした数々の不幸も、この呪わしき血の運命も。

はじめからそうすれば良かったのだ。そうすればベアトリーチェさまを不幸にすることもなかったのかもしれない。もう遅いのかもしれない。それでもビーチェさまの近くで、生きていたかった。

抵抗しないレティシアに、歓喜の表情でカルザスは体を重ねる。

カチャリ

レティシアの手に、短剣が触れる。

ビーチェさま…。

ビーチェさまの顔が脳裏に浮かぶ…。あの方はやさしいから、私

が死んだから悲しむだろう…。ごめんなさい…。

「私が、私こそがこの国の王だ。」
今だ。

レティシアが短剣を抜こうとした瞬間。

「レティに！なにをするのよ！」

カルザスの体が横に吹き飛んだ。

レイアは仰天した。

通気口を探索し、二人はレティシアの部屋を見つけた。

そこから見えたのは、カルザスに襲われるレティシアさまの姿。

だがレイアはためらった。見張りがどこにいるかもわからない。

部屋の周りの状況もまだわかってない。

それなのに、この少女、ベアトリーチェは、レイアが動く間もなく天井から飛び降り、そのままの勢いでカルザスを蹴り飛ばしたのだった。

自分の手に触れていた短剣の感触が消え、カルザスの重みが消えた。

だが、レティシアはそんなことどうでも良くなっていた。今自分の目に映る光景を、まぼろしでもみるかのように見つめる。

揺れる蜂蜜いろの柔らかい髪、小柄でそれでも生命にあふれた肢体、可愛らしく整った横顔は今ほ眉をつりあげ怒りの表情で満たされている。

「ビーチェさま…?」

琥珀色の美しい瞳がこちらを向く。

「レティ、大丈夫？けがはない？」

ぺたぺたぺた、と自分の体を心配そうにさわる。

それでも、レイシアは自分が見ているものが現実なのか信じられなかった。

「ビーチェさまなのですか…?」

「うん、そうよ。」

吹き飛ばされたカルザスはせき込みながら立ち上がる。

「ベアトリーチェか!? 貴様なぜここにいる。」

腰の剣に手をかけベアトリーチェに斬りかかるようにするが、その前にレイアがおりてきて剣を抜く。

「カルザス、覚悟!」

レイアの一閃が、カルザスの剣を弾き飛ばす。

「くっ」

カルザスは慌てて踵を返し、扉に逃げる。その背中をレイアの剣がかすめた。

「カルザスさま!」

開いた扉から見張りの戦士が飛び込んできたが、レイアによりすぐさま倒された。しかしカルザスの姿は、その時には既に無かった。

「ちっ、逃したか…。」

千載一遇のチャンスを逸し、レイアは舌打ちした。

一方、部屋では二人の少女が向き合っていた。

「ベアトリーチェさま…。何故ここに…。」

「なんとか逃げ出せたの。だからレイアを助けにいかなきゃと思つて。」

「っ!?!」

ベアトリーチェの言葉にレイシアは絶句した。

「何故、そのまま逃げてくださらなかつたのですか! 何故私など助けに来たのですか!」

レイシアの言葉はこのうえない本心だった。自分など助けに必要など無かつたはずだ。ベアトリーチェさまを不幸にするしかないそんな存在など、見捨ててくれればよかつたのだ。それをわざ

わざ危険まで犯して。

それなのにベアトリーチェさまは優しく笑って首を振る。

「レティは親友だもの。置いてなんていけないよ。」

そしてそつと抱き着いて言った。

「ごめんね、レティ。不安にさせちゃって。無事で良かった。」

暖かい温もりが、その胸から伝わってくる。レティシアは、自分の体が心が、恐怖で嫌悪で冷えきっていたことをそのとき自覚する。目じりに自然と涙があふれた。

体を離しベアトリーチェは、座り込んだままのレティシアに手を差し出した。

そうだ。いつもこの人は、自分が窮地に陥ったとき、絶望の暗闇におちたとき、その闇から引き上げてくれる。その小さな手で。

「行こう、レティ。」

そして微笑むのだ。いつだって、その優しい笑顔で。

36・『そのかたち』

クレイドール公爵は、砦の中の部屋で酒を飲んでいた。

国軍を引き離すことにも、レティシアをさらうことにも成功した。計画は順調だ。

カルザスが国王になれば、それを支援したクレイドールの地位も限りなくあがる。3大公爵家でも飛びぬけた権勢を誇るようになるだろう。いや、この祭だ大公と名乗るのも悪くない。

クレイドールがカルザスが王になったときの皮算用をしていると、扉がいきなり開かれすさまじい形相をしたカルザスが飛び込んできた。

「クレイドール！ いったい何をしている！」

「で、殿下、一体どうされたのですか。」

鬼気迫る様子のクレイドールは驚いて立ち上がった。

「ベアトリーチェが脱走し、レティシアをつれて逃走した。王妃以外の処置はお前にまかせたはずだ。」

「ベアトリーチェが脱走ですと！？ マルチダということだ！」

「今確認に向かいます。」

控えていたマルチダが青い顔をして部屋を飛び出していく。

「全軍を使って、奴らを追いましょう。」

「いや、万一ということがある。傭兵たちには砦の周りを固めさせる。出口には念入りに兵を置け。その方が確実だ。」

「りよ、了解しました。」

クレイドールは慌てた様子で、カルザスの言うとおりに兵士たちに指示を出した。

レティシアと一緒に連れ去られたフラウとカーラは閉じ込められ

た部屋の中で震えていた。

「どうしよう…。レティシアさまが…。」

「どうしようっていつても。私たちじゃどうにもできないよ。」

二人が閉じ込められた部屋は、牢獄ではないが外から監視できるように窓がつけられていた。外では兵士たちが見張りをしている。

「私たちどうなっちゃうんだろう…。」

「大丈夫よ。きっとアーサーさまが助けにきてくださるわ。」

震えるフラウを、気丈な様子でカーラが慰める。でも、カーラの手も震えを止めることはできなかった。平和なエルサティーナで暮らしてきた少女たちにとって、王妃と一緒にさらわれるという大事件に巻き込まれたことは、大きなショックと恐怖を与えていた。

二人の少女がお互い抱締めあいながら、窓を見た時。

ゴスツ、ザシユツ

ほぼ同時に二つの音が響き、兵士が崩れ落ちた。

「確かここにいるはずよ。」

バタンツと扉が開かれる。

目を見開いた二人の前に現れたのは、蜂蜜色の髪の少女。

「べ、ベアトリーチェ…?」

それは一緒にさらわれ、別の場所に閉じ込められたはずの第八妃の姿だった。舞踏会で見かけた青いドレスのまま、手には何故か剣の鞘らしきものをもっている。

「無事ですか?」

ベアトリーチェの後ろから、王宮で見かけたことがある女騎士が入ってきた。

「うん、大丈夫みたい。レティ、来て大丈夫よ。」

「フラウ！カーラ！良かった。」

ベアトリーチェに呼び掛けられ、後ろから現れたのは誰であろう心配してた王妃であった。フラウとカーラは目の前の光景に混乱する。

助けがくるのは期待していた。でも、現れたのは女騎士はともか

くとして、もう一人は魔女と呼ばれレティシアさまに反心があると
いわれるベアトリーチェだ。

倒れた兵士を見ると、外傷はない。殴打によって気絶させられて
いることがわかる。ベアトリーチェの手に握られた鞘をもう一度見
る。もしかしてあれで殴つたのだろうか。

「ビーチェさま、無茶すぎです！」

そんな二人の前で、また驚くべき光景が繰り広げられる。眉尻を
さげて、ベアトリーチェを心配そうに抗議するレティシアさま。し
かも、ビーチェさまと呼んだ。

それにベアトリーチェは笑って答える。

「大丈夫よ。部屋の方に意識がいつていたもの。隙をついたから、
1撃で倒せばなんてことないわ。それにレイアもいたし。」

「それでも、普通の人ならいきなりできることではありませんがね。」

レイアと呼ばれた女騎士は呆れたように溜息をつく。

「ゆっくりしてる暇はないわ。あなたたちも行きましょう。」

「は、はい……。」

蜂蜜色の髪を揺らし、琥珀色の瞳でやさしげに笑うベアトリーチ
ェに、二人は思わず答える。

レイアが部屋の外を見回し、合図してみんなで外にでる。足音を
ひそめながらも走るベアトリーチェたちに、なるべくついていく。

何度か接触する兵士を倒し、廊下を進んでいく。ほとんどはレイ
アが倒してしまつたが、うちもらした敵をベアトリーチェが鞘を使
い気絶させていく。その姿は素人とは思えず呆気にとられるしかな
かつた。

「レティ、大丈夫？まだ走れる？」

レティシアさまにそう語りかけるベアトリーチェに驚く。

「はい、大丈夫です。」

そしてレティシアさまが笑顔で返事をしたことにさらに驚く。

その笑顔は、王宮で見たどんな表情よりも嬉しそうだった。敵に

さらわれ、まだかこまれている最中なのに、安心したような顔をしている。

「あなたたちも大丈夫？」

そう声をかけられ、フラウとカーラはぎょっとしながらも答える。「だ、大丈夫です。」

思い出す。レティシアさまがいつもベアトリーチェさまはそんな方ではないと噂に対して言っていたことを。私たちまわりの人間はそれを、レティシアさまの優しさゆえにでた言葉だと思った。自分をいじめた相手すら、憐れみを与えるレティシアさまの深い優しさに感激した。

でも、それは違ったのかもしれない。

ふと気づくと、レティシアさまは悲しい表情をしているときがあった。それはアーサーさまを思う故だと、城のものたちは噂しあったものだ。でも、今、ベアトリーチェの隣にいるレティシアさまに、悲しみの色はまったく見えない。

本当に、レティシアさまの言った通り、ベアトリーチェとレティシアさまは仲が良かったのかもしれない。こんな恐ろしい敵中ですから、微笑みあえるほどに。

「カルザスたちはどうやら砦の周囲に、兵士を配したようです。ベアトリーチェさまが使った隠し通路は使えませんか。」

一旦みんなで適当な部屋に隠れ、偵察から戻ってきたレイアが告げる。

「牢獄以外からは天井が高すぎて、登れないと思うわ。牢獄は錠が掛けられてたから、中には入れないと思う。それに隠し通路を抜けても、兵士たちの網を突破しなきゃいけない。」

「そうですね。仕方ありません。私が道を切り開くしかありませんね。出来うる限りの敵を引き付けるので、なんとかお逃げください。」

レイアの握る剣に力がこもる。

「いえ、奥に行きましょう。」

「え？ビーチェさま？」

3人はベアトリーチェの言葉の意味がわからず、思わず聞き返す。「私たちがさらわれたとき、部屋にいきなり兵士たちがあらわれたのを覚えてる？この砦には後宮とつながる転送装置があるはず。隠し通路を通っていた時、警備の兵士が多く立っている部屋を見つけたの。きっとそこにあるはず。そこを目指しましょう。」

「はい。」

レティシアは一も二もなく同意した。

「わかりました。」

レイアも頷いた。あれだけの傭兵を相手に、レティシアさまだけでも逃がせるかといったら難しかった。それならこの少女の考えに賭けてみようとおもった。

「あなたたちもそれでいい？」

こちらを見たベアトリーチェに、フラウとカーラもベアトリーチェについていくことにした。

砦の周りを傭兵で囲み、直接の配下の兵士たちでベアトリーチェたちの捜索を行っていた。護衛の女騎士は相当腕が立つらしく、何人かの兵士がやられてしまっていた。

「くそ、まだ奴らを捕らえられんのか。」

カルザスは苛立ちに、床を蹴り毒づく。

「まあまあ、どうせ奴らは袋のネズミです。まもなく捕らえられるでしょう。」

それをクレイドルが宥める。

兵士たちが戻ってきて、ベアトリーチェたちは砦の奥へ向かったと報告した。

「奥だと……。どういうことだ。」

「どうやら魔法装置の場所を感じていたようですね。しかし、あれに

は細工がしてあります。王妃を脱出させることはできませんよ。」
「そうだな。奴らをあそこに追い詰めれば少なくとも、レティシアだけは手に入れられる。」

クレイドールとカルザスはにやりと笑った。

「カルザスさま！」

その時、牢獄を調べに行かせたマルチダが戻ってきた。

「マルチダか。何故、ベアトリーチェは逃げ出した。」

「それが、牢獄に隠し通路があったらしく。」

「なんだと、あの牢獄は兵士たちに調べさせたはずだ。」

「それが…。魔法による認証を使った扉を使ったものだったようです。」

「なんだと!? あれは王家のもの以外使えないはずだぞ。」

「ベアトリーチェはエルサティーナの分家、フィラルド王家の血のもので。もしかしたら、それで認証しているのかもしれない。」

マルチダの報告を聞いて、カルザスは真っ青になる。

「しまった。レティシアに逃げられる。全員で追っぞ。」

「ど、どういうことですか。」

状況を把握しきれないクレイドールに、カルザスがどなりつける。

「ベアトリーチェでもこの誓の魔法が発動するのだ。奴がもしレティシアを逃がそうしたら…。」

カルザスの言葉を聞くうちにクレイドールの顔も真っ青になる。

「いそげ! 全兵士に告げ! 転送の間へ急げと!」

カルザスの号令で、兵士たちはベアトリーチェを追いかけはじめた。

ベアトリーチェたちは、魔法装置がある間へと向かう。

先頭を走るのはベアトリーチェだ。それにほぼ並走するようにレイアが走る。レイシアはその後ろを走り、フラウとカーラがそれについていく。

「あそこよ。」

ベアトリーチェの差した先に、8人ほどの黒い鎧を着た兵士たちが立つ扉が見える。

「あれはレイシアさまと侵入者だ。捕まえろ！」

あちらもベアトリーチェたちに気付いたらしい、指を差してこちらへと向かってくる。

「下がっててください。」

レイアがベアトリーチェを手で制し先行する。

敵は三人、レイアへと向かってくる。

邂逅。

白刃が舞い三人の兵士たちが地に倒れ伏す。

「なっ……。」

その後ろいた兵士が、レイアの腕前に一瞬、たたらを踏む。その隙を見逃さず、懐に入り斬り付けた。

「ぎゃあっ！」

あと4人。レイアは剣を構えなおした。

相手はレイアの腕前に警戒しているらしい。剣を構えたまま、動かない。

(まづい……。)

時間がかかれば、カルザスたちの追手が来る可能性がある。

しかし、レイアの腕でも、隙をつかなければ1対多ではリスクが大きい。それでも、にらみ合いをこれ以上続けるのはまづい。飛び込もう。

そう。レイアが決めた時。

自分の背後から、姿勢を低くしてベアトリーチェが飛び出した。レイアに意識を集中していた兵士たちは、突然少女が飛び出してきたことに驚く。

「えい！」

自分が渡した鞘を下から振り上げ、兵士の顎を叩く。

「ぐはっ。」

兵士が一人気絶する。

「き、きさまあ！」

残った兵士たちはいきなり飛び出したベアトリーチェに、剣を振りかぶる。

「くっ！」

レイアは全速力で距離を詰め、三人を一太刀で斬った。ベアトリーチェに向かった剣が、逸れ床を叩く。ベアトリーチェは傷一つなかった。

その姿にレイアは安堵したが、やがて怒りがこみ上げる。

「下がっててくださいと言ったではないですか！」

「えっ、レティたちに言っただんじやなかったの？」

ベアトリーチェは目を丸くして驚いた後、レイアの様子を見て申しあけなさそうな顔をして言った。

「えっと…。ごめんなさい…」

レイアは上目づかいに見つめられ、溜息をつくしかなかった。

「まあ、いいです…。」

「良かった。それじゃあ、部屋に入りましょう。追手が来る前に脱出しないと。」

ベアトリーチェはすぐに部屋の方に向き直り、扉の中に入ってしまった。横を向くと、レティシアさまが少し泣きそうな顔でその背中を見ていた。

部屋の中には、2メートルぐらいの大きな魔法陣とがあった。

「たぶん、これだわ。」

ベアトリーチェは魔法陣の模様を見て後宮から連れ去られたときと同じものだと思い出す。

魔法装置はアラスト聖国時代の遺産だ。そのほとんどが、現代の技術では製造できない。魔術師たちにできるのは調整がほとんどであり、製造できるものは一握り。しかも大したものには作れない。転送の魔法装置といえば、遺産の中でも大変貴重なものになる。

「これで後宮まで移動できるんですね。」

カーラが嬉しそうに言う。

「でも、どうやって動かすんでしょうか。」

フラウはまだ少し不安そうな表情だ。

魔法陣は地面に描かれたまま、光を失っている。

「魔力が流れてないみたい。」

ベアトリーチェは魔笛を吹けると同じで、魔力の流れを感じることが出来る。扉の時と同じように魔法陣に触れてみたが、魔力を感じることはできない。

「どこかにスイッチがあるのかも。」

「スイッチですか…。」

4人は部屋を見回した。

「あ、ビーチエさま！あつたかもしれない！」

レイシアが声を上げて、ベアトリーチェに知らせる。その目の先には、エルサティーナの王家の紋章が掘られた金の鎖があった。

レイシアはそれを握ろうとする。

「待って、罠があるかもしれないわ。」

ベアトリーチェは静止するが、既にレイシアの手は鎖を握っていた。次の瞬間、ぼわっと光が生じレイシアの周りを四方に覆う。

「えっ、え!?!」

「レイイ!」

「レティシアさまあ！」

ベアトリーチエたちが悲鳴を上げる。しかし、それ以上は何も起こらなかつた。

「ベアトリーチエさま、魔法陣が。」

見ると、さつきまで何も反応のなかつた魔法陣が光を放っている。ベアトリーチエは魔力の流れを感じた。スイッチはこれで良かったのだろう。

しかし…。

「レティ、出てこられる？」

「無理みたいです…。」

壁はレティを傷つけないが、出してもくれない。これでは脱出できない。

「鎖を離してみて。」

「はい。」

レティシアが鎖を放つと光の壁が消えた。しかし、魔法陣の光も消える。

「これは…。」

「レティシアさまが魔法装置をつかって逃げられないように、仕掛けを作っていたのか。」

「うそっ…。せつかくここまでできたのに…。」

レイアたちは沈黙する。

これではレティシアさまを連れて脱出できない…。追いかけていた希望が失われたことに、レイアは歯をかみしめ、フラウたちは俯く。

「大丈夫よ。私が触れても魔法装置は発動するはず。」

そう言うとベアトリーチエは、レティシアの手から鎖を取った。そして握る。ベアトリーチエの周りを光の壁が覆い、魔法陣が魔力を取り戻す。

「ほらっ、これで逃げられる。はやくみんな乗って。」

レティシアはそれを見て顔色を変えて言った。

「それではビーチェさまが逃げられないじゃないですか！」

「私は残るわ。」

ベアトリーチェは静かに答えた。

「そんな！」

「そんなの駄目です！」

レイアたちの声を塞ぐように、レイシアは叫ぶ。

「私が残ります！私が残ればビーチェさまたちは脱出できます！」

「レイ、あなたはこの国の王妃なのよ。」

ベアトリーチェの声はゆるぎない。

「敵の狙いはあなたなの。あなたが脱出しなければ意味がないの。」

「いやです！別の方法を探しましょう！一緒に逃げましょう！」

「あなたがカルザスに捕まれば、この国に大きな危機が訪れる。争いが起こり、たくさんの国民が巻き込まれる。あなたはそれを防がなきゃいけない。お願い、魔法装置を使って逃げて。」

「ビーチェさまを残していくなんていやです！そんなのいやです！」

いつもはベアトリーチェの言うことを聞いてくれるレイシア。

しかし、この時ばかりは、言うことを聞こうとしなかった。

ベアトリーチェはその姿を見て、厳しく叱りつけるように言った。

「レイ、あなたは望むとも望まぬとも王妃なのよ！この国に暮らす人たちを守らないといけない！そのためにも、あなたの身を守らないといけない！あなたにはその義務があるわ！」

そして沈黙するレイシアに、優しげに微笑んだ。

「レイ、私、嬉しかったよ。レイが王妃として活躍している噂を聞いて。素晴らしい王妃としてみんなに愛されると聞いて。私の友達のレイは、こんなにも素晴らしいんだって。誇らしくて、自慢で。レイ、あなたはこの国で必要とされているの。城にはあなたの帰りを待つ人がいっぱいいる。あなたはその人たちの元に帰らなきゃならない。お願い、レイ、逃げて。」

レイシアはベアトリーチェの微笑みを見て口を閉じていた。しかしまた首を振る。

「いやです。絶対に嫌です。」

目に涙を浮かべ、駄々っ子のようにしぐさで何度も首を振った。その姿を、ベアトリーチエは困ったような、それでも愛おしそうに見つめる。そして瞳を閉じ、ひとつ息を吸い込む。

そして目を開き、強い声で言った。

「レイアさん、レティを連れて行って。」

「えっ、なにを。」

「レティを拘束して、魔法陣の中へ。後宮に飛ばすわ。」

「ビーチエさま!?!」

レティシアが悲鳴のような声をあげる。

レイアは二人の会話を、茫然として眺めていたが、ベアトリーチエの言葉に意識を取り戻して言った。

「私も残ります。そうすれば逃げられるかもしれません。助けがくるまでの時間稼ぎになります。」

「だめよ。」

しかし、ベアトリーチエの返答は早かった。

「敵が後宮にいないとは限らないわ。あなたは近衛騎士、王妃を守る義務があるわ。あなたの使命はレティを安全なところまで送り届けることのはずよ。」

「はい…。」

ベアトリーチエの言葉に、レイアは反論できなかった。

「レティシアさま、行きましょう。」

レティシアの肩を掴んでいった。

「いやです!」

しかし、レティシアはベアトリーチエの傍を離れようとしなない。

ベアトリーチエは、フラウとカーラの方にも向き言った。

「あなたたちも手伝って。レティを魔法陣の中心へ。」

「は、はい…。」

二人の侍女は青い顔をしながらも、レティシアの体にしがみついで、その体を魔法陣の中心へと引きずる。

「いや！いやあ！」

レティシアは泣きながら、暴れて逃げ出そうとする。しかし、三人に拘束されその体はじよじよに魔法陣へと向かう。

「離して！私もここに残る！」

レイアは暴れる王妃を引きずりながら、ベアトリーチェの方を向き言った。

「必ず助けに戻ります。」

「ありがとう。」

ベアトリーチェは安心させるように微笑んでお礼を言った。

「いやです！ビーチェさま！」

レティシアの手が、ベアトリーチェを追い求めるように宙に揺れる。

「離して！離してよ！わたしが、私が王妃になったのは、こんなことのためじゃない！ビーチェさまをつ……！」

泣き叫ぶレティシアの声は、うまく最後まで言葉にならなかった。レティシアの体が魔法陣の中に入った。ベアトリーチェは鎖を強く握り締め、最後の微笑みを浮かべる。

「レティ、元気だね。」

「いや、いやああああああ」

レティシアの悲鳴は途中で途切れた。

発光する魔法陣は、一際大きな光を放ったあと、その力を失った。その円の痕には誰もいない。

今だ耳にこだまする、レティシアの叫び。

ただ一人残された皆で、ベアトリーチェはほっと息を吐いた。

次の瞬間、立っていたのは、さらわれた後宮の部屋だった。

フラウとカーラは、王妃を見る。

「ビーチエさま、ビーチエさまああ。」

迷子の子供のように、泣きじゃくるレティシアさま。優しく凛々しく優秀だと評判される王妃のその姿は、王宮の誰もが見たことないものだった。

「レティシアさま！」

レイアは不敬だと承知しながらも、王妃の顔をあげ両手であげさせ、瞳をあわせた。

「ベアトリーチェさまはまだ生きてます！助けを呼びカルザたちを倒せば、救出することができますかもしれない！それにはあなたを、安全な場所まで送り届けなければいけません。あなたが早く避難すれば、それだけベアトリーチェさまを救える可能性が増えます。」

「ビーチエさまが、助かる……。」

涙で濡れた顔で、王妃はレイアを見つめた。

「はい。」

レイアは強く頷き返す。

ぐしっと、レティシアは涙を拭くと、泣くのを堪えるように立ち上がった。

「行きましょう。」

こくと頷く王妃は、レイアについて王宮の方へと向かう。時折ふらつくレティシアの体をフラウとカーラが支える。

レイアも、フラウも、カーラも、身を犠牲にして自分たちを助けてくれたあの少女に、助かってほしいと願っていた。

アーサーたちは近衛騎士団たちを連れ、砦から3キロほど離れたところに展開していた。

緊急事態とあって、その隣には宰相のカイト、騎士団長のグノイが控えている。

王妃が人質にとられている以上、アーサーたちの側からはむやみに手出しはできなかった。戦況は膠着していた。

アーサーたちの陣地に、驚くべき知らせが届けられたのは、カルザスたちが雇った傭兵たちとにらみ合って、6時間ほど経ったころだった。

「レテイシアさまが救出されただっ…？」

突然の報告に、冷静なカイトが驚きの声を上げる。

「それは本当なのか？」

報告に来たのは、部下の騎士から連絡を受けたという位の高い騎士だった。

「は、はい。城に残した騎士たちもたしかに確認したと言っております。」

「それは朗報だ。」

グノイも頷く。

「砦に潜入できた騎士がいます、レテイシアさまを助け出して脱出したそうでございます。」

「その騎士には褒章を授けよう。」

アーサーの言葉に、報告しに来た騎士は跪きながら言葉をつづける。

「それと…。」

「なんだ？」

報告する騎士の顔は戸惑った様子だった。

「ベアトリーチェ…さまが、敵に囚われたようでございます。」

「ベアトリーチェだと！」

がばつと立ち上がったのは、アーサーだった。いつにない感情を

乱した様子に、一同が驚く。

「何故ベアトリーチェが！」

「は、はい。脱出するとき、一人だけ取り残されたようでございます。」

アーサーは椅子に座り込んだ。

ベアトリーチェが囚われただと……。どうしてそんなことに……。巻き込まれてしまったのか。

思考の渦に陥りそうになる。しかし、それを振り払った。剣を抜き放ち、側近に告げる。

「今からカルザスたちの砦を攻めるぞ。準備をさせる。」

助け出さなければいけない。一刻も早く。

「お待ちください。」

しかし、冷静な声がそれを遮った。カイトだ。

「なんだ。」

「城に戻りましょう。レティシアさまを失った以上、カルザスには陛下を殺すか、レティシアさまを再びさらうしか方法がありません。敵は傭兵といえど、人数は互角、万一ということがあります。そんな中、レティシアさまと、アーサーさまが分散しては守りにくい。城に戻って、防護を完璧とし、国軍が戻るのを待ちましょう。カルザスの討伐は国軍が合流してからすべきです。」

その声はどこまでも平静だった。

「ベアトリーチェはどうなる！」

「彼女は、側妃です。王妃と陛下の安全には代えられません。それも、最下位の第八妃。民たちの人気も無く、祖国から見捨てられている。見捨てても何も問題はおきません。危険を犯してまで、助ける必要はありません。」

「……………」

アーサーは黙りこくった。

王として行動しながら、自らの勝手に彼女を閉じ込めていたつけが今、回ってきていた。

「命令だ。カルザスたちへ近衛騎士団を向かわせる。」

「出来ません。王命を無視してでも、陛下をお守りするのが側近の役目です。」

カイトは首を縦に振ろうとはしない。グノイーも、無言だが同じようだった。

「わかった…。」

王がそう言い、カイトは安堵した。

「私ひとりで皆へ向かう！」

次の瞬間、アーサーは自らの馬へと駆け出し、飛び乗った。

ベア…、頼む、無事でいてくれ。

カイトは目を見開いたが、すぐにグノイーの方へ向く。

グノイーはそれより早く、馬に飛び乗り陛下を追う。

「何をしても構わん！陛下をお止しろ！」

若くして騎士団長となつたグノイーは、馬術においても優れていた。やがて、アーサーの乗る馬に追いつく。

「邪魔をするな！グノイー！」

「陛下、ご無礼を！」

グノイーの拳が、アーサーの鳩尾にめり込む。手加減は一切しなかった。

大きな衝撃に、意識がうすらいでいく。

(ベア…。)

愛しい少女の影が、消えゆく意識の中で浮かんだ。

レイアはレティシアを、城に残った近衛騎士たちのもとへ送り届けた後、すぐさま馬を走らせ陛下たちがいる陣地へと向かった。

はやくベアトリーチェさまの救出を。考えるのはそれだけだった。

陛下に直接報告することは許されなかったが、伝令につたえることはできた。

レイアは自分の部隊の陣地に戻ると、戦いの準備をはじめた。必ず、ベアトリーチェさまを助けて見せる。

万全を期し剣を研ぐ。はやる気持ちで出陣の命令を待ちわびた。周りの騎士たちが、野営陣地を片付けはじめたのは、レイアが戻って半刻ほど経った頃だった。

「な、何をしているんだ？」

レイアは戸惑い、周りの騎士に聞く。

「城へ戻るそうだ。レティシアさまが助かったからな。本当にお手柄だったな。うらやましいぜ。」

男の騎士は笑いながら答える。

「なんだと！？ベアトリーチェさまはどうなる！」

レイアはその言葉に叫び返す。

「第八妃だろ。助ける必要なんかないだろう。むしろ囚われたままのほうがいいが、みんな喜ぶんじゃないか？」

「なっ……。」

レイアは騎士のあまりの言い草に言葉を詰まらせた。しかし、同時に思い出す。以前までは自分も同じように思っていたことに。

「レイア、良くやったぞ。」

横から話しかけてきたのは、所属する騎士団の隊長だった。騎士といいながらも、出世と金勘定ばかり考える男で、レイアとは馬が合わなかった。しかしいつになく上機嫌に、隊長はレイアに話しかける。

「レティシアさまを助け出したとなれば、我が隊の名誉も鰻登りだ。この隊ごと褒章がもらえるかもしれん。がっはっは。」

この男の勝手な皮算用など聞いていられなかった。

「隊長、私は失礼します。」

「むっ、どうしたのだ？」

「ベアトリーチェさまを救出に行かなければなりません。」

「そんな命令は出ていないぞ。それに騎士団は撤退する。」

「関係ありません。」

隊長に一言だけ報告して、武器を置いたテントへと向かう。たとえ一人でも、この命にかけて、あの人を助ける。

準備を終えテントを出たところで、後ろから拘束される。

「なにをするつもりだ。お前たち！」

拘束したのは同じ隊の騎士たちだった。目の前にはにやにやと笑う、隊長がいた。

「どういつもりですか。隊長。」

隊長は馬が合わないこともあって、単独行動をするレイアを止めたことなど今まで一度もなかった。何故、こんな時に限って…。

「お前は国の英雄なのだ。死なせたらは我が隊の責任になりかねん。それは困るのだよ」

俗物が…。苛立ちに歯ぎしりする。

「離してください。私が英雄というなら、ベアトリーチェさまも英雄です。助け出さなければなりません。」

「あれは、性の悪い魔女だ。レイシアを助けたなど誰も信じん。実際、私も信じていないしな。大方、計画の途中で怖気づいて、カルザスたちを裏切ったというところだろう。魔女にはふさわしい末路だな。」

隊長の言い草に、頭の血が沸騰しそうになる。以前は、自分もそう思っていたのに、ベアトリーチェさまを無責任に罵る言葉が、誰かの口を出るたび怒りに我を忘れそうになる。

「あの方はそんな方ではない！」

「ふん、魔女の魔法で洗脳されたのではないか？いいから大人しく戻れ、単独行動は今後許さんぞ。」

「離せ！」

思いつきり体を動かし、拘束を抜ける。手が動き、隊長の頬を殴ったが気にしなかった。

「き、きさま！おい、全員でそいつを捕らえろ！手荒にしてもかまわん！ただし顔だけは傷つけるなよ！」

「は、はい！」

戸惑いながらも、周りの騎士たちは命令に従う。

「きさまら！離せ！」

多勢に無勢で、最初の拘束時、武器を取られていたこともあり、レイアは再び捕まってしまう。

「営倉にぶちこんでおけ！」

レイアはそのまま頑丈な檻の中にいれられる。

「だせ！ここからだせ！」

「しばらく大人しくしている。勲章の授与式までには出してやろう。」

「

隊長はそう言って去っていく。馬車とつながれた営倉は、そのまま城まで向かう。

「ここから私を出してくれ！頼む！」

レイアは鉄の格子を殴りつけた、手がやぶけ血で滲んでいく。

「ベアトリーチェさまと約束したんだ！必ず助けると。」

声は大きく、絶叫していた。

「あの人がいなければ、レイシアさまを助けることはできなかつた！あの人が勇気を出して皆から抜け出し、助けを求めてくれたからこそ、レイシアさまを救い出せたんだ！」

手の皮が破け、血が飛び散る。それでも鉄の格子は開きはしない。

「レイシアさまを助けられなければ、この国も国王も大変なことになっていた。あの人はそれを救ってくれたんだ！」

レイシアさまを人質に取られたまま、事態が膠着すれば他国につけこまれ国は荒れて行つただろう。もし間違つてレイシアさまが殺められたりすれば、エルサティーナは各国の大きな非難にさらされ、国力を衰退させただろう。深刻な国の危機だった。

それをベアトリーチェさまは一人で救い出したのだ。

「私もあの人に助けられたんだ！」

そう、自分もあの人に助けられたのだ。

あの状況で後宮に兵士がいる可能性なんてほとんど無かつた。それでもあの人は、自分を城に戻す理由を言った。戦闘力のある私が、

あの状況では一番命の危険があつたから。

彼女を信じず、自分ひとりしかついでこなかった私。そんな私ですら、思いやつてくれた。自らの命の危険をかえりみずに。

「私は英雄なんかじゃない！あの人こそ真の英雄なんだ！」

声は叫び枯れ果てる。それでも、レイアは叫ぶ。

「頼む、ベアトリーチェさまを助けなければならぬんだ！ここから私をだしてくれ！」

だが、その声を聞くこととする者はいない。その言葉を信じるようとする者はいない。

魔女の噂が、全ての思いを阻み、レイアの叫びは虚空にだけ響き続けた。

そして近衛騎士たちは、全て撤退した。
もう、助けは来ない。

カルザスは茫然と、部屋の中を見つめた。

王宮へとつながる転送装置のあった間、そこはぼろぼろになっていた。地面に刻まれた魔法陣は、ところどころ傷つけられ形を失っている。

古き時代より引き継がれた貴重な魔法装置は、その力を失っていた。

一度は攫うことに成功したはずのレティシアの姿は当然のごとくない。

「ばかな…。私の計画が…。私の王になる運命が…。」

その横を素早く、ひとつの影が走り抜けていった。蜂蜜色の髪、茶色の瞳の、一見普通の女。しかし、自分の計画を狂わせすべて台無しにした女。

兵士たちも部屋の中を見ていたせい、反応が遅れた。その際に少女は、通路の向こうへ駆け出していた。

「ベアトリーチェ！奴を逃すな！必ず捕まえて私の元へ連れてこい！」

カルザスは叫んだ。

皆にひとり残されたベアトリーチェは、自分に何ができるかを考えた。

見つけたのは後宮へ飛んだ4人がいた場所に残された一振りの剣。きつとレイアが残してくれたものだろう。

ベアトリーチェはそれで転送装置を破壊することにした。これをこのままにしておけば、後宮に兵士が侵入して、命を失う人がいるかもしれない。

ベアトリーチエは魔法陣に剣を叩きつけた。何度も何度も繰り返す。魔法陣が刻まれた床は固く、剣は歯がこぼれ、手からは血が滲んだ。

それでも今できることをしようと、ベアトリーチエは何度も剣を振るった。

そしてカルザスが来るまでになんとか魔法装置を破壊し終えたベアトリーチエは部屋の、死角に隠れ茫然とする兵士たちの隙をついて逃げ出した。

ベアトリーチエは逃げまわった。少しでも助けが来るまで時間を稼ごうと。兵士たちの間をすり抜け、隠れ、抵抗し。復讐心かられたカルザスの生け捕りにしろという命令が、ベアトリーチエにとつて幸いだった。

力の限り、体力のある限り、逃げ続けた。

しかしそれでも逃げ切れなかった。追い詰められたベアトリーチエは、遂に捕まりカルザスの元へ連行された。

捕らえられ連れてきた先、目の前にはカルザスと顔を青くしたクレイドールがいた。

「このガキが！」

ベアトリーチエを見て、クレイドールはすぐさま拳を振り上げベアトリーチエの頬を打つ。鈍い音が響き、鼻腔に血の匂いが漂う。それでもベアトリーチエは表情を崩さなかった。

クレイドールはまたベアトリーチエを殴りつけようとしたが、それをカルザスは止めた。

「まあ、待て。」

カルザスは表情を変えないベアトリーチエを見る。

「この期に及んで命乞いをしないとは大した度胸だな。」

カルザスの瞳には怒りが灯っていたものの、冷静さを保とうとす

る王族のプライドと、追い詰めたものを嗜虐しようとする愉悦が見えた。

「……………」

ベアトリーチエは沈黙で答える。その表情を見て、カルザスは含み笑いを浮かべる。

「もしかして、助けが来ると思っているのか？」

その声には相手を見下すような憐れみが織り交ざっている。

「近衛騎士団は撤退したぞ。お前を見捨ててな。」

カルザスの言葉を聞いてベアトリーチエは、心がすとんとひとつの場所へ落ちたような感覚を覚えた。絶望より、悲しみより、納得したといったところだろうか。やっぱり…。そう思ってしまったのかも知れない。

その感情さえベアトリーチエは表に出さなかった。

「それでは、あなたの計画も終わりですね。」

騎士団が撤退したということは、アーサーさまは王城に戻られたということだ。傭兵だけでは王城の守りを突破することは不可能だ。それはカルザスの企みが詰んだことを意味する。

「そうだな。その通りだ。ベアトリーチエ、お前にはしてやられたよ。お前がいたために、私の計画は全て崩れた。王になるはずの私が、こんな皆で朽ち果てなければいけない。」

「いえ、あなたの計画は最初から不可能だったわ。たとえ成功してもあなたは王になることなんてできなかつた。それどころか、無辜の民まで巻き込む災いが起きかねなかつた。そんなこと王になるべき人間がすることじゃない。」

「お前に何がわかる！」

カルザスはベアトリーチエの前で初めて激昂した。

「ただ先に生まれただけで、ほとんどのものが奴のほうだけを向いて微笑む。民も、臣下も、女たちも！後に生まれただけで、立場は低く、軽んじられる。ただ生まれた年の違いだけで、奴はほとんどものを得て、私は多くのものを失った。私はそれを取り返そうと

「ただけだ！」

「だからってたくさんの人を巻き込んで不幸にしていいいわけがないわ。」

ベアトリーチエの言葉に、カルザスは一瞬沈黙したが、喉の奥から絞り出すようにまた笑った。

「くつくつく。この状況でのご高説、感謝して受け取るう。」

腰の剣を引き抜き、ベアトリーチエの目に突きつける。

「礼として最初に斬られる箇所を選ぶ権利をやるう。目がいいか？それとも耳か？ああ、残念ながら心臓は許可できん。楽に死んで欲しくないからな。」

「そんなものいらないわ！」

ベアトリーチエはその瞬間足を大きく振り上げた。カルザスの剣を持つ手を蹴りぬく。

「ぬっ」

剣が剥き身のまま宙を舞い、全員に動揺が走った。その隙に降ろした足でそのまま兵士の足を踏み抜き、頭を使って顎をうつ。

「ぐはっ」

腕を振り拘束を抜け出し、そのままの勢いで駆け抜ける。兵士たちもベアトリーチエを捕まえようと手を伸ばす。服がひっぱられバランスが崩れそうになるが、体勢を立て直し走る。

生きなければならぬ。

たとえ自分の帰りを待つ人がいなくても。誰もが自分が生き残ることを望んでいないのだとしても。

私が死ねばレティは傷つく。私はあの子に自分の命を背負わせてしまった。

だから、生きなければならぬ。

たとえそれが不可能なことだとしても。どんなに絶望的な状況でも。

一歩でも、一秒でも、遠く、永く、生きなければならぬ。

それが命ある者の、私に残された最後の責務。

そして会いたいと思った。アーサーさまに。
いつも自分に勇気をくれたあの笑顔に、幸せをくれたあの微笑みに、もう一度会いたい。

ブチッ

何かがちぎれる音がした。

ぐらりと視界が横倒しになっていく。床がせまり、顔から地面にこすり付けられる。

ベアトリーチェはバランスを崩し、倒れたのだとその時理解した。

「取り押さえる！」

カルザスの声がひびく。

体のうえにたくさんの重みがのしかかり、腕ひとつ動かせなくなる。

「本当に諦めの悪いやつだ。よくこれだけ何度もあがけるものだ。」
押さえつけられたベアトリーチェはカルザスを見て驚いた。いやカルザスの右手に持っているものを見て驚いた。

「ん、なんだこれは？」

カルザスも自らの右手に握ったものに気付いたらしい。逃げるベアトリーチェに追いつき、必死に手を伸ばして掴んだものだった。鎖はちぎれたが、その時ベアトリーチェもバランスを崩し取り押さえることが出来た。

改めて見てみると花の細工が施されたペンダントだった。カルザスはそれが縦に開く構造になっていることに気付く。

なんと無しにそれを開けたカルザスは、不意に狂ったように笑い出した。

「ハッハッハッハ！ハッハハ！そうか！そうだったのか！」

中に入っていたのはアーサーの写真だった。この女はずっとアーサーの写真を身に着けていたのだ。

「お前もあいつを愛しているのか。だからレティシアを取り返し、私の計画を邪魔したというのか。あれだけの冷遇を受けていたとい

うのに。愚かな、愚かな女だ。」

カルザスとベアトリーチエの瞳が会う。

「それでお前は何か得をしたか？あんな王に生まれついただけの何もしていない男に、そこまで尽くす価値はあったか？あの男はお前に何かしてくれたか？助けさえ来ること無く、見捨てられてお前は満足だったか？」

ベアトリーチエは答える。強い瞳で。

「親友のレティを助けられた。災いに多くの人が巻き込まれるのを防げた。あの人はこの国を支える立派な王よ。たくさんの人々の命を支えている素晴らしい人。アーサーさまは私に大切なことを教えてくれた。笑うこと、幸せなこと、がんばること、慈しむこと。そのアーサーさまを助けられた。私は後悔なんてしてない。」

「馬鹿な女だ。」

カルザスは一言呟くと、クレイドールの方を向いた。

「クレイドール、あれを持ってこい。」

「あれと言いますと。」

「レティシアがどうしても言うことを聞かなかったときのために準備した薬だ。」

「は、はあ、あの薬ですか。しかしどうして。」

「もう必要のないものだ。最後の余興に使ってやる。」

クレイドールは戸惑った顔をしながらも、カルザスの言う通りのものを持つてくる。それは薬液が入った注射だった。

「何をするつもりなの。」

地面に押さえつけられたまま、ベアトリーチエは尋ねる。

「お前を生かして帰してやるのだよ。」

「どうということ。」

ベアトリーチエはカルザスが何を考えているのかわからなかった。

「お前をもう一度、愛しのアーサーに会わせてやるうというのだ。」

その目で見るが良い。お前が助けたものたちが、お前をどういう瞳で見るのか。」

カルザスは薄く笑った。その目には狂気の光が灯っていた。

「ベア！ベアトリーチェ！どこにいる！」

声が…。声が聞こえる。アーサーさまの声。この世で一番愛おしい人の声。もう一度聞きたいと願ったあの声が。

（こないで…。こないでください…。アーサーさま…。）

それなのにベアトリーチェは願った。あの人がここに来ないことを…。

「暴れるなよ。」

押さえつけられ、首に針が刺さる痛みがはしる。続いて薬液が体の中に入って行く。

（なに…。）

喋ろうとしてベアトリーチェは、唇が動かないことに気付いた。

それだけじゃない。腕も足も指すらも動かせない。

「安心しろ。命を奪うような薬じゃない。」

体はまったく動かないのに、意識だけはあつてカルザスの声が耳に入ってくる。

「ただ、体が動かせなくなるだけだ。人形のようにな。」

そして体をひきずられ、どこかの部屋へと連れて行かれる。引きずられながら、見えたのは何かを拘束するような道具たち。

「ここはな。この砦を作った王が、もう別れたいと言い出した愛人を閉じ込めた場所だ。」

体の向きを変えられた。薬を打たれてから、はじめてカルザスと目が合う。破滅の前に、最後の愉悦を楽しもうとする、狂気の笑み。両手を無理やり頭上にあげられる。鉄の輪が両腕に填められたのが冷たい感触でわかった。それは両足も同じだった。

ベアトリーチェはカルザスが何をしようとしているのかわからなかった。

「お前のことは計画のときよく調べた。今まで一度もアーサーの渡りが無いとな。」

カルザスの手がベアトリーチェの体に触れる。ベアトリーチェの体がびくりと震えた。その感触を感じて、カルザスはまた笑った。

「この部屋の扉も王族のものしか開けることはできない。」

カルザスはベアトリーチェの顔に、いつそ愛しげに唇を近づける。「もし、お前が助かるのだとしたら。お前に助けがくるのだとしたら。その男はお前のどんな姿をみることになるだろうな。」

そしてまるで睦言のように優しくにつぶやいた。

(いやっ…。いやぁっ…。)

カルザスの考えを悟り、ベアトリーチェの体が大きく震える。抵抗したいのに、体も指もひとつも動かせない。

人形となったベアトリーチェに、破滅に身を沈めかけた男が、この上ない愉悦を浮かべ覆いかぶさっていく。

そして絶望の暗闇が、ベアトリーチェの目に映る全ての光を覆い尽くした。

「ベアトリーチェ！どこにいるんだ！」

声はだんだんと近づいてくる。会いたかった人、大好きな人、今この場所に一番来てほしくない人。

「ベア！」

バタンッ

扉が開かれる。

目に映ったのは金色の髪、翡翠の瞳。ベアトリーチェは見た。助けに来てくれたアーサーの姿を。

アーサーは扉を開けたところで立ちすくむ。

その瞳に映る、汚れた自分の姿。

「ビーチエさま!…っ!いやあ!」

後から入ってきたレティが、中に入り悲鳴をあげる。

「だめ!入ってこないで!」

振り返り、後ろの騎士たちに必死の声で命令する。

「ビーチエさま!ビーチエさま!」

レティシアは泣きそうな声で駆け寄り、騎士たちから受け取ったマントを体に被せてくれる。

それでもベアトリーチエは見つめ続けた。アーサーだけを。

今だ動かぬ体で、両の目から涙を流し。

「みないで…、みないでください!…アーサーさま…。」

掠れた声にならない声で。呟き続けた。

それは小さな、小さな悲鳴だった。

日暮れの鳥の鳴き声を聞いて、ベアトリーチエは目を覚ました。あれから一週間の時が経った。皆にて発見された後、王宮の女医からさまざまな治療を受けた。怪我は大したことなくあった。妊娠することがないように施術もほどこしてくれたいらしい。ただ、薬の影響で4日間はベッドから動くことができなかった。

その間の看病は、レティシアに頼まれたフラウとカーラがしてくれた。しかし大きな事件だっただけに、レティシアは膨大な事後処理に追われるようになり、ベアトリーチエが動けるようになると、フラウとカーラはベアトリーチエが深刻すぎると思う程、すまなそうな顔をしながらレティシアの元へと戻った。二人にはとても感謝していたし、動けるようになったのだから元の生活に戻らなければならぬ。そう思ったベアトリーチエはお礼を言って、彼女たちを見送った。

ベアトリーチエはベッドから立ち上がる。しばらくベッドの上の生活だったので、そろそろ服を洗濯しなければ、着るものが無くなってしまう。

扉を開け、廊下に出る。

歩くベアトリーチエを見て、侍女たちがひそひそと噂を交わす。

それは王都で流れる新たな噂だった。カルザスと不義を交わしていた。カルザスの愛人で計画の味方をしていて。計画が失敗し、被害者のふりをしようまく逃れた。などだ。

レティシアは必死に誰にもあの光景を見せまいとしたようだが、何人かの騎士が目撃しそれが外部に漏れことう噂になったらしい。フラウとカーラは気を遣い、噂を遮断しようとしていたようだが、それはすぐに耳に入ってきた。

不思議と心は痛まなかった。もう慣れてしまったのだろうか。

ただ重臣会議でベアトリーチエを側妃から廃妃するように議題が

上っているらしいことは、少し気にかかった。

(私は追い出されるのだろうか…。)

一度も王からの渡りがないまま、あんなことになったのだから当然のことなのかもしれない。あの時以来、アーサーさまの姿は見えない。

廃妃されたらもう二度と会うこともないのだろうか。

まだ動かない頭で考えていたベアトリーチェは、自分がいつの間にか水場とは別の方向へ歩いていることに気付いた。

振り返ったベアトリーチェの目に映ったのは、あの人の姿だった。

(アーサー…さま…。)

綺麗な金色の髪はぼさぼさになり、目元には疲労の色も濃い。それでもその美しさは変わらない。

ベアトリーチェの驚きに見開かれた目が、翡翠の瞳と会う。

邂逅は一瞬だった。

アーサーはすぐに顔を逸らし、そのまま何も言葉をかけず、ベアトリーチェの前から去っていった。

それでもベアトリーチェは見た。自分を見たアーサーさまの瞳が、驚きに見開かれた目が次の瞬間歪んだことを。その視線に冷たい光が宿っていたのを。

後宮に入ってからよそよそしい態度でも、アーサーさまはいつも声をかけてくれた。それすらも、もうない…。

嫌われたのだ…。声すらかけて貰えぬほどに。

アーサーさまに嫌われた。それがこの三年間でベアトリーチェが得た結末だった。

ズキッ

胸に痛みが走る。それは瞬時に激痛へと変わり、ベアトリーチェの胸を引き絞っていく。

心がばらばらになりそうだった。

そして気付く。最初から痛かったのだ。今までずっと。あの悪夢の時間からもう心はずたずたに切り裂かれていた。ただ、麻痺し

ていた。あまりの痛みに、心が壊れそうで。

激痛はベアトリーチエを苛み続ける。ベアトリーチエはただその場に立ち尽くした。

涙は出なかった。心だけ、ただ泣き叫んでいた。

絶望したとき、悲しいとき、アーサーさまの笑顔が勇気をくれた。アーサーさまの笑顔を思い出せば、どんなに辛いときもがんばることが出来た。

なのに、もうあの人の笑顔が思い出せない。

ベアトリーチエは後宮を出ていくことにした。

新月の夜、一人の少女が後宮から出てきた。

少女は立ち上がり、一度だけ王宮を振り返ると、夜の闇の中へと消えて行った。

41・『結末』（後書き）

ここまで読んで頂き本当にありがとうございました。

自分でもこれだけの後宮編が分量にはなると思わず、書いたことを後悔するときもありました。

それでも読者さんに励まされ、ここまで書くことができました。

次は旅立ちの前に、アーサーの視点で少し話を書かせて頂きます。アーサーの名誉が回復されるような話ではありません。むしろ馬鹿さ加減に怒りが増すかもしれせん。

なんでこんな男にベアトリーチェが惚れてるかについては、旅立ち後の話の折り返しの時点で書くつもりです。

間違ったのかもしれない…。

カイトはそう思った。

カルザスの反逆から一ヶ月の時が経った。計画に失敗したカルザスたちは皆を逃げ出し、レイツオンに逃げ込もうとした。しかし、レイツオンはこれを拒否した。エルサティーナ国軍がカルザスたちを追い詰めたときには、計画の失敗に逆上し国軍に命乞いしようとした傭兵たちの手でカルザスたちは殺されていた。

それで事件に加担した傭兵たちが許されるわけもなく、処刑を含む重い罰が与えられた。カルザスを唆したとみられるレイツオンにも制裁を行った。

事件後の膨大な事後処理も落ち着きを見せ始め、エルサティーナは元の姿を取り戻し始めていた。一部を除いて。

後宮からベアトリーチエの姿は消えていた。いついなくなったのかはわからない。いつの間にか、後宮から姿を消していた。

ベアトリーチエの廃妃の話は、アーサーさまとレティシアさまの強い反対で避けられた。しかし全ての処理が終わったとき、第八妃はもういなかった。

搜索命令は出された。いつ出て行ったのかもわからない、ほとんどのものが顔もしらない側妃は見つかるとはなかった。

それからアーサーさまの様子も変わった。

政務や国事するときには、いつもと変わらない様子を見せる。しかし何も仕事がない時間があると、あの第八妃が去った部屋に入り浸っていた。

王の命令である部屋は、誰も入ることを許されずそのままになっている。

何をしているのかと疑問に思ったが、目撃した侍女によるとただ部屋の中で何時間も佇んでいるらしい。

あれから他の側妃のもとへ訪れたことは一度も無い。

ずっとアーサーさまはレティシアさまと想いあつてるのだと思ひ込んでいた。そしてベアトリーチェは価値のない側妃だと思っていた。あの噂を信じていたわけではない。しかし影響は受けてしまっていたのだろう。

今思えばあの少女が側妃となつたときから、アーサーさまの様子はおかしかつたのかもしれない。アーサーさまは王の責務として定期的に後宮に通っていた。それがレティシアさまが王妃になってからめつきり少なくなつた。それはレティシアさまへの愛ゆえなのだと思つていた。そうかと思えば短期間に何度も後宮へ出向くときもあり、侍女たちの間で王と王妃の仲の不安が囁かれた。

側妃に対しても以前はバランス良く訪れていたが、彼女が来て以降は気まぐれといつていいほど偏るようになった。それどころか後宮に行き、どの側妃の部屋も訪れることなく帰つてくるときもあつた。そして一度も、ベアトリーチェの部屋だけは訪れることは無かつた。

それは全部、他の側妃のもとを訪れるふりをして、ベアトリーチェに会いにいっていたのかもしれない。

良政を敷くよき王で、賢いレティシアさまを妻として迎えてからはさらにエルサティーナは栄えた。しかしアーサーさま自身は、いまいち政務に身が入つてなかつたのでは。それはごくわずかである上に、レティシアさまや周りがフォローしていたので誰も気づかなかつたが。

あの時の選択は今でも正しいと思つている。あの状況に会つたらまた同じ選択をするだろう。それは変わらない。

側妃の命では、王と王妃の安全にはかえられない。

しかし、何かできることがあつたのでは…。

時折、光を失つた瞳を見せる国王を見ると、カイトはそう思わざるを得なかつた。

「アーサーさま……。もし、私がかんばって努力し続けて、立派な淑女になれたなら、その時はあなたの妻として迎えに来てくれますか……？」

目の前の少女は、泣きじゃくりながらそう言った。

生まれながらにして不幸を背負った少女。この少女に幸せを与えてあげたい。

そう思った……。

ベアトリーチエが15歳になったとき、フィラルドへ彼女を正妃に迎えたいと打診した。

やっと約束を果たせると、アーサーは思った。久しぶりに見た彼女は、以前と変わらず優しい少女で、それでいて成長し可愛さの中にほのかな美しさを芽生えさせはじめていた。

久しぶりの再会、無邪気に自分を慕う態度はそのまま、淑女としての礼節を身に着け成長した彼女。これからは彼女と一緒にいられるのだと思っていた。

自分はずっとベアトリーチエのことが好きだったのかもしれない。それは彼女の約束より以前から。しかし、その思いに気付くことはなかった。彼女と約束した、その言葉が自分の想いをこまかし続けていた。本当は、自分が彼女を欲しくてたまらなかったのに。

その思いをきちんと自覚していたら、こんな大きな過ちを犯すことも無かったのだろうか。

状況が変わったのは、レティシアという少女がアラスト聖国の皇族の末裔と分かったときだった。

その血筋は大陸に存在する全ての国家の上に立ちえる血筋。どこかの野心ある国家が、彼女を担ぎ上げれば大陸は無用の戦乱に巻き

込まれる。

アーサーは王だった。しかも大陸を代表しその秩序を安定させる大国エルサティーナの王。その肩には自国だけにとどまらない、多くの民の命を背負っている。

また王としては若く、その王権は絶対では無かった。良政をしいているからこそみな従ってくれているが、味方の貴族たちの後ろ盾なしには王権を保つことはできない。

アーサーにはレティシアを正妃として迎えるしか選択肢はなかった。

そしてそれはベアトリーチエを手放すという選択でもあった。

ベアトリーチエを手放す。そんなことは考えられなかった。アーサーはその根拠となる自らの想いも自覚しないまま、焦燥感に捕らわれた。そして悪あがきをする。

むりやりに第八妃という例外を作り、ベアトリーチエをその位置に収めた。それは身勝手なわがままだった。

それからの日々は忙しかった。レティシアという古き血筋を引く王妃を手に入れたことで、他国が抱く不安を解消しなければならぬ。エルサティーナという信頼ある国家が手に入れたことで、まわりが受けた衝撃はそれほど大きくはなかったが、それでも内外に波紋が広がった。それを治めるために、アーサーたちは奔走した。

幸いレティシアは優秀な少女だった。こちらが望むことを確実にこなしてくれる。王妃としての振る舞いは、見事というほどだった。レティシアを王妃という位置に収め、アーサーも王としての役目を果たし、国家はその体制を整えた。

アーサー自身におけるベアトリーチエという問題を残して。

国家が新たな体制を得て、落ち着きをはじめたころアーサーはベアトリーチエの問題を突き付けられた。いやずつと前から自覚はしていた。しかし考えないようにしていたのだ。

ベアトリーチエは自分を恨んでいるだろうか。

自分は過去の約束を守れなかった。それどころか正妃に迎えるという話を、直前に反故にして彼女を王族として恥をかかせた。そして他の王のもとへ嫁いで幸せになる権利のあつた彼女を、最下級、しかも例外の側妃として後宮に閉じ込めた。

いても立つてもいられなくなったアーサーは後宮を訪れた。

廊下を歩いていたアーサーは、ベアトリーチエと会う。アーサーは驚いた。王の訪れは侍女たちにより側妃へ伝えられ、側妃たちは部屋の中で王の訪れを待つことが普通だった。

「お久しぶりです、陛下。」

そう挨拶をされ、アーサーの心に痛みとともに暗い感情がほとばしる。もうアーサーとは呼んでくれないのか。

ベアトリーチエの格好はまったく着飾る様子も無く、自分を歓迎しているようには見えなかった。それどころか、自分がベアトリーチエの部屋を訪れても会わなくてすむようにで何処かに逃げ出そうとしていたのかもしれない。

「服が乱れているな。側妃にふさわしい格好をせよ。」

それは悔し紛れの言葉だった。

そのままベアトリーチエを見ずに、近くにあった第二妃の部屋に入る。

第二妃やその侍女たちの甲高い会話を聞きながら、アーサーの心は暗く沈んでいた。ベアトリーチエの信頼を失った。そのことが心に暗い澱を生み出しはじめていた。

アーサーは未だその感情の根源にあるのが何か、本当はどうすべ

きなのか気付けなかった。

国の安定のため王と王妃の子をなさなければならぬ。それは義務だった。

レティシアは聡い少女で、一緒に過ごすことに苦痛はなかった。ベアトリーチェと長く一緒に過ごしていたせいだろうか。どこか彼女の残り香がした。

だがお互い王と王妃として仮面を被り接し、その間に信頼が生まれることは無かった。

後宮に行く気はおきなかった。ベアトリーチェのよそよそしい態度を見てから。

それでも思い出したように焦燥感にかられ、ふと後宮を訪れる。ベアトリーチェに出会えるのはたまにであり、服装はましになったものの彼女との間にあるぎこちなさは変わらなかった。

レティシアが秘密裏に演奏会を開くという報告を聞いても、アーサーはさほど興味は無かった。レンディ侯爵は好色な男だが、王妃に手をだすほど馬鹿ではあるまい。

偶然、部屋の前を通りかかったとき、聞こえてきた声にアーサーの心臓は凍りついた。小さい声ながら笑っているのは、ベアトリーチェの声だった。

感情に突き動かされるように扉を開ける。

まだベアトリーチェはレティシアと二人つきりで、レンディ侯爵の姿は見えなかった。わずかに安堵しながらも暗い感情は止まらない。

「何故こんなところにいる、ベアトリーチェ。」

さっきまで笑っていたはずのベアトリーチェの顔は、暗くこちらを恐れるように見ている。その表情に心が掻き毟られる。

彼女は後宮に閉じ込められているのだ。活発な彼女にとって、そ

れは苦痛だったのかもしれない。少しぐらいなら、外に出してやるべきなのかもしれない。

頭ではわかつているものの、心はそれを拒絶する。もし、レンデイ侯爵のような好色な男たちに目をつけられたらどうする。そのような男たちがベアトリーチエの下賜をたまわってきたとしたら。あまつさえ、ベアトリーチエもそれを望んだりしたら。

そんなこと考えられなかった。

「もうよい。今すぐ後宮に戻れ。それで不問とする。」

レテイシアの手を握り、彼女をベアトリーチエから遠ざける。彼女の存在は危険だった。ベアトリーチエを後宮の外につなげる存在になりうる。そんなことが続けば、彼女を見初める誰かが表われるかもしれない。

本当はベアトリーチエの手を握り、彼女を後宮に戻し閉じ込めてしまいたかった。

しかし彼女の自分を恐ろしげに見つめる瞳を見れば、その勇気すら湧いてこなかった。

そうしてアーサーは少しずつベアトリーチエの現状と、彼女への想いから目を逸らし始めた。

レティシアからベアトリーチェについて、悪い噂が流れていると聞かされた。

好都合だと思った。悪い噂が流れれば彼女に近づく人間もいなくなる。ずっと後宮に閉じ込めておける。

どんな噂か確認もせずに。彼女の苦痛など思いやることもできずに。

自分のしていることから目を逸らしたまま、想いはだんだんと歪んでいく。自覚もないままに。

その日は珍しくレティシアと会話をした。いや、何度も話したことはあるが、あくまでも王と王妃として話ただけだった。

ベアトリーチェについて話すと不思議と会話が弾み、彼女と二人で過ごしたころの懐かしい暖かさが胸によみがえってきた。

しかしその思いはすぐに凍りつく。

レティシアと別れたとき見つけた、少女の後ろ姿。蜂蜜色の髪、

小柄で華奢な体。間違いようもないベアトリーチェの姿。

何故、後宮から出てきている。

しかも彼女は手を握られ、兵士の姿の男と会話を交わしている。

頬から嫌な汗が噴き出る。まさか思いを交わす男ができ、王宮を抜け出しその男と会っていたのか。

「ベアトリーチェ！そこで何をしている。」

冷たい声が口からでた。

ベアトリーチェが振り向き、こちらを恐れるようにびくりと震える。彼女との間にあったはずの温かい信頼はもう見えない。胸が暗い感情で乱れていく。

幸いにして男はベアトリーチェと初対面だったらしい。だが、男が漏らしたつぶやきが耳にはいる。

「こんなに可愛い娘が……。」

ベアトリーチェは自覚があまりないが、十二分に容姿にすぐれた少女だった。美しいというより可愛いといった印象だが、ちゃんと格好をすれば美姫に数えられる。

やはり彼女を外に出すのは危険だ。誰が彼女を奪おうとするかわからない。

アーサーは後宮の兵士たちに伝え、彼女を外にださないように強く命じた。顔を覚えさせるために写真を与えたが、決して外部には漏らさないように厳命した。

アーサーがベアトリーチェの想いを自覚しはじめたとき、それは既に歪み切っていた。

ベアトリーチェの誕生日に、アーサーはプレゼントを用意した。彼女に似合いそうな白い清純な色のリボン。

しかし自分からのプレゼントを受け取ってもらえるか不安になった。そして、レティシアに頼み連名として送ってもらうことにした。仲の良いレティシアとのプレゼントなら彼女も拒絶することはないだろうと。

プレゼントを贈った日から、後宮に訪れベアトリーチェの様子を見た。しかし、彼女は一度もリボンをつけたりはしなかった。

それはベアトリーチェのアーサーへの拒絶に見えた。

アーサーは暗い絶望を抱いた。自分を信頼し見つめていてくれた少女との間に、今は飛び越えようのない深い溝ができているように感じた。

最初にあつた彼女を幸せにしたいという想いが、いつの間にか身勝手な執着へと変わり果てていたことに気付いていなかった。

それから誕生祭の準備に追われ、しばらくベアトリーチェの姿を見れない日が続いた。側妃たちの誕生祭への参加も問われた。ベアトリーチェも参加させるか問われたが、そんなもの許容できるはず

がなかった。出来うる限り誰の目にも触れさせるつもりはなかった。無自覚のまま肥大化し歪んだ愛の前に、彼女の幸せということは頭を過ぎらない。

ただ心の中は空虚さがつねに鎮座し、それをわずかにでも埋めるためベアトリーチェの残り香をもったレティシアと過ごすことが多くなった。

誕生祭の休憩で、レティシアからカンティアの花を渡されたとき、思い出したのはベアトリーチェのことだった。フィラルドで二人ですごした思い出。

それは今では遠い夢のことのようだった。

「なんで…。」

夢の中の少女の悲しい声が耳にはいり、続いてレティシアの「ビーチエさま！」という声が聞こえて我に返る。

振り返ったときには二人の背中が遠くにあった。

アーサーは動揺した気持ちを抑えるように、心の中で呟き自嘲した。

今更レティシアと一緒にいるところを見られたぐらいで何がある。

自分は彼女を裏切り続けてきた。

それでも抑えられない胸の疼きを、レティシアがいなくなり増えた誕生祭の政務をこなすことでごまかした。

時間ができたアーサーは連日、後宮へと訪れた。しかしベアトリーチェは姿を見せない。

もしや病気にでも罹ってしまったのだろうか。胸騒ぎがしたアーサーはベアトリーチェの部屋を訪れる決心をした。もしかしたら、元のような関係を取り戻せないかと願って。

ベアトリーチェの部屋へと行き、唾をのみ込み、緊張を抑え扉をノックする。

「ベア…いるのか？開けてくれないか？」

懐かしい、愛称を呼び彼女によびかける。

返事はなかった。

「ベア…。いたら返事をしてくれ。」

アーサーは再び呼びかけた。祈るように。

返事はない。

しかし耳は聞いてしまった。

ベアトリーチェの気配を伝える、かすかな物音を。ベアトリーチ

エは中にいた。

「ベア、いるのだろう。話したいことがあるのだ。開けてくれないか。」

話したい要件なんてありはしなかった。いや、要件なんてなくても、二人で話して笑いあえたところに戻りたかったのかもしれない。

だが、彼女が答えてくれることは無かった。彼女の侍女たちも、国王の訪れに答えることは無い。ベアトリーチェに命じられたからだろうか。

これほどまで嫌われていたのか。

アーサーは何も答えない扉の前で俯き絶望した。

絶望はさらにアーサーの想いを歪ませていく。

いや、大丈夫だ。彼女は私の側妃だ。この後宮を出ることはできない。たとえ彼女が私を嫌ってたのだとしても、彼女に逃れるすべはない。ベアはずっとずっと私のものだ。

愛しい小鳥を閉じ込めた檻を見て、王は悲しく笑った。

自らがベアトリーチェの傍にいない矛盾から目を逸らし。彼女の幸せにしたいという願いを忘れ。

小鳥が羽ばたいていくのを阻む檻などどこにも無く、その小鳥が自分のことを想いこの場所に留まったことなど、気づけもしないまま。

自分のものになったはずだった。誰にも渡さないように閉じ込めていたはずだった。

だが、それはあっさり自分の手をすり抜けていった。

「ベア！いたら返事をしてくれ！」

カルザスたちの去った砦を必死で探す。

頼む、無事でいてくれ…。

そう祈りながら。

「これは…。」

目についたのは、花の飾りが掘られたペンダント。後宮でみかける度にベアがつけていたペンダント。

手で握り締めると、干切れた鎖がかしやりと軋んだ音を立てる。

心臓が凍りつく心地がする。

「ベアトリーチェ！どこにいるんだ！」

それを打ち消すように大声で叫んだ。

騎士たちの報告で、あらかたの部屋を搜索し終わった。あとは王族のものしか開けられない扉だけ。

「ベア！」

探し求めるものの名を呼びながら、扉を開いた。

ベアトリーチェは生きていた…。

なのに、アーサーの心は晴れることが無かった。あの時見たベアトリーチェの姿…。それから胸の底に淀んでいた感情が、一層濃さをまし消えてくれない。

あの状況で助かったただけでも、奇跡だと分かっているのに心はおさまらない。

この手でカルザスを八つ裂きにできたのなら、少しは気が晴れたのかもしれない。だが、カルザスは既に傭兵たちの手にかかり殺されていた。

王弟の反乱、しかも三大公爵の一人が加担していた。この事件が引き起こした波紋は大きい。若き家長の暴走とはいえ、エラン家は取り潰しを免れないだろう。

後釜を狙おうと、さもしい貴族たちは動き出している。

やらなければいけないことは多い。アーサーはベアトリーチエに起きたことを忘れようとするように、政務に没頭した。

だが、今日は後宮に行かなければならない。

事件には第三妃の侍女が加担していたという。その侍女もすでに死んでいるが、第三妃についても調べなければならぬ。

ベアトリーチエとは顔を合わせなくなかった。今あってもどのよ
うな態度を取ればいいのかわからない。王都では噂が流れていた。ベ
アトリーチエがカルザスの愛人で計画に加担していたという。どこ
からか情報が漏れていたらしい。

馬鹿げた噂だと思う。ベアトリーチエがそんなものに加担するわ
げがない。なのに頭には黒い疑念が浮かぶ。もしかしたら……。そう
考えてしまう。

それを振り切るように、アーサーは後宮の廊下で足を進めた。
はやく済ませて王宮に戻ってしまおう。そう考えていた。

あんなことがあったあとだ。ベアも出歩いていたりはしないだろ
う。

だが、それは裏切られた。目に映る柔らかな蜂蜜色の髪、琥珀色
の瞳、少しやせた白い頬。愛しい影。なのに、胸に浮かんでくるの
はどす黒い感情だった。

カルザスの嗤う姿が目には浮かんでくる。

アーサーは慌てて顔を逸らした。今向き合えば、何を言っ
てしま
うかわからない。そのまま速足で第三妃の部屋に向かう。

時間ができてからだ……。それからベアとの関係を修復しよう……。

心に浮かぶ情けない感情を、アーサーはそう言っただごまかした。

激務もようやくやくひと段落した。

しかし、議会ではベアトリーチエの廃妃の議題があがっていた。一度も渡りがないまま、カルザスに手をつけられたベアトリーチエは側妃たる資格がないというのだ。

そんな話受け入れられるわけがなかった。やっと手もとに取り返すことができたというのに。

アーサーは強硬に反対した。レティシアも協力をしてくれた。

なんとか賛成派を跳ね除けることには成功したが、アーサーの心は疲弊しきっていた。

部屋に戻るとレティシアがいた。

「おかえりなさいませ、陛下。」

ここは王と王妃の両方の部屋から通じている夫婦の部屋だった。

「ゼン王国の大使が来て、今回の事件の説明を求めていました。」

「カイトから説明をさせてくれ。あいつなら必要最低限の情報だけ伝えられるはずだ。」

ここ数日は日の終わりに、仕事の報告だけをして別れた。

だが、今日のアーサーは違った。ベアトリーチエと会ってしまったことにより、強く意識させられた心の空虚。

ふらりと体が引き寄せられる。

レティシアの体からはベアトリーチエと良く似た匂いがする。同じ香水を使っているからだろうか。アーサーの手がレティシアへ伸びる。

「陛下？」

レティシアという娘は、従順な少女だった。半ば無理やり王妃にしたあげられてからも、こちらが望むように振る舞ってくれた。

心を開いた様子は無くとも、与えられた役目を十分にこなしてくれた。逆らうことは決して無かった。

「いやあ！」

だからレティシアがそう拒絶したときアーサーは驚いた。

レティシアは泣きそうな顔をしていた。大人びた様子でこの国の王妃として振る舞っていた少女。だが、いまの表情は年相応の幼さを見せていた。

泣き崩れそうになりながら、目じりに涙をため、レティシアはアーサーを見る。

「なんで…。」

つつかえながら、レティシアは言葉を絞り出す。それが事件に巻き込まれてなお、王妃としての職務をこなしていたこの少女の、溜めに溜めこんでいた本心だと分かった。

「なんでビーチェさまを守ってくださらなかったんですか！なんでビーチェさまを愛してくださらなかったんですか！なんで…。」

その言葉はアーサーの胸をえぐる。自らの情けなさを胸に突きつける。だが、続く言葉にアーサーはそれが吹き飛ぶほどの衝撃を受けた。

「あんなにビーチェさまはあなたを愛していたのに！あんな後宮に置かれてからも、ずっとずっと愛していたのに！」

頭を打ち付けられたような気がした。レティシアの口からでた言葉が信じられなくて。

「ベアが私を愛していた…？」

耳に入った言葉を茫然と呟く。

「そうです！後宮に置かれて、あんな冷遇を受けてなお、あなたのことをずっと愛していました！この三年の間ずっと！」

「嘘だ…。そんなはずは…。」

ベアは自分を恨んでるはずなのだ。あの約束を守れなかった自分を。第八妃という低い位に、無理やり彼女を押し込めた自分を。

「なら、あれを見てみればいいじゃないですか！あの中に何が入ってるか！そうすればわかりますよ！ビーチェさまがどれだけあなたのことを思っていたのか。」

そう言っただけでレティシアが指し示したのは、昔から持ち帰ったベアトリーチェのペンダントだった。部屋の前で拒絶されてから、ずっとベアトリーチェがつけていたもの。

アーサーはふらつく足で、そちらへ歩みを進める。

ペンダントは中が開く構造をしていた。

震える手でそれを開けたアーサーは息を止めた。

中に入ってたのは自分の写真。どこで手に入れたのかはわからぬ。新聞の写真の切り抜きなのかもしれない。花の飾りのペンダントの中、笑う自分の姿があった。

2年間、ベアトリーチェはずっとこれをつけていたのだ。

「ベア！」

アーサーは大きく叫び駆け出した。

無我夢中で走り後宮のあの部屋へと向かう。まわりは驚いた顔をしていたが、気にする余裕はなかった。ただ、ベアトリーチェに会いたかった。

ベアトリーチェの部屋の前にたどり着き、勢いそのまま扉を開ける。ちゃんとベアトリーチェと話さなければいけない。今度こそ向き合っただけ。

だが、部屋にはだれもいなかった。

側妃の私室とは思えないさびれた部屋、ろくな家具も置かれていない、うす暗い部屋がそこにはあった。

そこには部屋の主のベアトリーチェはおるか、侍女の姿すらない。

「なんだ…。これは…。」

呟くアーサーに、国王を追いかけてきた女官長のルーネが話しかけてきた。

「どうされたのですか、陛下。こんなにも急に後宮に訪れになられるとは。」

「なんだこの部屋は！ベアトリーチェはどこにいる！」

自分の質問には答える様子なく尋ね返すアーサーに、ルーネは訝しげな表情を隠しながら答える。アーサーがここまで動揺した姿などルーネは見たことなかった。

「そこはベアトリーチェさまの部屋ですが。ベアトリーチェさまについては最近見かけた記憶はありません。」

「見かけた記憶はないだと？ベアの侍女はどうした？何か連絡があるはずだろう。」

アーサーの言葉を聞き、ルーネは今度ははつきりと不審げな顔をした。

「ベアトリーチェさまの侍女はおりませぬ。」

「侍女がいない？どういうことだ？」

アーサーはルーネの口から語られる、ベアトリーチェの情報にさらに混乱させられた。

「あなたさまのご意志ではないのですか？側妃へ国からの援助はすべて王命によって行われると。後宮が作られたとき法でそう決められていたはずです。」

「……。」

言われてみれば、確かにそういう法があった。側妃たちの身勝手な散財が問題になったとき作られた法だ。しかしアーサーは、ベアトリーチェを王妃にするつもりだった。だから特に後宮に関心を払ったことは無かった。側妃たちの望みは侍女から王宮に聞き入れ、問題がなければ王命として実行されるようにしていた。

そしてそのまま、その法について忘れ去っていた。

思い出す。ベアトリーチェを第八妃にしたとき、それを必死に押し通しただけで、それ以外の法改正や命令については何もしていなかったことを。

「では、ベアトリーチェはどうやって暮らしていたのだ…。侍女も居ないのにこの後宮で……。」

「ご自分で洗濯や掃除などはされていたようです。衣装については、

なんとかお金をやりくりされていたようです。売り買いには私も協力いたしました。」「

ぐらりと意識がかすむ。

何故、言ってくれなかった。

そう言いかけて思い出す。最初の頃この女官長、何度かベアトリーチェさまの元を訪れないのか聞いてきたことを。そのたびに会う勇気のなかった自分は跳ね除けてきた。

後宮はいろんな感情が渦巻く危険な場所だ。昔に比べると平和になったとはいえ、いつ災禍の渦がおこるかわからない。

ルーネという女性はそれをなるべく無関心でいることで乗り越えてきた女性だ。

あの提言が、この女官長の精一杯の抗議だったのだろう。

「ではベアトリーチェは、ずっと一人で後宮で暮らしていたのか。

何の援助も無く。」「

「はい。その通りです。」「

震えるアーサーの言葉に帰ってきたのは、短く残酷な答えだった。

あれから、アーサーはベアトリーチェの置かれていた過酷な状況をようやく知った。

フィラルドからもエルサティーナからも支援は無く、まわりには侍女すらもいなかった。たまにアーサーが送った贈り物は、たちの悪い文官により着服されていた。冷遇を受けている側妃へのものなら着服しても気づかれないと思ったらしい。アーサーの贈りものは誕生日以降、全てベアトリーチェのもとに届いてなかった。文官には重い処分を科した。だが、それでベアトリーチェが帰ってくるわけでもない。

ベアトリーチェはいなくなっていた。それがいつなのかすらもわからずに。アーサーが気付いたときには後宮から姿を消していた。

あらためて自分がベアトリーチェを置いた境遇について思い知らされる。消えてすら今のいままで誰にも気づかれなかった孤独な側妃。部屋の中の家具も、残されたドレスもみな大国の側妃の持つものとは思えなかった。

こんなはずでは無かった。エルサティーナの側妃になった時点で、少なくとも物質的には満たされた生活を送れているのだと思い込んでいた。

アーサーの座るベッドのシーツは擦り切れていた。いつたい自分は何をやっていたのだろう。

父である国王からも愛されず、周りを敵で囲まれ、ひたすらに冷遇されてきた少女を救いたいとおもった。自分の傍で十分な幸せを与えてあげたいと思ったはずなのに。

なのに自分が実際に彼女にしたことは…。

彼女から名誉を奪い、親友を奪い、冷たい後宮に押し込み、周りの悪意の視線にさらしたままにした。そのうえで、王族としての生活すら奪い去った。

彼女の親族たちがしてきた所業と同じ、いやそれすら生ぬるいと思える酷いことをした。

彼女を助けられなかったとき側近たちを恨んだ。だが、それも今なら自分のせいだったとわかる。側近たちは自分の意思を汲んで行動してくれる。自分の態度がこの国における彼女の価値を失わせ、周りの人間に彼女を見捨てさせた。

全て自分の罪だった。だが、罰を負ったのは自分ではない。何の罪もないベアトリーチェなのだ…。

彼女は自分を愛してくれていたという。顔を上げると、机の上におかれた写真が目に入る。映っているのは自分とレティシアが並んで立つ姿。国の記念式典のときに配られたものだ。

彼女にとつては辛い写真のはずなのに、それは部屋の中で綺麗に磨かれたまま置かれていた。

彼女はどんな思いでこの写真を見ていたのか。

部屋のそこかしこを見るたびに、彼女の苦境と想いを知らされる。誕生日に贈ったあのりぼんも、何か手がかりがないかと漁った棚で見つけた。

血で汚れてしまった純白のりぼんは何度も洗った後と共に、汚されてすら宝物のように大切にしまわれていた。

三年間、自分はどれだけ彼女に辛い思いをさせたのか。自分を愛してくれてたというなら、どれほど心が引き裂かれる思いをしたのか。

抱締めれば良かったのだ。

今さら簡単な答えに気が付く。そうすればすべてが解決していた。いや、たとえ恨まれていても、そうすれば良かった。それから謝って、何度でも彼女が許してくれるまで想いを伝えれば良かった。

彼女が一番傷ついたときこそ、そうすべきだった。カルザスへの恨みになど囚われず、傍に在るべきだった。本当に辛い思いをしているのは誰か、少しでも考えればすぐにわかったはずなのに。

だが、そのどれも自分はやらなかった。目を逸らし続けた。拳句の果てに最後は、傷ついた彼女を無視して通り過ぎた。

出ていかれても仕方がない。そう言うことすらおこがましい。

何度も出て行かれて当然の仕打ちをしてもなお、彼女はこの場所に留まり続けてくれていたのだから。

そして自分とこの国のため行動し、彼女は傷つき果て、ついにこの場所から去っていった。

アーサーは頭を抱えた。

自分がしでかしたことを、ようやく今になって気が付いた。今更、遅すぎる時になって。彼女がいなくなっ、手を伸ばしても届く位置にいなくなっ、ようやく…。

彼女はおそらく、もうここへは戻ってこないだろう。

それでも。

「頼む…。帰ってきてくれ…。」

その願いを消すことはできなかった。

「すまない…。私が間違っていた…。愚かだった…。」

取り返しようなない間違いを犯してきたのに。

「愛しているのだ、お前を。もう二度と傷つけたりしない…。だから頼む…。」

請う資格すらない願いは、絞り出るように口から出てくる。

「帰ってきてくれ…。ベア…。」

愚かな男の言葉は、誰もいない部屋の中で響き、飛び去った少女へと届かない。

王都とはいえ、深夜の道は寂しい。ベアトリーチェは人通りのない道をコツコツと歩いた。夜風に吹かれ短くなつた蜂蜜色の髪が少しだけ風に舞う。

遠目にうつるのはまだ明かりの残る歓楽街。そこからどんどん逸れていくように、ベアトリーチェは歩みを進めていく。

たぶん出て行ったことをすぐに気付かれはしないだろう。でも、なるべくはやく王都から出て行かなければいけない。どこに行くか決めたわけではない。それでも、ここにはいられないと思つたから、ベアトリーチェの足は遅い方ではない。それでも小柄なので、その歩みは小さい。

夜空の色は変わらず墨を流した黒のままだが、それでもまたたく星の動きが時の経過を知らせる。

ベアトリーチェは少し足をはやめた。

冬夜の空気はしんと張りつめ、吐く息を白く染める。それは足を踏み出すと共に背中へながれ、幻雲のように溶けていく。

規則正しく繰り返される呼吸が、あたたかな心音と共に音を刻む。ベアトリーチェの心は絶望に染められていても、死を選ぶことは無かつた。その体は生の鼓動を刻み続けている。

未来は見えない、何をすべきかも分からない。ここにいることができない。ただそれだけ。それでも小さな歩みは、一歩ずつどこかへと進みはじめている。

まばらにあつた人の気配もだんだんと消えていき、静かに眠る街がベアトリーチェの横を通り過ぎていく。

身をすくめる寒さも、足を動かす熱で取り払われた。

俯いた琥珀の瞳が見つめるのは、夜闇の霧のほんのわずか先。

たたらむことは無かつた。何か残る想いも、今はすべて胸に収まっていた。

冷たい風が街中を吹き抜けてもベアトリーチェは足を止めず、歩み続ける。

チュンチュン

ふと鳥の声が聞こえてきた。

ベアトリーチェはわずかに顔を上げ、王都を覆っていた薄闇が少しずつ晴れているのに気付いた。街の景色もまばらに変わり、その先にはどこか永く続く道が見える。

見上げた空は飛びかう小鳥たちの背中で藍色に模様を変えていた。夜闇は晴れ、遠くから白い光が差しかかっている。夜の空は、青空へと変わっていた。

足を止めていたベアトリーチェは、一歩、歩みを進めた。

小さな体が街の景色から抜け出すように、一歩だけ外に出た。

その歩みを切らさないように、左足がまた一歩でる。そのまま足を交互に動かし、道を進んでいく。

ベアトリーチェは歩き出した。青空の向こうへと。

夜も明けた道を歩く途中、通りかかった馬車に拾ってもらったベアトリーチエは、そのまま馬車に揺られひとつの街にたどり着いた。

「ありがとうございます。」

「いいつてことよ。」

馬車を動かす御者にベアトリーチエはお礼を言つて馬車から降りた。

「あの、お代を。」

そう言つてがさごそと袋に手をいれるベアトリーチエに、御者は顔をしかめて言った。

「いらねーよ。営業前についでに乗せただけなんだから。気をつけるよ、お坊ちゃん。」

ぶつきら棒にそう言つて、御者はさつていった。ベアトリーチエはもう一度頭を下げて、それを見送る。

彼は王都とこの街をつなぐ定期便の御者らしい。運行前に街へと向かう馬車に、ベアトリーチエを乗せてくれたのだ。

親切な御者を見送つた後、ベアトリーチエは街を見渡した。王都からはだいぶん離れた街だ。交通の要所らしく、なかなかの繁栄を見せている。

次の街までどうしようかと思つたベアトリーチエの目に、大きめの食堂が目に入った。そういうえば、もう昼時かもしれない。

誘われるように食堂へ入つたベアトリーチエは、中を見回す。

食堂の中は広く、丸いテーブルを旅人や地元に住人たちが囲んでいる。その奥にはステージがあつて、旅楽団らしき人たちが今も準備をしていた。

「おひとりさまですか？」

「あ、はい。」

ウェイトレスに席に案内されたベアトリーチエはメニューを受け

取る。

「ご注文はお決まりですか？」

しばらくしてまたやってきたウェイトレスに鶏肉のシチューを頼む。

王族生まれのベアトリーチェにとってはじめての経験だった。

(うまくできただろうか。)

どきどきしながら待つベアトリーチェのもとに、シチューが運ばれてくる。ほっとしてベアトリーチェはシチューを口に運ぶ。

「美味しい。」

空腹のお腹に温かい味が広がった。

シチューをゆっくりと口に運ぶベアトリーチェの耳に、バイオリンの旋律が聞こえてきた。高く伸びる優雅な音。それに優しく響くギターの音が混じって行く。ピアノは美しく繊細なメロディを奏で、それに打楽器が楽しげにアクセントを付ける。食堂中に響く歌声は、透明な湖のように澄んでいながらもはつきりと力強い。

(音楽を聞くのは久しぶり。)

後宮にいるときは、自分を勇気づけるため魔笛を吹いたりしていたものの、他の人の演奏を鑑賞することはできなかった。

聞こえてくる演奏は王宮所属の楽士たちに負けないほどの技術だった。でもそれ以上に、心にやさしく響いてくる。久しぶりに聞く音楽に、ベアトリーチェの傷を負った心は少し癒されていく。

ベアトリーチェは食事の手を止め、楽団たちの演奏に耳を傾ける。ステージ上の彼らはまだ若い6人の男女だった。バイオリンを奏でているのは、長い髪を後ろでたばねた甘いマスクの青年だ。ピアノを弾いているのは、まるで兵士かと思うようながっしりとした男なのに太い指は魔法のように鍵盤をすべり繊細な音を奏でる。ギターを弾いているのは巻き髪のどこか色っぽい女性。歌い手は背は高いのに、顔はそばかすが残って幼さが残る少女。打楽器を鳴らすのはそっくりな顔の男の子と女の子。双子なのかもしれない。

楽団たちはいろんな曲を奏でていく。食堂の人たちはベアトリー

チエも含め、その演奏に聞き入っている。楽しげな民謡、美しいバラード、激しい歌曲、聞いたことのない曲もたくさんあった。

ベアトリーチエは純粹な気持ちで彼らの音楽を楽しんでいく。後宮での辛いできごとは旅だったベアトリーチエの心に寂しさを与えていたが、それもこの瞬間は忘れていられた。

時間はあつという間に過ぎ去つて行つた。

「音楽つていいなあ。」

ベアトリーチエはそう呟いて、演奏を終え休憩に向かう彼らを見送つた。食堂のたくさんのお客たちが彼らに拍手をしている。ベアトリーチエも小さく手を叩いた。

ベアトリーチエは暖かい気持ちで食事を再開した。シチューはもう冷めていたが気にならない。さっきの音を反芻し、ゆっくりスプーンを進めていたベアトリーチエの耳に口論が聞こえてきた。

「おい、報酬を半分しか払えないってのはどういふことだよ！」

顔を向けると、先ほどの楽団のバイオリンを弾いていた青年だった。でつぶりとした腹の中年の男に向かって怒鳴りつけている。

「わしだつて全額ちゃんと払つてやりたいがね。あんたたちの演奏がねえ。」

中年の男の方はにやにやと笑いながら、青年の言葉に答える。青年の表情に怒気が増していく。

「俺たちの演奏に不満があるつてののか！」

「確かにあんたたちはうまかつたよ。でもねえ、魔笛の奏者がいなくなつたじゃないか。」

厭味つたらしく喋る中年の男を見て、地元の客たちが呆れたように話し始める。

「あーあ、またシギルのケチがはじまつた。」

「あれでやり手取りなんだから困つたもんだ。親父は立派なオナーだつたのになあ。」

「親父が立派だから、慢心してああなつちまつたんだろ。呆れたもんだぜ。」

どうやら中年の男は、この食堂のオーナーのようだった。

「魔笛なんか無くて俺たちは立派にやってる！そこらの楽団には負けない演奏をしている！」

「でも魔笛っていったら楽団にとっては花形さ。それがなきゃ、いくらがんばったって片手落ちだ。全額払ってほしけりゃ休憩の間に魔笛を吹ける奴をつれてきな。」

そういつてオーナーの男は去って行った。

「あーあ、魔笛をふける奴なんてそこらに転がってるわけもないのに無茶いいやがる。」

「あの楽団たちも不運だったなあ。いい演奏してたのに。」

ベアトリーチェは思った。このままでは彼らが可哀想だと。彼らの優しい演奏は自分の心をいやしてくれた。

後宮にはいられなくなつて旅に出た。出て行ってからも心の中には不安や苦しみが渦巻いていた。そんな自分に音楽が楽しいものだと思ひ出させてくれたあの楽団の人たち。

自分は魔笛を吹ける。趣味でやってきただけだから、ぜんぜん下手だけど。だけど、もしかしたら彼らの力になれるかもしれない。

それに…心の奥では、彼らと一緒に一度音楽を奏でてみたいと思つたのかもしれない。

ベアトリーチェは勇気を出して席を立ち、青年の方に向かった。

「あの、わたし…僕が吹きましようか？」

話しかけたベアトリーチェに、青年の反応はあまり好意的でなかった。ベアトリーチェを訝しげな顔でにらみ、不機嫌な口調でたずねてくる。

「あんな何だ。」

「あ、僕は……ベル、ベルって言います。ちょっと旅をしまして。」

ベアトリーチェは咄嗟に偽名を考え、名乗った。

「魔笛を吹けるって？」

「はい、そんなにうまくはないですけど。」

「帰ってくれ。」

青年の表情はさらに不機嫌になった。

「俺たちは仮にもプロの楽団だ。自分の腕にも自信をもてない奴とは一緒に演奏する気はない。」

断られてしまった。

「そうですか。変なこといつてしまつてごめんなさい。」

もしかしたら自分の申し出は、楽団の人たちにとって失礼なことだったのかもしれない。そう思ったベアトリーチェは、素直にぺこりと頭を下げ、立ち去ろうとした。

「こらっ」

「ごっん」

「いてえ！」

何か固いものが打ち付けられる音を聞いて、ベアトリーチェは振り向いた。あつ気にとられた表情をするベアトリーチェの視線の先に、頭を抱えてうずくまるさきほどの青年と、彼と同じ楽団でギターを演奏していた色っぽい女性がいた。

「あんたちよつと待っておくれ。あたしたちに協力してくれるんだつて？」

「はい。でもご迷惑ですよね。ごめんなさい。」

「そんなことないよ。マーセルが失礼なこと言つてすまなかつたね。良ければ私たちと一緒に演奏してくれないかい？」

「おい、こら！何勝手なこと言つてやがる！」

ざつくんばらんな口調で話しかける女性に、マーセルという名前らしい青年が食つて掛かる。

「なにつてせつかくこの子が力を貸してくれるっていうから、お願いしようとしただけじゃない。」

「力をかりる？どうみても素人だぞ！」

「吹けるつて言つてるんだらう。何もしないよりマシさ。このまま黙つても報酬を半額に減らされて、馬車の修理代が払えなくなるんだよ。」

ベアトリーチエを置いてけぼりで、二人の口論は激しさを増していく。

「金の問題じゃない！俺たちはプロなんだぞ。自分たちの音つてもがある。素人が混ざれば演奏の質が落ちる。客にそんなものを俺たちの演奏として聞かせられるか！」

「そんなのやってみなきゃわからないじゃないさ。」

「とにかく俺はこの楽団の団長だ。客にきちんとした演奏を聞かせる義務がある。よく実力も分からない素人なんて、一時でも入れるわけにはいかない。」

マーセルの言った言葉に、女性の瞳が冷たくきらりと光る。

「へえ、そうかい。それで馬車の修理を頼んだ親方にはまた付けにしてもらつて、育ちざかりのルモとルミにおかわりを我慢させて、親方には迷惑かけてもいいつてことかい。だいたい、今日のはあんたがとつてきた仕事だろ。他にも依頼はあつたのに、あんたは一番箱が大きいつていつてここ選んじまつたじゃないか。ろくに調べもせず。そういうことをきちんとするのが団長の一番の仕事じゃないのかい。」

「ぐつ。」

女性の言葉に凶星をつかれたらしい。マーセルは言葉に詰まってしまう。

マーセルが何も反論できないのを見ると、女性はベアトリーチェの方に向き直りにこりとわらった。

「悪かったね。こいつが失礼な対応をしちまって。あたしの名前はイレナ。この楽団の副団長をやってる。といつても、小さな楽団だから役職なんて意味なしなだけだね。あんたは？」

「僕はベルです。ごめんなさい。あなたたちに失礼な申し出をしまして。」

ベアトリーチェの謝罪の言葉に、イレナは苦笑いをする。

「マーセルの言葉は真に受けなくていいよ。まだまだ、あたしらは駆け出しの楽団だからね。それより手伝ってくれるんだって？」

「はい、でもお力になれるかどうかは。」

「いいよ。あんたが吹いてくれれば、あとはあたしたちでなんとかする。よろしく頼むね。」

「わかりました。精一杯がんばるので、よろしく願います。」

また頭を下げたベアトリーチェに、イレナもまた苦笑する。

「頭をさげなきゃいけないのはあたしたちのほうさ。すまないね。仲間を紹介するからついてきておくれ。」

そう言っつてイレナはベアトリーチェを楽屋のほうに誘い、まだ不機嫌顔のマーセルの襟をひっぱり楽屋へと引きずって行く。

「ほら、あんたも時間がないんだから。とっとと行くよ。」

「俺はおまえを認めたわけじゃないからな。」

そう言っつて睨んでくるマーセルにぺこりと頭を下げて、ベアトリーチェは二人についていった。

イレナに連れられ、ベアトリーチエは楽屋にやってきた。ステージのほうから横にそれ、奥に入ったところにある部屋で、大きめの木造の扉に控室と書いてある。

「はいるよ。」

そう言うと同時に、イレナは返事も聞かずに扉を開ける。

「おそい。もうすぐ休憩時間おわっちゃうよ。」

「休憩時間つつたつて、あのデブおやじ値切ってきたんだろ。半額しかもらえないんだし、もうさぼっちゃおうぜ。」

イレナが楽屋にはいると同時に、あるときステージにいた双子の男の子と女の子が飛びついてくる。

「こらこら、まだ半額と決まったわけじゃないだろ。」

イレナは笑いながら双子に対応する。

「そんなこといっても、魔笛の奏者なんて今からみつかるわけないじゃん。」

「そうよね。あのオヤジ無茶いつてくれるわ。でも無茶を言われなくてもどうにもならないのが、中小楽団の悲しいところよね。」

「……。」

男の子の言葉に、同意するように頷いたのはステージで歌ってた背の高い少女だ。うしろにはピアノを弾いていた男もいるが、彼は一言もしゃべらない。

「ところで、その子だれ？」

少女がようやくベアトリーチエに気付いて、指をさして首をかしげる。それにイレナは自慢げににやりと笑う。

「やっと気付いたのかい。聞いておどろけ。この子が魔笛を吹いてくれるんだ。名前はベルっていうんだ。」

「よろしく願います。」

「おおおおおおお！？」

イレナの言葉に三人が感嘆の声をあげる。

「魔笛の奏者が見つかったの!？」

「すごいじゃん。」

「すごいすごいー!」

魔笛は魔力を持っていないと音すら出すことができない。魔法に関するものがほとんど無くなりかけたこの時代、吹ける人間は他の楽器の奏者よりかなり少ない。

「あの、でも、あまり上手じゃないですよ。」

双子からきらきらとした瞳で見られ、ベアトリーチェはちょっとのけぞってしまふ。

「吹けるだけですねえよ。俺、一回試させてもらったことあるけど、全然音がでないだもん。」

「ねえねえ、吹いてみせて。」

すがりついてこようとする双子を、イレナが止める。

「それよりあんたたち自己紹介がまだでしょ。ちゃんとしなさい。」

「あ、そうねっ。」

イレナの言葉を聞いて、まず双子の女の子のほうが一歩前にでる。胸に手をあて、精一杯そらし、おしゃまな表情を見せながらベアトリーチェに自己紹介する。

「わたしはルミ。この楽団のパーカッションしてるの。」

それを見て、すぐさま男の子のほうが乗り出し、右手の親指で自分を指しながら元気な表情で言う。

「俺はルモ。打楽器ならルミより俺の方がうまいぜ!」

「はあ、何言ってるのよ!わたしのほうがうまいわ!」

ルモの言葉に、ルミが眉を吊り上げ抗議する。

「どっちもまだまだ、二人そろってようやく半人前だよ。」

「「えー。」」

イレナの言葉に、同じ表情をして揃って声を上げた。

次に名乗ったのは、背の高い少女だ。そばかすの残る顔には、愛嬌のある表情が浮かぶ。

「私はマーサっていうの。歌を歌っているわ。」

「歌姫っていうにはちょっと鼻がひくいがね、歌ならそんなじよそのらの美人には負けないよ。」

「もう、イレナってば酷い。よろしくね、ベル。」

イレナのからかう言葉に抗議しながらも、マーサは明るい笑顔でベアトリーチェに話しかける。

「はい、よろしく願います。」

次にイレナが視線を向けたのは、大柄のピアノを弾いていた男。

「ウッド……。」

みんなの視線をあびた男が呟いたのはそれだけだった。イレナはちよつと呆れたようにわらった。

「すまないね。こいつの名前はウッド。見ての通り無口な男でね。」

ピアノの腕前は一流なんだけど、口下手な上にこの風貌で貴族受けが悪くてね。おかげでこの楽団に流れ着いちゃった可哀想なやつさ。

「そんなことない。この楽団で弾くのが一番楽しい。よろしく……。」
大きな体の頭が少し傾いたのを見て、ベアトリーチェも頭を下げる。

「ところで、マーセルの奴さつきからなにぶすくれてんの？」

一通り自己紹介が終わったところで、ルモが疑問を口にした。マーセルは楽屋にはいつてきてから、一回も喋っていなかった。

「ああ、いつものあれさ。」

それだけの言葉で、4人はああと頷く。

「あれか。いい加減大人になれよ。」

「この前なんて凄かったもんね。貴族相手に掴み合いの喧嘩しちゃうんだから。」

「少しは柔軟になれば、問題も起きないと思うんだけどね。」

口々に言われ、その表情がぴくりと歪む。

「うるさいな。もう時間だ。無駄口たたいてないで行くぞ。」

そう言っのっしのっしと楽屋からでて行ってしまふ。その後ろ

姿を見て、ベアトリーチェは不安になる。

「あの…悪いことしちゃったんでしょ…。」

「そんなことないさ。ただ、あいつは人一倍理想が高いからね。悪いやつじゃないんだけど、たまにああなっちまうのさ。」

そして改まったように笑顔で。

「あんたが私たちをたすけようとしてくれて、みんな感謝してるぞ。本当にありがとうね。」

「うんうん、ありがとうね！ベル。」

「ありがとう…。」

4人から口々に感謝の言葉をもらい、ベアトリーチェは微笑む。

「まだ子供なのに、立派な子だよ。」

しかし次にイレナが言った言葉に、顔が凍りついた。

「へ？」

「うんうん、ルミとルモも見習わなきゃならないわね。」

マーサの言葉に、ルミとルモが抗議の声をあげる。

「俺たちだってやればできるんだぞ。」

「そうよ！ルモはともかく私はちゃんとしてるもん！」

「あ、てめー！」

ベアトリーチェは慌てて声を上げた。

「あの、ちょっとまってください。僕はもう大人ですよ！」

だが、ベアトリーチェの言葉に帰ってきたのは、生暖かい視線だった。

「ああ、ごめんごめん。その年になると、もう自分は大人だと思ったりするもんね。」

「言葉づかいもきちんとしてるし、このまま大人になっても十分通用するよ。」

「あと何年くらいで成人だ？いいなー、俺もはやく大人になりて〜。」

ベアトリーチェの頬から汗がたらりと垂れる。

「僕はもう18です！とつくに成人してます！」

ベアトリーチエの叫びに、反応は劇的だった。

「えええええ！うそっ、私より年上なの！？」

「えっ…ほんとうなのかい…？」

「うそだ」。俺より2、3歳上なだけと思ってたのに。」

「じゅ、じゅうはっさいなの？」

悲鳴を上げるような声で驚かれる。

「はい…。」

いったい何歳だと思われていたのか。

「それで18かよ…。」

ぼつりと聞こえた声に振り向くと、出て行ったはずのマーセルがいた。

「あれ、マーセルどうしたの？」

「どうしたって、もう時間なのにおまえらが来ないから呼びに来たんだよ。」

そう言った後、ベアトリーチエの方を向き。

「お前もやるんだろ。はやく来い。」

そう言っ去って行った。

「あ、はい。」

それを見て、マーサたちは微笑みベルの手を掴んだ。

「それじゃあみんな、あのケチオーナーに一泡吹かせてやりましょよ。」

「緊張しなくていいんだよ。私たちが出来る限りサポートするから。」

「まかせとけ！」

「ルモは自分の心配したら？」

「なんだとお！」

楽団の人たちは明るい表情で声をかけあう。

「それじゃあ、みんないつてみようか。」

「「「おー！」「」」

イレナの掛け声マーサたちが手を振り上げ応じる。ベアトリーチ

エも小さな声参加した。ベアトリーチェはマーサたちに手を引かれ、初めてのステージへと走り始めた。

（ちくしょう…。）

マーセルの心境は暗澹たるものだった。

自分たちの楽団は実力なら他の楽団に負けていない。なのに、何故かいつも実力を侮ろうとする人間が表われる。確かに風変りな楽団だ。魔笛の奏者は未だいないし、団員たちには子供や少女もいる。全員が最初から、音楽を志していたというわけではない。

それでも一つの楽団として、音楽で身をたてられるよう上を目指していこうと決めたのだ。

なのに…。

マーセルはちらつと、自分の右手を見た。

蜂蜜色の髪と琥珀色の瞳の小柄な少年。いや、18歳だからもう大人なのか？この食堂のオーナーに報酬を値切られかけたとき、魔笛を吹けるといって少年は現れた。

今は荷物入れから取り出した銀の笛を両手で大切そうに持ち、自分たちと一緒にステージの上上がった。

人のよさそうな少年だった。申し出も純粹に親切心からだったのだろう。だが、滅茶苦茶に切られていながらもさらさらの蜂蜜色の髪、どこか気品の漂う仕草、丁寧でやわらかな物腰は育ちの良さを伺わせる。どこかの貴族のお坊ちゃんなのだろう。

マーセルは貴族出身の音楽家が好きになれなかった。真剣にやっているものもいるし、自分自信も貴族の出ではある。が、身分の高い貴族の娘がろくな実力もないのに高価な楽器を弾き、宝の持ち腐れのような演奏をして、それを聞いた周りの人間たちが褒め称える。そんな有様を見ていると虫唾が走った。

少年の持つ銀の魔笛は一見地味だが、良く見ると高貴な装飾が施されとても高価なものであるとわかった。この少年もきつと、そういう貴族たちと同じ類の人間なのだろう。実力には期待できない。

いや、もともと期待なんかしちゃいない。自分たちは魔笛の奏者なんかいなくても、立派にやっていけるのだ。

魔笛の奏者は希少な存在だけに、引く手数多だ。だから傲慢な人間が多い。自分たちの楽団に子供がいるのを見ると、馬鹿にし演奏も聞かずに去って行った。

そんな人間たちに頼ることはない。今回も本当なら自分たちだけでやれるはずだったのだ。この少年に望むのは、どれだけ足を引く張らないでくれるか。それだけ。あとは自分たちで観客を満足させ、オーナーの鼻を明かしてやる。

「何の曲にする？」

マーセルはベルという少年にそう聞いた。自分が言い出す曲なら失敗しないだろう。少年は少し考えると、こちらに顔を向け笑顔で言った。

「あの、食堂で一番はじめに引いた曲をお願いします。」

「ラッフェルのセレナーデか？」

「はい。それです。」

「わかった。」

一度やった曲だが、休憩をはさんでいるので客層も入れ替わっているだろう。演奏するのに問題はない。イレナたちにも、そう伝える。

「わかったわ。ベル、緊張してない？」

「少し緊張してるかもしれない。でも大丈夫です。」

イレナたちは少年のことが気に入ったらしい。笑顔で話しかけている。

「おい、なんか一人増えてるぞ。」

「魔笛の奏者か？」

「そんなはやく見つかるわけないだろう。」

休憩前の客たちがまだいたらしい。口々に噂しあつ。そんな客の後ろで、オーナーがなめきつた態度でにやにやしている。成功するわけないと思っっているのだろう。それは自分たちの実力がなめられ

ているということだ。

「よし、やるぞ。」

マーセルの発した言葉と共に、全員が楽器を構えた。全員は始めるまえに1度、音を出す。

ギター、ピアノ、バイオリン、打楽器、そしてマーサの声が響いた。だが、魔笛の音は聞こえない。見てみると、ぱちくりと少年は目を瞬かせている。

（音合わせもとくにできないのか。）

マーセルは実力のない貴族の少年という自分の予想が半ばあたりかけていることに眉をしかめたが、もうここまで来たのだから仕方ないと演奏を開始した。

心を落ち着かせバイオリンの弓を引く。長く伸びる綺麗な音が、高く低く上下し食堂に優雅に響き渡る。その音色は美しく、食堂にいる女性たちはうっとりとし耳を傾ける。

その音にギターの音色が混じっていく。イレナの性格を表すように力強く、安定した音がメロディに厚みを加えていく。

この曲はバイオリンで始まり、次々といろんな楽器が加わって行く。

ピアノの音。セレナーデの名にふさわしい優美な演奏。そして双子たちが加える打楽器の音。セレナーデにしては少し陽気すぎるかもしれない。

マーサの歌が加わる。美しい声は演奏に負けず、食堂中に響き渡る。

そして次が、ベルの番だった。もしかして音も出せないのでは？と今更な不安が、マーセルの頭を過ぎる。

6人の奏でる演奏がついに魔笛の部分にさしかかる。マーセルは横目でベルが息を吸い込み、魔笛に口をつけるのを見た。

ベルの演奏がはじまる。

そして…。

「すごい…。」

イレナがそう呟くのが聞こえた。演奏中は集中している彼女が、何か言葉を発するのは珍しい。双子たちも、マーサも、ウッドも目を見開いてベルを見ている。

自分も同じような状態になりかけていた。

今まで聞いたこともないような高く澄んだ音色。魂を奪われるような美しさと、精霊のような神聖さを持った美しい笛の音。

思わず演奏が止まりそうになる。

だがその音が自分たちと一緒にメロディを紡いでいつているのを聴き、慌てて意識を演奏に戻す。魔笛の音は美しい音色で曲を奏でていく。

魔笛の音はそれを吹く人間によって変わる。人によってそれぞれ持つ魔力が違うからだと言われている。マーセルはこれほど美しい魔笛の音を今まで聞いたことがなかった。

そしてその音が奏でる音階は、恐ろしく正確だった。

魔笛は魔力がある人間なら簡単に吹けると誤解されやすい。音孔がないためだ。だが、それは逆だ。吹き込む息の量、触れる手の位置、そしてそこに含まれる魔力という捕らえられない概念。音はすぐに変わってしまう。正確な音程を奏でるのはとても難しい。

観客たちも目を見張るようにステージの一点を見つめている。あのオーナーまでが茫然とした顔で、魔笛を吹く少年を見ていた。

魔笛は魔力を使った楽器であり、その特殊さからどんな音でも出すことができると言われる。『第二の歌』と言われる所以だ。ベルの奏でる音は、その名の通りに自由自在に高音低音へと展開していく。

マーセルはバイオリンを握る手に力をこめ、演奏に注力する。他のみんなも同じように思ったらしい、6人の音に力がもどる。

食堂全体に響き渡るように7人の音が美しい音楽を奏でた。

わああああ

食堂とは思えないほどの歓声が響く。

(うまくできたのかな…。)

その様子を見たベアトリーチエは演奏を終え、ほっと胸をなで下ろした。この様子なら報酬も値切られることもないのではないだろうか。

「すごい、すごいよベル！」

「わっ。」

ルミが突然飛びついてきた。ベアトリーチエは驚いて声を上げる。ルミは興奮したように顔を紅潮させ、自分の体にしがみついてくる。

「うん。凄いね。」

音楽つて凄い…。こんなに多くの人を感動させられるのだから。

マーサやイレナがベルのもとへ駆け寄ろうとしたとき。

「あー、あいつ逃げようとしてるぞ！」

こそこそと立ち去ろうとしている食堂のオーナーを、ルモが見つけた。

「なんですって！」

「往生際のわるいやつだね！」

「むきー！」

楽団員たちはすぐさまステージをかけより、オーナーの周りを囲む。青い顔をするオーナーにマーサたちが悪乗りして報酬のうわのせを要求する。それにお客さんたちも味方して食堂はちよつとした騒ぎになった。

(もう、大丈夫かな。)

その様子を見てベアトリーチエは微笑むと静かにステージを立ち去った。

食堂から出たベアトリーチェは、街の出口へと歩き始めた。太陽は西の空にあり、大分時間が経っている。次の街へと出発しなければならぬ。

「ちよつとまつてよ、ベル！」

そんなベアトリーチェの後ろから声がかかった。振り向いてみると焦った顔のマーサがいた。その後ろにはルミとルモもいた。

「なんで黙って言っちゃうのよ。」

マーサはベアトリーチェが立ち止まるのをみて安心した表情を見せると、すぐにすねた顔をする。

「もう大丈夫かなって思ったんだけど。」

「もう、お礼も言う前にいなくなっちゃってるんだもん。焦ったよ。」

「う、ごめんね。」

なんだか申し訳なくなりベアトリーチェは謝る。

「ベルのおかげであのケチオーナーから、報酬きつちりとりたててやれたぜ！」

「それだけじゃないのよ。ボーナスも貰っちゃった。ベルのおかげよ！ありがとうね！」

ルミとルモが笑顔で言うのをみて、ベアトリーチェは本当に手伝って良かったと思った。

「それは良かった。こちらこそ楽しい時間をありがとう。それでは。」

そう言って満足して去っていくこうとするベアトリーチェを、またマーサは慌てて引き留めた。

「どうかしました？」

マーサより身長が低いベアトリーチェは、自然と見上げる形になって首をかしげる。

「ね、ねえ、ベルはいまどこの楽団にも入ってないんでしょう。私

たちの楽団に入っ て見ない？」

「僕が楽団に？」

「うんうん、ベルなら絶対人気者になれると思うよ。」

彼らの力になれたのは嬉しかったが、自分の実力が本物の演奏家には全然及ばないと思っ ているベアトリーチェはその申し出に驚いた。

「おまえら勝手に勧誘するんじゃない。」

期待するようにマーサとルミ、ルモがベアトリーチェの顔を見てい ると、後ろから不機嫌な声がかかる。そこにいたのは腕を組ん でしかめっ面をしたマーセルだった。

「む、もしかして反対するの？ベルの演奏ものすごかったじゃん。ベルが入っ てくれれば、私たちの楽団ももっと良くなるよ。」

マーサも不機嫌な顔をしてマーセルに食っ て掛かるが、そんなマーサを無視してマーセルはベアトリーチェに話しかける。

「おい、おまえに聞きたいことがある。」

「はい、なんででしょうか。」

ベアトリーチェは首を傾げた。

「なんでセレナーデの23小節目のコン・モートを無視した。」

「コン・モート？」

「そうだ。あそこはルフェルが憧れる女性の活発さを表現するためコン・モートの表現記号が入っ ている。だが、お前はそれを無視していた。」

「もう、お客さんは喜んでたんだからいいじゃん。」

マーセルの質問に、マーサが反論する。

ベアトリーチェは数瞬黙りこくっ たが、申し訳なさそうにおずおずと口を開いた。

「あの…ごめんなさい…コン・モートってなんですか…？」

「はあ？」

予想だにしない答えに、マーセルは間抜けな声を上げる。

「コン・モートは動きをつけてという記号だ。それくらい知っ てる

だろう。」

「ごめんなさい。音楽を習ったことはないから。」

ベアトリーチェは音楽が好きだが、正式に習うことはでき無かった。アーサーさまがフィラルドにいたころは演奏会に連れてってもらえたりしたが、いなくなつてからは聞く機会も減つた。それでも聞いた曲を魔笛で練習して吹けるようになっていった。

「習つたことがないだと？じゃあ、今回の曲はどうやって吹いたんだ。」

「何度か聞いたことあつた曲があつたから。それに今日もあなたたちの演奏を聞いたし。」

マーセルはそういうベアトリーチェの顔をしばし見つめたが、はあと溜息をついた。

「とにかくだ。俺たちは演奏で食つていく人間だ。あなたの演奏はたしかに素晴らしかった。素人とは思えない素晴らしさだった。それでも真剣に音楽を志して無い奴を、俺たちの楽団にいれるわけにはいかない。」

「そうですね。」

マーセルの言葉に、ベアトリーチェは頷いた。彼らは真剣に音楽をやっている。だからあんなに素晴らしい演奏ができるのだ。

あつさりと自分の言葉に頷いたベアトリーチェに、マーセルが微妙な顔をする。しかめっ面をして頭をがしがし掻き筆ると。

「あー、もう。こんなこと言いたかつたわけじゃないんだ。とにかくあなたのおかげで助かつたよ。お礼を言いたい。ありがとう。」

「いえ、気にしないでください。僕も楽しかったです。」

「あと、これだ。」

そう言つてマーセルは何かの袋をベアトリーチェの手に置いた。ちやりつと金属の鳴る音がする。お金が入っているのだろうか。

「あの…、これは？」

目をぱちくりさせたずねるベアトリーチェに、マーセルは言った。「あなたの演奏の分の報酬だ。」

「そんな受け取れません。」

自分は魔笛を吹いただけで、報酬は彼らの演奏への対価なのだ。ベアトリーチェは慌てて首をふった。

「受け取ってくれ。俺たちはプロだ。協力してもらったからにはちゃんと報酬は払う。」

しかしマーセルにそう言われ、受け取ることにした。

「ありがとうございます。それでは僕は行かなきゃいけないので、どこに行くかは決めてないが、王都からはなるべく離れなければなりません。」

「ベル、いつちょうの？」

ルミが悲しそうな顔でベアトリーチェの顔を見る。

「マーセルのケチ！」

ルモがすねたような顔で叫ぶ。そんな双子の頭を撫でて、ベアトリーチェは別れの挨拶をした。

「それじゃあ、みなさんがんばってください。」

「じゃあな。」

「じゃあね…。」

「ばいばい…。」

マーセル以外のメンバーは消沈したような顔をしていた。名残惜しいような申し訳ないような気もしながらも、ベアトリーチェは振り返り歩き出す。

道をしばらく進んでいると、ちやりつとまた硬貨の入った袋があった。あらためてベアトリーチェはその袋を見つめる。後宮から持ち出したお金に比べ、それはとても少ない。

でも、はじめて自分で稼いだお金かもしれない。

「楽しかったなあ…。」

ステージに立ったときの緊張、みんなで音を合わせて音楽を奏でていく楽しさ、喜ぶお客さんの拍手と歓声。何もかもがはじめての経験だった。

もう自分は王族ではないので、いずれ仕事を見つけなければなら

ない。音楽でお金を稼ぐ。それはとても素晴らしいことに思えた。自分に出来ることではないと思うけれども。ベアトリーチェは手にした袋のわずかな重みを感じながら、微笑んで歩き出した。

「あーあ、いつちゃったよお」

「マーセルのケチー。バカー。」

そんな風に言う団員たちに、マーセルは不機嫌に言い返した。

「うるせえな。俺には団長としてメンバーを選ぶ義務があるんだ。」

「そんなこと言ってるから、いつまでたっても魔笛の奏者がみつからないんだよ。あー、もう本当に凄い子だったのに。」

確かにそうだった。後悔がないかと言われれば、かなりあると言える。しかし一緒にやるなら、本気で音楽に取り組む人間が欲しかった。あの少年の場合、不真面目とはちょっと違うのかもしれないが……。

「まあしょうがないよ。縁があればまた会えるさ。私たちもそろそろ出発しないと。」

オーナーとの交渉でその場にはいなかったイレナが溜息をはきながらいう。

「……。」

ウッドも喋らないがどこか落ち込んだ様子だった。

マーセルの胸にもみんなと同じように残念な気持ちがかまっていた。

そんな6人のもとに、街の人があわてたようにかけてくる。

「おい、あんたら、あのぼっちゃんと一緒に行かないのか？」

「はあ？」

何故、関係のない町人にまでに言われるのか。聞き返したマーセルに、町人は血相を変えて言う。

「それがあのぼつちゃん、カーナンタの森のほうに歩いていったつていうんだよ。しかもひとりで。」

「カーナンタの森だと!?!」

野犬がでるといわれる危険な森だ。普通の旅人は迂回して進路をとるか。馬車をつかって明るいうちにすぐに走り去る。

今から歩いて向かえば、必ず森の中で日が落ちる。

「なんでそんな場所に…。」

そう考えて、マーセルは少年の世間知らずそうな素行を思い出す。服もまだ汚れてはおらず旅慣れてない様子だった。

「マーセル…。」

ルミとルモが不安そうな顔でこちらを見てきている。他の団員たちをみると、みんな同じ顔をしていた。

「仕方ねえ。親方のところについて馬車をとってこい。すぐに追いかけるぞ。」

「わーい!」

「やったあ!」

みんなから歓声があがる。その様子に溜息をつきながら、マーセルは意識を切り替え大声で言った。

「まだ仲間にいれるって決めたわけじゃないからな。さっさと準備しろ。見失ってもしらんぞ。」

マーセルの号令に5人は、すぐにベルを追いかける準備にとりかかった。

52・『知らないこと』1

「もう、びっくりしたよ。ベルったら、カーナンタの森に平気で入ろうとしてるんだもん。」

「ごめんなさい……。」

たびたび見せられるマーサの呆れた表情に、ベアトリーチェは申し訳なさそうに謝った。

「とにかく無事で良かったな。」

「はい、すいません……。」

腕を組みながらマーセルも言う。

ベアトリーチェは森に入ろうとしたところを、追いついたマーセルたちに呼び止められた。入ろうとした森が野犬のいる森だったらしく、わざわざ自分を助けにきてくれたらしい。申し訳なく感じた。特にマーセルという青年には、あまり良い印象を持たれていなかったような気がしていたので、彼が慌てた様子で自分を呼び止めたことに驚いた。

そうして彼らの馬車に乗せてもらうことになった。

「次の街までお世話になります。」

ペこりと頭を下げたベアトリーチェは、イレナに呆れた顔をされてしまった。何かおかしなことを言ってしまったのだろうか。ベアトリーチェは小首をかしげる。

「それは全然問題ないんだけどね。ベルは何処に行きたいんだい。」

「へ？」

「次の街って言うても、北に行くならベルド、南の方に行くならアルガ、このまま西に行くならヨルダに向かわなきゃいけないんだよ。あんた全然、行先をいわないんだもん。」

「あつ……。」

ベアトリーチェは言葉に詰まってしまった。どこに行くかなんて決めていない。だから馬車に乗せられてそのまま、そういうこと

を思いつかなかつたのだ。

「もしかして行く場所を決めてなかつたとか!？」

行先を決めてない旅人なんて珍しく、ルミが驚いた声を上げる。

「はい…。とりあえずエルサティーナ以外の場所に…。」

ベアトリーチエは素直に白状した。その表情に一瞬暗い影が差したのを、マーサは気付いた。マーサがイレナに視線を送ると、イレナも気づいたようで静かに首を振って返した。

「それじゃあ、俺たちとアルセーナに行こうぜ!」

ルモが明るい表情で言う。

「アルセーナ?」

「おう、そこで音楽のコンクールがあるんだ。田舎のほうだけど、結構大きなコンクールなんだ。俺たち、そこに出るんだぜ。」

「行先決めてないなら、ベルも一緒に行かない?」

アルセーナは大陸の南方にある国だ。特に目立った産業はないが、温暖な気候であり観光などで人気がある場所でもある。そこなら、エルサティーナからもフィラルドからも離れているので問題はない。でも…。

「それはちょっと…。迷惑になってしまうから。」

エルサティーナからもフィラルドからも離れているということは長旅になる。それに自分がついていったら楽団の人に迷惑をかけてしまう。

「迷惑じゃねーよ。」

聞こえた声に驚き顔を上げると、マーセルがこちらから顔を背けながら言った。

「というか、お前みたいな旅慣れて無い奴をここで放り出したほうが、あとあと心配になって迷惑になりそうだ。」

「あ、それは言えてる!」

「確かにそうかも。」

マーセルのぶっきらぼうな言葉に、ルミたち女性陣が意を得たように同意した。

「うっ…、僕そこまで心配そうに見えますか？」

「心配でしょう。旅慣れてないお坊ちゃんって感じたもん。」

散々な言われようにベアトリーチェは言葉に詰まってしまう。でも、確かに危険な森に入りかけたのは事実なのだ。マーセルたちの言うことは的を射ている。

「あたしたちはこんな所帯だから、一人増えたところで問題ないさ。遠慮なんてしないでいいんだよ。」

目的のない旅。だから、一緒に行動してくれるという人たちがいるのなら、一緒に連れてってもらうのも悪くないのかもしれない。

「それじゃあ、お世話になります。」

ベアトリーチェの言葉に、馬車のみんなは微笑んだ。

「それじゃあ、アルガに向かってくれ。」

「おう…。」

馬車の御者を務めていたウッドが短く返事をする。そういえば馬車はゆっくり進んでいた気がする。自分が行先を言わなかったのであまり進まないようにしてくれていたのかもしれない。

申し訳なく思いながら、彼らの心遣いに感謝した。

王妃だった頃いろいろなことを勉強したつもりでも、旅に出てからは失敗し通しだ。自分はまだ何も知らないのかもしれない。

「あつ。」

ベアトリーチェはふと重大なことに気付いた。

「どうしたの、ベル？」

急に叫び声をあげたベアトリーチェに、ルミが不思議そうに聞く。

「そういえば食事代を払っていませんでした。」

食堂で食事をした後、マーセルたちに手を貸して、そのまま満足して立ち去ってしまった。食事した料理の代金を払ってないことにいまさら気付いたのだ。

これでは食い逃げではないか。ベアトリーチェの頬に汗が伝う。

「ああ、それならあたしたちが払っておいたから大丈夫さ。」

「あつっ、ご、ごめんなさい…。お返しします…。」

ベアトリーチエは慌てて荷物袋をこそこそ漁る。

「いいのいいの。それにオーナーに今後の食事代をただにするように言っただけだから全然損してないよ。ベルも私たちの仲間になったわけだし、むしろ払ったのがミスだったかも!? ああー、失敗した!」

マーサが言い放つ。

そんなことまで決めさせてしまったのか。楽団たちのバイタリテイに、ベアトリーチエの頼に違う汗が伝い、自業自得とはいえあまりのオーナーの処遇にベアトリーチエは少し同情してしまった。

翌朝、ベアトリーチェを仲間に入れたマーセルたちは、アルガの街にたどり着いた。

「うーん、やっぱり馬車は寝心地悪いよ。やっと一息つける。」
あくびをしながら、マーサが馬車から出ていく。ベアトリーチェは布でしきられた馬車の荷台から顔を出し、着いた街の景色を眺めた。通りには早朝なのにたくさんの人が行きかっている。

「前の街より人が多いだろ？この街は南の特産品が一手に集まってくるのさ。」

「わあ、活気がありますね。」

王都には敵わなくとも、十分な賑わいだった。野菜を売っている露店の店主の声が大きく響き、道を行き交う人々が足をとめて商品を見ている。籠を持った女の人たちは何人かで集まり、道端で噂話に花を咲かす。

「朝市では野菜なんかの食糧なんかが多いけど、もう少ししたらいるんな店が出てくるよ。」

「へえー、凄いですね。」

ベアトリーチェの目には遠目からも鮮やかに光る果実の赤や野菜の緑が目映った。大陸の西、フィラルド出身のベアトリーチェには見たことないものも多かった。

「ねえねえ、面白い物いかない！面白い物！」

顔を洗って戻ってきたマーサが浮かれた表情言う。

「ん？まだ食料とかは不足してないだろう。」

答えを返したマーセルの表情は、まだ起きたばかりで眠そうだが、声にも力が入ってない。朝は弱いのかもしれない。その返答を聞いてマーサがわかってないなあという風に首を振り、口を尖らせて言い募る。

「そんなのじゃなくて、ショッピングよ！ショッピング！」

「シヨツピングう？」

ますますわからないと言った風にマーセルが眉を寄せる。

「そうそう、いろいろ市を見て好きなものを見たり買ったりして楽しむの。普段の食料を買い込むだけのあれは買い物なんていわないわ。補給よ、ただの補給！味もそっけもないじゃない！そんなのじやなくて、楽しんで買い物するの！」

手を振り上げ主張するマーサに、イレナも同意する。

「いいんじゃないかい？お金にも余裕あるし。」

「うーん、まあそうだな。」

頭をかいて同意したマーセルに、マーサが飛び上がる。

「やったー！ベルも行くうね。結構、大きな街だから、珍しいものもあるかも。」

「う、うん。楽しみだね。」

マーサの勢いに圧倒されながらも、ベルも頷く。遠目からみた市場には、見たことがないものがたくさんあり興味が惹かれた。

「それじゃあ、ルミとルモを起こさないかね。」

そう言っただけは、まだ起きない双子の方へ向かった。

「わーい、買い物！買い物！」

「買い物だー！」

ルミとルモが嬉しそうに馬車のまわりを走り回る。

「まったくあいつらはガキだなあ。せつかく街についたのに休めそうにないぜ。お互い大変だな。」

マーセルはウッドにそう話しかけたが。

「俺、馬車の留守番をする……。」

そう言っただけは馬車に戻っていく。

「なんだと！？てめえ、一人だけ休憩するつもりか！待てっ！」

慌てて追いかけてしようとしたマーセルの襟首をイレナが掴む。

「ほら、団長行くよ。」

「くそっ、俺も二度寝する！お前たちだけで行け！」

「何言ってるのさ。団長なら団員の面倒をみるもんだろ。」

「そうそう、早く行こうよ。」

笑顔のマーサがマーセルの右腕を掴む。

「おっかいものー！おっかいものー！」

「行こうぜー！」

双子がマーセルの両足を掴む。

「ちくしょう！はなせっ！俺は馬車の御者をやって疲れてるんだ！」

「ベルもこつちを掴んで！」

「へっ？」

「ほら、はやく。」

「う、うん！」

マーサに言われてベアは思わずマーセルの左腕を掴んでしまう。

「お前までこいつらの味方する気が！」

「あ、ごめんなさい。」

マーセルに睨みつけられ慌てて手を離そうとするが、マーサの聲がそれを止める。

「離しちゃだめ！このまま引きずってくよ。」

「せーのー！」
ずるずるずる

団員たちに各所を掴まれ、マーセルの体は市場のほうに運ばれていく。女子供だけなので力がたりず、地面にはマーセルが引きずられた後がつけられていく。

「おい、てめえら、やめろ！」

ベアトリーチェもちよつと頬から汗を流しながらも、マーサたちの協力する。体をなるべく上に持ち上げようとしているのは、ベアトリーチェの思いやりだったが力がなかったのでまったく意味がなかった。そのまま団員たちは団長を市場へと引きずっていった。

市場につれてこられたころには、さすがにマーセルも自分の足で歩いていた。顔は仏頂面だったが。

「くそお、好き勝手やりやがって。」

「う、ごめんなさい。」

ベアトリーチェは服についた土ほこりを払ってあげる。

「お前もあいつらと一緒に引きずりやがって。」

「つい乗せられちゃって…。」

顔を逸らし頬を掻くベアトリーチェに、マーセルは溜息をついた。

「はあ、仕方ねえなあ…。もういいから、お前らもあいつらと一緒に何か買ってこい。」

マーセルの視線の先には、ルミたちがいろんな露店を見て回っていた。日はずいぶんと上り、露店は野菜や果物だけでなく、装飾品や珍しい布なんかも増えていつている。マーサたちはそれを楽しげに見て回っている。

「はい。」

「あ、こらっ！」

そう言っ駆け出そうとしたベアトリーチェだが、腕を引っ張られ引き戻される。

「いきなり飛び出すな。あぶないだろ。」

目の前を馬車が通り過ぎていった。

「案外おつちよこちよいなんだな。楽しむのはいいけど気をつけるよ。」

「う、ごめんなさい。」

確かに少し浮かれていたかも。見たことのない地方の品、市場にもこんな自由に来たのは初めてだ。自分の気持ちは思いのほか浮き立っていた。

「しかし細いな。本当に18歳なのか？13歳ぐらいじゃないのか？」

「ほ、本当ですよ。」

そんなに自分は幼く見えるのだろうか。

マーセルの態度には悪意があるわけではなく、むしろ真剣に疑問に思っているようでベアトリーチェはちよつと落ち込みかけた。確かに王宮にいたころから小柄で童顔な容姿だと思っていたが、団員たちにルミたちより少し上程度だと想われたのは改めて考えてみるとショックだ。

そんなにも自分は大人としての魅力に欠けていたとは…。

「はあ、僕ってそんなに幼く見えますかね…。」

「あ…。ま、まあそのうち大きくなるさ。」

暗く沈んでしまったベアトリーチェに、さすがにマーセルも悪いことを言ってしまったと思っただけらしい。慰めの言葉をかける。

「おい、ベル、マーセル、おいてっちまうよー!」

「むしろ俺はおいて言っただけで欲しかったんだよ!」

二人がついてこないのに気づいて、マーサが遠くから声をかける。マーセルは怒鳴りかえす。

それからはベアトリーチェは5人と一緒に市場を見て回った。ルミ、マーサ、イレナの女性陣は服や布などを見てまわり、今、装飾品の露店で足を止めていた。

「ねえねえ、これどうかなあ?」

「いいんじゃないの。」

髪飾りをつけて聞いてくるマーサに、ルモがおざなりに答える。

「全然見てないでしょう。」

「良く分かったな。その通りだ。」

かれこれ1刻は同じ露店に留まっている女たちに、マーセルたちは適当な態度を隠さない。むしろ、つかれた表情で隠す余裕すらない感じだ。

「もう。役に立たないんだから。ベルはどう思う?」

「うーん、その服ならこっちのほうがいいんじゃないかな。」

ベアトリーチェは蝶の模様が彫られた髪飾りをマーサに渡す。

「ん、どれどれ。あっ、確かにいいかも！」

「うん、マーサに良く似合ってるね。」

ベルの選んだ髪飾りは、マーサの赤い髪とよく合っていた。

「これにしようかな！これください！」

「はい、まいどありがとうね。」

買うのを決めたマーサはポケットから銅貨を取り出し店主へと渡す。

「えへへ、このまま着けちゃおう。」

「ベルはセンスがいいね。マーセルたちと大違いだよ。」

「ほっとけ……。」

ベアトリーチェの選んだ髪飾りを気に入ったらしく、そのまま頭に着ける。マーセルは地面にこのまま座り込んでしまいたそうな表情だ。

男装しているから自分のを選ぶことはできないが、他の娘が着けるものを選ぶのも十分に楽しい。そんなベアトリーチェは、上着の裾がくいくいと引っ張られるのを感じた。下を向くと、顔を輝かせたルミがいる。

「ねえねえ、ベル、私のも選んで！」

「うん、いいよ。」

可愛らしくお願いするルミにベアトリーチェは微笑みを返した。

商品の中からルミに似合いそうなのを探す。ルミとルモはお小遣いをもたらっていた。それに十分足りる中で、ルミに似合いそうなものは……。

「これなんてどう？」

ピンクのりぼんが着いた髪飾り。

「うん、それにする。」

ルミはそれが気に入ったようで、頬を紅くさせ笑顔で頷く。

「えへへ。」

買ったばかりのりボンの飾りをつけてルミも微笑む。マーサたちは満足したのか笑顔で露店を後にした。

それについていくベアトリーチェは両肩をぽんつと叩かれる。振り向くと疲れた顔をしたマーセルとルモがいた。

「よくやった、ベル。」

「お前のおかげで助かったぜ……。」

2刻ほどは続く彼女たちの装飾品の買い物も普段の半分で終わらせたベアトリーチェの快挙だが、当の本人はよくわからず首をかしげただけだった。

53・『知らないこと 2』(後書き)

6月13日まで更新停止します。ごめんなさい。

女の子たちの買い物が終わると、団員たちは食べ物屋台がある地区へとたどり着いた。

太陽はちょうど空の真上に差しかかっている。もうお昼の時間だ。

「おなかへった〜。」

辺りにただよいいい匂いに、ルミはお腹を押さえて声を上げる。

「う〜ん、どこか店に入って食べるか？」

「せっかくだから屋台で食べようよ〜。」

「そうね。せっかくだからここで食べていきましょう。」

マーセルの問いかけに、ルミとイレナが答えここで食事をとることになった。

「あー、あそこの鳥の香草焼き食べたい！」

「俺も俺も！」

団員たちはそれぞれ食べたいものを見つけると屋台の店主に話しかけ、串焼きや具をばさんだパンを買い、そのまま道端でそれを口にしていく。

「どうした？お前も何か買ったらどうだ？」

マーセルは、何やらきよろきよろしているベアトリーチェに話しかけた。

「は、はい。」

それでもベアトリーチェはなかなか動かさないとしない。

「もしかしてこういう場所に来るのはじめてか？」

マーセルはこの少年が貴族の出自らしきことを思い出した。世間ずれしていない態度に、上品な顔立ち。本人は何も言わないが所作のひとつひとつが高貴ないでたちであることを伺わせる。

「はい。」

実際、ベアトリーチェはこういう場所に来たことがなかった。お転婆ではあったものの、歩きながら食事を食べるという経験もない。

遠目でみた経験はあったが、この場にあらためて立って見ると大きなカルチャーショックを受けていた。

このままではずっと食べ歩いているルミたちを見学していそうなベアトリーチェに、マーセルは苦笑してまた話しかけた。

「とりあえず、あそこの串焼きを注文してみる。あれなら当たり外れがないからな。」

そう言っつて串焼きを売っている屋台を指し示す。

ベアトリーチェはマーセルの顔を目をぱちぱち瞬かせてじっと見つめる。その仕草が、まるで親に本当にいいのか問いかける子供のようで、マーセルはまた笑ったあとその背中を押してやる。

「ほら、行ってこい。」

ベアトリーチェはまだちょっとマーセルの顔を見つめたが、こくりと頷くと屋台のほうに向かった。

「あ、あの……。」

話しかけるだけで緊張している姿は微笑ましかった。

「どうしたんだい？お坊ちゃん。」

「串焼きを、ひとつ、ください。」

喋り方までたどたどしくなっているがなんとか言い切る。

「塩にする？たれをつける？」

「し、しおで。」

「あいよー！」

気のいい店主は挙動不審な客にも笑顔で答え、串にさした肉を火であぶる。注文を終えたベアトリーチェは、ほっとした様子で少し微笑みを浮かべた。

「お待ちどうさん！串焼きひとつで5コルペだ。」

コルペは銅貨5枚。

串焼きを差し出されたベアトリーチェは、皮袋に手を入れお金を取り出そうとする。

ちゃりんと貨幣に手が触れたとき、ベアトリーチェはこれがマーセルにもらったお金だったことを思い出す。自分が初めて稼いだお

金。使ってしまうのが勿体ない。そんな気持ちで沸いた。

ベアトリーチェはわずかに逡巡すると別の袋からお金を取り出し主人に手渡した。

「ごめんなさい、これでお願ひできますか？」

「んっ…えっ!？」

額こうとした屋台の主人だが、手渡されたものをみて驚きの声をあげる。

「ええ!？」

「ちよっ!」

いつの間にかベアトリーチェのことを見ていた仲間たちも同じように声をあげる。

「おい、ベル!」

慌てた様子で駆け寄ってきたマーセルが、ベアトリーチェの傍にぐる。ベアトリーチェは周りがどうしてそういう反応したのかわからずきよるきよるしてしまう。何かまずいことをしてしまったのだろうか。

「おっちゃん、俺が払うよ。」

マーセルはそう言って主人に自分の銅貨を取り出す。

「え、僕が注文したものですから僕が払わなきゃ。」

「いいから。」

わけがわからないまま止めようとするベアを無視して店主にそれを渡してしまう。主人のほうも立ち直った様子で銅貨を受け取り、ベアトリーチェへと向き直りその手にしっぴかり金貨を返した。

ベアトリーチェが主人に渡したのは金貨だったのだ。

「ぼっちゃん、今度から気を付けなよ。」

「ああ、悪いな。ほら、ちゃんとしまえ。」

相変わらず状況を理解できないベアトリーチェの手を取り、袋の中にそれを入れさせる。

「お前ら、いくぞ。」

「ええ。」

「うん。」

マーセルの呼びかけに楽団のみんなも頷く。そのまま一座はベアトリーチェの手を引き歩き出した。

そして市場から大離れた場所まで来て立ち止まる。

「ベルうゝ、あんまりびつくりさせないでよ。まさか、金貨を出すなんて。」

「え、もしかしてこの金貨って使えないの…?」

どうやら金貨を渡したのが悪かったらしい。大陸で使われている貨幣だと思っていたのだが、もしかしたらここらへんでは価値が無いのだろうか。

「ぎゃあ!もう!ちゃんとしまつて!しまつて!」

袋から金貨をまたとりだして見つめるベアトリーチェに、マーサが慌てて縋り付き袋の中にしまわせる。

「ど、どうしたの?」

ベアトリーチェはマーサの剣幕にまた戸惑ってしまう。

その様子を見てマーセルは顔を手で覆い溜息をつく。

「使えないっていえば使えないが、お前の考えている理由とたぶん逆だ。」

「逆?」

首をかしげるベアトリーチェに、マーセルが答える。

「価値がありすぎるんだよ。金貨一枚で普通の人間の半年分の稼ぎになる。お釣りなんてだせないぞ。」

「わたし金貨なんてはじめてみたよ…。」

マーセルの言葉にルミが頷く。

「そうなんですか…。」

何も考えずに渡してしまったが、あの屋台の店主はさぞ困ったのかもしれない。悪いことをしてしまったと反省していると、マーセルはさらに言葉をつづける。

「それだけじゃない。」

「え？」

首をかしげるベアトリーチェに、マーセルは真剣な顔をして語りかける。

「そんな大金を大勢の前で不用意に取り出せば、悪い人間からも目を付けられることになる。あの屋台の店主は良い人だったが、そういう人間ばかりとは限らない。こちらへんは治安が良い方だが、スリだっていないわけじゃない。スリならまだいい。直接暴力で奪い取るうとする人間も出てくるかもしれない。」

「あつ…。」

ベアトリーチェはマーセルの言葉に、みんながあの場所をすぐに立ち去った理由を理解する。

「ごめんなさい…。」

知らなかった。貴族ではない社会で金貨がそんなに価値があることも。それが危険を引き寄せてしまうことも。

俯いてしまったベアトリーチェの頭に、ぽんつと暖かい手がのせられる。

「まあ、これから気を付ければいいのさ。私たちがついてるからさ。」

「イレナはベアトリーチェの頭を撫でて優しい声で言った。

顔を上げると微笑むみんなの顔があった。マーセルだけはベアの頭に置きかけた手をぎこちなく戻し、微妙にしかめっ面をしていたが。

「イレナにいいところ取られちゃったな。どんまい。」

「う、うっせえ！」

からかうルモに、マーセルが罰が悪そうに言い返す。それがおかしくてベアトリーチェもくすりと微笑む。

「みんな、ありがとう。」

自分を連れて慌ててあの場所を立ち去ったのも、注意してくれたのもすべて自分を思いやってくれたから。その心遣いが嬉しかった。「いいよ。気にしないで。」

ベアトリーチェのお礼に返ってきたのは、マーサたちの笑顔だった。

「とりあえず、商会館に行くぞ。あそこなら金貨も交換できるだろうし。」

「はい。」

「りょうかい。」

「おー！」

マーセルの呼びかけにそれぞれが返事をする、ベアトリーチェと楽団員たちは新たな目的地へ歩き出した。

商会館に行き金貨を銀貨と銅貨に替えてもらったベアトリーチェたちは、ウツドの待つ馬車に戻ってきた。

「ウツド、遅くなってごめん。お土産に鳥の香草焼きがってきたよ。」

マーサが馬車に顔を入れ、昼寝をしていたウツドを起こす。

「気にしないでいい。ありがとう。」

ウツドはそれを受け取り、礼を言う。あまり表情は変わらなかったが、その顔が少し微笑んだのがなんとなくわかった。

「それじゃあお前ら散々遊んだことだし、そろそろ演奏の準備をはじめろぞ。」

買ってきた荷物を置いて一息ついたところに、マーセルがそう呼びかける。

「はい。」

みんなそれに返事をして準備をはじめろ。

「ねえねえ、ベルは何の曲ふきたい？私は春の歌が聞きたいな。ベルの演奏が入ったら凄くきれいだと思うの。」

「へ？」

準備をする団員たちを何か手伝えることがないか見ていたベアトリーチェは、ルミにそう話しかけられて間抜けな返事をしてしまった。

「おい、ちょっと待て！ベルはまだ演奏させないぞ！」

「えー、まだそんなこといつてるの？」

ルミの言葉を聞いたらしいマーセルは腕を組み厳しい顔をして宣言する。それに対してマーサが呆れた返事をする。

「当たり前だ。こいつはまだ素人だ。」

「はい。僕もそう思います。」

ベアトリーチェはあっさり頷いた。自分はいくまで音楽は趣味で

やってきた人間。好意から一緒に行動させてもらってるけど、彼らの演奏に混ぜて貰えるほどのモノじゃない。彼らはマーセルの言うとおりプロの楽団なのだ。

「えー、けちい…。ベルももつと自信持てばいいのに…。」

ルミが拗ねた表情で、唇を尖らして呟く。

「ごめんね。」

その表情が可愛くて、ベルは苦笑いしながらその頭を撫でてやる。

「ベル、お前は見学だ。」

「へ？」

それでこの話は終わったと思ったベルに、マーセルからまだ声がかかる。

「まずは俺たちの演奏を見学してる。」

見学…、演奏を聴いていていいってことだろうか。

「いいな。」

「はい、わかりました。」

彼らの演奏がまた聞けるのは嬉しい。戸惑いながらも頷く。

「お前、本当にわかってるのか…？」

気の抜けた返事をするベルにマーセルが訝しげな顔をして聞く。

「演奏を聴いていていいってことですよね？」

「演奏を聞けってことだ。」

うん、間違ってる。ベアトリーチエはマーセルの返事を聞いてそう思った。

「…？ありがとうございます。」

旅に同行させてもらえるだけじゃなく、彼らの演奏をまた聞かせて貰えるなんて本当にありがたいことだ。笑顔でお礼を言ったら、何故かマーセルが微妙な顔をしたが、ベアトリーチエは素直に自分の幸運を喜んだ。

今回はステージではなく路地で演奏するらしい。ピアノはきちんとしたものでなく、簡易的なものを使っている。それでもウツドの演奏は以前のものと同色なかった。

マーサの声が元気に街に響き渡り、通行人たちが立ち止って人だかりができる。ベアトリーチェも観客たちと同じように彼らの演奏を楽しんでいたが、途中から人が集まりすぎて小柄な体の人ごみに押しつぶされるようになってきた。ちよつと苦しい。

「おい、大丈夫か。」

気が付くと演奏をやめたマーセルが目の前までやってきて、ベアトリーチェに手を差し出した。そして人ごみからその小さな体を引き抜く。

「わわっ。」

観客たちは興味深そうにその光景を眺めていたが、マーセルはそれを無視してベアトリーチェを演奏していたところに引つ張り空いてる場所に座らせた。

「なるべく観客と同じ視点で見てほしかったが、きついならちゃんと言え。今日はそこで聞いてる。」

「ありがとうございます。」

さすがにきつくて演奏を聴くどころではなかった。演奏を中断させたのが申し訳なくて、マーサたちにも観客たちにもぺこりと頭を下げる。マーサたちは笑顔で手を振ってくる。

「ぼつちゃんだけずるいわ。私も特等席に座りたい。」

観客の女性の一人が冷やかすように言った。

「こいつは見習いだから特別だ。」

「あら、そうなの。」

マーセルはそれにぶっきらぼうに言葉を返す。

「見習い？」

「おまえ、本気でわかってなかったのか…。」

首をかしげたベアトリーチェに、マーセルが半眼になってそう言う。

「当たり前じゃん。マーセルってぜんぜん言葉足りないもん。」

「肝心なこと言わないし。」

「デリカシーもたりないし。」

マーサ、ルミ、イレナがそんなマーセルに言葉を返す。

「て、てめえら……。特に最後のは関係ねえだろ……。」

マーセルは目を吊り上げながらも、観客の前ということであると
か言い返すのを抑え、ベアトリーチエに向き直った。

「とりあえずちゃんと演奏を見ておけ。これも勉強だ。」

「は、はい。勉強……。」

結局、マーセルの言葉が足りず、ベアトリーチエは意図を理解でき
ていなかったものの、再び演奏をはじめたマーセルたちを楽しみ
ながらも見ていた。

「これからお前には音楽を勉強してもらおう。」

演奏が終わり片づけを手伝い馬車に戻った、ベアトリーチエにマ

ーセルが言った。

「勉強ですか……?」

「そうだ。お前も俺たちの一員になるわけだ。確かにお前は演奏に
ついては優れているものを持っている。だが、まだ音楽をぜんぜん
知らない。演奏をやっつけていくうえで足りないものがたくさんある。
だからこれから特訓だ。それをこなさないと俺たちと一緒にやつて
もらうことはできない。」

また首を傾げるベアトリーチエに、マーセルは腕を組んで厳しい
表情をつくりいった。

「確かに魔笛は才能に依存する部分も大きい。楽譜が読めなくても
弾ける人間だっている。だからといって、音楽的な知識が必要ない
わけじゃない。きちんと勉強してこそ身に付くものもある。」

目を開いてこちらを見つめるベアトリーチエに、マーセルは言葉

をつづけた。

「これから毎晩、これから俺が音楽について教える。覚えてらうことがたくさんあるから、自分で勉強もしてもらう。あとはお前の努力次第だ。いいな？」

「勉強……」

「そうだ。お前に必要なものだ。」

厳しい顔で言い切ったマーセルに返ってきたのは意外な反応だった。

「勉強させてもらえるんですか！教えていただけのんですか！」

ベアトリーチェの顔がパアッと輝く笑顔でそう言ってくる。いっになく興奮して身を乗り出し、思わずマーセルの服を両手で掴んでしまってるほどだ。

音楽を勉強したいと思っても許されなかったベアトリーチェにとって、毎晩音楽の勉強ができるなんて信じられない幸運だった。

「あ、ああ……」

普通、勉強となったら嫌がるものだ。特に演奏がある程度できるものは、それを軽視してしまいがちだ。だから、ベアトリーチェの反応は予想外だった。

「ありがとうございます！さ、さっそく教えてください。」

そわそわして今にも駆け出してしまいそうなベアトリーチェを、マーセルが慌てて静止する。

「ちよつと待った。まずは晩飯を食ってからだ。あと、言うておくが俺の指導は厳しいぞ。」

「はい、よろしく願います！」

脅すようにさらに厳しい表情で言ったマーセルだったが、ベアトリーチェは満面の笑顔でそう返す。よく勉強を嫌がり逃げて困らせたルミとルモとの違いに、マーセルは頬から汗を垂らした。

「晩御飯の準備手伝ってこなきゃ。」

「まあ、熱心なのはいいことだよな……。」

晩御飯の準備を手伝いに駆け出してしまったベアトリーチェの後

る姿を見て、マーセルはそう呟いた。

「いいか。この記号はだな。」

「はい！」

馬車の中、マーセルとベアトリーチェが向き合って、擦り切れた本を見て勉強している。

「へえ、ベルは勉強熱心だねえ。」

「逆に熱心すぎてマーセルが戸惑ってるみたいだけだな。」

「ルモたちは、良くサボろうとしてたもんね。」

その様子を見学しながらマーサたちが雑談する。

「もう、2刻ほどやってるよ。」

「あんたたちなら、確実に脱走しているころだねえ。」

「熱心なのはいいこと。」

そんなやり取りをしていると、ぶっ通しの授業にさすがにマーセルが根をあげる。

「今日はこれで終わりだ。」

「あ、はい……。」

これだけ勉強してまだ残念そうな顔をするベアトリーチェの頭にマーセルの手がのせられる。

「明日もまたやるから、そう張り切りすぎんな。あと、宿題もあるぞ。」

「宿題ですか？」

「これを一週間以内に全部覚えろ。」

マーセルはにやりと笑いちよつと集めの本を、ベアトリーチェの前にどんと置いた。表紙には音楽用語集と書かれている。

「えー、マーセル厳しい〜。」

勉強が終わったと聞いて、ベアトリーチェに駆け寄ろうとしていたルミが悲鳴をあげる。

「ふん、これくらい必要なんだよ。特にベルはこういう知識が全然ないんだからな。」

「はい、わかりました。」

ベアトリーチエの方は笑顔で返事をする、その本を大事そうに胸に抱えた。

そして…。

「おい…。」

「どうかしました？」

眠そうな目をして声をかけてきたマーセルに、ベアトリーチエは不思議そうに聞き返した。借りたランプの明かりが揺れ、ベアトリーチエが今まで見ていた本の影が揺れる。夜にマーセルから渡された本だ。

「おまえ今何時だと思っているんだ。」

馬車の窓をみるとまだ外は星空がまたたく夜だった。

「まだ夜…。ですね？」

「まだ夜じゃねえよ！もう深夜だよ！いつまで勉強してんだ！」

「えっ、ちよつとでも覚えておこうと思って。」

そういつてベアトリーチエは本から手を離さない。

「もう寝る。いい加減に寝る。まだ一日目だぞ。」

「も、もう少しだけ。もうちよつとだけ。」

「さっきからずっとそう言ってるだろ！もうだめだ！」

それでも粘ろうとするベアトリーチエに、マーセルは強制的にランプの灯を消した。

「あ…。」

恨みがましい声をベアトリーチエが上げる。

「勉強はこれから一日3時間だ。それ以上は許さん。」

「はい…。」

そう言っでどしどし寢床にもどっていったマーセルに、ベアトリーチエはしょんぼりして答えた。

アルガの街を抜けたベアトリーチエたちは、しばらく馬車で旅を続けていた。

「この曲の15小節目のピウ・モツソの意味はなんだ？」

「えっと……。主人公を捕まえようとする追手たちから逃れようとする様子を、それまでより早く弾くことで表します。」

「完璧じゃないかい。よく短い期間でこれだけ覚えたねえ。」

マーセルの出した問題に答えたベアトリーチエを、イレナが褒める。

旅の間もマーセルはベアトリーチエに音楽を教えてくれた。それはベアトリーチエにとつて至福の時間だった。いままで習うことが叶わなかった音楽についてのいろんな知識。それに毎日触れることができる。

演奏は出来ても音楽についてはほとんど知識の無かったベアトリーチエは、マーセルに教えられることを水を吸う綿のように吸収していった。

「ベルは凄いな。まだ習って一週間も経ってないのに。」

マーサもイレナに賛同してベアトリーチエを褒める。

「ふん、まだまだだ。今までが知識がなさすぎだし、ようやく人並みになっただけだ。それに覚えているだけじゃだめだ。実際に演奏に反映できないとな。」

マーセルはいつものように厳しい意見を言う。でもベアトリーチエには、それが思いやりから来るものだとなっていた。

「はい、がんばります。」

だから自然と笑顔で返事をする。

「それじゃあ、実際弾いてみようよ。」

「うんうん、私もベルの演奏聞きたい。」

「ええっ!？」

マーサとルミがベアの演奏を聴きたいと騒ぎ出す。ベアトリーチェは驚いていると、マーセルも珍しく賛同した。

「そうだな。実際に弾いてみるといい。ほら、楽譜を見て教えたことを思い出して弾いてみる。」

さつき教えてもらった楽譜が、ベアトリーチェに手渡される。

辺りを見回すと、ルミもルモも、マーサもイレナもウッドも座って自分を楽しそうにみている。みんな観戦ムードだ。

なんでだろう。食堂ではろくな経験もなしに飛び入りしてしまったのに、こう改めて見られると恥ずかしいかもしれない。

そういえば城を出る前までは自分が魔笛の演奏を聞かせたことがあるのは、アーサーさまとレティの二人だけだった。二人のことを思いだし、少し胸がズキンと痛んだ。あんな事件の後で大変だったかもしれない。特にレティは自分がいなくなったことで落ち込んでるかもしれない。出来ればそれでも、二人には早く立ち直って笑って暮らしてほしいと思う。自分はその場所にいなく、遠く離れる選択をしてしまっても。

少し思考の海に落ちたベアトリーチェだったが、目を上げると仲間たちの笑顔が映った。城を出たら一人で生きていくのだと思っただけで一人……。でも、一時の間でも一緒にいられる仲間ができた。だからたぶん、レティも立ち直れるはず。フレミヤカーラ、それにレイアがきつと支えてくれる。

「それじゃあ吹くね。」

「うん！」

ベアトリーチェは息を吸い込み、魔笛へと命を吹き込んでいく。

馬車の中に、ベアトリーチェの独奏が流れていく。

最初はアダージュでゆるやかに、それからグラーヴェで重々しく沈み、さらにピウ・モツソで速く焦りをましていく。でもそれはだんだんと和らいでいき、明るくいいきとした旋律に変わる。

ルミもマーサもその演奏の美しさに、感心したように溜息をはい

まだ曲の解釈にぎこちなさは残るものの、それはベアトリーチェの演奏がひとつ成長しはじめた証だった。趣味で弾くだけだった音楽から、ちゃんとした演奏へと。

演奏を終えると、ぱちぱちとみんな拍手をした。マーセルも珍しく少し笑って拍手をしていた。

「ありがとう。」

楽譜も見ずに知っている音楽を、なんとなく弾いているだけだった自分。それがこの短い期間で、もっと音楽はいろんなもので出来ていると教えて貰った。それはたぶん、城にそのままいたら知ることができなかつたこと。

失ったものは大きいけど、そのかわり自分の手には光り輝くいろんな欠片が入ってきた。初めて手にした演奏での銀貨、新しい友達たちの手のぬくもり、知りえなかつた音楽の知識。

「もうすぐ国境付近だね。」

イレナが馬車の外を見ていった。

「国境？」

「そうさ。あと10分もしたらエルサティーナをでてラフルドに入る。アルセーナはまだ遠いけどね。」

ベアトリーチェも外を見た。あたりは森の景色でわからないが、もうすぐ自分はエルサティーナを出る。狭い後宮しか知らなかつたが、それでも3年間暮らした国。大切な人たちを残してきた国。

たぶん国境を抜けたら、万が一、連れ戻される可能性ももう無くなるだろう。

さよなら、レティ、アーサーさま。

アーサーさまの笑顔は思い出せない。レティの顔はあのかのときのように沈んだ悲しい顔のままだ。胸の痛みは消えないけれど、それでもあの傷ついたときより心は力を取り戻していた。

ベアトリーチェを乗せた馬車は国境を越え、本当にエルサティーナから旅立った。

カタカタカタ

馬車の揺れる音が静かに響く。窓の外の景色は変わらず緑にあふれているが、道幅が徐々に広がってきている。さっきまでは明るく騒いでいたルミとルモたちも、今はすやすや眠っている。

「ベル、大丈夫？」

マーサの聞いてくる声に、ベアトリーチエは微笑んで答える。

「うん、平気だよ。」

「腕とかしびれない？」

「二人とも軽いし大丈夫。」

ベアトリーチエと話し込んで、そのまま寝てしまった二人は、ベアトリーチエに寄りかかるように寝てしまった。おかげでベアトリーチエは窓の向かい側から動けない。ベアトリーチエも二人が寝苦しくないように、腕で抱きしめてあげている。

すやすやと眠る双子の表情は安らかだ。

窓から流れる風景を眺めていたベアトリーチエの目に、不思議な光景が目映る。

「あれ？煙？」

木々の間からもくもくと立ち上る白いもの。火事だろうかと一瞬思ったが、良く見ると煙とは違う。それが何本も立ち上っていた。ベアトリーチエには見たことがない景色だ。

マーサも振り向いて窓の外を確認する。

「あー、あれね。あれは湯煙だよ。」

「湯煙？」

お湯の煙？そんなものがあるのか。しかもあんなにいっぱい。首をかしげたベアトリーチエに、マーサがにやりと笑う。

「もしかしてベルは温泉も知らないのかな？」

「温泉？」

聞いたことがなかった。

「そうそう、ここらへんは地下からお湯が湧き出てくるの。それを使った天然のお風呂。この国は火山地帯だから、そういう場所がたくさんあるの。」

天然のお風呂、そんなものがあるのか。安定した広い平地の国で生まれ育ったベアトリーチェにとっては驚くべき話だった。お風呂は薪で沸かして入るもので、手間がかかるものだった。それが自然と湧きでてくるなんて信じられない。

「今回は旅の休養もかねて温泉のある宿に泊まるみたいだから、楽しみにしておくといいよ。」

「へえ、楽しみ。」

まだ見たことない温泉というものに思いをはせる。純粹にお風呂に入れるというのも嬉しい。

しばらく話し込んだ二人は、いつの間にか寄りかかって眠っている双子と一緒にすやすやと眠っていた。

ベアトリーチェたちが起こされたときには、すでに馬車は街にっいていた。

「ベル、起きてー。」

「おい、起きろー。」

数秒差で起こされたはずの双子は、自分たちを棚上げて、ちゃっかりベルを起こす側に回る。

「ん、おはよう。」

昨日もちよつと夜更かし気味に勉強をしていたベアトリーチェは、ずいぶん深く眠っていたらしく、眠たげに目をこすって起き上がる。

「もうお昼すぎだけどね。」

イレナが笑って相槌をうつ。

馬車を降りると、いきなり妙な匂いが鼻についた。

「んんっ!？」

ベアトリーチエは顔をしかめる。びっくりして息を止めてしまう。「あはは、大丈夫だよ。温泉地帯はどこもこんな匂いがするの。」その様子をマーサが笑って見つめる。

「そうなんだ。」

ほっとしたベアトリーチエは息を再開する。たしかに独特の匂いだが、慣れてくると平気かもしれない。あたりを見回すと、木造の建物のおちらこちらから湯煙が立ち上っている。

「ここらへんは旅人たちの羽休めの場所になっていて、ここらへんは全部それ目的の宿さ。とりあえず、マーセルたちが来るまで待たないかね。」

馬車の預り所までいったマーセルたちもすぐに戻ってきた。

「おかえりなさい。」

「おう。」

普段は仏頂面が多いマーセルも、今日はどこか上機嫌な顔をしている。

「温泉楽しみですね。」

ベアトリーチエは自分が楽しみにしているせいもあり、そんな言葉が出てきた。そんなベルの言葉にマーサがからかいを入れる。

「温泉がどんなものか知らなかったくせに。」

「だから楽しみなんだよ。」

ベアトリーチエはちよつとむくれて反論する。

「ほう、ベルは温泉に入ったことないのか。」

マーサの言葉を聞いて、マーセルとルモがにやりと笑う。ウッドだけはかわらず無表情だが。

「それじゃあ俺たちがじっくり温泉の入り方を教えてやろう。」

温泉の入り方？何か特別なことでもしなければ入れないのだろうか。

「うん。ベルにはきっちり温泉の楽しみ方を教えてやらないといけないな。」

ルモも同意するようにうんうん頷く。

どういうことだろう。

首をかしげているベルに、マーサが苦笑いするように答える。

「温泉っていうのはみんなで一緒に入るものなんだよ。そういうの無かったところに住んでいるベルは、慣れないかもね。」

マーサの言葉を聞いて頭が真っ白になる。

「みんなで入る!？」

「あ、もちろん男女は別だよ。」

驚いた表情のベルにからかいの言葉を投げて、マーサたちは道を歩いていく。

みんなで一緒に入る?男女は別って、いま自分は男装しているから、入るとしたら男の人と…!?!?ええええええ!?

「ど、どうしよう!。」

さっきまでまだ見ぬ温泉を楽しみにしてたはずのベアトリーチエは、思わず立ち止まって、その場でだらだらと脂汗を流しだした。

ベアトリーチェは困っていた。

温泉はみんなで入るもの……。今まで水浴びにしても一人で入っていたので誤魔化せていた。でも、一緒にお風呂に入ってしまったらごまかせない。

いや、それ以前の話だ。男の人たちと一緒に風呂に入るなんてたたとえばれないとしてもできるわけがない。

「うづうづう。」

「いっそ、女だとばらしてしまおうか？」

そう考えたが、思いとどまる。たとえ搜索されてないとはいえ、自分は後宮を逃げ出した側妃。何か問題が起きた時、自分が女だと知っていれば、彼らにも責任が及ぶかもしれない。自分を助けてくれた彼らに、少しでも自分のせいで迷惑が及ぶのは避けたかった。

「どうしたの、ベル？歩くの遅いよ。」

悩んでいたせいで歩みが遅くなってしまったらしい。戻ってきたマーサが、不思議そうに顔を覗き込んでくる。

「あ、うん。なんでもないよ。」

ベルは慌てて首を振り、ついでに咄嗟におもいついた言い訳を口に出す。

「そ、それより僕ちよつと怪我があつて、温泉には入れないかも。残念だな。」

それを聞いて何故かマーサは満面の笑顔になる。

「そうなんだ。良かったね。」

「へ？」

「この温泉、怪我によく効くらしいんだよ。是非入りなよ。」

「へ、へえ……。それは……。嬉しいなあ……。」

「うんうん！ラッキーだね、ベルは。」

会話の末には、肩を落としたベアトリーチェと、楽しそうにスキ

ツプするマーサが、並んで道を歩くことになった。

マーセルたちが泊まる予定の宿は、木造の素朴なつくりの宿だった。一回は小さな食堂になっていて、山の幸をつかった料理が提供される。二階が客が泊まるための部屋になっている。適度にただよる湿気のせいかな、壁の木板は濃い茶色の色合いを見せている。落ちて着いた雰囲気の宿だ。

「どうしたんだ？落ち込んだ顔して。」

ルモがベルの顔を見上げて聞いてくるが、ベアトリーチェは溜息をつきながら首を振った。

「なんでもないよ。」

「まあ、何か知らないけど、温泉入ったら元気であるよ！」

ルモのセリフにさらにベアトリーチェの溜息は深くなったが、ルモは首をかしげるだけだった。

「えええー！」

すると受付で宿屋の女将と話していたマーサたちが悲鳴をあげる。

「ごめんなさいねえ。」

すまなそうに謝る女将の声が耳に届く。

「どうしたんだろう。」

「なんだろうな。」

ベアトリーチェとルモは顔を見合わせると、マーサたちのほうへ駆け寄って行った。

「こちらの温水をくみ上げる装置が故障してしまっ。しばらく温泉には入れないんです。それでも泊まっていただけなら、宿代を半額にしますけど。」

「うーん、他の宿も駄目なのか。温泉は諦めるしかないな。」

「ええー、温泉入れないのぉ。」

顎に手を当て頷くマーセルに、ルミが不満げな悲鳴をあげる。

「あんだ半額って聞いて、喜んでないだろうねえ。」

「そ、そんなことないぞお…。」

いつもはまとめ役をするイレナがマーセルを睨みつけて言う。イレナも温泉に入りたかったみたいだ。マーセルはそれから目をそらし、返事もちよつとどもつていた。

「ちえ、温泉はなしか。ん？ベル、なんか喜んでないか。」

「そんなことないよ。」

否定の言葉をだすベアトリーチェだが、表情は正直だ。ほつとしたように口元がゆるんでいる。

どうやらしばらくは大丈夫なようだ。ベアトリーチェはほつと胸をなで下ろした。

空き部屋が多かったせいか、三つも部屋を借りることができた。

部屋割りは、ベアトリーチェとルミ、ルモの双子、マーセルとウツド、イレナとマーサになった。「子ども同士は一緒の部屋がいいだろ。」とからかいながら頭を撫でてきたマーセルにちよつとむくれたが、ベアトリーチェとしても馬車の中で一緒に寝泊まりしているとはいえ、男の人と一緒にの部屋なのはさすがに抵抗があり、こうなつたのは助かった。

「うん、下に降りてみよっか。」

「うん。」

「おう。」

部屋で二人と遊んでいたが特にこれ以上やることを思いつかず、暇をもてあましたベアトリーチェはマーセルたちのいるはずの一階へと降りた。だが…。

「なにやってるんですか…。」

下に降りると完全に出来上がったマーセルがいた…。食堂のテーブルの上には何本も開けられた酒瓶がある。思わずベアトリーチェ

はマーセルをじと目で睨む。

「いやー、温泉がないならせめてお酒でも楽しまないとってな。お前がルミとルモの面倒見てくれるから、おかげでこうやって心のリフレッシュができるわけだ。お前は本当にいい子だな。」

マーセルの顔は赤らんでいて、やたら上機嫌だ。馴染んできて普通に話すことが多くなっただが、まだまだ仏頂面の印象が強いのので、その上機嫌な様子はなんとなく気持ち悪い。また頭に手が伸びてきたので、ベアトリーチェはそれを首を曲げて避ける。

「うん、ベルに感謝だ。」

無口なウツドは変わらないが、それでも顔は少し赤く、今もコップに入った酒を飲んでいく。そして何気なく手が伸びてベアトリーチェの頭を撫でていく。

「ウツドさんまで…。」

溜息を尽いて食堂を見回すと、マーサとイレナの姿はない。

「あれ？マーサとイレナさんはどうしたんですか？」

「ああ、あいつらならどこかで温泉入れるところがないか探してるっていったぞ。」

「あら、大丈夫かしら。」

たまたまつまみをテーブルに運んできた宿屋の女将さんが、驚いた表情で口に手を当て声を出す。

「大丈夫ってどういうことですか？」

「ちよつと柄の悪い連中きててね。温泉に入れないうつてんで、ここかしこで問題起こしてるんだよ。女の子だけで歩いて絡まれなければいいけど。」

ため息をかく女将に、ベアトリーチェはすぐ反応した。

「迎えに行かないと、マーセルさん!」

「おう、仕方ねえな。」

マーセルは立ち上がった、そして…。

ズデンッ

こけた…。

「あれー、おまえらなんか斜めになってんぞ。」

「倒れてるのはマーセルさんのほうです！どれだけ飲んだんですか！」

「そんなに飲んでないぞ。俺は全然酔ってないしな。」

「ああ、もう、仕方ないなあ。」

そのまま起き上がれない、というか起き上がろうとしないマーセルを「んしょんしょん」と苦勞して椅子に戻す。男の体重なのでなかなか持ち上がらなかったが、ルミとルモ、そして女将さんにも手伝ってもらってなんとか椅子に戻す。

ぐてんつと椅子に座ってしまったマーセルを見て、ベアトリーチェはふたたび溜息を尽くしかなかった。普段は厳しい人だけに、いろいろストレスがたまってるのかもしれないと思うことにした。

「マーセルさんはだめだ。ウッドさん！」

ウッドのほうを振り向いたベアトリーチェだったが。

「すーぴー。」

「寝てる…。」

いつの間にもやらその巨体を椅子にかけたまま眠ってしまった。結構騒いだはずなのだが気づいた気配は無く、その寝顔は安らかに起こすのは忍びない。

「うう、僕だけで行くしかないか。ルミ、ルモはここにいてくれる。ちよつと僕、イレナさんたちを探してこないと行けないから。」

「酔っぱらいと一緒になんてやだー。」

「やだー。」

そして双子にもガーガー叫んで、拒否される。

「わかったよ…。一緒にいこう…。」

「気を付けておいき。」

女将さんに見送られベアトリーチェは肩を落として、双子の手を引いて宿を出た。

よくならされた温泉街の土道をイレナとマーサの二人が歩く。

「ベルたち置いてきてよかったのかい？」

「ベルはいいけど、絶対ルミとルモが大人しくしてないもん。まず二人で探してあとで、ベルたちも誘いましょ。」

「まあ、仕方ないかねえ。」

お酒を飲みだした二人は置いておくとして、ベルたち三人を置いてきたことに少し罪悪感があった。まあ、ベルは優しいから、ルミとルモの面倒をちゃんと見てくれるだろうけど。あとで温泉に入れてあげてお礼をすればいいのだ。

そう考えた二人は街の人たちに、温泉に入れるところがないか聞いてまわった。しかし…。

「どこもだめみたいだねえ。」

同じ場所からくみ上げているのか、ここらあたりの宿はすべて全滅だった。

「うーん、もう大方の宿場では聞いちまったねえ。」

「宿じゃなくてもどこかでないかなあ。」

立ち止まって二人は話し合う。

「よお、お嬢ちゃんたち暇そうじゃねえか。」

そんな二人にいきなり声がかかる。顔を向けると明らかに柄の悪い三人組の男たちがいた。その下卑た表情を見て、イレナとマーサは顔をしかめる。

一方男たちは振り向いた顔に、口元を吊り上げる。

「へえ、二人とも結構いい器量してるじゃねえか。」

「まあ、そっちはちよつとでかくて野暮ったいけどな。」

「誰がでかいですって！」

マーサは男たちの言い草にかちんと来て、反射的に言い返そうとする。しかしその手をイレナが掴み止める。

「行こう。構ったって仕方ないよ。」

イレナはマーサの手を引き宿のほうへ向きを変えるが、男たちの

方もついてくる。

「なあ、あんたらも温泉に入れなくて暇なんだろ。俺たちと付き合
つてくれよ。いい退屈しのぎになるぜ。」

「ちよつと俺らと遊ぶだけだつて。」

無視して歩いてもしつこくついてくる男たち。イレナはまだ冷静
だったが、マーサの苛立ちがどんだんたまつて行く。

「なあ、無視するなよ。」

「触らないでよ!」

バシッ

馴れ馴れしく肩を触ってきた男の手に、我慢の限界に達したマー
サはその手を振り払おうとした。しかし勢いをつけたその手は、男
の手を飛びこし鼻に当たる。

「あつ…。」

「い、いつてえ…。」

男たちの形相が険悪なものになり、マーサの顔色が変わる。

「人が下手に出てれば調子にのりやがつて!このアマが!」

イレナが間に入る前に、殴られ頭に血を上らせた男がマーサに対
して拳を振り上げる。

「きゃあつ」

「マーサ!」

次にくる痛みを予想し、マーサは目をつむり体を硬直させる。
ガシッ

しかし、固い音は聞こえても、痛みはいつまでもこなかった。お
そろおそろ目を開くと…。

「ぐっ、なんだてめえ!」

「べ、ベル…?」

木の棒で男の拳を受け止めたベルがいた。その表情は厳しく、男
たちを睨みつけている。

「よつてたかつて女の子に何をしているんですか…。」

「なんだこのガキ。」

「あいつらの知り合いみたいだぞ。構わねえ、やっちまおうぜ。」
「でしゃばったことを後悔させてやる。」

血気盛んな男たちはあつという間にベルに標的をかえる。

「ベル！危ない！」

三人が一斉にベルに対して飛びかかる。マーサの頭に小柄なベルが大きな男たちに痛めつけられる想像が浮かんできて、顔が真っ青になる。

しかし…。

「これにこりたら女性に対して暴力は振るわないことです。」

数秒後には地面に倒れ付し気絶した三人の男と、ケロリとした顔で立っているベルの姿があった。男たちも大した傷をおった様子はなく、最小限の攻撃で無力化されている。

「ベル、凄い！強い〜！」

「かつこいい〜！」

いつの間にか一緒にいたルミとルモがその姿に歓声をあげる。

「それから僕はガキじゃありませんから。きちんとした、立派な、普通の大人です！」

ベルをガキ呼ばわりした男に、ちょっと生傷が多いのは「ご愛嬌だ。」

「ベル…？」

地面に座り込み茫然と呟くマーサに、ベルは笑顔に向け手を差し伸べた。その笑顔がやけに綺麗に見える。

「大丈夫だった？マーサ」

「う、うん…。」

差し出された手を取り、マーサは立ち上がる。

「助かったよ、ありがとう。」

「いえいえ。」

イレナにお礼を言われても、何でもない表情でベルは柔らかく微笑む。

「それじゃあ宿にもどろつか。ちょっと騒ぎになっちゃったし。」

「うん…。」

優しく柔らかい手のひらが助け起こしてくれたときのままマーサを導く。

そのままベルに手を引かれ、マーサは宿屋へと戻った。

その夜。

「ベルって…かつこいいよね…。」

晩御飯の席、といっても男たちは昼の酒がたたって部屋で寝ていて、ベアトリーチエはルミとルモにせつつかれて部屋にもどって遊んでいる。マーサとイレナだけが残った席で、マーサは頬を少し赤く染めて呟いた。

「あんだ…。」

その表情にイレナは呆気にとられ口をあんどぐりあける。

「ちよつと女顔だし背は低いけど、すごくきれいな顔立ちしているし、態度だって紳士的で優しいし、とつても気が付くし。それで結構頼りになるあるし、なんか…王子様みたい…。」

「初恋つてやつかねえ…。」

元気娘のいつにない女の子らしい表情に、イレナは苦笑した。

「ちよ、ちよつとやめてよ！ただ、ちよつとかつこいいなつて思つてるだけなんだから…。」

その慌てた態度は、初恋に戸惑う乙女そのものだ。

「若いつてのはいいねえ…。」

イレナは年寄りみだ台詞をはく。それから思いついたように。

「でも、苦労しそうだね。あの子、鈍そうじゃないか。」

「うっ、確かに鈍感そう…。」

イレナの言葉に、マーサもあつさり同意した。

「うう、別にいいもん。ただかつこいいと思つてるだけなんだから。」

マーサは机に突っ伏し、頬を紅く染めながらそんな言葉をつぶや

いた。

「くしゅんっ。」

「どうしたの、ベル。風邪ひいたの？」

ルミが顔を覗き込んでくる。ベアトリーチエは首をかしげて鼻をさすった。

「そんなことないと思うけど。」

「それじゃあ、誰かが噂してるんだ〜。」

「それは絶対ないよ〜。」

ルモの言葉にベアトリーチエは笑って首を振った。

朝早く、小鳥の声と共にベアトリーチェは目を覚ました。

自分に抱き着くようにして寝ていたルミとルモを起こさないようにして、そっとベッドを出ると、階段を降りて宿屋の一階へと降りていく。

「~~~~~」

どこからともなく綺麗な歌が聞こえてきた。ベアトリーチェはつられるように歌の聞こえてきた方へ足を進める。

「どんなに辛い時でも、明けてゆく朝陽が背中を押して、」

朝霧を透かすように日の光が降り注ぐ木々の下、マーサが透明なそよ風に髪を揺らしながら歌を歌っていた。歌うマーサの表情は真剣で、歌声には強い感情の響きが籠っている。

「すごく良い歌だね。」

マーサが歌い終わるまで、ベアトリーチェはその歌をずっと聞いていた。

終わったところに話しかけたベアトリーチェに、マーサは今更気づいてはつと振り向く。

「べ、ベル！？もしかしてずっと聞いてたの？」

「うん、朝起きたらマーサの歌声が聞こえたから。」

マーサはベアトリーチェの笑顔を見て赤面する。

「あうう…。聞いてたなら話しかけてよ…。」

「邪魔しちゃったら悪いかなって思って。それに歌ってるマーサ、すごく綺麗だったから僕もずっと聞いていたかったし。」

「き、きれい!？」

「うん、綺麗だったよ。」

「なっ、なんでそんなことさうつといっっちゃうかな…。じ、じつは軟派な性格…?」

顔を一層赤くしたマーサだったが、最後の方の言葉はごにょごに

よしてよく聞き取れなかった。ベアトリーチェは首をかしげる。その何もわかっていない表情を見て、マーサは昨夜言っていたイシナの言葉を思い出す。

(本当に、鈍い…。)

マーサは溜息をつくしかなかった。

「さっきの歌はなんて曲なの？あまり聞いたことない歌だったけど。」

旅の中でマーサの歌は何度も聞いたことがあったけど、今日の歌は一度も聞いたことがなかった。

「ん〜、空と歩むって歌なんだけど、ぜんぜん有名な歌じゃないからね。」

「きつと大好きな歌なんだね。いつもより、さらに心をこめている気がした。」

ベアトリーチェの言葉にマーサはちよつと不意をつかれた表情をしたが、それもわずかに柔らかく微笑んでちよつと首をかしげる。

「そうかな。でも確かに、特別な歌かも。」

「特別な歌？」

「うん、私が歌手になるって決心した歌だから。」

そう言ったマーサの表情は笑っていて、誇らしげなようで、それなのにちよつと罰の悪い表情をしている。

「私ね、子供のころから歌うのが好きだった。村に昔作曲家をしていたおじちゃんがいる、いろんな歌を教えてくれたの。結構私、歌うのが上手で、大人もたくさん褒めてくれた。でも、農村の生まれだったから親の仕事について将来は畑仕事をやるんだと思っていた。」

「そんな時ね、ちよつと大きな町の歌のコンテストに出ることになって、この歌を歌ったの。この歌は作曲家だったおじちゃんが作ったもので、ついでだから歌ってあげようかなあって。」

「そしたら優勝しちゃってね。」

喜ばしいことを話しているはずなのに、マーサの顔は苦いものを

かみつぶしているような表情だった。

「嬉しくなかったの？」

「優勝したときは、してやった！って感じだったわよ。いつもは嫌味な町の子とかも出てたからね。それで凱旋気分得意気揚々と村に帰ったら…、待ってたのは村中の人たちの説教だったわ…。」

「ええっ、説教？なんで！？」

「なんか私が歌手になりたがってたと勘違いしたらしくて。私は歌手になる気なんてないっていつてるのに、親も村長さんたちも隣のおばさんも信じないで、歌手なんてお前には無理だとか優勝したのはまぐれだとか延々と言ってくるの。ずっと夜遅くまでよ。」

「そんな中おじちゃんだけが褒めてくれて、こっそりお菓子を振る舞ってくれたの。したらおじちゃんまで説教の対象にされちゃって、お前はろくな曲も作れないのに若い娘にいい加減なことを言っ て馬鹿な夢を見させるのかとか、二人並んで説教よ。もういい加減に腹が立つちゃって。」

「説教が三日目に入ったところに、ならプロの歌手になってやるって啖呵を切って飛び出してきちゃった。」

「なんか…すごいね…。」

「うん、まあちよつと浅はかだったと思うけど、でもあんまりにも才能が無いとか言っただもん。」

「その人の作った曲は、凄く良い曲なのにね。」

「うっ…。うん…。そうよ、それなのに才能が無いとか言われておじちゃんはいしょぼりしちゃって。おじちゃんの曲のおかげで優勝したんだからって、何度も説教の合間になくさめたわ。」

マーサの言葉から自分の歌が貶されたからだけではなく、おじちゃんの曲までも馬鹿にされたことに腹を立てたことがベアトリーチエにはなんとなくわかった。彼女は自分が馬鹿にされているだけなら、きつと我慢していたのだろう。

「だからいつか大舞台で、おじちゃんの曲を歌ってまわりを認めさせてやるうと思ってるの。そして村に今度こそ凱旋してやるっとな。」

まずはそのための下積みだけだね。」

きつと普通に村に暮らしていた彼女にとって、そんなきつかけで親の元をでたのは寂しいことだったのかもしれない。それでも、きつかけは怒りだったけれども、彼女は夢を追いかけて、それを叶えたら村へ帰ると言っている。

「うん、マーサならきつと出来るよ。」

ベアトリーチェの笑顔に、マーサは照れたようにわらう。

「そうかな。ベルがそう言うならちゃん出来る気がしてくるかも……。えへへ、ありがとう。」

そう言っただけで、マーサはいつも以上の笑顔で、ベアトリーチェに微笑みかえした。

「結構いい雰囲気だったじゃないかい。」

朝食の席、イレナのからかうような笑みに、マーサは赤面した。

「み、見てたの!？」

「ふっふっふ、若いつていいねえ。」

「あれはそういうんじゃないよ、もう。」

マーサは頬に朱の色を残しながら、スープを救うスプーンを加えたまま溜息を吐く。

「ベルー!おはようー!」

「よー!」

「わわつと。」

視線の先には、ルミとルモに飛びつかれて慌てているベルの姿があった。

「まあ長い付き合いになりそうなんだ。ゆっくり行けばいいじゃないかい?」

「うん…そうだね…。」

出会ってからまだ二週間ほどだけど、随分仲良くなった気がする。ルミとルモなんて一番懐いているくらいだ。マーセルも最初の態度はどこへやら、ベルの前でも仲間同士の顔を見せるようになった。

そして自分も…。

マーサは今朝のベルの笑顔を思い出して、幸せなようなむずかゆいような不思議な感情を溜息にして吐き出した。

「広場で演奏?」

「ああ…、実は村長と酒の席で一緒になつてな。それが随分良い酒を振る舞ってくれて。」

「で、安受け合いしたと。」

朝食の席、知らないおじいさんに「楽しみにしていますぞ。」と話しかけられ首をかしげたイレナたちは、遅れてやってきたマーセルが申し訳なさそうに切り出した話によりその事情を理解した。

どうやら酔っぱらって会話した拍子に、温泉に入れなくなつて退屈している客たちのために演奏をしてあげて欲しいという依頼を受けてしまったらしい。

「す、すまん…。」

「ぶーぶー！」

「ふ〜ん。」

「へえ…。」

ルミとルモは不満そうにマーセルに唇を鳴らす。腕を組んでマーセルを見下ろすイレナの視線も冷たい。

「悪かった！」

がばつと地面にひれ伏したマーセルを見て、ベアトリーチェが仰天する。

「マ、マーセルさん！？そこまでしなくても。み、みんな許してあげて？お酒の席のことだし、いろんな人たちの助けになるし。ね？」

慌てて土下座しているマーセルを助け起こし、まわりを囲むみんなを上目使いで見上げて頼んでみる。

いままで怒つた表情をしていたみんなは、くるりと表情を変えてあっさりと頷く。

「うん、ベルがいうならいいよ。」

「ベルがいうならね。」

「ベルに頼まれちゃ仕方ないね。」

実際、怖い顔をしていたみんなだが、そこまで怒っているわけはなかった。コンテストに出られなかったせいか、ベルと会つた前後のマーセルは焦りすぎてぴりぴりしすぎていた。それもベルが旅に同行するようになってきてからは、随分と雰囲気も柔らかくなつてきた。

お酒の席で羽目を外すのも、しばらくは見られない光景だった。だからこれぐらいの面倒は引き受けるつもりだったのだ。でも、ただ頷くだけじゃつまらない、そこで不満そうな態度をしていた。そこにベルにお願いされたものだから、あっさりとみんな態度を翻してしまった。

「た、助かったぜ。ありがとうな。」

ただそんなこと知らないマーセルは全員から睨まれ生きた心地がしなかったらしい。ベルに向かって手を合わせて拝み、感謝した。

「ねえ、マーサ。」

マーセルたちが演奏の準備をしている折に、ベアトリーチエはマーサに話しかけた。もう楽器の運搬は終わり、あとは自分の楽器の細かな調整にみんなかかっている。ベアトリーチエも楽器の運び方をマーセルから習い、手伝えるようになっていた。といっても手伝えるのはそれぐらいで、あとはみんなが真剣な顔をして準備しているのを見守るだけ。その時間もベアトリーチエにとっては楽しいものだった。

それでも時間を持て余してるように見えるベアトリーチエに、よくマーサが話しかけてきたりして、そこにルミとルモが我慢できずに飛びつくというのがいつもの光景だった。

でも今日はベアトリーチエの方から話しかけると、何故かマーサは飛びのき、赤面してわてわてしだした。

「ななな、なにベル？」

そのいつもと違う反応にベアトリーチエは首をかしげる。

「どうかしたの？大丈夫？」

「なんでもないよ！なんでもないから！なんでもないからね！それより、ベルのほうこそどうしたの？」

強い口調でなんでもないと言われ、汗を掻きながら頷いたベアト

リーチェは、マーサの言うとおりに話しかけた理由をつげた。

「今日、あの歌を歌ってみたらどうかね。」

「あの歌って今朝の…?」

「うん、せっかく今朝も練習してたんだし。」

マーサの反応はあまり芳しくない。

「うう、目標にしていることではあるんだけど、私の勝手な事情だしみんなには言い出しにくいんだよね…。ちよつと…。」

「そっかあ、じゃあ僕から頼んでみるね。」

「ちよつ、ちよつと、ベル!？」

ぼそぼそと呟くマーサに、ベアトリーチェは何を合点したのかわからない笑顔で頷いてマーセルのもとへ走って行ってしまふ。慌てて手を伸ばし止めようとするが、優しげな顔をしてる癖にはしつこく既にマーセルの目の前で身振り手振りも交えて何かを話している。

マーサが立ち上がって追いついたところには、話し終えてしまったらしい上機嫌な笑顔をこちらに向けて話しかけてきた。

「やったね!マーセルさんもいいって。」

「ええ、いいっていったの!?練習もしてないんだよ?」

思わずマーセルのほうを向くと、マーセルは顎に手を当てて頷く。「今回はそこまで気を張ってやる舞台でもないからな。この機会に新しい曲を試しておくのも悪くない。ちょうどレパートリーを増やしたいとおもっていたところだし。」

「よかつたね。」

「えええ…。」

まさかマーセルが、一度もみんなで演奏したことが無い曲を、ぶっつけ本番で演奏することに同意するとは思わなかった。

「なんか変わったね、マーセル…。」

それはベルが来てからだ。

「はあ、俺はいつも通りだぞ。それとベル。」

「はい?」

また声をかけられたベアトリーチェは首をかしげる。そんなベア

トリーチエにマーセルは一つの箱を手渡した。それはベアトリーチエの銀の魔笛をいつも入れている箱。

「今日はお前も弾いてみる。」

「えっ……。いいんですか？」

マーセルの言葉にベアトリーチエは目を丸くしておどろく。

「ああ、お前もちゃんとがんばってるからな。今日はお試した。あ、もちろんまだまだ見習いなことには変わりないぞ。一人前には程遠いし、これからも見学や練習はしてもらう。」

「はい。」

魔笛を手にもつと初めてみんなで演奏したときのどきどきが蘇ってきた。笑顔でうなずいたベアトリーチエに、マーセルは照れたようにそっぽむく。

「やったねーベル！」

「一緒にがんばろうね！」

話を聞きつけたルミとルモが、ベアトリーチエの足元で騒ぎ出した。

「お前らわかったら、さっさと準備するぞ。もうすぐ演奏だ。」

マーセルが気を取り直すようにかけた声に、みんなが返事をして最後の準備にとりかかった。ベアトリーチエも受け取った魔笛をぎゅっと大事に握り締めた。

村長に用意された広場には、もう結構な人が集まっていた。

「うわあ、随分と多いなあ。」

「そんだけみんな暇をもてましてるんだろ。」

ルモが感心して喋った言葉に、マーセルが答える。ここにしばらく滞在するつもりでいたが、ベアトリーチェたちと同じくせっかくなきたのに温泉に入れなかつた人たちだろう。みんな急遽行われることになった演奏を楽しみにしている表情だ。

「固くならなくても大丈夫だよ。」

イレナがベアトリーチェにそう話しかける。

緊張していたのだろうか。ベアトリーチェはそう言われて、肩に力が入ったのを感じた。あの最初の演奏から、少し間だけど音楽のことを勉強してきた。今、考えてみるとあんな風に飛び入りしたのは、すごく無謀なことだったかもしれない。

「大丈夫、ベルはきちんと勉強してきた。ちゃんと出来る。」

ウッドが言葉は少ないがベアトリーチェを励ます。

そう、前までは気ままに魔笛を吹くだけだった自分。でも、それはちよつと前に変わった。音楽についてもちゃんと教わり、一緒に演奏する仲間もできた。これは自分をはじめて音楽にした努力を試す場所。だから、ちよつと緊張してしまっているのかもしれない。

「うん。」

ベアトリーチェは頷き、二人に笑顔を返す。

大丈夫だ。だって今の自分には、こんなに励ましてくれる仲間がいる。

最初に演奏するのは、あの時みんなで演奏した曲だ。ベアトリーチェが入りやすいように、わざわざみんながこの曲を最初に選んできた。

マーセルのバイオリンから演奏がはじまっていく。それに次々と

仲間の演奏が混じっていき、次はベアトリーチェの番だった。

あの時と同じく、ベアトリーチェも魔笛に息を吹き込む。どこまでも美しく澄んだ音色を持つベアトリーチェの魔笛の音。それを耳にした観客たちは驚いたようにざわつく。

その音は以前演奏したときよりも、マーセルたちの音楽に溶け込んでいった。

あの時は自分が演奏するのに精いっぱい、まわりの音が聞こえてなかったのだ。それがこの三週間で勉強したことでわかるようになっていた。

今度はマーセルたちの音をよく聞き、自分も精一杯演奏していく。マーセルたちもベアトリーチェの音にあの時のように驚いたりせず、その音をしっかりと聞いて音を合わせていた。

あの時は良くも悪くもベアトリーチェの音と演奏に引きずられていたのが、今それが調和しあっていた。楽団として仲間として、お互いに高め合い、フォローしあって…。

やがてざわめいていた観客たちも、その美しい音に聞き入るようになっていく。

演奏が終わったときベアトリーチェが見たのは、大きく拍手する観客たちと仲間の笑顔だった。

「マーサ、次はがんばってね。」

次の演奏は、マーサの曲だ。演奏ではフォローされっぱなしの自分だけど、なんとか言葉だけでも励ましたかった。

「う、うん。」

さすがに緊張しているのか、いつもとは違う固い表情のマーサのたまにマーセルの手が置かれる。

「まあ安心しろ。どうせ、ぶっつけ本番でろくなもんになんねーだろ。」

にやりと笑いながらマーセルが言った。この曲はみんなマーサが歌ってるのを何度か聞いていたとはいえ、演奏するのははじめてだった。それでもやろうというのだ。成功か失敗かは気にしてなかつた。

た。

「うっ、一曲目が完璧だったのが、こうなるとプレッシャーだよ……。」

マーサはそんなことを言っただけで肩を落とす。

「そんなことないよ。僕なんてフオローされてばかりだったし。

僕は力になれないかもしれないけど、出来る限りがんばるから。マーサもがんばる？」

そう言っただけでマーサは両手を握りしめた。力がはいつているせいか、小首を傾げた顔がやたら近い。

マーサの顔がみるみる真っ赤に染まって行く。

「わわわ、わかったから。がんばるから！」

慌ててベアトリーチェの柔らかい感触の指に握られた自分の手を引き離した。

「マーサ顔が赤いぞー。」

「まっかつかー。」

何かを察したのか、双子たちがマーサの耳もとでからかうようにしゃべる。

「うっ、うっさいわねえ！」

にやにや笑う双子たちにマーサがげんこつを振り上げようとしたとき、申し訳なさそうな声とその背中にかかる。

「あのお、次の演奏はいつはじめてくれるのじゃろうか……。」

マーセルたちに演奏を依頼した村長だった。そう言えば、今は全員が壇上にいるのだった。あのやり取りもみんなに見られていたのだ。

「いいぞー、ぼっちゃん顔に似合わずたらしだなあ。」

「じょうちゃん、いろいろとがんばれよー。」

観客たちから送られるからかいのヤジに、全員の顔が真っ赤にそまる。

「とりあえず、演奏。」

ウツドの一人だけ冷静な声で、ベアトリーチェたちは頷いた。

「ところでたらしつてなに？」
演奏の再開をまつなごやかな空気の中、ベアトリーチェはぼつりとつぶやいた。

「ふう、終わったあ〜。」

演奏が終わったベアトリーチェたちは宿屋に帰ってきた。ルミが椅子にすわり、テーブルにだらりと体を投げ出す。

「はあ、失敗はしなかったけど緊張したよ〜。」

同じくマーサもくたびれた顔をしている。

「お帰りなさい。私も聞きにいったけど、すごくよかったわ〜。」

そんなベアトリーチェたちを出迎えたのは、笑顔を浮かべた女将さんだった。

「疲れたでしょう？そんなあなたたちに朗報よ。なんと温泉に入れるようになったの！」

女将さんの言葉に、さつきまで一步も動きたくないという感じでテーブルに突っ伏していたマーサとルミががばりと起き上がる。

「入れるようになったの!？」

「温泉！」

「ええ、くみ上げ装置が直って、いまはお湯がちゃんと入ってるわよ。」

温泉に入れるときいて、女たちの目がきらーんと輝く。

「早速入ってこなくちゃ！」

「そうだね。遅れた分を取り戻さないと。」

「はやくいこーいこー。」

さつきまでの疲れた表情はどこへやら、さつと準備をすまして行くこうとする。

「ところで、なんでそんなに早く直ったんだ？大分かかりそうって話だったのに。」

マーセルの疑問の言葉に、女将さんはにこにこ上機嫌な笑顔で答える。

「それもあんたたちのおかげさ。あんたたちの演奏をたまたま通りかかった貴族さまが聞いててね。本当は旅行者で温泉に入り来たと聞いたら、修理のための資金と人員を提供してくれてね。急ぐようなので本人たちはもういつちまったけど、温泉には入れるようになったのさ。」

貴族、そう聞いてベアトリーチェの心臓がどくりと震える。大丈夫、もう行ってしまったということはばれなかつたはずだ。そもそも、自分は貴族たちに顔を知られているわけじゃない。男装だつてしている。

きつと大丈夫だ。

「へえ、ありがたいこつたなあ。それじゃあベル、俺たちも温泉はいろいろぜ。」

「へ？」

ベアトリーチェは間抜けな声をあげた。

ベアトリーチェはすっかり失念していた。温泉が直つたら男の人と一緒に男湯に入れらなければいけないという危機に…。

「あ、僕は…。えつと、その…。」
どうしよう。間近に迫つた危険にベアトリーチェの頬に汗が落ちる。

「ん、どうした？はじめてかもしれないが、怖がることなんてないぞ。」

「あの、ぼく、11日の金の日には水に入ると言われてるんです！」

宿屋におかれたカレンダーが目に入った瞬間、ベアトリーチェはそんなことを口走っていた。

「は、はあ？誰がそんなことを…？」

マーセルはわけがわからないと言つた感じで問いかける。ベアトリーチェは危機回避本能故か、口をまわし咄嗟についた嘘をそのま

ま押し通す。

「アーサ…、アーさんという方で、僕のおにいさまみたいな方です！すごく尊敬していて、かしこい方で、僕におっしゃったんです！11日の金の日には決して水に入るなと！だから僕は今日は温泉に入れません！」

そういつてマーセルが圧倒されるほどの勢いでしゃべった後、脱兎のごとく逃げ出していった。

「アーさんって誰だよ…。」

ベアトリーチェがいなくなった食堂で、茫然とした顔でマーセルが呟いた。

ぽちゃんつと水のゆれる音がする。

「えへへ。」

空には闇のカーテンが包み、白く月の光っている。もう夜も深い時刻。ベアトリーチェは上機嫌にわらって、湯気をたてる温泉に足をつけた。

「わあ、あつたかい。」

結局、温泉には入ってみたかったベアトリーチェは、深夜にふんから抜け出してこっそり入ることにした。ルミとルモと一緒に寝ていたが、ぐっすり寝てくれていたせいか特に起きることはなかった。

ちよつと暑めのお湯の感触が、慣れない旅で疲れのたまっていたベアトリーチェの足をときほぐしていく。

ひんやりとした夜の空気が頬をうち、白い湯気を流すお湯が足元からベアトリーチェにぬくもりを伝える。今まで知らなかった温泉と言うもの。でもこの不思議な香りのするお湯は、不思議とベアトリーチェに安心感をあたえる。

「よいしょっ。」

ベアトリーチエは声を出して、ぽちゃんとお湯に全身を入れた。ちよつとお湯は熱い気もしたが、それもまた心地いい。

「えへへ、気持ちいい。」

顔にもお湯をかけた後、そのままちよつとふざけてばちやばちやとあつちこつちにお湯を飛ばしてみた。

ベアトリーチエも女の子だ。お風呂が大好きだ。久しぶりにつかるあつたかいお湯に、その表情は完全に緩み切っていた。

「ん？」

夜、遅く起きたマーセルは水の音を聞いた。聞こえてきたのは、温泉がある方からだ。

「もしかしてベルのやつか？あいつ今日は入れないっていったのに。って、今は明日か。」

ばしゃばしゃ聞こえてくる水音に、結構はしゃいでいるのだとわかる。

「湯あたりしないように声かけといてやるか。」

お湯に長くつかりすぎると逆に体調を悪くする。温泉がはじめてのベルに、一言アドバイスでもしてやるつもりだった。

「おい、ベル。いるか。」

ガチャッ

そう言っただけで気軽に温泉に続く扉を開けたマーセルの目に映ったのは、蜂蜜色の髪をした一人の少女の姿だった。

「え……。」

「あ……。」

呆然と見つめ合う二人。

月明かりの下で輝く白い肌、濡れた茶色の瞳は茫然としたようにこちらを見つめてくる。

流れる沈黙。

そして。

「ひゃあああああああああああ！」

「おわあああああああああ！うわあっ！」

悲鳴をあげて少女はお湯に体を隠し、マーセルはあわてて温泉から出ようとしてこける。

「な、なんなんだ！いつたい。」

宿には自分たち以外とまっついていないはずだ。なのに、マーサでもイレナでもない少女がなぜか温泉の中にいた。

「なになに！どうしたの！」

悲鳴を聞きつけたマーサたちの瞳に映ったのは、裸の少女とマーセルの姿。マーサが目をつりあげる。

「マーセル！あんた！」

「ちがう、誤解だ！」

「問答無用！」

「ぐはっ！」

マーサの乙女の怒りを込めたけりが、マーセルの顔面にクリーンヒットする。現場的にマーセルが女湯を覗いたと判断したらしい。

自分たち以外の少女がこの宿にいるはずがないことは、マーサの頭からすっかり抜け落ちていた。

「この女の敵！」

そういつて追撃を加えようとしたマーサに、慌てて少女が止めにはいる。

「ま、待って、マーサ！マーセルさんは悪くないよ！」

「ちよつとベルは黙ってて！」

少女の言葉を見無視して、天誅をくだそうとしていたマーサは、ふと違和感に気付き少女に顔を向ける。

「え…ベル…？」

少女の出した声は、ベルとまったく同じだったのだ。というか、よく見ると顔立ちもまったく一緒だ。え、なんで…。マーサの頭が混乱する。

だつて少女の体は完璧に女の子だつた。いや、ベルは相当な女顔だつたので、全然違和感がないが。柔らかい体つきは、立派な女性のものだ。

「あんだ、女の子だつたのかい…。」

まだ混乱しているマーサの頭に、イレナの冷静な声が入ってくる。

「うん…。」

その言葉に少女は頷いた。

「ごめんなさい！騙してて！」

マーサはマーセルの首を吊りあげながら、頭を下げ謝るベルの声を聞いた。

「なんで女だつて言わなかったんだよ…。」

顔を腫らして不機嫌そうに呟くマーセルに、ベルは恐縮したように謝っている。

「ご、ごめんなさい…。」

「わたしは気付いてたよー。だつて一緒に寝てるもん。」

「俺は全然気づかなかったぞ…。」

ルミは明るく、ルモは驚いたようにそう言う。

結局、女とばれてしまったベルは、全員に謝って女性だということとを離れた。

「どおりで男にしてはガキっぽくみえるはずだ。つて、女だとしても十分子どもっぽいな。本当は年齢もごまかしてるんじゃないか？」

「そんなことありません！ちゃんと18歳です！」

真顔でそう聞かれて、大声で言い返す。

そしてマーサのもとにやってくる、本当に申し訳なさそうな顔で謝ってくる。

「本当にごめんね、マーサ。女だつてこと隠してて…。」

でもマーサには答えられない。その反応に、ベアトリーチェは肩

を落としてしまぼしまぼと遠ざかる。さつきから繰り返しているやり取りだ。

「はあ…、マーサはまだ許してくれないみたい…。僕が隠しごとをしていたことにすぐ怒ってるみたいですよ。」

可愛らしい悲しげな表情で言うベルを、イレナがげます。

「あいつはそんなに怒っちゃいないよ。ただ、ちよつとこつ、あいつなりの複雑な心境があるのさ。そのうちもどおりに接してくれるよ。」

「そうですか…？」

「ああ、大丈夫さ。」

そう、別に怒ってはいないのだ…。ただ…。ただ…。

マーサは横目でベアトリーチエの顔をちらりと見る。色素の薄い毛に、永い睫、優しげな瞳に、小作りな顔のパーツ。どうみてもそれは女性のものだ。

ちやんと見てみれば間違いようのない。ちよつと幼めな印象を受けるが、れつきとした美少女だった。

なのにどうして男の子だと自分は思ったのだろうか。少年だと思っ込んでいたせいなのか…。

そしてあるうことが、自分はこの女の子に…。

「うっ…。」

マーサの胸に、今では苦い想いが浮かぶ。

「私の初恋…。」

ベルが悪いわけじゃないけれど、怒っているわけじゃないけれど、しばらくは変な態度をとることを許してほしい。

天罰ならもう先払いできているだろう。初恋が女の子だったこと…。

「おい、もう明かりを消すぞ。」

眠そうな顔をしたマーセルがベルに声をかける。遅くまで音楽の本を読んでいるベアトリーチエに、熱心なのはいいことだと思いつつもあまりにも際限なくやろうとするので、マーセルはこうして適当な所で止めなければならなくなる。

「あ、ごめんなさい。」

ベルは、はつとした様子で本から顔をあげてマーセルに謝る。相当熱中していたのだろう。素直な性格のベルは、基本時間を守ろうとするのだけれど、今回みたいに新しい音楽の本をもらうと、どうにも夢中になってしまい、こうして夜遅くまで勉強をしたりする。

「音楽の勉強は楽しいか？」

「はい！すごく楽しいです！」

本当に嬉しそうな笑顔が、本人の気持ちは何よりも素直に伝えてくる。男装をして旅をしていた不思議な少女。音楽好きのようだが、出会ったところは音楽についての知識をぜんぜん持って無く、なのに誰もが驚くべき魔笛の演奏をして見せた。

マーセルも実は貴族の生まれである。それほど地位は高くないが、だから仲間には話してないがベルの立ち振る舞いの所作が、相当高貴な生まれのものであることに気づいていた。もしかしたら侯爵、いや公爵家にすら縁がある血筋かもしれない…。

だが、それならますますおかしい。貴族にとって音楽は大事な教養のひとつである。プロになるのは反対されてても、勉強することにそんなに不自由はしなかったはずだ。

お前はいつたいどういう生まれなんだ。

疑問を口にしたか、マーセルは思いとどまった。楽団にはいろんな事情を持つ人間が集まってくる。本人が何も言わない限り、決してそういうことは聞かないのがルールだ。

ベルの吹く誰をも引き込むような美しい魔笛の音色を思い出しながら、マーセルはその背中を見送った。

「ふわ〜、眠いよ〜。」

そんなことを思われているとはつゆ知らず、ベアトリーチェは眠そうな顔で小さなあくびをして馬車の中に入った。ずっと夢中になっていた分、一度われに返ると一気に眠気を自覚してしまった。

疲労のたまった目をこすりながら、馬車の中で横になっているみんなを避けて一番奥のスペースに行く。馬車の中は薄暗くて見えにくいんだけど、ベアトリーチェにとってもここらへんは慣れたものだ。最初のころは危うく仲間を踏んでしまいそうになったり、バランスを崩して抱き着いたりするはめになっていたが、ベアトリーチェの体重は軽いのでそれほど大変なことにはならなかった。

「よいしょっ。」

ウツドの大きな体乗り越えてたどり着いた、馬車の一番奥がベアトリーチェたちのスペースだ。たちと言葉通り、ルミとルモが寝ている。何気に寝相がわるいイレナを、対照的に寝相の良いウツドがガードする布陣で、子供用のスペースとして作られている。

最近になって子ども用のスペースだったと教えられたときはムっとなってマーセルに抗議しようとしたが、今までも寝ていてぴったりとベストフィットしていたのはどうしようもない事実だった。

壁にかかっている毛布をとり、ルミとルモの間に横になる。宮廷にすんでいたころのベッドとはまったく違う感触、あそこには柔らかなベッドと布団があった。でも、何故かいま自分を覆う毛布の感触のほうがか心地よいのは何故だろう。

みんなの穏やかな寝息を聞きながら、ベアトリーチェも目を閉じ眠りの世界に引き込まれていった。

木の板がかすかに揺れる音を聞いて、ルミはぱちくりと目を覚ました。

ウッドが横たわるときとは違うかすかな音。それなのに、はつきりと意識は戻る。横を見ると、いつもどおりベルが寝ている。

音楽の勉強をして夜更かしするベルを待っていると、まだ子供のルミは自然と寝てしまうことが多い。そしてベルが戻ってきて横になる音で目を覚ますのだ。

ルミはそーっと自分の毛布から出ると、ベルに抱き着く。

ふわっと花のような香りが鼻腔をくすぐる。暖かくて柔らかい体は、ルミに心地よさと安心感を与えてくれる。

「ふふ〜。」

ルミはそのまま満足げな顔をして眠りにつく。

しかし…。

「んんっ!?!」

感覚では数刻ほど経ったところか、何か違ってきた感覚がして目を開けると、何故か間にルモが挟まっていた。ベルの柔らかい体の感触と香りは、ルモに阻まれてうまく届いてこない。

反対側に寝ていたはずの双子の弟は、ルミの確保したはずの位置を奪って吞気そうにねていた。

「むー!」

眉を吊り上げたルミは、ドンツとルモを押しつけてベルの一番近くを確保する。ベアトリーチェの寝顔は穏やかなままで気付いた様子はない。すやすやと寝息をたてる綺麗な顔を確認したあと、ルミは思いつきりベルに抱き着き再び眠りの世界に旅立った。

「あぢやっ。」

暗い馬車の中に小さな悲鳴があがる。マーサの声だ。

「いだーい…。」

痛みの走る鼻を押さえて目じりに涙のたまった目を開けると、目に映ったのはほっそりとした小さな足。その足が伸びた先にいるのは、とんでもない恰好で眠っているイレナの姿だった…。

「確かあたしと同じ向きで眠ってたはずなのに…。」

大人の女性という外見に反していつも酷いと言えるイレナの寝相だが、今日は特にひどい。

上半身を起こして鼻をおさえる。痛みはすぐに治まったとはいえ、もう一度安心して眠れるような気分ではなかった。ふと、目をむけるとウツドの体に阻まれた先に、ベアトリーチエたちの眠っているスペースが見える。

まだ子供のルミとルモ、そしてかなり小柄なベル、まだ自分が入れるほどのスペースはありそうだ。

のそりと起き上がり、ウツドの体を飛び越えて、ベルたちの膝元までくる。そして…。

「ちよつとごめんね。」

ベアトリーチエの体を動かしてスペースを開けると、自らの体をその開いた空間に横たえた。

ルミがまたも感じた違和感に目を開けると、目の前に大きな壁があった。

いや、比喻ではあるが、まだ小さな子どものルミにとって、女性としても背の高い方であるマーサの体は壁のようにみえたのだ。

「んなつ。なんでよ！」

ルミが上半身を起こすと、何故か自分とベルの間にマーサが挟まっている。いつもは向こうで寝ているはずなのに、いったい何故ここにいるのか。

「ちょっと！マーサの寝る場所ここじゃないでしょ！」

ぽかぽかと肩をたたいても、安心した顔で熟睡していて起きる気配はない。ベルの体の感触は、その体で遮られた先にある。

「ぬぬぬぬ！」

業を煮やしたルミは立ち上がり、マーサの体を掴み引つ張り上げようとした。しかし子供の体力では、まったく持ち上がらない。

「んー！」

思いつきり力を入れて、体を傾けるとわずに体が動いた。

「はあはあ…。」

しかし体力の消耗も大きい。数センチしか動いてないのに、ルミの息は荒くなっていた。しかしそれでも諦めない。

「んしょっ！んんー！」

何度か休憩しながら、マーサの体を少しずつ少しずつずらしていく。そして。

「や、やったあ…。」

なんとか自分が入り込めるだけのスペースを確保したルミ。その頃には、ぜえぜえと息は完全に上がって汗をかいていた。

しかし満足げな笑みを浮かべると、思いつきり何とか確保したスペースに滑り込む。再びもどってきた柔らかい感触といい匂いに、さつき動いた疲労も癒される気がしてルミはすぐに眠りについた。

ガシッ

そんな感じの感触がしてルミはまたまた目を覚ました。よくわからない状況に身をよじるが、何故か体がうまく動かせない。視線の先にあるベルの体からは30？ほど引き離されてる。

「なにこれ…。」

下を向いて自分の体を確認すると、上半身が誰かの腕で拘束されていた。首を動かして後ろを向く。

「なんで〜!」

何故かそこにいたのはイレナだった。どうしてこっちに来たのかは知らないが、その様子はどうみても熟睡している。まさか寝たまウツドを乗り越えてこっちにきたのだろうか。寝相が悪いとしても、それはさすがにありえないことのように感じるけど。

とにかく今の問題はイレナにがっしり掴まれていて、ベルから引き離されていることだ。右腕から上半身が体の上に乗っかっていて動けない。手も拘束されていてうまく伸ばせず、ベルの体には届かない。

これはもうあきらめるしかないように思えた。

「ふぬー!」

もうこうなれば意地である。

ルミは歯を食いしばって乗っかっているイレナごと体をベルのほうに向かって動かす。子どもの力ではふつつ動かせないように思えるが、火事場の馬鹿力というやつかもしれない。

「あとちょっと…」

ベルの体まであと10センチというところへ来た、その時。

「うーん。」

イレナの背後で眠っていたマーサが寝返りをうつ。

「うぐつ。」

何故かイレナの上にさらに腕がのっかって、体にかかる重みが増す。

「待てよー。ベルー。」

ガシツ、と寝ぼけたルモに足を掴まれる。動き難さがさっきよりも増してしまった。

「くー、わざとやってるのおー!」

涙目になって手をわたわた動かすが届かない。でも、ここまで来たのだ。絶対あきらめない。

「にゃああああ!」

うまく動けない体をよじらせて、地面につつぶせになる。そして

思いっきり全身をつかって地面を押す。動け、動け、そんな純粹な願いが心を走る。

目に映るのはベルの姿のみ。

ぐぐぐぐ

奇跡が起きた。

のしかかったマーサたちと共にルミの小さな体が少し持ち上がる。

「えーい！」

そしてそのままの勢いで、ルミはベルの体へ飛び込んだ。
どすっ

そんな音と共に、柔らかな体の感触といい匂いがルミの元に戻ってくる。

「やったあ…。」

ほとんど力を使い果たしたルミはそのまますぐに眠りに落ちた。

朝、ウツドが起きると青い顔をしたベルが天井をみあげていた。

ウツドが起きたのを発見すると、涙目になった瞳を向けてか細い声で呟いた。

「ウツドさん…助けて…。」

ベルの体の上には、ルミとイレナ、マーサ、ルモという順に何故か四人も乗っかっていた。イレナとマーサは上になってるのは一部分だけとはいえ、ベルより体は大きい。ベルの表情はぐえっとなっていて、とても苦しそうだった。

それでも4人を起こさないように気をつかっているのか、助けを呼ぶ声は小さい。

ウツドはベルの脇に手をいれひょいっと持ち上げてやる。ベルの体にしがみついていたルミとルモがずるずると脱落していく。4人は地面に捨て置かれたが起きる気配はない。

「なにしてる。」

「私にもさっぱりです…。」

ウツドの単純な疑問に、息苦しさから涙を浮かべた目じりて答え
たベルは、そのままぐでーっとウツドの腕にぶら下がるようにして
倒れた。

カルザスの反逆から半年が経ち、平穏を取り戻した王宮。しかし、そのこととは裏腹に、王都には暗い雰囲気漂っていた。

「はあ…。」

フラウは紅茶を運びながら溜息を吐く。

「どうしたの、ため息なんかついちゃって。」

軽くたしなめるように尋ねるカーラも何となく、その原因がわかっているような声だ。

「今日もレティシアさま、沈みつきりだったわ…。」

「アーサーさまも…。」

王都に漂う暗い雰囲気の原因は、アーサーさまとレティシアさまにあった。アーサーさまもレティシアさまあの事件から、まわりからもわかるほど沈んだ様子を見せるようになった。まわりからは理想の恋人と思われていた二人も、今はまったく逢瀬を見せることはない。

レティシアさまはあまり外にすることもなくなり、政務以外では部屋にこもりつきりだ。アーサーさまはレティシアさまのもとをまったく訪れなくなり、かといって後宮に通う様子もない。ただひたすら毎日、政務をこなし、暇があればベアトリーチェの搜索の指示をだしていた。

二人とも王族としての仕事はきっちりこなしている。しかしその表情は周りから目に見えて暗く、それが周りにも暗い雰囲気として伝播していた。

「ベアトリーチェさま、まだ見つからないそうね。」

「うん…。」

ベアトリーチェさまがいなくなってから、アーサーさまの命令により搜索が開始された。しかしその行方は未だ見つかっていない。

国王自らが出向いて他国にも協力を要請した。しかし、いつ出奔し

たのかすら正確にはわからず、ほとんど情報がないのも同然の状況。他国からも芳しい報告は何もなかった。

彼女の故郷であるフィラルドにも問い合わせと謝罪を行ったが、自国の元姫が失踪したというのに彼女の故国の反応は驚くほど冷淡だったそうだ。知らない、興味すらないといった態度で、聞くのは王妃であるレティシアさまの様子ばかりだったらしい。エルサテイーナからのお詫びの宝物をにこにこ顔で受け取ると、代わりにもつと良い姫を側妃としてだせるとまでいったと聞いた。

その様子から考えれば彼女が故国に戻る可能性は薄いだらう。

「それに…ベアトリーチェさま自身は戻りたくなんかないよね…。」
王国に広まった彼女の悪い噂。それは未だ払拭されていない。レティシアさまが何度噂を否定しても、アーサーさまが何度説明しても、民の間まで広まった悪評を消すことはできなかった。本人が失踪してしまったこの状況は、二人の言葉にすら説得力をもたらない。

それに、近頃では王妃にすら悪評をたてるものが現れ始めた。レティシアさまは今も政務を完璧にこなされているが、一部の貴族の間では孤児出身だとか王の寵愛を失っていると誹るものが現れているらしい。

「とにかく今は私たちはレティシアさまを支えないと。」

「うん、そうだよな。」

身分も低く無力な自分たちには、できることは少ない。それでもベアトリーチェさまが命を賭けて守ってくれた自分たちの主人を、自分たちもできるかぎり支えなければいけない。

レティシアは王妃の部屋でベッドに身を投げ出して、天井を見つめていた。今の時間は政務もなく、部屋には彼女ひとりしかない。頭の中にはいろいろな思考がぐるぐる渦巻いていた。

「ビーチェさま…。」

自分が支えようと思っていたはずの人、本当はずっとずっと自分を支えてくれてた人。そして自分のせいで、奈落に突き落とされこの国を去って行った人…。

なんでこうなったんだろう…。

自分が無力だったから。臆病だったから。そして愚かだったから。ベアトリーチェさまを守るため王妃になったはずなのに、いつも通り優しく笑ってくださっていたから、それに甘えて傷つけて…。それなのに、ベアトリーチェさまは自分を守ってくれて。

そして犠牲になった。

「うっつ…。」

泣く資格なんかない。そう思うのに、こらえてもこらえても目じりには涙が浮かぶ。そんな弱い自分が気持ち悪かった。

ベアトリーチェさまのため、そう思ってた王妃になつてみたものの、本当は怖かった。まったく何も知らない国、一物を隠した貴族たちに囲まれ、ベアトリーチェさまは傍にいてくれない、そして肩にはこの国に住む100万もの人々の命のしかかっていた。

科せられた王妃の仕事を必死でこなし、なんとか体裁を取り繕い、でも本当に肝心なことは何もできてなかった。不遇の噂は聞いていたのに、あんなに酷い状態だと気付けなかった。アーサーさまの心が見えず、ただベアトリーチェさまとうまく行きますようにと祈るばかりで、手をこまねいていた…。

そしてベアトリーチェさまはいなくなってしまった。

「どこにいらっしやるのですか、ビーチェさま…。」

もともと王族の姫だったのだ。一人で旅をして大丈夫なのだろうか。何か危険な目に会ってるのではないだろうか。心配で、胸が締め付けられるのに、でもベアトリーチェさまが見つかってまたぶん戻ることは望まれないだろうと言うことはわかる。いや、自分もこの国に戻ってきてほしいのかわからない。

ベアトリーチェさまが戻ってきたとき、少しでも悪い待遇が改善

されるようにしようと、貴族たちの誤解を解こうとした。なのに、それすらも自分ではできなかった…。今までうまく出来てたはずの王妃の仕事すら、貴族たちの偏見の壁によって新たな困難が生じはじめてきた。

そもそも、ベアトリーチェさまがいなくなったのに、なんで自分はまだ王妃など続けているのだろうか。そう自嘲しながらも、まだまわりには王妃としてふるまっている自分がいる。

たくさん命を背負う仕事なのだから、投げ出してはいけない。ベアトリーチェさまならそう言うかもしれない。でもこの国の人も、ベアトリーチェさまを傷つけた人たちだ。もう、何が何だかわからない…。

投げ出してしまいたいのに、捨てられない。その理由も綺麗なものじゃなくて、ただ自分の汚さをごまかしたいだけの気がする。

答えを出せない思考に、瞳の向こうの視界が歪む。

こんなとき、ベアトリーチェさまと一緒に泣いてくれたのに…。そう考えて、自分はベアトリーチェさまに戻ってきて欲しいことに気付く。しかも、それはベアトリーチェさまのためじゃなく、自分がさびしいから…。

「ごめんなさい、ベアトリーチェさま、ごめんなさい…。」

まだ政務は残っている。泣くことは失敗だった、王妃として。

美しく賢い完璧なる王妃。そう呼ばれた少女は、ひとりベッドで子供の用に泣きじゃくった。

ベアトリーチエとマーセルたちの乗った馬車は、目的地であるアルセーナへの道の半ばまできている。

ベアトリーチエは、鏡にうつった自分の姿を見てふと気付いた。

「髪、のびてきたかも…。」

右手で髪を触ってみると、前は耳の上にあつた髪が、頬のところまで降りてくるようになっていいる。後ろを通りがかつたマーサが、そんなベアトリーチエの方を覗き込む。

「どうしたの？」

「うん、髪が伸びてきたから切ろうかと思って…。」

そう言つてカシャンと鋏を取り出したベアトリーチエを見て、マーサが顔色を変える。

「ちよつとちよつと、何してるのよ!」

慌ててその手から鋏をとりあげたマーサに、ベアトリーチエはきよんとした顔をする。

「え、マーサこそどうしたの？髪を切ろうとしたんだけど。」

「髪を切ろうとした、じゃないでしょ。しかも、なんかすごく適当に切ろうとしてた感じだし。」

「う、うん、とりあえず短ければいいかなあつて…。」

マーサの強い剣幕に押され、ベアトリーチエはのけ反りながらたどたどしく答える。いったいなぜこんなに怒つてるのだろう。

マーサの方はベアトリーチエの頭をまじまじと眺めて、はあと溜息をついた。

「変かな？」

「変じゃないけど…。」

確かに自分で適当に切っているわりには、変にはなっていない。でも、多少のびてましにはなっているとはいえ、ところどころ荒い部分があるし、何よりせつかく可愛いらしい容姿をしているのに、こ

の髪型ではもっただいなかった。

「ベルも女の子なんだよ。髪は女の命なんだから、もっと気を使わないと！」

強く主張するマーサの髪は、まっすぐ伸びた赤毛で、さらっと肩から下へと広がっている。それは確かに綺麗だったが、それと自分の話は別だとベアトリーチエは想い、それをそのまま口にする。

「でも、僕は男装してるし。」

「男装してても、してなくても女の子なんだから気にしなきゃいけないの！」

しかし、まったくマーサは折れない。はさみも返してくれない。

「そもそも、最近、男装も適当よね。この前なんかお嬢さんって普通に呼ばれてたし。」

「うっ、そ、そんなことないよ……。ちゃんと否定したし。」

思わず口ごもるベアトリーチエ。確かに最近、みんなの前だと気を抜きすぎて、男装していることを忘れてることがあった。それにエルサティーナからは、もう大分離れたのだし、もう一人旅でもない、念のためにまだ変装しているとはいえ、前ほど意識を配る必要もないと感じてきている。

「だいたいなんで男装なんてしてるわけ？そのせいで」

マーサが勢いのまま何か言いかけて口ごもる。

「そのせいで？」

首をかしげるベアトリーチエに、マーサは顔を少し赤くした後、咳払いをして取り繕い、すまし顔をつくと、ベアトリーチエに向かって宣言した。

「とにかく！明日、美容院につれてくから。そこで切ってもらいましょう。」

「はあ！？」

何故か、マーサのセリフに叫び声をあげたのは、ベアトリーチエではなくマーセルだった。

「え、どうしたんですか？」

今度はマーセルの方を向いて首をかしげることになったベアトリーチェを無視して、マーセルはマーサに食って掛かる。

「ちよつとまで、お前まさか、あの店に連れて行く気じゃないんだろつな。」

「そうだけど、なんか文句ある？」

「文句もあるも何もお前、なんでわざわざあの店に行くんだ。」

「ちよつとパウリが近いし、都合がいいじゃない。」

「俺の都合は考えてないのかよ！」

「うるさいわね、女の髪の毛の一大事なのよ。マーセルの事情なんていちいち気にしてられないわ！」

そのまま二人は言い合いをはじめてしまった。

パウリは今向かつてる進路上にある街だ。でも、寄る予定はなかった気がするが…。

「それじゃあ多数決をとります。ベルの髪を切るために、パウリにやる方がいいと思う人〜。」

「はい！」

「さんせーい！」

「賛成ね。」

「それがいい…。」

いきなり多数決が開始され、茫然とするベアトリーチェをしり目に、次々と仲間の手があがっていく。

「はい、賛成過半数以上で決定！」

「ウッド、馬車の進路をパウリにかえて！」

「わかった…。」

団長つていったい…、とつぶやきながら、がっくり膝をつくマーセル。

「え、決定しちゃったの…？」

そしてただ眺めていた本人の意思をおいて、ベアトリーチェは美容院に行くことになったらしい。

パウリに着いたベアトリーチエたちは、整備された街道を通り、マーサの言った美容院へと向かう。午後の日差しが照る明るい街並みに、5人の顔にも笑顔が浮かぶのだが…。

「何してるんですか？」

何故かひとり、上着を頭からかぶりこそこそと道を歩いている。

「しっ、話しかけるな。俺は風だ、俺は木だ。」

「木は歩きませんよ。」

何やら話かけて欲しくないようなので、ベアトリーチエも離れることにする。

「どうしたんですか？マーセルさん」

「いつものことよ。それより、ベルをどんな髪型にしよっかなあ。」
対照的に明るい表情のマーサが、楽しそうにそう言った。

「え…、適当でいいのに。」

「だーめー、ちゃんとベルに似合う髪型にしないとねー。」

「ねー。」

顔を見合わせてそう言うマーサとルミに、イレナも同意する。

「せっかく行くんだから、ちゃんと決めた方がいいよ。」

「そうそう、ちゃんと伸びてきたあとのことも考えないと。」

「伸びてきたって、男装してるんだけど…。」

頬から汗を垂らしながらそう言うベアトリーチエだが、実際そこまで気にしなくてもいいかなと思ってしまうのも事実だ。だから特に拒否もせず、まわりに任せてしまう。

王宮にいたころは外見にも自分なりに気を使っていたけど、今はめっきり無頓着になってしまった。昔はアーサーさまに大人っぽく見てもらえるようながんばってたんだけどな。そう思うと、少し胸に苦い気持ちも湧く。

「ベルはどの髪型がいい？」

いつの間にか取り出したファッション誌を片手に、ルミがベアト

リーチェの肩に飛びついてくる。

辛い気持ちも一時期より重くないのは、こうやって周りに明るい仲間がいてくれるからだろうか。

「うーん、…ってこれ女の子ようじゃない…。」

眉をしかめて口をとがらせるベアトリーチェに、ルミがえへへと舌を出して笑う。

「えっと、この角を曲がって、ほらほらあそこ。」

マーサが指をさした先には、ちよつと洒落た感じの赤い屋根の店があった。壁は綺麗に白で塗られ、色鮮やかな街並みの中でひときわ目立っている。

「それじゃあ、俺は外でまってるから早く切ってこいよ。」

そして後ろ手で手をあげて、何故か路地裏に入っていこうとするマーセルだったが…。

「今だ！捕まえる！」

そんな声が路地に響き渡ると同時に、5人ほどの大人がマーセルにとびかかっていった。

「げっ、なんだとっ!?!」

ベアトリーチェの目の前で、あつというまに組み敷かれてしまうマーセル。その姿をベアトリーチェは茫然と見つめた。

「ありやりや、今回は早かったね。」

「この前は馬車から引きずりだされたから、逃げやすいように外に出たみたいけど、結局だめだったわね。」

「え…、どうしたんですかこれ…。助けなくていいの…?」

「毎度のことだしね。」

ルミも無情にうなずくだけだ。

「てめえら、少しは助けようとしやがれ…。」

「えっと、息苦しくくないですか?」

押さえつけられて苦しそうにしているので、せめて呼吸しやすいようにしゃがみこんで襟のボタンをはずしてやる。

「そういうのはいいから…。」

さすがにだいの大人5人を退かすのは難しいので、ちょっとだけ助けようとしたのだがだめだったらしい。おとなしくみんなの位置に戻る。

じゃりつと砂を踏む足音がした。現れたのは厳しい顔つきの初老の男性。その男性は、地面に押さえつけられているマーセルをじろつと睨むと、低い声で言った。

「ふん、帰ってきてたのか馬鹿息子。」

「ここまでやっていて白々しいぞ、親父…。」

マーセルも低い声でそう返し、突如現れたその男性を睨み返した。

押さえつけられたマーセルと、突然現れた初老の男性。それをベアトリーチエが茫然と見てみると、後ろからちよいちよいと袖を引かれた。

「ちょうど空いてるみたいだから入っちゃおうよー。ここの美容師さんは腕が良くて、かなり有名なんだよー。」

マーサが美容院のほうへベアトリーチエの体を引っ張る。

「え、マーセルさんはどうするの？」

「いいのいいの。女の子の髪の毛のほうが大事なんだから。」

そのまま男たちに拘束され、引っ張られていくマーセルを眺めながら、ベアトリーチエもマーサたちに美容院へと連れて行かれる。

「あら、おひさしぶりー。おやまあ、可愛い子ねー。でもちよつと、髪型がひどすぎるわー。」

入ってすぐに、一人の美容師がベアトリーチエたちを迎える。整った顔立ちの人で、ショートカットの髪に、すらりとした体つきでマーサより背が高いのだが、声は低めのハスキーな声で、男なのか女なのかわからない。まさに、性別不詳といった感じだ。

「でしょでしょ！だからこんなかんじで、ここをこうして。」

「あらー、これはこっこのほうがいいんじゃない？」

「これなんかどうかしら。」

流れについていけず目を白黒させているベアトリーチエを置いて、マーサたちはその美容師さんと髪型の相談に入ってしまう。

そんなベアトリーチエを、この人は女性とはつきりわかる店員さんがやさしく椅子に座らせる。そして…。

「よし、まつかせなさい。久しぶりに燃えてきたわー。」

数分後、腕まくりをした例の美容師が、ベアトリーチエの方にやってくる。楽しそうに鼻歌を歌いながら、てきぱきと手慣れた手つきでカットの準備を開始する。

「あの…わたし…なにもいってない…。」
「どういふ風にしてほしいとか、髪型の要望とか普通聞き届けられるものじゃないんだらうか…。」
そして、その呟きも聞き届けられることがないまま、ベアトリーチエの髪は切り始められた。

「ありがとつ。またきてね。」
そう言う美容師の声に、ベアトリーチエたちは送り出され店を出る。

「うん…、これってフェミニンすぎない…？」

その後も、なるべく男っぽくというベアトリーチエの意見は、却下され、反対され、拒否され、最後の方は流され、そのわりに手際よくカットされていった。

ベアトリーチエは近くの店の窓ガラスに映った自分の顔を見てうめく。

ベアトリーチエの蜂蜜色の髪は、大して切られることなく。毛先を細く整えられ、小さなウェーブを描いて頬にかかっている。後ろの毛先も巻くようにしながら、背中に降り切る前より女の子っぽく見える気がする。

「ぜんぜんそんなことないよ、とっても可愛いよー。」

「……………」
可愛いって女の子っぽいうことではないだらうか。マーサの言葉は前後で完全に矛盾していたが、あまりの自信満々に突っ込まない。

「良く似合ってるよ。こうしてみるといっそう綺麗な顔立ちだね。」

「まるでお人形さんみたい。すごい、かわいい。」

イレナは微笑み、ルミは両手を合わせて目をきらきらさせてこっちを見る。

みんな大げさすぎる反応だった。レティやイレナみたいな美人ならともかく、自分が髪形を変えたぐらいで、そんなに変わるはずもない。

そう考えると、あまり男っぽくとか自分の髪形にこだわっているのも馬鹿らしくなってきた。もう大分、エルサティーナから離れたので、気を使いすぎるのもよくないのかもしれない。けど、なんかみんなのいいように誘導されてしまった気もする。

「もういいです。」

ぶいっとそっぽ向くベアトリーチェの頬を、マーサとルミがつつき、そのままじゃれ合いになる。

「ところでそろそろマーセルのところに行かないとねえ。」

そんな3人を見ていたイレナが呟く。

「あ…。」

ベアトリーチェもすっかりそのことを忘れていたのだった…。

マーサたちが一緒にいった先には、結構大きな豪邸があった。

「マーセルさんって子爵家の人だったんですか？」

「うん、そうだよ。けど、よく子爵だってわかったね。」

イレナにそう問い返されてギクツとした。王族として一応受けた教育の中に、それぞれの身分ごとの家紋の特徴などもあったので、他国のものでもなんとなくわかったのだが、まずい発言だったのかもしれない。

「い、いえ、貴族だし、家も大きいし、それぐらいかなあって。」

慌ててベアトリーチェは言い訳する。それに納得したのかはわからないが、イレナはそれ以上は追及してこなかった。

「これはこれは、みなさん。よくいらっしやいました。」

門の前に立って話していたベアトリーチェたちに声がかかる。そちらを向くと、こちらに向かって柔和に微笑むひとりの青年がいた。

ベアトリーチェはその顔を見てあつと声を上げる。その顔立ちは、マーセルととても似ていた。ただ髪は短く揃えてあつて、メガネをかけている。それにきつく見えがちなマーセルの顔とは対照的に、青年の表情からは柔らかい雰囲気の流れてくる。

「こんにちは、ピーセルさん。」

「やあ、ルミちゃん、マーサちゃん、イレナさん。君は…、初めましてかな？」

「ベルです。よろしくお願ひします。」

ベアトリーチェがぺこりと頭をさげると、ピーセルと呼ばれた青年はまた頬に柔らかな微笑みを浮かべる。

「わあ、すごく可愛い子だね。まるで天使みたいだ。よろしくね、ベルちゃん。」

大げさなお世辞を投げかけられたうえに、あつさり女の子だとはれている。やっぱりこの髪形は男装に向かないようだった。

「はあ、とため息をつくベアトリーチェにピーセルも首をかしげた。「あれ、何か失礼なこと言っちゃったかな。」

「いえいえ、ちょっと照れてるんですよ、この子。それより、マーセルはいますか？」

「ああ、兄さんなら父上と話してると思っけど…。」
そう言つてちよつと表情を苦笑いに変えて続ける。

「今はちよつと行かない方がいいと思うよ。待つ間にお茶でも飲んでいったらどうかなあ。」

「それじゃあ、お世話になろうかね。」

イレナがピーセルの提案に了承し、ベアトリーチェたちは屋敷の中に案内されることになった。

「エルハイン家にようこそ。」

笑顔でそう言われて、ベアトリーチェたちが案内されたのは、広めの応接間だった。それを聞いて、マーセルさんの家名を聞いたのはじめてかもしれないとベアトリーチェは思った。

やわらかい皮のソファーに座らされ、すぐにお茶が準備される。ルミはお茶と一緒に用意されたケーキに目を輝かせている。

フォークを取り大きな口を空けて、一気にケーキを食べてしまったルミは物足りなさそうにフォークをかじっている。

「はい、私の分をあげるよ。」

「わーい、ありがとう。ベル、大好き！」

自分の分を食べて物足りなさそうにしてたルミに、ベアトリーチェが自分の分のケーキを譲ってやると大喜びした。

「ベルは優しいね。」

「優しいっていかお人よし……。」

その様子を見てイレナは微笑んだが、マーサはちよつと溜息をついた。こうやって誰かが少しでも欲しそうにしていると、ベアトリーチェは全部譲ってしまう。マーサもイレナもそれはどうかと、たまに思うことがあった。

「お待たせしてすみません。といつても、本当に待たせているのは僕では無く兄なのですが。」

ベアトリーチェたちを応接間に案内した後、ピーセルは少しの間退席していた。戻ってきたピーセルは、また柔らかな笑顔をベアトリーチェたちに向ける。

「おしごと〜？」

ルミが無邪気にピーセルに問いかける。

「はい、緊急というわけではなかったのですが、陛下からのご命令だったので。」

「へえ、大層な話だねえ。私らの耳に入っても大丈夫な話なのかい？」

「はい、むしろ皆さんにも知っておいてもらったほうが都合がいい話かもしれません。人探しなんですけど。」

「人探し？」

「マーサが興味を引かれたように、ピーセルの言葉に聞き返す。」

「はい、ベアトリーチェ妃の搜索です。」

その言葉に、ベアトリーチェの鼓動が一気に跳ね上がる。

「ベアトリーチェ妃ってあの？」

「はい、エルサティーナの第八妃ですね。」

ドクンツ、ドクンツ

嫌なリズムを立てて、ベアトリーチェの心臓が震えだす。

「失踪したとは噂で聞いてたけど、見つかったのかい？」

「いえ、まったく。いつ居なくなっただのが正確な日時もわからず、消息の手がかりもまったくなく、これでどうやって探したらいいのかという感じで。エルサティーナの国王直々の依頼らしいので、我が国としても無視するわけにもいきませんし。」

「へえ、そうなんだあ。」

喉が一気にカラカラになり、唇が塞がり声が出せなくなる…。でも、ばれた様子ではない。なら、怪しまれてはいけない。平静を装わなければ…。

「ベアトリーチェっていつぱい酷いことした魔女なんですよ？いなくなってみんな喜んでるのに、なんでまた探したりしてるんだろう？」

「うーん、一応、体裁悪いから探すふりをしてるとか？」

ルミの言葉にベアトリーチェの胸がズキツと痛んだ。後宮にいた時の記憶が、胸の奥からじわつと広がってきて、ベアトリーチェの体を固くさせる。でも…、表情には出していない。ベアトリーチェは、自分が今自然な表情でいてくれることを祈った。

（大丈夫…。大丈夫…。）

不安に震える胸に、何度も言い聞かせ、心を落ち着かせようとする。

「エルサティーナの思惑はわかりませんが、そうなのかもしれないね。まあ、どうあれ居なくなつて、もう半年です。見つかる可能性は低いでしょう。」

ピーセルの言葉で、その話題は終わった。ベアトリーチェは、ほつと静かに息をついた。

探しているふり…、それなら大丈夫かもしれない。今も、現にこうして見つからずにいられてるのだから。きっと、きっと…大丈夫だ…。

話題が変わつて数分経つてからようやく、ベアトリーチェは肩の力を抜いた。

バンツ

扉が強く開かれる音がして、ベアトリーチェたちの視線はそちらの方に向く。

「帰るぞ、お前ら！」

応接間に入ってきたマーセルは開口一番、そう言い放つ。

「ちよつとちよつと、兄さん、もう帰るんですか？」

「ああ、帰る。悪かつたな、ピーセル。ベルたちの相手をしてもらつて。」

「それは全然かまわないけど。」

そのまま、ベアトリーチェたちまで追い立てるようにして、マーセルは家を出ようとする。

「待たんか！マーセル！」

その後ろから、先ほど街で見た初老の男性が表われる。マーセルの父であり、エルハイン家の当主である子爵だ。

「お前らも早く来い。」

その声を無視して、マーセルは部屋をでる。その姿を見て、ピーセルは溜息を尽く。

「はあ、毎年こうなんです。帰ってきてても、喧嘩をして、すぐに出

ていってしまう。」

「私たちが知る限り、一日も持ったことすらないねえ。」

「そうですね。母が亡くなってからはずっとこんな有様で。せめて、一泊ぐらいして、父とも食事を共にしてほしいのですが。」

マーセルの父は、マーセルの消えた扉を睨みつけた後、無言で踵を返し部屋を去って行った。ベアトリーチェは、その背中が一度、悲しげに溜息を吐いたようにみえた。

屋敷を出てると、玄関のところにマーセルが苛立たしげに土を踏みながら待っていた。ベアトリーチェは、その両腕をガシツと掴んだ。

「なんだ？ベル。」

「私、泊まりたいです。」

「はあ？」

「この屋敷に泊まりたいです！」

「えええええええ。」

突然、そんなことを言い出したベアトリーチェに、みんなも驚きの声を上げる。

「突然、何言い出すんだ。帰るぞ、おまえら。」

「いやです。泊まりたいです。」

「駄々っ子かよ！」

ベアトリーチェの珍しく、しかも唐突なわがままに周りは混乱した。

ベアトリーチェの方は、このわがままを絶対押し通す気でした。

マーセルの父の沈んだ背中を見たら、どうしてもこのままマーセルを屋敷から去らせたくないと思ったのだ。

「僕の方は構いませんよ。一度兄さんの仲間たちを、ちゃんとおもてなしたかったことですし。大歓迎です！」

見送りに来ていたピーセルは、笑顔でベアトリーチェの要求を受け入れる。

「て、てめえ……。」

マーセルは汗をかきながら、ピーセルを睨み、ベアトリーチエへと視線を向ける。

「うっ……」

必死にマーセルの腕を引っ張りながら、無意識だろうが上目づかいになった大きな瞳が子犬のようにマーセルに訴えかける。そもそも、マーセルもベアトリーチエがどういう意図で、こんなわがままを言い出したのかうすうすわかっていた。

純粋な、無私のがまま。一時期の反動かベアトリーチエを甘やかすようになってしまったマーセルは、ベアトリーチエの初めての本格的なだこねを一蹴することはできなかった。

やがて意図を察知したマーサたちは、当然ベアトリーチエの方につく。

「あー、足つかれちゃったねえ。一度貴族の屋敷とやらで休んでみたいねえ。」

「私も腰が。」

「私はケーキ食べたい!」

白々しい。いや、ルミだけは純粋にそう思ってるのだろうか。

「て、てめえら!」

マーセルは大声を出し一蹴しようとしたが、ぐいっと引っ張られ再びベアトリーチエの潤んだ瞳と目を合わせてしまう。

「…わかった…わかったからそれやめろ…。」

不思議な、居た堪れない気持ちにさせられたマーセルは、ついにつくりと膝をつき折れた。

こんなにながまななんて初めて言った。

やったことのないことをしてしまつて、落ち込んだような心境なのに、意識はむしろじつとしてられないようなそわそわした興奮をつたえてくる。

でも、あの背中を見た時、マーセルをこのまま帰らせたくないと思つたのだ。マーセルの父はマーセルのことを愛してると思つたから。自分の母さま、父さまとは違つて…。

このまま、喧嘩したままでいて欲しくない。いや、喧嘩したままでも、一日ぐらい一緒にいて欲しい。そう思つた。

「やったー、すごいぞー、ふかふかのベッドだ。ベルのお手柄だなー！」

馬車で留守番をしていた、ルモとウッドもエルハイン家の屋敷にお世話になることになった。いつも通り、ルミとルモと一緒に部屋になつたベアトリーチェは、ふとんにダイブしてはしゃぐ二人を見て笑顔になる。

マーセルさんにしたことを余計なおせっかひだつたかもと不安に思つ気持ちも、二人の姿を見ているとやわらいでくる。

コンコンコン

扉をノックする音がして返事をすると、侍女が扉を開けて要件を伝える。

「お食事の準備ができました。旦那さまも同席されるそうです。」

侍女の案内に従い、大きなテーブルのある部屋にやってくる。マーセルたちが座つても、十分足りるほどの椅子があり、既にマーセルたちは着席している。

「ベル、遅いよ。」

ベアトリーチェの姿を見たマーサが笑顔で手を振る。

「どうぞ、座ってください。」

ピーセルの言葉に従い、ベアトリーチェたちも席に着く。

「……。」

そしてマーセルはずっと黙りこくっている。

「兄さん行儀悪いですよ。肘をつかないでください。」

ピーセルが注意するものの態度は変わらない。そうこうしている内に、ベアトリーチェが入ってきたのは反対側にある扉から、あの時、街でみた男性が入ってきた。

「ようこそいらっしやった、客人のみなさん。このエルハイン家の当主カークが歓迎しますぞ。」

本当に歓迎しているのかわからない厳めしい表情だが、口調はとも丁寧だ。それから、チラッとマーセルの方を見ると、不機嫌な声で続ける。

「何やら、見かけぬやつもいるようじゃがの。」

その言葉に、カッチリと二人の目があり、互いによく似た瞳でらみ合う。

「さつきも会っただろうが。」

「ふん、知らんな。」

食堂をぴりぴりとした空気が包み込む。

「まあまあ、父上も兄さんも落ち着いてください。」

ピーセルが宥めようと間に入るが。

「ふん、ピーセル。お前も勝手にこの家を出て行った奴なんぞ、兄と呼ぶ必要ないんじゃないぞ。」

「こつちだつていたくっているわけじゃねえよ。」

お互いが一触即発の雰囲気になる。

「あ、あの、私お腹すきました！」

ベアトリーチェがいきなり割って入った。みんな目を丸くして、ベアトリーチェの方を見る。

二人を止めるために咄嗟に言った台詞。我に返ったベアトリーチェは恥ずかしくなり赤面する。よく考えたらもっとうまい方法もあったのではないか。

「お腹：減りました。」

それでも一度口をでたものは仕方ない。頬を紅く染めたまま俯き、すねたように唇を尖らせ、もう一度呟く。

マーセルの父、カークはベアトリーチェの姿をばちくりと見た。

「ふむ、そうじゃな」。大変、失礼した。」

そう言った声は先ほどまでと違い、大分落ち着いたものだった。

「お嬢さんとは初めて御逢いしますかな？」

「あ、はい。ベルと言います。半年前からマーセルさんの楽団でお世話になっています。」

「そうか」。たいした御もてなしではないが、うちは男家族だったので量だけはたっぷり用意してある。好きなだけ食べていってください。」

敵めしい顔つきがちょっと和らぐ。ベアトリーチェはそれが笑ったのだとわかった。マーセルさんの笑顔に少し似ていたから。

「はい。」

ベアトリーチェも微笑みを返して、祈りの手をきり、食事始める。カークはその姿を見た後、同じく食事をはじめた。

「うーん、この肉うまい！」

ルモが用意された肉にさっそくかぶりつく。

「こらこら、行儀が悪いぞ。」

「そうだよー。行儀わるいー。」

「なんだよ。お前だつてフォークの使い方変だぞ。」

「そんなことないもんー。」

ガルルウとルミとルモがにらみ合いを始める。

貴族の家の晩餐でも、みんなの様子は変わらない。ピーセルもその会話に楽しそうに参加している。ただマーセルとカークは、食事の間も無言だった。

ベアトリーチェはその姿を見て、そつと溜息をついた。

夜になったエルハイン家の庭、夜風にさわさわと梢が揺れる中、ベアトリーチエは一人で歩いていた。

「はあ……。」

口から洩れるのは溜息。

「どうしたんだい、ベル？ため息なんかついて。」

後ろからかかった声に振り向くと、イレナが立っていた。長い髪を夜の風に揺らしながら、優しい瞳でベアトリーチエを見つめている。

「私、余計なことしちゃったのかな。」

「マーセルたちのことかい？」

「うん、仲良くしてほしくて引き留めてみたけど。結局、食事中も何も話さなかったし、私、何もできなかった。」

マーセルたちのために何かしたいと思った。けれど、自分ができることなんて、何もなかったのかもしれない。

自分は家族の暖かさを知らない人間……。

そんな人間に、誰かの家族の仲を取り持とうとするなんて、無理だったのかもしれない。

「きつとそんなことはないさ。」

俯くベアトリーチエにイレナは優しく頭を撫でてやる。

「その通りですよ。」

そんな二人にピーセルの声がかかる。いつから庭にいたのであるう。ピーセルは、いつもの笑顔をもっと柔らかくしてベアトリーチエに語りかける。

「僕たちが家族そろって食事するのは、5年ぶりのことなんです。あの時とはちがい、母はもういませんが。」

そういつピーセルの瞳には、遠い思い出を懐かしむ光があった。その光の先にあるのは、きつとベアトリーチエが持っていないもの

だ。でも、それでも、それがこの人にとって大切なものだということとはわかる。

「父も兄も意地っ張りで、会うたびに喧嘩別れを繰り返すばかりでした。そんな僕たちが5年ぶりに、家族の団欒をとにもすることができました。あなたのおかげです。」

暖かい微笑みと言葉が、ベアトリーチェの心に伝わってくる。さつきまでの落ち込んでいた気持ちも、ピースルの言葉で消えて行っ

た。

それと同時に疑問が浮かんでくる。

「どうしてマーセルさんとカークさんは、あんなに喧嘩してるんですか？」

「それはわたしも聞きたいねえ。」

喧嘩していることは知っているイレナたちも、その理由までは知らなかったらしい。ベアトリーチェの言葉に同意するように頷く。

「直接の原因は、兄さんが音楽家を目指していることにあります。兄さんは長子だったので、この家を継ぐ予定でした。そのための教育を受けていました。ですが、学校に通ううちに音楽の魅力を知り、その道に進みたいと思うようになりはじめたんです。」

ピースルは快く、マーセルとカークの喧嘩の原因となった出来事を語り始めた。

「父はもともと質実剛健な人間です。教養として以上の音楽はいらないと言っていました。だから当然、猛反対することはわかっていたのです。だから兄さんも半ば諦めて、父には言わずにいたんです。」

「ピースルはそこで一息つくつと、その記憶を思い出すように目を瞑る。」

「それでも兄さんがその夢を捨てられないでいることを、母さんは気付いていたんです。貴族学校の卒業の三か月前に、音楽学校への入学書を兄に差し出して言ったんです。『一度ぐらい夢に挑戦してみなさい。』と。母さんは元来、大人しい性格で、父の言うことに

逆らったことはありませんでした。ですが、その時は父と喧嘩しても説得してみせるとまで言って…。

ですが、そのすぐ後に、母は流行病にかかって亡くなってしまいました。葬式がすみ、貴族学校を卒業したら兄さんは王宮に務めると父は思っていました。でも、母さんは音楽学校への入学手続きを秘密裏にすませてあつたんです。

兄さんは迷った末に、音楽学校に行くことにしました。自分のためにも、背中を押してくれた母さんのためにも。父とは当然喧嘩になりました。そして兄さんはこの家を出ていくことになりました。「貴族の事情だからあんまり勝手なことを言うのもなんだけど、妻の意思ならカークさんももう少し話し合うべきじゃなかったのかねえ。」

イレナの言葉にピーセルは首を振った。

「父は母さんの意思だったことは知りません。兄さんが決して言うなど言いました。」

「なんで…?」

「二人は仲の良い夫婦でしたから。亡くなってまで喧嘩してほしくないと思ったでしょう。だから兄は自分の意志で出て行き、勝手に音楽学校に通いだしたということになっています。」

「そんな…。」

それでいいのだろうか。確かにマーセルさんのお母さんは音楽学校に行くことを望んでいた。でも、家族がこんなになることを望んでいたのではないと思う。

カークさんはつつけんどんな態度で接しながら、マーセルさんが故郷に戻るたびに会おうとしていた。マーセルさんもこの街に来るのをいやいや言いながらも、完全に拒否することは無かった。

二人をなんとか仲直りさせる方法はないのだろうか。

俯いて考えるベアトリーチェに、ピーセルは微笑んだ。

「心配してくれてありがとうございます。あなたはとても優しい方ですね。でも、問題を根本的に解決できるとしたら当人たちだけで

しょうね。ねえ、兄さん。」

ピーセルの言葉にベアトリーチェの横のしげみがかざりと鳴った。「マ、マーセルさん？何してるんですか…？」

そちらを見ると茂みの中に身を隠していたマーセルと目があった。生い茂った木々の中にいたので、背中や肩やら全身葉っぱだらけだ。「なんかお前が落ち込んだ顔をしていて気になったからな…。」

罰が悪そうな顔で、頭を掻きながら茂みから出てくるマーセル。葉っぱが長い髪やらに絡まって酷い姿だ。

「それでなんで茂みの中になんていたんですか…。もう、あっちこつちに葉っぱがついてお化けみたい…。」

「いや、なんか出てきにくくてな。」

ベアトリーチェは駆け寄って、マーセルの体についた木の葉を払っていく。

「ベルが落ち込んだの、あんたのせいだったもんね。」

「うつせえ…。」

にやにや笑ったイレナは、マーセルの頭頂部に手が届かなくてぴよんぴよんしだしたベアトリーチェの体を抱え上げてやる。やっと手が届いたベアトリーチェは、マーセルの髪に絡んだ葉っぱを取り始める。

その様子を見て、ピーセルがまったくすくす笑う。

「わかってたんだよ。俺がなんとかしなきゃいけない問題だって。ついつい意地張って先延ばし位にしちまった。」

マーセルは罰の悪そうな顔のまま、頭をかいて続ける。

「でも、仲間に心配されてるのに、それも言ったられないよな。そろそろ決着をつけないといけねえ。ベル、この問題は俺が自分でどうにかする。けど、そう決心できたのはお前のおかげだ。ありがとうな。」

マーセルはそう言って罰の悪そうな唇を、少し釣り上げベアトリーチェ笑った。それは食事のとき見たカークの表情に似ていた。

「はい。」

自分では大したことはできなかった。それでも、マーセルは自分のおかげで決心できたと言ってくれた。胸に温かい気持ちがあふれてくる。

「それで、ちょっとお前たちの力を借りたいんだが…。」

マーセルはまた罰が悪そうに頭をかくと、そう切り出した。

カークはいつも通りの時間に、朝起きた。

そして屋敷の中が、いつもと違い浮き立っていることに気付いた。妻が亡くなってからのこの屋敷は静かなときが多かった。妻は本人は大人しいが、いるだけで場の雰囲気は自然と暖かくしてくれる女性だった。

「いったいどうしたんじゃ。」

礼儀正しく挨拶をして通り過ぎる使用人たちの顔も、今日はどうにかうきうきしているように見えた。

「おはようございます、父上。そろそろお時間ですよ。」

「ピーセル、今日の仕事はなかったはずじゃが？」

もう若くないとはいえ、カークの頭には今日のスケジュールがきちんと記憶されていた。それによれば、これといった仕事はなかったはずだ。

「はい、今日は仕事ではなくコンサートです。」

息子が笑顔で続けた言葉を、カークは少しの間まったく理解できなかった。

「さあ父上、行きましょう。時間になってしまいます。」

理解の追いつかない父を息子はニコニコ顔で背中を押して玄関前の広間へと連れてく。

「こら、ピーセル。説明せんか！」

遂に癇癪を起した父にピーセルは、手で広間の階段のほうを指し示す。

「もうすぐはじまりますので、直接確かめた方がよろしいかと。」

ピーセルに言われてみた先には、二階へと続く階段の広めの踊り場が飾り付けられ即席のステージになっていた。そこに立っているのは、昨日から客人として迎えているマーセルたちだった。

午前中の仕事をすませた使用人たちも楽しそうに集まってきてい

る。

「せつかくの5年ぶりの演奏会なのですから、使用人たちにも気兼ねなく楽しんでもらうことにしました。」

妻が死んでマーセルが出て行つて以来、この家で演奏会が開かれたことは一度も無かった。楽団を招くためのステージも必要のないものということで、以前に家を改修したときに取り払ってしまった。しかし今、踊り場に楽器を用意し、一階に家中の椅子を並べ、玄関からつながる広間を利用して即席のコンサート会場ができてしまつていた。自分の書斎の椅子が、その中の最前列に並べてあることにカークは気付いて苦笑した。

「さあ、父上が座りませんと、みんなも座れません。コンサートもはじまりませんよ。」

ピーセルがカークにその椅子をすすめる。

「ふん、お前たちも協力したのか。まあいい、あいつが何を考えているかは知らんが、見てやるうではないか。」

カークは頷き、どっかりと自分の椅子に腰をおろした。使用人たちもそれに合わせて座り、広間に拍手が鳴り響く。

そして予想通り、マーセルとその楽団の仲間たちが入場してくる。カッチリと息子と目線が会う。あれ以来、会う度ににらみ合う仲間になつていたが、今日は少し違う。いがみ合うわけではない、真剣な瞳がこちらを見つめてくる。

仲間たちが位置につくと、マーセルは一礼した。

「ようこそ、マーセル楽団の演奏会へ。エルハイン家のみなさんに楽しんでいただけるよう、精一杯演奏させていただきます。」

それは息子としてではなく、演奏家としてのマーセルの言葉だ。だからカークも当主として答える。

「みなさんの演奏を楽しませてもらおう。」

カークとマーセルの真剣な眼差しが再び会う。

マーセルの仲間たちは楽しそうにそれを見つめている。使用人たちも同じように久しぶりの演奏会に楽しみな表情だ。ただ、晚餐会

で自分たちの喧嘩を止めようとした少女は、心配そうな見守るような表情でこちらを見てきている。

そして演奏が始まった。

観客になったエルハイン家の人々は、演奏が始まるとわっと一度盛り上がると、流れてきた旋律に静かに耳を傾け始めた。

王宮勤めの楽師たちにも引けをとらない高い技術の演奏。暖かな音色。

しかし…、カークは思う。一流になるためには、何か傑出した要素が必要なのだ。

カークは隠れて何度か、マーセルの演奏を聞きに行ったことがあった。聞く度に演奏の技術は上がっていることがわかる。だが、それだけでは演奏家として成功を収めるのは難しいのだ。

しかし同時に違和感を感じた。いつもより演奏が抑え気味なような。基本的な演奏の仕方は変わっていないが、微妙に前に聞いた時より一人ひとりが個性を抑え目になっているような気がする。

そして今まで演奏に参加してなかった、自分と息子を心配そうに見つめていた少女が楽器を構えた。

それは陽光に照らされ美しく輝く銀の魔笛。

少女がそれに口づけた時、世界が変わった。

美しい、純粋な旋律が広間に響き渡る。その音は、広間に集まったエルハイン家の人々の心を揺さぶる。

カークは目を見開いた。音楽にそれほど熱心なわけではないが、貴族として長年いきていくうち多くの音楽を聞いてきた。しかしこんな魔笛の音は今まで聞いたことがなかった。高く澄んだ天使のような音。

隣に座っていたピーセルも呆けたような顔でステージを見つめる。やがてその旋律は、マーセルたちの音と混じり合い美しい音楽を奏で始める。高く低く楽しそうに。それを支えるように寄り添う仲間たちの音。少女の顔にもう不安の色は無かった。

カークは理解した。この魔笛の音はとてつもなく美しいと共に、

その音が合奏をするにはあまりに強すぎる。だから周りがそれを受け入れてやらなければならぬ。だから今、マーセルたちは自分たちの主張を抑えた演奏をしている。楽団たちはずっと7人で弾くことを意識していたのだ。

それは決して良いことばかりは言えない。もっと周りの奏者もきちんと自分たちの個性を主張したほうがいい場面もある。魔笛の演奏も時には抑え、誰かのサポートに入らなければいけないときもある。今がベストとは決して言えない。

だが、いずれそれも仲間たちと共に解決していくのだろう。

（そうか…。お前は見つけたんじゃない。自分の夢を切り開く光を…。

再び会ったマーセルの瞳に、昔見たような焦りの色は無かった。演奏が終わった時、広間は大きな喝采に包まれた。

演奏を終えたマーセルは、団長として観客に挨拶を終えると、カークの元にずんずんとやってきた。

「親父、俺は演奏家としてやっていく。こいつらと一緒に。」

マーセルが手を向けた先には、さっきまで一緒に素晴らしい演奏をした仲間たちがいた。その中で少女が緊張した面持ちで、魔笛を握り締めてこつちを見ている。

「ふっ、勝手にせい。」

カークはそれだけ言って立ち上がると書斎へと向かったが、途中で立ち止まる。

「そうじゃ、ピーセル。」

「どうしました、父上？」

「うちには楽団たちを招くステージが無かったようだのう。今月中にでも作りなおすことにしよう。これから年に一回は楽団を招くことになるだろうからな。」

ピーセルはその言葉を聞くと、笑顔でメモを始める。

「招く楽団についてはどうします。」

「それはお前に任せる。今日のようにな。」

「わかりました。」

ピーセルは振り向くと、ベアトリーチェたちに向かって大声で言った。

「みなさん！来年もまたお願いできますかー？」

「ふんっ。」

カークが少し急ぎ足気味になり、ピーセルを置いて書齋へと向かいだす。

「任せとけー！」

「こら、てめえ勝手に了承するんじゃないねえ！」

親指を立てて返事をしたルモに、マーセルが食って掛かる。

「いいじゃないのー。どうせうんっていうんでしょ？」

「来年も美味しいもの食べれるねー。」

「それじゃあよろしくお願いします。」

団長が何かを言う前に、約束を取り付けたことにしたピーセルも去っていく。マーセルはいつも通りにぎゃーぎゃーと仲間たちと騒ぎ出す。カークが最後に振り向くと、安心したようにその姿を見つめるあの少女の姿があった。

急ぎ足で書齋に戻ったカークは呟いた。

「椅子がない…。」

エルハイン家から出る直前になって、ベアトリーチェはカークの書齋に呼び出された。

「いったいどうしたんだ？」

そう言う仲間たちを置いて、ベアトリーチェはカークの書斎へと向かう。木の扉を開けて中に入ると、カークが立ち上がって待っていた。

厳しい顔立ちだが、不思議と怖くない。優しい表情を浮かべてるのだとわかる。

「突然呼び出して失礼しました、高貴なる方。」
「最敬礼のお辞儀。」

その言葉にベアトリーチェの心臓は跳ねた。しかし、不思議と逃げ出す気は起きない。

「ご安心ください。あなたをどうしようというのではありませんせん。」

「はい…。」

頷くベアトリーチェにカークは微笑む。

「あなたに言いたいことがあります。」

「言いたいこと…ですか？」

ベアトリーチェは首を傾げる。

「あなたはもう少し気を付けた方がいい。晚餐の席、あなたがとつた祈りの動作は特定の王族だけに伝わるものでした。」

「あ…。」

そう言われて初めて、昨晚の行動から、見破られてしまったのだとわかった。仲間たちからときどき抜けていると言われるが、本当にそうかもしれない…。

「それからその銀の魔笛も五大国の王族が所有するものにしか無い装飾が施されている。」

「え…。」

その言葉にはベアトリーチェも動揺する。銀の魔笛は自分にとって大切なもの

だ。しかしこれも自分の正体を明かす危険があるのだという。でも、ばれる危険があると言われても、手放すわけにはいかなかった。こ

の魔笛は自分にとって大切なもの。アーサーさまからもらった贈り物。

困ったように銀の魔笛を見つめるベアトリーチェに、カークは微笑むと何かを手渡した。

「安心してください。それについては少し隠せば大丈夫です。演奏の邪魔にならないようなものをピーセルに用意させました。」

それは、とても薄い皮のカバーだった。ベアトリーチェの魔笛にもしつかりとフィットする。これなら確かに演奏の邪魔にもならないし、装飾も隠されてはいることはないだろう。

「ありがとうございます。」

大切そうに銀の魔笛を握り締め、ベアトリーチェはお礼を言った。「何、それはささやかなお礼です。今回、あなたが私たちにしてくれたことの。」

私たち。それはきつとマーセルとカークを表す言葉なのだろう。

カークが自分とマーセルのことを、そう言い現したことにベアトリーチェはなんだか嬉しくなる。

「それからもうひとつ。」

「なんででしょうか。」

まだ何か自分はまずい行動をしてしまったろうか。ベアトリーチェは緊張する。

「息子のことをよろしくお願いします。」

頭を下げられて、ベアトリーチェは一瞬呆けてしまう。それから我に返り慌てだす。

「そんな、マーセルさんにお世話になっているのは僕のほうで。音楽だって教えて貰ってるし、いつも失敗ばかりして迷惑かけちゃってるし……。」

そこまで言ったが、カークの姿を見て言葉を止める。それから笑顔が浮かべて言った。

「今は私のほうがお世話になりっぱなしだけど、いつか私の方もマーセルさんのことを助けられるようになれたらいいと思います、み

んなと一緒に。だから、がんばります。」

マーセルの仲間たちと同じ、優しい笑顔だった。

ベアトリーチェのいなくなった書齋で、カークは呟いた。

「良い子じゃのう。別の意味でも息子をよろしくお願いしとけばよかったですか…。」

ベアトリーチェを待つマーセルたち。そこにピーセルがやってきて来た。

「ベルはまだー？」

「もう少しかかりそうです。すみません、なんだか父が引き留めてしまつて。」

唇を尖らせているルミに、ピーセルが謝る。それからピーセルはマーセルに歩み寄る。

「な、なんだよ。おまえ…。」

あまりに近づきすぎて戸惑っているマーセルに、ピーセルは耳打ちをする。その表情はやたら真剣だった。

「兄さん、がんばってくださいね。」

「ああ、わかつてる。ベルも入ったことだし、コンテストでも結果をだしてやるさ。」

「いえ、そう言うことでは無くて。それもあるんですけど、そろそろ兄さんもいい年でしょう。」

「はあ？」

「せっかくあんないい子がいるんですから、ちゃんと捕まえてくださいよ。僕もあんな方が義姉なら、御屋敷にすむのが楽しくなりそうですから。」

「いったい何の話だよ。」

「ですから…。」

そう言いかけた時、玄関が開き蜂蜜色の髪の少女が出てくる。

「おまたせ。」

「ベルー！」

ぴょんと飛びついたルミと抱き合いながら、ピーセルの元に戻ってきてぺこりとお礼をする。

「とてもお世話になりました。ありがとうございます。」

ピーセルはマーセルから離れると、いつもの柔らかな笑顔に戻り言った。マーセルは一瞬舌打ちを聞いた気がしたが、気のせいかもしれない気がした。

「いえいえ、また来てください。いつでも歓迎します。」

もうみんなの荷物を用意はできてるので、あとは馬車で旅立つだけだ。

「本当にがんばってくださいね！あにうえー！」

見送りの言葉を交わした後、屋敷から離れていく馬車に、まだピーセルは同じ言葉を叫んでいる。

「いったいどうしたの？ピーセルさん。」

「いやわけわからねえ……。」

首をかしげるマーサに、マーセルがうんざりした顔で呟く。

「きつとマーセルさんが音楽家として成功することを応援しているんだよ。いいね、仲が良い家族って。」

ベアトリーチェだけは憧れた表情で二人のことを交互に見つめていた。

「よいしょ、うんしょっ。」

馬車が停泊している森の中、よろよろと歩く影がある。背がわずかばかりか低い影は、大量の木の枝を抱えている。とてつもなく多い量とは言えないが、小柄なせいか相対的にはすごい多量で、その足取りはあぶなっかしい。

そして何より前が見てないのが致命的だ。

カツンッ

そんな音がして小さい石ころが足に当たる。それだけで影はバランスをくずして倒れかけてしまう。

「わわわっ。」

このまま正面から地面に倒れふしそうになったとき、ぐいっと誰かの腕がその体が抱きとめた。

「持ちすぎてる……。」

「ウッドさん……。」

倒れそうになったベアトリーチェの体を左手だけで支えたウッドは、右手で落としそうになった木の枝も確保してしまっている。

「みんなはもつと運んでるから、僕もがんばらないと思って……。」

「最近私ということも多くなっただが、ときどき癖で自分のことを僕と言ったりするベアトリーチェ。」

それはともかくとして、王族に生まれたせいかわささたちよりちよつと不器用なところがあった。今日は野宿のため、焚き火用の枯れ枝を集めようとしたのだが、どうにも自分だけ持ち運べる量が少ない。

みんなの足を引っ張ってると思ったベアトリーチェは奮起して、枯れ枝を大量に集めみんなのところに向かおうとしたのだが……。

「無理はよくない……。」

「はい…。」

前述のようにふらふらになり転びかけたところを、ウッドに助けられたのだった。

簡潔な言葉に反省をほどこされる。確かに自分の手には余る量だった。

「それにもう晩御飯もできてる…。」

そう言われて空を見上げるともう真暗だ。実はウッドが来たのもベアトリーチェがあまりに遅いから探しに来たからだだった。あまりに枯れ枝集めに夢中になった結果、結局時間がかかりすぎて役にはたてなかった。

「ううー…。」

腕の中でぐったり落ち込むベアトリーチェに、ウッドが言葉少なに声をかける。

「まとめ方おしえる…。」

「まとめ方?」

「枝…。」

ウッドの言葉に、自分より小柄なルミヤルモも自分より多くの量を運んでいたが、そう言えば手に持つときには上手にまとめたことに気付く。

一方、自分のもってきた枝をみると、ばらばらで鳥の巣みたいになっている。マーセルたちとは体格の差もあるが、そのせいでさらに運ぶ量に差がついていたことに気付いた。

「ベルを連れてきた…。」

考え込んでいたベアトリーチェは、みんなが集合している馬車の前に、ウッドに抱えられた格好のまま到着する。

「ベルー、もう心配したよー。」

マーセルに何故か襟首をつかまれ、ぶら下がった状態だったルミヤルモが、ベアトリーチェの姿を見て目を輝かせると、そのままマーセルの手を脱出しベアトリーチェに飛びついてった。

「ごめんね。」

しょんぼりした顔で謝るベアトリーチェに、マーセルが溜息を吐いて文句を言う。

「はあ、探しにいくとか言って暴れだすそいつを、止めなきゃいけないかった俺が一番苦労したんだぜ。」

「あんたもずっと心配そうな顔してたけどね。」

「ぐっ…。」

そしてイレナからいやらしい笑顔で突っ込みを受け黙り込む。

「わあ、枝もってきてくれたんだ。でも、もう足りそうだけど。」

ウツドの抱えている枝を見てマーサが、鍋のおたまをかき混ぜながら言った。暗くなるまでがんばったせいか、ベアトリーチェが持つてきた枝は結構な量がある。

それを聞いてベアトリーチェはさらにしょんぼりとなる。

ウツドは呟く。

「大丈夫、練習に使う。」

「練習？」

「晩御飯の後に。」

返されたウツドの返事は説明不足すぎて、マーサたちには理解できなかった。

晩御飯を食べた後、ウツドとベアトリーチェは多量の枝を間に挟み、正座をして向き合っていた。

「ウツドはこうしたほうがいい…。」

「どうですか？」

「どう。」

枝の形はひとつひとつそれぞれが違う。コツはあるものの、あとは感と経験の作業だ。ベアトリーチェは熱心な顔で、ウツドにアドバイスを受けながら枝をまとめていく。

「そんなにがんばって木こりにでもなるつもりか？」

「立派な木こりになってみせます。」

からかうように言ったマーセルに、ベアトリーチェが手元の木の枝を一心不乱に組み合わせながら答える。

「おいおいっ……。」

さすがにそれは困るとマーセル声を出す。夢中になったら止まらない性格は知っていたが、こういうことにまで真剣になってしまったとは。

「マーセルのバカ野郎！ベルがきこりになっちゃっやうじゃん。」

「ばかー！」

双子が余計なことを言ったマーセルに食って掛かった。

「俺のせいじゃねえだろ！」

「ばかばかばかばかー！」

「言つとくがバカつて言った奴がバカなんだからな？」

「あほー！あほー！」

そのまま双子たちと同レベルの口喧嘩をはじめることになった。双子は手も足もだしてるが……。そんな周りの騒ぎを置いて、ウッドとベアトリーチェは二人だけで、いそいそと枝を出来る限り小さくきれいになるよにまとめている。

ベアトリーチェが木の枝を一生懸命、横に束ねていく。一生懸命やってるのだが、不器用な手つきで束ねられた枝はちぐはぐでところどころ隙間があったり、枝が突き出たりしている。それを無言でウッドが解体し、綺麗に形をそろえ束ねていく。

その手つきをベアトリーチェは真剣にじっと見つめ、コツを学んでいく。

そして綺麗なまとめられた枝の束に目を輝かせるベアトリーチェをみると頷き、まとめてしまった束を分けたあと、またベアトリーチェに渡す。

ベアトリーチェは早速、お手本を真似て枝をまとめ始める。

かれこれずっとそんなことを繰り返している二人だった。はた目から見ると、かなり珍妙な光景である。

「あんなに真剣になっちゃって…。枝をまとめるのになんてそんな真剣にがんばることでもないのに。」

「私たちには当たり前前にできることでも、あの子にとってはそうじゃないのさ。何かをできるようにするためがんばるってのはいいことだよ。」

食事を終え肩肘をつけて寝ころんだマーサが、ベアトリーチェたちを呆れたように見つめる。イレナの言うこともわかる…。けど、食事を終え、もう一刻以上も経ってるのにずっとやってるのである。マーサがそうやってがんばるベアトリーチェの姿をじっと見てると、何やら双子とマーセルたちが音楽の本を持ってベアトリーチェに近づいていく。

「何やってんのあいつら。」

そうマーサが呟くうちに、二人はベアトリーチェに近づきおおずといった感じで声をかける。

「べ、ベル、そろそろ音楽の勉強の時間だよ。一緒に勉強しよう？」

「そ、そうだよ。もうそんな時間なんだぞ。」

「きよ、今日は特別に新しい分野について講義してやるよ。前に勉強してみたいと言ってたよ。まだ早いと言ってたけど特別だ。特別。」

「今日はいいです。」

「ばっさり断られた。」

ベアトリーチェが今まで音楽の勉強を断ったことは一度もない。

むしろ自分からせがんでくるくらいだったのだ。それが…。

3人もガーンとした顔になり、落ち込んだ表情でふらふらと戻って行く

「寂しくなっただね…。」

「何やってんだか…。」

三角座りで仲良く落ち込む三人に気付いた様も無く、ベアトリーチェはウッドと枝をまとめる練習に没頭した。

「いたつ。」

そう小さく悲鳴をあげたベアトリーチエ。

「どうしたの？」

慌てて駆け寄ると枝でちょっと指を切ったらしく、ぷくつと血が出ていた。

「包帯と消毒とつてこなきや。」

なんだかんだで過保護なマーサが馬車の方へ駆けて行こうとするのをベアトリーチエが止める。

「大丈夫、舐めておけば直るよ。」

「それ…マーセルたちの真似だよ…。」

傷の出来た親指を口にくわえるベアトリーチエ。一ヶ月前は、もっと丁寧な性格だったはずだ。マーセルたちが軽い傷を負った時、そう言つて舐めてすませてしまつたのを覚えてしまったのだろう。

(ベルがどんどん下品になっていく…。)

マーサは微妙な心境で、傷口をくわえるベアトリーチエを見る。
と…。

「どうしたの？」

眉根を寄せて困つた顔をしだしたベアトリーチエに、マーサが首を傾げたずねる。ベアトリーチエの頬は膨らんでいて、ずいぶんと唾が溜まつてるようだ。小さな傷だったから血は止まつたろうに、まだ指をくわえたままにいる。

そして何かとまどうように震えてる。

「もしかして、唾はけないの？」

それを聞き、ベアトリーチエは首を振り、何か決心するような表情で顔を下に向けたが…。結局、そのまま頬を膨らませて固まってしまう。

マーサの思う限りベアトリーチエはかなり育ちが良いようだった。マーセルたちみたいに地面に唾を吐くなんてやったことないのだろう。なんだかそのことにちょっと安心したりする。変なことばっかり覚えられたらいやだし…。

「ほらこれに出して…。慣れないことはしないこと。ほら、ベーター。」

「ううん。」

綺麗なタオルを口におしつけ、ベアトリーチェがなんとか口にたまった唾を吐きだしたのを確認すると、あんまりマーセルたちが悪いことを教えないように注意しようと心に決めた。

「次はがんばる。」

「いや、それはがんばらなくていいから。お願いだから枝をまとめる程度にしておいて…。」

「そうしたほうがいい…。ほら練習。」

「うん。」

ウツドも同意して、ベアトリーチェを枝をまとめる練習にもどるようほどこす。その意図をわかったのかはわからないが、ベアトリーチェも素直に枝をまとめ始める。

「マーサずるーい！ずるーい！」

「はいはい、あんたたちも邪魔しないの。」

マーサだけ構ってもらってずるいと不平の声を上げるルミを適当にあしらひ、マーサは元の位置に寝ころびベアトリーチェを見守る作業に戻った。

「できたー！」

ベアトリーチェが嬉しそうに両手を上げ、手の中に出来た枝の塊を見つめる。綺麗に組み合わされた枝は、随分と綺麗にまとまっていた。

「良く出来てる…。」

ウツドもそれを見て笑顔でうなづく。もうずいぶんと時間が経ち、暇になったみんなは寝てしまっている。それからベアトリーチェは奮闘して、満足できる枝のまとめりをつくりあげた。

「ありがとうございます。」

「いい…。もう寝よう。」

ウツドは言葉少ないながらも、気にしなくていいと言い、もう夜遅いからとベアトリーチェに寝るようにほどこす。これまでの付き合いで、ベアトリーチェも短い言葉の中身にある優しさを読み取れるようになっていた。

素直に頷き、寝るための準備をはじめ。

「えへへ。」

自分がうまくまとめあげた枝を見つめ顔を崩し笑う。ただの枝のかたまりなのに大切な宝物のように馬車の隅におき、馬車の中に入って行った。

その日のベアトリーチェの寝顔は、いつもより1割増幸せそうだった。

朝一番に起きたマーサは冷たい森の空気に体を震わせた。まだ冬ではないが、空は曇っていて日の光が届いてこない。

「うっ…、今日は冷え込んでる…。」

馬車の外に出たが、焚き火は昨日の夜のうちに消してしまってるので暖かさはもうない。

「うーん、火をつけなおしたいけど。」

だいたい焚き木はその日の分しか集めない。どうせ昼の間は移動するのだから、移動した先でまた集めればいいからだ。しかし今日はよく冷え込んでるし、出発の間までは結構ある。ちょっと暖をとりたいかった。

「そういえば…。」

昨日は、ベルががんばって焚き木を集めていた。その分は余ってしまい、ベルの練習用に使われたはずだが。

「あったあった。」

何故か馬車の隅にあつた枝のかたまりを見つけた。いつもベルが持つてくる薪とは違い、上手にまとめられていて持ち運びやすい。ベルが昨日かなりがんばったことがうかがえる。

手早く火石で火をつけると、枝はぱちぱちと燃え上がっていく。

「はあ、あつたかい。」

寒さから解放され、マーサはひとここちつく。

「ううー、さみいさみい。」

馬車の中からマーセルが肩を抱いて震えながら出てくる。

「お、あつたかそうだな。」

そしてマーサが焚き火してるのを見ると近づいてきて暖をとる。

そうやって、みんな起きては焚き火の前に集まっていくな。

「ベルおそいねえ。」

消えもう必要なくなつたころ、ルミが少し不満そうに呟く。

「昨日遅かつたからまだ眠たいんでしよう。」

そんな話をしているとがさごと馬車から音がして、またちよつとのびた蜂蜜色の髪が馬車の出口から覗く。

「んんん、んんん？」

しかし奇妙なことに馬車から降りてこず、眠たげな表情のまま何かをがさごと探している。馬車から降りてふらふらと目蓋が落ちかけたままの表情で、あたりをゆっくりと首をまわし見回す。

「どうしたの？」

寝ぼけた表情のベルにたずねると、ポツリと言葉を漏らす。

「んん？どこ…。」

「ないって何が？」

「枝…。」

そうやって目をこすりながらあたりを見回す。

マーサはああと頷き、笑顔で焚き火の方を指差しヘアトリーチェに言った。

「今日寒かつたから焚き火に使わせてもらつたよ。お陰でたすかつた。ありが…。」

ありがとう。そう言おうとしたマーサの口が途中で止まる。焚き火を見たベルの顔が、眠気など吹っ飛んだように目を見開き、真っ青になっていたからだ。茫然といった感じで、普段から大きな目のことさらに大きくして、ばらばらになって燃えていく焚き木をじっと見つめている。

「えっ…、もしかして…、まずかった？」

何かとてつもないショックを受けた様子のベルに、頬から汗を垂らしたマーサがおずおずといった感じで聞き返す。

しかしベルは気付かない様子で、ただ立ちすくんでいる。

マーサは今朝見た枝がずいぶん綺麗にまとめてあったのを思い出した。あれは本当に綺麗に、それこそ愛情たっぷりこめたように、綺麗にまとまっていた。

「ベル…？」

もう一度声をかけられ、はっと気づいたように我に返り、ベルは首を振る。

「う、ううん。そんなことないよ。」

否定しているのに、その表情は思いつきり泣きそうだ。

マーサの脳裏に何故か、幼いころの記憶が浮かんできた。

うんと小さかった頃に家のぼろ布で苦労して作った人形。擦り切れた布と、糸くずを組み合わせて作ったそれは、どう見ても小汚い布のかたまりだったが、自分にとっては世界中のどの人形より素晴らしい宝物に思えた。しかし周りから見たらごみ同然なので、次の日、母親にゴミとして捨てられた。それを知った自分は三日三晩、大泣きした。

何故か今、その時の母親が今の自分とだぶるのだ。そして目の前にあるベルの今にも泣きそうな顔は…。

子どものころというのは、自分が作ったものにやたら感情移入してしまうときがある。本当にその人形に魂でも宿ってるかのごとく大切なものに、あの時の自分は感じていた。

だが、まさか…。いくらベルが幼めにみえる容姿だからといって

も、ルミヤルモ、あの頃の自分なんかよりはちゃんと年上に見える。そして実際の年齢では、自分より年上なのである、ベルは……。そんな子どもみたいなことがあるはずが……。だいたい、今回ベルが作ったのは人形ではなく、ただの枝のかたまりである。

「これでいいんだよね……。だってこれがそれが本来の役目だったんだもん。あの枝だつてきつとこのの方が幸せだったんだよね……。」
(思いつきり感情移入してるうつつうつつ！)

マーサは心の中で絶叫した。

まるで大切な人を見送るような目で、燃えていく焚き木を見るベル。その目じりには涙が浮かんでる。

泣いてる理由がひたすら幼児じみてるのだが、それとは裏腹に聞き分け良い態度がマーサたちの心をさらにえぐる。

「お、おい。どうにかしろよ。」

「そんなこといったって、もうどうしようもないじゃない！」

なんとなく事態を把握したらしい、みんなが焦ったようにマーサの方にくる。

だが、もうベルが集めた枝は全部焚き木として火にくべてしまったのだ。もう、取り返しがつかない。

「だいたいあんたたちだつて、あの焚き木で暖をとってたし、どんどん枝を火に入れていったじゃない！」

「うつつ……。」

「わ、わたし知らなかったもん。あれがベルの作ったのだった。知つてたら大切にしてたよ？本当だよ？」

「あ、ずるいぞ！」

そのまま醜い内輪もめがはじまりそうになったとき。ウッドがひよいっと表われベルに何か差し出した。

「ベル、これ。」

悲しそうに焚き木を見つめていたベルに差し出されたのは、小さな木彫りの熊の人形だった。

「これって……。」

目をまんまるにしてそれを見つめるベルに、ウツドが口数少なく説明する。

「ベルの集めた枝から作った。これなら記念になる。」
ウツドは手が大きいが、とても器用だ。熊の人形はとても小さいが、とても丁寧に掘られていた。それはまるで、彼の奏でる繊細なピアノの音のようだ。

それを受け取ったベルは、目をしばしば、数回瞬いた後、木彫りの熊を見つめた。マーセルたちが緊張してその表情を見守る中、それが笑顔に変わる。

「ありがとう。」

「いい。」

ウツドはベルが笑顔になったのを確認すると、それだけ言って馬車の準備にもどろうとする。

「よくやったウツド！」

「さすがウツド！」

それに仲間たちが駆け寄り賞賛の声を贈る。

「でも…、結局ベルが一生懸命まとめた枝は燃えちゃったんだよね。あれって意味あるの…?」

マーサが小さく疑問の声を上げる。

「子供が泣いてるときは何かおもちゃをあげて気をそらすのがいい…。」

ウツドはそれだけ答えて、出発の準備に戻ってしまった。

「子どもって…。」

その言葉にマーサが引きつった顔になる。

「ん〜、どうかしたんですか?」

すっかり機嫌を直したベルが、そこにやってくる。

「べ、ベル…。」

「ウツドさん何か言っていました?」

「いや、なんも言っていない!なんも言っていなかったぞ!あいつは無口だからな!それよりその熊かわいいなあ!」

せつかくベルの機嫌が直つたのに、ウツドの言葉を伝えてまた機嫌を損ねる危険を犯すわけにはいかない。マーセルは全力で強引に話を逸らすことにした。

「そうですね。小さいのにすぐよく出来ていて気に入っちゃいました。ウツドさんは凄いです。大切にします！」

「あ、ああ…、大切にしろ…。」

ウツドに思いつきり子ども扱いされたことに気付かず、ベルは幸せそうに微笑んでいる。その嬉しそうな表情と、彼女の手にあるウツド談「子供の気を逸らすためのおもちや」に、なんか申し訳なくなるマーサたちだった。

暗い、暗い森……。真暗な森……。見えるのはひとつの手のひらだけ。何も見えない真暗な森。今まで頼っていた人たちの背中は今もう無い。

「いくぞ。」

小さな決心を秘めた声。それは硬質で、今にも崩れそうに脆く、それでも必死に固く強くなるうとしていた。

女の子は自分とつながったその手のひらから、小さな震えを感じ取った。

怖い……。何も見えない……。この先の道も、自分たちの未来も。

「……」

口を開いて言おうとした。戻って、と……。戻れる。自分の手を引いて歩いている、誰よりも近い姉弟は、戻ることができる。今までいた明るい場所に……。

自分さえ、いなければ。

なのに、その言葉は声にならなかった。見捨てられたら、本当に自分は一人になっていしまう。

そうなら怖くて、怖くて、ぎゅっと繋がる手に力をこめてしまふ。離すことなんかできなかつた。

「……」

目から涙がぼろぼろとこぼれる。

「泣くな。大丈夫だから。絶対、大丈夫だから。」

言い聞かせるように言う声。

普段はふざけてばかりの弟なのに、その声は自分と同じで幼くて、怖さに震えているのに、自分を引っ張る力は強かつた。

「……」

女の子も涙を拭いて歩き出す。震える足を前に、前に……。暗い森を、見えないその先を……。

そうやって二人の姉弟は歩き出した。

いつも通りベルに抱き着いて寝ていたルミは朝起きて仰天した。自分の体が猫になっていたからだ。

「なっ、どうして…?」

声をだしてから、はっと気付き口をつぐむ。

「んん…、どうしたんだ? ルミ。」

眠たげな声をだして弟のルモが、起きてくる。そしてルミの体を見て、驚きの声を上げる。

「げげっ、ルミ、猫になっちゃってるぞ!」

「騒がないでよ!」

小さな声で唸るようにルモに言うルミ。

「だってそうなるのって久々だし、ちゃんとコントロールできるようになってたじゃないか。」

そう、ルミもルモも猫になったことに驚いたのではない。勝手に猫に変化していたことに驚いているのだ。

「とりあえず離して! 馬車からであるから!」

驚いて自分を抱き上げてしまった弟に、ルミが猫さながらに唸りながら言う。

「え、なんで?」

呑気な返答に、ルミがブチぎれてフシャーっつと声をあげる。

「ベルにばれちゃうでしょ!」

しかし怒りのあまり声が大きくなりすぎた。

「んっ、ルミ…?」

今まで寝ていたベルが薄目を開ける。それを見た瞬間、ルミはルモの腕の中で激しく暴れ、その手から抜け出すと馬車の外にダツと駆けて行った。

「あれ…? ルミはどこいったの…?」

目をごしごしこすりながら、眠たげに起き上がったベルは馬車を見回す。しかしルミの姿は見当たらない。ベルの寝ぼけた眼が、ルモのほうを見る。

「あ…ああ、トイレにいったんじゃないかな？そのうち戻ってくるから、寝てて大丈夫だと思うぞ。」

ルモは焦った顔になりながら、ベルにそう言い聞かせる。

「そっかあ…。」

まだ眠かったのかベルはそのまま毛布に横になり、寝息を立て始めた。

「ふう…。」

その姿を見てルモは一息つくど、いつものように一緒に寝ようとはせず、馬車の外へと向かった。

ルモに起こされたマーセルとイレナは、馬車の外に連れ出された。まだ眠たそうな声で、イレナがルモに訪ねる。

「いったいこんな朝早くどうしたんだい？」

「それがさ、あいつ急に猫になっちゃってさ。」

「へえ、結構久しぶりだな。」

ルミが猫になったという言葉に特に仰天する様子なく、二人はそれを受け入れて会話する。そして二人が外にでると落ち込んだように頭を垂れた黒猫がいた。

「おや、まだ戻ってなかったのかい。」

その黒猫を見てイレナが少し驚いたように言うと、ルモが眉をしかめて言った。

「それがさ、なんか戻れなくなっちゃったみたいなんだ。」

「なんだと!？」

戻れないと聞いて、マーセルは驚いた顔をする。ルミは変身することすら滅多になかったが、その何度かの変身でもすぐに戻ってい

た。

「どうしよう。」

黒猫の姿のまま、うなだれるルミが言う。

「そう言われても、俺たちもそう言う知識は全然ないからなあ…。」

「しばらく、その姿でいるしかないねえ。」

マーセルもイレナももとに戻る方法なんて知らなかった。

「とりあえずベルでも起こしてくるか？」

「やめて！」

落ち込んだルミの心を紛らわそうと、ルモはベルを連れてくることを提案したが、ルミはそれに激しい拒絶の声をあげた。

「ど、どうしたんだ？」

みんながあまりの剣幕に目を見開いてルミを見る。

「ベルに私が獣人だって知られちゃうじゃないの！」

ルミの言葉をマーセルは否定する。

「あいつはそんなことで差別するような奴じゃないだろ。大丈夫さ。」

「

むしろルミがそう思ったことを疑問にすら思った。メンバーの中

でも、一番ベルに懐いているのはルミだったと思っていたから。

「なんでわかるの？」

しかしルミの声は切迫していた。

「そんなのわからないじゃない！もし、ベルに嫌われたりしたらどうしたらいいの？そんなの、絶対やだよ！」

目じりには涙まで浮かんでいる。

「でも、ずっと隠し通すことなんてできないだろ？」

頑なな態度のルミをマーセルはなんとか説き伏せようとする。

「隠し通すもん。一生、知られないようにするんだもん。」

「そんなの無理だろ。大体、そんなに秘密にするってのはあいつのことを信じてないってことじゃないのか？」

マーセルの言葉に、ルミの形相が変わる。黒猫のダークブルーの瞳から、ぼろぼろと滴がこぼれてくる。

「うるさい！マーセルに何がわかるの！絶対、こんな姿でベルと会わない！ばらしたりしたら許さないんだから！」

そう叫ぶと踵をかえし森のほうに走って行ってしまった。

「お、おい！」

慌てて追いかけてよとすが、黒猫の姿は森の闇に消えあつという間に見えなくなる。

「なんなんだ……。あいつ……。」

そう言っ頭をかきながら呟く。なんとも後味が悪い……。ルミがいつもと違いあまりにもベルのことを信じないものだから、大人気に言い方をしてしまったかもしれない。

振り向くと、ルミとよく似た容貌に暗い表情を浮かべたルミが呟いた。

「仕方ないかもしれない……。あいつは父ちゃんにも母ちゃんにも、裏切られたから……。」

獣人、それは動物に変身できる人間たちのことだ。

ただそれは種族を表す言葉ではない。獣人は普通の人間の間から、突然生まれてくる。その理由は誰にもわからない。病気だと言う人もいれば、呪いだと言う人もいる。確定的なものはひとつもない。

その存在を不気味に思う人たちから、獣人は差別を受ける。獣人は獣であつて人ではないと言つて、人間扱いしない人々もいる。

だから獣人は、そのことを隠して生きようとする。

8歳の時のある朝も、起きた時突然、ルミの体は猫になっていた。ルミは混乱した。自分の体を見回すと全身が黒い毛に覆われている。体の感覚も全然違い、二本足で立つことすらできない。体の様子がおかしいことに気付いたルミは鏡の前まで四本足で歩いた。そして映つた自分の姿に、ルミは悲鳴を上げた。

そこには黒猫になつた自分の姿が映つていた。

「なんだよ〜ルミ。急に悲鳴なんか上げて。」

ルミの悲鳴にたたき起こされたルモは、眠そうに目をこすりながら、ルミの姿を探す。そして部屋を見回しルミの姿がないことに気付いた後、黒猫が一匹、部屋の隅の鏡の前で座り込んでいるのを発見する。

「ん？この猫どこから入ってきたんだ？」

茫然としていたルミも、不思議そうに自分を見つめるルモの表情に正気を取り戻す。

「あ、あたしだよ。ルミだよ。」

「じゃべつた！？つて、ルミ？でも確かにこの声はルミだ！」

ルミはそう言った後、自分でも驚いてしまった。猫の姿でも普通にしゃべれることに。

そしてふと、これがどういう状況か気付いてしまった。幼いながらにおぼろげな知識で。

獣人。

その瞬間、恐怖が四本の足から、胸に目がけてせりあがってくる。獣人はみんなから嫌われる。親から捨てられてしまう。

「ど、どうしよう。あたし獣人になっちゃったのかも…。」
恐ろしい予感に体が震えだす。ルミも戸惑うように、床にうずくまる猫にたずねる。

「母ちゃんたち呼んでくるか？」

「…うん…。」

捨てられる。その言葉が一瞬、頭を過ぎった。でもいくらなんでも、お父さんとお母さんが自分を捨てるなんて考えられなかった。そしてこの状況で頼れるのは、お父さんとお母さんだけだった。

ルミが部屋を出て行き、やがて母と父を連れたルミが戻ってくる。

「お母さん…お父さん…。」

ルミは泣きそうな顔で、いつもよりずいぶん大きく見える両親を見上げた。胸の中は不安ではちきれそうになりながら。

「ルミ？ルミなの？」

母親は黒猫の姿のルミが、娘と同じ声で喋ったのを聞き、一瞬驚いた表情を見せた。

「お母さん…あたしをすてたりしないよね…？」

しかし、泣きそうなルミの顔をみると表情を和らげ、その体を抱き上げる。

そしてルミの頭を優しく撫でて、こう言ってくれた。

「ええ、大丈夫よ。」

その言葉に、ルミは安心し体の力を抜いた。

自分が獣人でもお父さんとお母さんは、大丈夫だった。そう思った…。

あれからもう一度寝て起きたベアトリーチエは、ルミがいないことにすぐに気付いた。いつも一緒に寝ているし、起きたら起きたで良く一緒に行動しているので気付くのもはやかった。同じく一緒にいるルモも、今日は近くにいない。

馬車から出ると、マーサやウッドだけでなく、いつも寝起きの悪いイレナまで起きて外にした。そしてベアトリーチエは自分を見たマーセルの表情が、一瞬げつとなったのを見逃さなかった。

「ルミはどこですか？」

みんなに曖昧に聞くのではなく、自分の方だけをまっすぐ瞳で見つめられて尋ねられたマーセルはうろたえた。

「いや…どっかいつちまって…。」

「馬鹿っ。」

イレナが舌打ちしてマーセルを小突く。

「どこかって…。」

ここは街と街をつなぐ道の森の奥である。一応馬車が通れる道はあるものの、迷子になれば脱出するのは大変だ。特に子供の足ともなれば…。ルミは自分よりよっぽど旅慣れているけど、森の中で危険な獣にあつたり、怪我をしたりしないとも限らない。

逆にそういう所はしっかりしたルミが、マーセルたちに場所も知らせずどこか行ってしまったと聞くと、とても不安な状況に思えた。

「僕、探してきます。」

「あ、ちよつとベル！」

ルミが危ない。そう思ったベアトリーチエは、マーサたちが止める間もなく森の中に走って行く。

「どづしよづ。」

そのやりとりを、ルミは小さな木の陰から見ていた。

あれよあれよという間に、ベアトリーチェは森の中に入って行く。動揺して出遅れたマーセルたちは追いつけそうにない。

ルミは眉をしかめながら、黒猫の姿のままベアトリーチェを追いかけることにした。

「ルミ、どこにいるの!」
ベルが自分を呼ぶ声が聞こえる。けど、ルミはベルの目の前に姿を現すことができなかった。

かれこれ、もう二時間ほどの時間が経っている。ベルに追いついたのはすぐだった。でもそれからは、自分を探すベルを目の前に何もできず、歩き回るベルを気付かれないようにつけまわすことしかできずにいた。

自分を探すベルの心配そうな表情。胸がずきりと痛む。

なのに体は、小さな身を隠した草の影から動き出せずにいる。

(怖い…。)

胸の中に残る暗い記憶。その感情がルミの心をしばりつけていた。

ルミがはじめて猫に変身してから、一週間ほどの時間が経った。

人間の姿には半日ほどで戻ることができたが、いきなり猫の姿になってしまうこともある。慣れてないからのか、そういうものなのか、獣人について誰もわからないので解決策もない。

だからルミは両親に言われて、一週間ずっと部屋にこもっていた。

「あーあ、退屈だなあ。」

外には出れないし、出る気もおきない。それでもやっぱり部屋の中にずっといるのは、活発な子どもであるルミにとっては退屈なことだった。

「じゃあ、ちょっとだけ外に出てみようぜ。」

そんなルミに、ルモが提案してくる。

「ええ、でも…。」

退屈だとは言ってみたものの、外に出るのはルミ自身怖かった。

ためらうルミを安心させるように、ルモは笑いかける。

「家の周りをちよつとだけだよ。猫になっちゃったら俺が野良猫を捕まえたふりするからさ。」

どちらかというとしょつちゅう喧嘩することの多い姉弟だったが、ルミが獣人になってからはルモなりに気遣ってくれることが多くなっていた。獣人になってしまつてひとつだけ良かったと思つたことは、強く家族の絆が感じられるようになったことだ。母からも感じたその暖かさに、ルミの恐怖心も少しやわらぐ。

「うん、じゃあちよつとだけ…。」

ルミははにかむと、ルモの手を取つた。

「父ちゃんと母ちゃんには見つからないようにこつそりな。」

二人は廊下を忍び足で歩いていく。

そしてキッチンの前に差しかかった時、声が聞こえてきた。

「そうはいつでも、このままルミを育てるのは難しいだろう。」

ルミもルモも立ち止まる。父とも母とも違う声。その声にルミもルモも聞き覚えがあつた。この町の町長の声だつた。そして弱々しい声で答えるのは、自分の父と母だつた。

「はい、わかつてます。でも、ルミは…。」

「確かに君たちの娘かもしれん。だが、獣人だつたんだ。」

自分の話をしている。しかも町長には、自分が獣人であることがばらされている。

どくんつ。何故か心臓が嫌な音を立て、その場所から一步も動けなくなる。ルモも一緒の状態のようだつた。

お父さんもお母さんも泣きそうな声で話している。そんな二人に町長は宥めるようにおだやかな声で、しかしそれとは裏腹な強い言葉で二人を説き伏せる。

「この町は観光で栄えている。中には貴族の方も、避暑地として利用してくださつて町に大きな収益をもたらしてくれる。それなのに町に獣人がいることがばれば、悪評が流れ、誰もよりつかなくなつてしまう。そうなれば、町は衰退の一途をたどるだろう。ルミの

ことは町全体の問題なのだよ。どんなに君たちががんばろうと、君の家族だけで被りきれぬ問題じゃない。」

「はい…。」

町長の言葉に父が呻くような声で頷く。町長の言葉に二人とも否定の言葉を漏らすことは無い。

「これは仕方のないことなんだ。君たちが悪いわけじゃない。娘が獣人に生まれてしまったそれだけだ。君たちもまだ若い。ルモだつてまだいる。これからがある。私も君たちの未来に、出来る限りの協力をする。」

町長の真剣な言葉が、あたりに響く。

「町のためだ…。あの子を捨てる決心をしてくれ…。」

そして町長が最後に告げた言葉は、その場に重い沈黙をもたらした。ルミとルモも含めたその場の全員が、息の音すら立てない沈黙が続く。

そしてルミの耳に、母親の絞り出したような声が入ってきた。

「わかりました。あの子は、ルミは…、捨てることにします…。」
パキッ

ルミの心の中で、信じていたものが壊れていく。大丈夫と言ってくれた優しい声、暖かい手のぬくもり、家族の暖かさ。同時に、凍えるような冷たい風が胸に吹き込んできた。

「あの子の処分は、私が信頼できる人間に頼んでおこう。明日、迎えを寄こす。君たちは何もしなくていい。そうだ、明日はどこかに出かけるのよ。その為の馬車の手配もしておこう。」

町長と両親が何か今後の話をしていたが、耳には入ってこなかった。

いつのまにか気が付くと部屋に戻ってきていた。ルモはどこにいったのかわからなかった。でも、もうどうでもよかった。ただ、胸から入り込んでくる寒風に凍えるように、膝を抱え部屋の隅にうずくまる。そのまま死刑の執行を待つ虜囚のごとく、部屋の隅でじっと固まっていた。

それからどれくらいの間が経ったのかわからない。

がさごそという音に顔を上げると、大きな袋を持っているルモが部屋の中のもののかたっぱしからその袋につめこんでいた。何をしているかわらかず、じつと姿をみているルミに袋にいろんなものを詰め終えたルモは、袋を握るのと逆の手でうずくまるルミの体を引っ張り上げる。

「行くぞ！」

「行くぞつてどこへ？」

「出ていくんだ、この家を。」

「出ていくつて…あたし、捨てられちゃうんだよ…。なんでそんな意味ないことを…」

「違う。捨てられるんじゃない。俺たちがあいつらを捨てるんだ！見上げると涙を浮かべたルモの強い光が灯った瞳と目があった。

「捨てられるのはあたしだけだよ。ルモが出ていく必要ないじゃない。」

「うるさい！俺は父ちゃんや母ちゃんたちみたいに、絶対お前を見捨てたりなんかしない！行くぞ。この家を二人で出ていくんだ。」

小さな手から伝わるのは、暖かさじゃなく緊張に震える汗ばんだ冷たさ。

捨てられるのは自分だけ、ルモが巻き込まれる必要なんかなくても。この手を離したら、本当に一人になる。そう思うと、離せなかった。

ルモはもう何も言わなかった。ただ同じく震える手が、自分の手を離さないのを見てその体をそつと引き上げる。

廊下を歩くと、ごちそうの匂いがした。ルミの好物の煮物の匂いだ。キッチンを横切るとき、目元を腫らしたお母さんが黙々と野菜を切っているのが横目に見えた。

何も言わず通り過ぎ、玄関の扉を静かに開ける。

外に広がるのは、既に日の落ちた暗闇の世界。怖気づくように二人は一瞬立ち止まったが、すぐにまた歩き始める。まだ何も見えな

い暗い森の方へと。

そうして二人は、今まで住んでいた平穏な家から旅立っていった。

自分を探すベルの顔には、明らかに疲れの表情が見て取れる。それでも一生懸命に、自分を探してくれるベルの姿。

それを森の木の陰から見守るっただけのルミ。だが、その表情はベルと同じように辛い表情だった。

(ベル…お願い…もう戻ってよ…。)

そう思いながら、自分のそんな思考が心を痛くする。

ベルを信じれないの…？

本当は自分がベルの前に姿を現せばいいのだ。それで、解決することだ。なのに、自分は…。

ベルは優しい。誰よりも。そして信頼できる人だ。それはこの旅の中で、何よりも感じていること。暖かい微笑み、自分を本当に思ってくれる気遣い。少し抜けているところもあるけど、確かにある思いやりと強さ。

それに獣人を差別しない人たちがいることも知っている。マーセルたちとあった時、ルミは変身を制御できなかった。それでもマーセルたちは、自分を差別することなく、むしろ助けてくれた。

ベルだっってきた…。ううん、ベルならそんな理由で私のことを嫌うはずなんて絶対ない！

けど…。

(怖い…。)

あの時、ルミはお母さんの手の暖かさを信じていた。疑うことなんてなかった…。でも、それは裏切られた。捨てられた。

もし、ベルにも同じように嫌われたら。あの優しい笑顔が、嫌悪の表情に変わってしまったら。

そう思うと、体がガタガタ震えて、木の影から姿を現すことがで

きなかつた。ただ恐怖と嫌悪に身を包まれながら、ベルを見てるだけの時間が過ぎて行った。

ベルとルミが森に入ってから、随分と時間が経ってしまった。マ―セルたちはまだベルを見つけられないでいる。何も目印のない森だ。一度、見失えば合流することは難しい。

そうしているうち、ベルの目線がある一点を見つめた。川沿いの足場の悪い岩場になっている場所。今日の川の流れは速く、ところどころ固い岩の角が突き出ている。バランスを崩したりしたら、大変なことになる。

「もしかしたらあそこにいるかも。怪我とかしていたら。」
(まさか。)

どうしても見つからないルミの姿に、ベルの思考が悪い方向に動いたのだろう。ベルはそちらの方に向かい始めてしまった。

ルミの背中に冷たい汗が流れる。

もし足場を滑らせて、ベルが怪我をしたら。川に転落してしまつたら。私のせいで…。

(どうしよう。止めなきゃ。ベルが危ない。)

今すぐ走り出して行って、ベルを止めようと思つ。

『あの子は、ルミは…、捨てることにします…。』

なのに、あの時のお母さんの言葉が脳裏に過ぎる。心の隙間にまだ残る冷たい風が、ルミの足を地面に縫い付ける。

動けないルミの瞳に、ベルの背中がどんどん遠ざかっていく。

ルミがいなくなったと聞いて森に飛び込んだものの、ベアトリーチエはその姿をまったく見つけられなかった。

時間だけが刻々と過ぎ、ベアトリーチエの心に焦りが募っていく。森は広い、全てを探ることなんてできはしない。じゃあ、どうすれば見つけられるのだろう。

そんなベアトリーチェに瞳に、川沿いの岩場が映った。

「もしかしたらあそこにいるかも。怪我とかしていたら。」

大小の岩がゴツゴツしていて、川の流れが速く危険な場所だ。

普段は自分よりよっぽど、しっかりしているルミだ。それが見つからないとなると、何か理由があるはずだ。自主的にあんな場所に近づくとは思えない。けど、何かの理由であそこで怪我をして動けなくなっていたら。

あそこにはいないならそれでいい。でも、怪我をしていたり危険な目にあつてたりしたのなら、一刻を争う事態かもしれない。

いってみよう。そう考え、岩場へと足を進める。

近づいてみると岩は不安定で、遠目で見ると以上に危険な場所だった。でも万が一ルミがここにいたら、それを考えるとベアトリーチェが足を止める理由はひとつもなかった。

ベルが足にぐつと力を入れ、岩場へと足を踏み出そうとしたとき、ぐいっ

ベルのズボンのすそを何か引張った。

それは小さな一匹の黒猫だった。ベアトリーチェのズボンのすそに噛みつき、必死で引っ張っている。その小さな体は震え、目じりは涙をこらえるように固く閉じている。

「…?」

その姿に気を取られ足を止めたベアトリーチェに、ズボンから口を離れた黒猫は震える声で言った。

「ベル…、あたしここだよ…。ここにいますよ…。」

今にも消えてしまいそうな、小さな声。でも、ベアトリーチェにはそれがルミの声だったとはっきりわかった。

「ルミ、なの?」

「そうだよ…。あたし獣人だったの…。ベルにそれを知られたくなくて、だからベルの前に出てこれなくて…。ごめんね、ごめんね…。」

堪えていた涙が、ルミのダークブルーの瞳から零れ落ちる。

ベルに獣人とばれるのが嫌だった。ばれて嫌われるのが嫌だった。ずっと騙っていたことを知られるのが嫌だった。でも、ベルが怪我してしまふのはもっと嫌だった。

泣きじゃくる黒猫を、ベアトリーチエは見つめた。

震える体で泣きじゃくるルミ。危険なところに足を踏み入れようとしてしまった自分を止めるために、見られるのが嫌だった黒猫の姿でも姿を現してくれた。

それはちよつとおませでいつも元気で、そして優しい心根を持っているベアトリーチエの知るルミの姿だった。

ベアトリーチエはルミを抱き上げその背中を撫でる。

「ごめんね…。気付いてあげられなくて。」

ルミの泣き顔に、どれだけ悩んでいたか、どれだけ苦しんでいたかわかった。ルミが今まで感じていた胸の痛みが伝わってきた。

だからそれを癒してあげたくて、体を優しく撫でる。

(あつたかい…。)

やさしい心が穏やかになる手のひらのぬくもり。その温もりは、あの時感じたのと同じ。ルミは一度、その温もりに裏切られた。

(でも、信じるよ…。私はベルを信じる。)

一度裏切られたことがあるからといって、もう何も信じられないようになつたわけじゃない。

また裏切られたっていいわけじゃない。嫌われていいなんてとても思えない。けど、信じる。ベルを信じる。そう、ルミは思えた。

ベアトリーチエから伝わるぬくもりが、ルミの心に吹き溜まっていた冷たい風を、暖かい風へと変えてくれる。

ルミが目目を再び開けた時、黒い毛でおおわれていた両手は、元の小さな肌色の手に変わっていた。

「戻れた…。」

目をまるくするルミに、ベアトリーチエが微笑みかける。

「良かったね。」

ルミは頷きかけたが、少し考えて微妙そうな顔をした。

「うんー？別にいまとなつてはどっちでもいいかも。今からマーセルたちのところに戻るんだよね。」

「うん。」

ベアトリーチェは不思議そうな顔をする。

「じゃあ、黒猫の姿の方が良かったかも。そっちのほうが歩くの早いし。」

前は獣人の姿になるのが嫌でたまらなかった。でも、ベルを信じられる今、もう変化することに嫌悪はない。

ルミは涙の残る目じりに、いつもの笑顔を浮かべて笑った。

「でも、暗いし黒猫の姿になったら、また見失っちゃうかも。」

そう言うベアトリーチェに、ルミがくすくす笑う。

「そうだね。ベルが迷子になったら困るから、人間の姿でいるね。」

「えええ…。」

ベアトリーチェはその切り返しに何か反論しようとしたが、自分がマーセルたちのもとを勝手に飛び出し、危険な岩場にまで足を踏み入れようとしたことを思い返すと何も言えなくなる。

「じゃあ、ベル、帰りましょ〜。」

情けない顔をしたベルに、ルミはまったくくすくすと笑い。その手を取って、先導しはじめた。そこにあるのは、いつも通りの二人の姿。そうして二人は、歩き出した。暗い森を抜けて仲間のもとにもどるために。

アルセーナ、それはマーセルたちが目指していた国。

田舎の小国だが観光地として栄えている。貴族たちのリゾートも数多くあり、中にはわざわざ遠方の国からこの国へと訪れる貴族もいる。

この国では一年に一度開かれる音楽祭が目玉であり、その時期には旅人たちも貴族たちも多くの人間がこの国を訪れる。

マーセルたちもこの国で開かれるコンテストに、出場するつもりで旅をしてきた。

馬車で街に入ると、木造りの町並みが色とりどりの布や工芸品で飾り付けされている。

「わあ、きれいだ。」

ルミが漏らした感嘆の溜息に、ベアトリーチェも頷く。

「音楽祭は街のお祭りもかねているからな。こうやって街全体で店や出し物を出して盛り上げるんだ。」

「去年も来たけど、名産の染め布の切れ端をつかって、家を飾り付けたりしてるんだよね。」

馬車がついたのは、大きな建物の前。そこでみんな降りる。コンクの受付会場になっている場所だ。

「おや、ベルは降りないのかい？」

一人馬車の中に残ったベルに、イレナがたずねる。

「うん、いつもウッドさんが留守番してくれるから、たまには私がしようかと思って。」

ウッドは運ぶ荷物があるために降りなければいけない。

「ええー。」

「そっか。じゃあ頼んだぞ。ほら、ルミ行くぞ。」

ルミが不満そうな声をあげたが、マーセルがさっとその首を引っ掴み建物の中につれていく。

「じゃあいつてくるねー。」

「いつてらっしゃい。」

手をふるマーサに、手を振りかえすとみんなの姿はいなくなった。ひとりになったベアトリーチエは、馬車の出口に腰かけて足をぶらぶらさせながら、アルセーナの街並みを見回す。

赤や青に染められた布が、風にたなびいて本当に綺麗だ。

「ベアトリーチエさま。」

急にかかった声に、ベアトリーチエは驚く。それが自分の本当の名前を呼んだことも。

慌てて顔を向けた先にいたのは、王宮の舞踏会であつたあの少女だつた。

「おひさしぶりです。ベアトリーチエさま。」

その少女、アリエー又は嬉しそうな顔でこちらに駆け寄ってくる。ベアトリーチエは逃げるべきか、どうすべきか逡巡する。それを表情で察したのか、アリエーも立ち止まり、慌てたようにベアトリーチエに言う。

「あつ、ご安心ください。捕まえにきたわけではありませんし、誰かに言うつもりもまったくありません。」

それから気付いたように。

「あ、ベアトリーチエさまとお呼びするのもまずいですよね。ごめんなさい。私って本当に馬鹿……。」

落ち込んだ表情を見せるアリエー又。その言葉に、嘘があるとは感じなかった。ベアトリーチエも逃げたりすることはやめる。

「私、今はベルって名乗ってるけど。」

「そうなんですか!」

ベアトリーチエから言葉をかけられて、アリエー又の表情はパアと明るくなる。

「それで、どうしたの?」

エルサティーナに連絡する気がないならどうして自分に話しかけたのかということと、エルサティーナの北方の貴族である彼女が何

故アルセーナに在るのかという二重の意味での問いかけ。

「えっと、私の叔母がこの国の子爵家に嫁いでいて、毎年この時期はここに滞在しているんです。それで王都をでるときは、アルセーナに向かつて馬車で立つたんです。」

アリエーヌのはちよつと緊張しているのか、たどたどしい口調でこれまでの経緯をのべていく。

「実は途中でベアトリーチエさまを見かけたんですよ。でも、その時は話しかける時間も無くて…。それでアルセーナに滞在していたんですけど、お父様の用事でここにきていたらベアトリーチエさまがいらっしゃったんです！」

最後は見つけた時の嬉しさを思い出したのか、初めに話しかけてきたときと一緒の表情になる。

話を総合すると、彼女はただ自分に会えてうれしくて話しかけてくれたらしい。妙な反応をしてしまったことは仕方ないとはいえ、申し訳なくなる。

「そつか。ごめんなさい。変な態度とってしまって。」

「いえ、私が悪いんです。いきなりぶしつけに話しかけてしまったから。」

ベアトリーチエに謝られて、アリエーヌは首をぶんぶん振ってそれを否定する。

「ベルさまもコンクールに出場されるんですよね。」

「う、うん…。たぶん…。」

なぜか確信したような顔でそう言ってくるアリエーヌ。その勢いに押される形で、ベアトリーチエは頷く。

それを聞くとアリエーヌは目をキラキラさせて、ベアトリーチエの手を握り締めて詰め寄ってくる。

「私、ベルさまの魔笛の演奏を通り過ぎる馬車から聞いたんです。すごく素晴らしい演奏で、それだけで感動してしまって。今度はちゃんと聞きたいって思ってたんです。」

それから今度は頬を赤くして、じもししながらたどたどしく言葉

を紡ぐ。

「あの、わたしにもお手伝いさせていただけませんか…。コンクールの衣装とか。私、この国ならいろんなつてもありますし、ベルさまの力になれると思うんです。」

俯いた顔で上目使いでベアトリーチエを見上げるアリエーヌ。その言葉にどう答えようかベアトリーチエが迷っていると。

「あれ、ベル。その子だね？」

受付を終え帰ってきたマーサたちが、不思議そうに話しかける。

「あ、ベルさまのお仲間の方ですよ。初めまして、私アリエーヌと言います。」

アリエーヌは慌てて振り向いて、マーサたちに自己紹介をする。その言葉に、マーサたちは不審そうに眉をあげる。

「ベル…さま？」

目の前の少女は、綺麗なドレスをまとい貴族然とした恰好をしている。ベルに何か秘密があるのは知っているが、そんな少女がベルをさま付けで呼んでいることに思わず不審な声をかえしてしまうのかもしれない。

アリエーヌもちょっとまずかったことに気付いたらしい。ベアトリーチエをちらりと見ると、慌てて言い訳を紡いでいく。

「あ、ベルさまとはちょっとしたご縁でお知り合いになったんですけど。とつてもかっこよくて素敵な方じゃないですか。だから、私が勝手にベルさまと呼ばせていただいているんです！」

ベアトリーチエはさすがにその言い訳は無理がないだろうかと思つた。そんなアリエーヌの言い訳に、マーセルたちの中の約一名の表情が微妙に歪む。

「ほうほう、それなら納得だね。ねえ、マーサ。」

イレナがちょっと意地悪そうな顔をして、苦虫を噛んだような表情になつているマーサにはなしかける。

「ま、まあそうね…。」

マーサは無理やり平静な顔を取り繕うと、神妙な顔をして頷く。

「うんうん、ベルはかつこいい。」

「俺の方がかつこいいけどな。」

「ばかー？」

「なんだと！」

ルミとルモも肯定し、マーセルたち男連中は大して気にした様子もなく受け入れる。アリエーヌの咄嗟の言い訳は、あっさり通ってしまった。

「それじゃあ受け付けはすんだし、俺たちは宿に戻るつもりだけど、あんたはどうする？」

あっさりベルのフアンと娘と認識されたアリエーヌに、マーセルが問いかける。

「あの、また後でお伺いしてもよろしいですか？」

問いかけるアリエーヌに、マーセルはお前が決めることだとベアトリーチエに顔を向ける。

「ベルさま……。」

捨てられまいとする子犬のような目で見つめられて、断りきれずはなすもなかった。

「う、うん。またね。」

また、ペアと顔を輝かせて嬉しそうな表情をするアリエーヌ。

「そいじゃあ、俺たちは西のコルネルって宿屋に滞在するから。」

「はい！」

「それじゃあ行くか。」

ベアトリーチエが乗って遠ざかる馬車に、アリエーヌは手をぶんぶんふる。ベアトリーチエは苦笑しながら、それに手を振りかえす。

「すっごく好かれてるのね。」

「うん、そうみたい。ってあれ、なんかマーサ不機嫌？」

いつのまにか拗ねた様子になっているマーサに、ベアトリーチエはあれっと思いかける。

「べつにー。ベルのことなんてどうでもいいし〜。」

「ええー。」

明らかにすねた返事をするマーサに、ベアトリーチェはわけがわからないまま、こまつた声をあげた。

次の日アリエー又が、ベアトリーチェたちの滞在する宿にやってきて開口一番言ったのはこういうことだった。

「コンクールのための衣装を準備しましょう。」

「え、準備って別にこの格好でいいでしょ。」

マーサがそう言って今着ているワンピースの裾をもちあげる。

「だめです！」

しかしアリエー又は厳しい顔でそう言い切る。

「ベルさまのせっかくの晴れ舞台なんですから、みなさんにもちゃんとした格好をしてもらいます。」

「私はもう着ることになってるんだ……。」

ベアトリーチェは自分も普段の恰好で出るつもりでいたのだが、どうやらアリエー又の方では衣装をかえることが決定しているらしい。

「それじゃあベルさま、いきましよう！」

そう言ってアリエー又はベアトリーチェの手を引き、宿屋から連れ出した。

「いやはや、凄いファンができたもんだな。」

別の部屋から連れ出されたマーセルが、げんなりした顔で言う。

「ごめんなさい。」

少し申し訳なくなったベアトリーチェは謝る。

明日は旅の疲れを癒すという名目で一日中寝て過ごすつもりでいたマーセルだが、その目論みはご破算となってしまうた。

「いや、人に好かれるのもこの仕事では大切だしな。悪いことじゃない。」

マーセルは優しい顔になりベアトリーチェの頭を撫でて言う。

「えー、マーセルがそれを言うの〜？ いったもつつけんどんな態度のくせにー。」

「うるせー、俺だって成長したんだよ！」

「ほらー、もうその時点で人当りよくないぞー！」

それにルミとルモがいつものように茶々をいれる。

「人に好かれる…。」

ベアトリーチェはその言葉を、何か考えるようにぼつりと繰り返した。

（私が、人に好かれる…。）

ぼーっとしてしまつたベアトリーチェの頭に、ぼんつとまた手が置かれる。

「それにお前もあの娘のこと好きなんだろう？」

「はい、そうですね。」

それだけは確かに言えることだつた。自分の正体を知つていても慕ってくれるアリエーヌ。その勢いにちよつと驚かされることはあつたが嫌いにはなれない。

マーセルの問いに頷いたベアトリーチェは、ガシツと肩を掴まれた。

「ベル！ 私のことは！」

目の間には何故か、物凄く真剣な顔をしたマーサがいた。

「え？ えつ？」

あまりの剣幕に、ベアトリーチェは戸惑つた。

「好き？ 嫌い！？」

「も、もちろん好きだよ？」

ベアトリーチェはちよつとその勢いに押されながらも、正直に答える。

「わたしはー！ わたしはー！」

今度はルミが騒ぎ出した。

「ル、ルミのことも好きだよ。」

そうすると次にはルモが、と仲間たちが騒ぎ出し、ベアトリーチはわけがわからないまま質問に答えさせられる。

大人のはずのイレナまで聞いてきた。

「あたしのことはどうなんだい？」

「す、好きですよ…。」

そして。

「お、俺のことはどうだ…？」

「もう、いい加減にしてください！」

マーセルが問いかけた時、さすがに恥ずかしくなったベアトリーチエはその問いかけをそこで切った。マーセルは地味にへこんだ。

「ここです。」

アリエーヌに案内されたのは、ひとつの洋服屋。とても華やかな雰囲気の漂う店で、ショーウィンドウに飾られているのはこの国の伝統工芸の布をつかってつくられたドレスだ。

高級な店の様子に、マーサが圧倒される。

「こんな店入って大丈夫？あたしたちこんな格好だし。」

旅衣装のマーサたち、別段それを恥ずかしく思いはしないが、こんな店に入るのはさすがに気後れしてしまう。

「大丈夫です。市民の方でも気軽に入れる店なんですよ。私の叔母が経営してるんです。男性の方は、隣の店で衣装を選んでください。さあ、入りましょ？」

マーセルとウッドは乗り気ではない顔だったが、抵抗するのも面倒くさいのかそのまま隣りの店にはいつていく。なんだか落ち込んだ様子のマーセルに、ベアトリーチエはちよつと首をかしげた。

アリエーヌに背中を押され、入った店の中にもいるんなデザイン
の綺麗なドレスが並んでいた。

「わあ、このドレス可愛い〜。」

ルミが薄いオレンジのドレスを見て、目を輝かせる。

「試着してみたらどうですか？」

「いいの!？」

アリエーヌにそう言われ、ルミは楽しそうに試着室に飛び込んでいく。そして仕切りのカーテンが開き、ドレスをまとったルミがでてくる。

「どうどう? 似合うかなあ？」

ルミは楽しそうな笑顔で、貴族の令嬢の真似をしてドレスの裾をつまみあげてベアトリーチェに微笑みかけた。明るい可愛らしい色彩のドレスは、元気なルミの姿によく似合っている。

「凄く可愛いよ。」

「えへへ。」

ベアトリーチェにそう言われて、ルミは嬉しそうに体を揺らす。

「へえ、いろいろな服があるんだね。」

店の中には子供用のかわいらしいのから、大人用の綺麗なドレスまで揃っている。この街の特産の布は淡い優しい発色をしていて、並んでいるドレスの色合いは目を楽しませてくれる。

「これなんかイレナに似合いそう。」

マーサが肩のた少し露出が多めのドレスを両手で掲げてみせる。確かに大人の女性の雰囲気纏うイレナには似合いそうだ。

わいわいと楽しそうにドレスを見せ合う三人。

「ベルさまは、どれになさるんですか？」

そんな三人を微笑みながら見ているだけで、ドレスを手にとろうとしなかったベルにアリエーヌが声をかける。

「えっと、わたしは...。」

ベアトリーチェはちよつとためらうように答えをつまらせる。ベアトリーチェの表情に一瞬の不安がさしたのが、アリエーヌにはわかった。

「大丈夫です。」

アリエーヌは真剣な声で言った。

「私たち家族以外のエルサティーナの人間は、来ているという話はありませんわ。それにもし万が一見つかることがあったら、私、ベルさまを逃がして見せませう。権力なんてないから、絶対なんて言えないし、信用してくださいなんて言えないですけど、でも…。」

真剣に、ベアトリーチエへの真心をもって紡がれたアリエーヌの言葉。だからこそ、自分の持ち合わせる力の弱さに気付いてしまい、最後には消え入りそうな声になってしまった。

ベアトリーチエさまにお礼がしたかった。でも、わがままで無理をさせてしまっただけかもしれない。そう、気付いてしまった。

目じりに涙が浮かぶ。

ほんつと暖かな手が置かれた。顔を上げると、ベアトリーチエさまの優しい笑顔が、アリエーヌの目にうつった。

「ありがとう。」

アリエーヌが向けたベアトリーチエへの思いへの純粋な感謝の言葉。それだけで、アリエーヌは救われた暗く沈みかけた心が、一瞬で光に満たされた気がした。

「せっかくだし私もドレス選ばせてもらおうね。」

「はい！あの、これなんか…。」

アリエーヌは前々から、ベアトリーチエに着てほしいと思っていたドレスを差し出そうとした。

「ベル、これきてみてー。このドレス、ベルの髪の色にすごくあうとおもっの。」

「うん、いいよ。」

だが、ずいっとかけてきたルミがベアトリーチエに別のドレスを手渡してしまう。

「これなんかどうだい。かわいくてベルに似合いそうじゃないか。」
「イレナもベアトリーチエに似合いそうだと思うたドレスを手渡してくる。」

「これも！ベル着てみて！ちょっと大人っぽいやつ！」

何故かマーサは少し必死な表情だ。

「ちょ、ちょっとまって。そんなにいつぺんには無理だよ。」
「ベルさま、わたしが選んだのも来てください。」
出遅れてしまったアリエーヌもそれに混じってベアトリーチェに自分が選んだドレスを押しつけてくる。その後、ベアトリーチェは4人の着せ替え人形にされる羽目になった。

店から出てきたベアトリーチェを見て、マーセルもウッドもルモも目を丸くした。

「ほらほら、驚いてる。」
ルミがその反応をみて楽しそうにはしゃぐ。

「もう、僕はやだっただけなのに。」
ベアトリーチェは頬を朱にそめて、少し恨めし気に呟いた。

「ほら、女の子がおめかししてるんだ。何か言ってやったらどうなんだい。」

イレナがぼけっと突っ立っているマーセルに突っ込む。
ベアトリーチェはドレスを着せられたまま店を出ていた。しかもピンク色でふりふりつき。舞踏会なら着ても別におかしくないが街中で着るのは庶民の感覚に大分なじんだベアトリーチェには恥ずかしかった。

他の三人は普段の格好に戻っている。こんな格好をさせられているのはベアトリーチェだけである。

このドレスを着た瞬間、三人がやたら盛り上がりすぎて「マーセルたちにも見せよう。」とそのままベアトリーチェを外に連れ出したのだ。

「いや、驚いた。女の子だったのは知ってたが、そうやってどこかのお姫様みたいだな。」

顔立ちが整っていたのは理解していたが、男装していたのであまり意識したことがなかった。蜂蜜色の鮮やかな髪と色素の薄い肌

がピンク色の布に栄えている。何より、どこか漂う気品が既製品のドレスを最高級の仕立てのように見せている。これで髪が長ければどこからどうみても物語のお姫様だ。

ベアトリーチェの方は、お姫様という言葉が出て、一瞬ぎくりとしてしまう。

「惚れちゃだめだよー。」

「アホか。でも、悪くないな。良く似合ってる。コンテストにでるんだし格好も気合いれとかなきゃな。見た目で点数が稼げるなら、稼いでおくべきだしな。」

しかし、あっさり話は別方向に変わり、安堵する。

「おおー、柔軟ですな。」

「成長したなあ、おぬし。」

ルミとルモがマーセルの肩にひっかかり、その頬をうりうりと肘でつつく。

「うっせえなあー！」

「あはは、やっぱり変わってない。」

すぐにいつもの調子に戻ったマーセルに、ルミとルモが逃げている。

「それでいくらだったんだ。団の資金から出さず。結構、余裕出てきたしな。」

ベアトリーチェが入ったからか、マーセルが柔軟になったせいも、楽団の資金繰りも困ることはなくなり、大分余裕ができていた。

高級なドレスは結構な出費だが、マーセルはベルの姿を見て先行投資と考えることにした。

「大丈夫です。私がお支払しますから。」

マーセルの言葉に、アリエーヌがそう返す。

「ええ、いやさすがにそう言うわけにはいかないだろう。」

「うん、私たちが着るものだし。」

そう言ってマーセルたちは断ろうとしたが、アリエーヌは自分の胸をポンとたたいていった。

「わたし、ベルさまのパロトンになりますから。」

エッヘンと言った感じに胸をのけぞらせる。

「パロトンじゃなくて、パトロンでしょ……。」

「ていうか、パトロンって男の人のことじゃないの？」

「女にも使うことはあるけど、あんまり使わないね。」

三人娘の指摘に少し赤くなっただが、気をとりなおすように咳払いをひとつして、アリエー又は宣言した。

「そう言うわけで、ベルさまがコンテストにでるといふなら私が支援させていただきます！」

そうしてベアトリーチェに初の支援者が誕生したのであった。

マーセルはみんなの練習が終わった後、ベルがコンサートのチラシをじつと見ているのに気付いた。アルセーナの音楽祭では、自分たちがでるコンクール以外にも、さまざまな催しが行われる。ベルが見ていたのもそんなポスターのひとつだ。

「もしかして、行きたいのか？」

なんとなく、そう思って話しかけた。

ベルはびくりとすると、頬を赤くしてのひらをこちらに向け、動揺する仕草を見せる。

「そ、そんなことないですよ。だいたい明日はコンクールだから、みんなの迷惑になっちゃうし。」

どう見ても行きたがってるのが、ばればれだ。半年前に入ってきた今では欠かせない存在といえる仲間が、言動は大人っぽいのに、こういうところに子どもっぽい仕草がでる。

「いいよ、遠慮すんな。連れてってやるよ。」

マーセルは笑いながら言った。ベルはこういうとき、一歩ひいて遠慮してしまう。だからこちらから、少し背中を押してやらなければならぬ。一緒に旅する中で、わかってきたことだった。

「いいんですか…？」

こちらをおずおずと伺うように見てくるベルに、マーセルはまた笑う。

「ほら、いくぞ。あいつらが来ると、買い物なんか引き回されそうだからな。今のうちだ。」

ここに滞在している間、ベルをいろんな場所に連れまわして三人娘は、用事ででかけている。今がちょうどいいチャンスだった。いくぞ、っと手招きして部屋を出ると、ベルは「はい！」と頷いて、嬉しそうな顔になってついてきた。

街に出たふたりは、このお祭りの中心、音楽ホールが集まってい

る地区へ移動する。

人がいっぱいいて、看板が並んでいる。

ベルはどうしたらいいのか、きよるきよると迷ってしまいが、マーセルの足取りには不安はなかった。

看板に書かれている名前に目を通すと、ひとつ頷き、そのまますらすとチケットを買いベルに一枚渡したあと入場する。

それほど大きくはないコンサートホール、ベアトリーチエとマーセルは二人ならんで座っていた。ステージではオーケストラの演奏が行われ、流麗な管弦楽器の音が流れている。

それほど格式の高いコンサートではないのだが、演者たちの実力は高く、観客たちはみな満足そうに聞き入っている。

マーセルがベルの横顔を眺めると、楽しそうにコンサートを見るベルの横顔があった。音楽が本当に好きなんだと言うことがわかる。演奏者としてはずば抜けた実力をもっているのに、音楽の知識はほとんどなかった。かといって、不真面目なわけじゃなく、やらせてみると誰よりも勉強熱心だった。

最初は誤解した。音楽を遊び半分で作っているだけの人間だとも違った。本当は誰よりも音楽を愛し求めていた。

きつと今までは、こういうコンサートすらなかなか触れられない、生き方をしていたのだろう。

あの魔笛の音、演奏の才能は音楽家として強く引きつけられる。きつと他の音楽家たちも、あの音を聞けば自らの楽団に引き入れたいとおもっただろう。でもそうじゃなく、音楽が好きなのベルの、音楽に触れて子供ように嬉しそうに微笑むベルを仲間として楽団にいて欲しいと思う。

それがマーセルの気持ちだった。

コンサートの音楽を聞きながら、ベアトリーチエは後宮をでてか

らのことを思い出していた。

全てが闇に閉ざされて、このまま暗やみの中、生き続けるのだとあの時は思っていた。でもいま、自分は音楽を楽しんでる。

マーセルたちと出会っているんなことを知った。見たことないものをたくさん見た。知らない場所を、いろいろ訪れた。

新しい友達ができた。音楽の勉強ができた。人前で演奏するようになった。みんなと一緒に。

自分は愛されることのない存在だと思っていた。でも、アリエー又は自分を好いていてくれた。マーサもマーセルも、イレナも、ルミも、ルモも、ウッドも、みんな自分を思いやってくれることがわかる。

いつの間にか辛い記憶を抜け出し、幸せな時間の中に自分はいった。コンサートも楽しい。自分のわがままなのに、連れて行ってもらうって楽しんでる。マーサたちやアリエー又には振り回されて買い物に連れまわされたのも楽しかった。ルミヤルモのいたずらにつき合わされるのも、ウッドに短い言葉でたしなめられるのも嬉しい。

自分が今いる時間が胸に温もりを与えてくれる。

やがてオーケストラの演奏が終わり、観客たちはまばらにホールを後にする。コンサートの余韻に浸るベアトリーチエを、マーセルは待っていてくれている。

ベアトリーチエはマーセルの方を向く。

「ん？どうした？」

マーセルの問いかけに、ベアトリーチエは微笑んだ。

「わたし、マーセルさんたちと出会えてよかったです。」

そうして花が咲くように笑った。

「うー、緊張するなあ。」

コンクールの控室で、ルモが呟いた。今日はコンクールの本番だ。

「ベルさま、がんばってください！」
アリエーヌも来ている。

「ベルはなぜか緊張してなさそうね。」

マーサがちょっとうらやましげに、ベアトリーチェを見る。ベアトリーチェはいつもどおりの表情で、椅子に座って魔笛の手入れをしていた。

「うん、みんながいるから。」

ベアトリーチェは笑顔で言う。

「それもそうね。今回はベルがいるんだもん。きつと、うまくいくわ。」

ベアトリーチェの言葉に、マーサもそう言ってやる気にあふれた顔に、表情を変える。

「それもそうだな。」

マーセルも腕を組んで頷いた。

「おや、いいのかい？団長の威厳とやらは。」

イレナが少しからかうように言った。

「俺もベルがいると上手く行く気がするからな。仕方ない。」

マーセルは苦笑しながらそう返す。

「それじゃあ、みんながんばろうー。」

「おー！」

ルミの掛け声にみんな答え、マーセル楽団はステージへと向かった。

コンクールは街でも一番おおきなコンサートホールで行われる。公開形式で行われるコンクールには、大勢の客たちが入場して、その中に審査員の席がある。

「次は、マーセル楽団か。聞いたこともない楽団だなあ。」

「それじゃあ、あまり期待できないな。」

配られた資料をみながら、観客たちは話している。そしてステージにマーセルたちが入場してくる。

「なんだ。あのでかいの。あれでピアノ弾くのか？」
ウツドのピアノ弾きとはとても思えない体格に何人かが驚く。

「おいおい、子どもがいるじゃないか。」
ルミとルモはコンクールに出る人間では最年少だ。

「へえ、でも女たちの子は可愛いじゃないか。」
「あの魔笛の奏者は貴族の出かになにか？ 綺麗な顔立ちをしてるなあ。」

「どうせ、顔だけで選ばれたんだろう。その分、演奏は大したことないさ。」

口々に言い合う観客たち。マーセルたちの構成は旅楽団としても、はた目には異様だった。

ベアトリーチェが魔笛に口をつける。

「おい、はじめるといいたぞ。」
観客たちに期待した様子はないが、一応聞いてやるかという態度で声を潜める。

そしてベアトリーチェの演奏がはじまった。

観客たちは最初、それを聞いたとき、何を聞いたのかわからなかった。あまりにも彼らの予想したものと違っていたから。いや、彼らが今まで聞いてきた魔笛の演奏というものからすら、それは遠くの場所にあった。

その澄んだ音は観客の耳に入り、その美しい響きに茫然とさせた後、柔らかく変化し心を揺さぶる。

一小節をベアトリーチェが奏する間に、騒々しかった観客席はあっというまに静かになった。

そして続いていくベアトリーチェの演奏に誰もが聞き入る。

ベアトリーチェのソロでの始まり。それは今までは出来なかったことだった。自由に弾きすぎるベアトリーチェは、誰かが弾くのにあわせないと何処にいくのかわからなかった。

でも音楽の勉強をし、マーセルたちと一緒に凄し、マーセルたちと共有する土台が今はベアトリーチエの中にもある。抑えるわけもなく、自由に弾きながらも今は一緒の場所にいれる。

だからマーセルは最も個性の強いベアトリーチエの演奏を、最初にソロで持ってきた。信頼と絆があるからこそ、出来た選択だった。そしてマーセルたちもベアトリーチエの演奏に加わる。

美しいハーモニーがコンサートホール中に響き渡る。マーセルたちの誰も、抑えた演奏をすることはなかった。みんなの個性が混じり合い、綺麗なそして暖かい演奏が流れていく。

素晴らしい演奏。でも楽しんでるのは観客たちだけではない。演奏している本人たちも笑顔で、音をあわせていくのを、音楽を奏でるのを楽しんでいた。

ベアトリーチエも微笑みながら、楽しそうに魔笛に、今まで勉強したことを、経験したことを、自分が得たものを吹き込んでいく。演奏が終わった時、コンサートホールには大きな喝采がひびいていた。

次の日、ベアトリーチエが朝の散歩でもしよつかと宿を出ると、いきなり大勢の人に囲まれた。

「きゃー！笛吹き姫さまよー！」

「サインください。」

「握手してください！」

「演奏またきかせてください！」

わらわらとまわりに人がやってきてもみくちやにされそうになる。目をしるくろさせて固まってしまったベアトリーチエは、誰かの手に引つ張られ宿屋の方に戻される。

目をぱしばし瞬かせたベアトリーチエは、引き戻してくれたマーサに動揺おさまらない様子で聞いた。

「な、なにあれ…。」

「あれはベルのファンよ。」

マーサは溜息をつきながら答えた。

「ファ…ファン？」

「私たちが無名なのにコンクールでいきなり最優秀賞とっちゃったでしょ。それで、みんないきなり有名になっちゃって。その中でも特に今まで聞いたことないような魔笛の演奏をしたベルは、街の女の子にも男の子にも凄い人気になっちゃったみたいなの。」

茫然と状況が理解できなさそうに聞いているベアトリーチェに、マーサは言い含めるように聞かせる。

「お姫さまみたいに美しい容姿をしていたから、笛吹き姫ってあだ名までついちゃって。まだ一日も経ってないのにそれが町中に広がっちゃって。だから、外に出るのはちよつと無理。」

扉の向こうでは、ベルを求める声が聞こえてくる。他にもマーサやイレナ、マーセルやらを呼ぶ声もときどき混じる。

「マーセルなんて変装すりゃ大丈夫だろうとか言って出て行ってあっさりご婦人方に捕まって、必死で宿に逃げこんできたわ。」

マーサもそれなりに何かあったのだろう。ちよつと疲れた表情をしている。

「とりあえず収まるまでは、ここで大人しくしてるしかないね。」
見るとイレナもテーブルに突っ伏し、何をするわけでもなく椅子によっかかっている。ルミとルモも何があったのか、今日は元気が無く床に寝ころんでいる。

その後やってきたアリエーヌが、新しく出来た大量のファンをまとめ上げるまで、ベアトリーチェたちの外出禁止は続いた。

76・『コンクール』（後書き）

11月20日まで更新停止になります。

折り返しの話なのに印象薄目になってしまいもうしわけないので、ここまで読んでくださった読者さんに感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5174n/>

エルサティナーナの笛吹姫

2011年10月18日15時03分発行